岳山

第十二年

第二期

山岳

第二十六年第二號

目次

（第二十六年第二號　昭和六年七月）

表紙　茨木猪之吉

口絵　富士山遠望（東京、新宿より）　山口成一

カット　坂本直行

本欄

一月の尾瀬　石原巖　一頁

ピヤナン越の山旅（上）　鹿野忠雄　一七

羅東より南湖大山、次高山を經て霧社へ

初冬の大井川の旅　冠松次郎　六〇

利根川水源　角田吉夫　八五

蓮華溫泉より朝日岳へ　渡邊漸　一〇五

山岳讃仰の歌　綠蔭草堂主　一一六

雜錄

Hans Morgenthaler に就て　井田清　一一九
一月の北穗高岳　桑田英次　一三四
春の空木岳　小池文雄　一三九
寸又川溯行　工藤英司　一五〇
五月の鹿島槍ヶ岳東尾根　田口一郎　一五六
鹿島槍ヶ岳東尾根に就て　渡邊漸　一六二
東京から見える山の寫眞　山口成一　一六五
風致の保存に就て　冠松次郎　一六八
「山日記」一九三一年版の發行　角田吉夫　一七二
日本北アルプス登山協議會概況　矢澤米三郎　一七五
新刊圖書紹介　一七九
會報　一九四

圖版

與作岳より見たる一月の平ヶ岳　飯島博　對頁六

與作岳より望める一月の燧岳	飯島　博	一二
タケジン附近より大甲溪を隔てゝ劒山（右）及び白姑大山（左）を望む	江島　勝一	三六
キレットイ附近より宜蘭濁水溪を望む	江島　勝一	三八
タケジン附近より見たる南湖大山	江島　勝一	四〇
左俣合流點附近の利根川	角田　吉夫	九四
槍倉ノ頭（一七四四、三米）より柄澤山の一部を望む	角田　吉夫	一〇〇
卷機山附近より望める五月の牛ヶ岳	荻島　四雄	一〇二
大所川深流より朝日岳を望む	渡邊　漸	一一二
朝日岳よりイブリ山及び北俣を望む	渡邊　漸	一一四
一月の奥穂高岳	高橋　榮一郎	一三六
カマノシマの廊下	工藤　英司	一五二
五月の鹿島槍ヶ岳東尾根	田口　一郎	一五八
四月の鹿島槍ヶ岳東尾根	渡邊　漸	一六四

挿圖

大白澤附近より至佛山を望む（八頁）會津駒ヶ岳（一五頁）ピヤナン越のコースを示す圖（二〇頁——二一頁）

南湖大山登路概念圖（三三頁）東北より南湖大山頂上を望む（四八頁）南湖大山主峯の東面のニヒタカビャクシンの純郡落（五三頁）大井川高瀬島附近（六九頁）デンツク峠より悪澤岳を望む（八二頁）駒ヶ嶽水無川略圖（八七頁）利根川水源略圖（九一頁）丹後コボラ合流點よりその上流と丹後山尾根（九四頁）魚止瀧と左股出合の中間（九六頁）米子頭山附近より卷機山（右）と割引山（左）とを望む（一〇二頁）北方より仰げる笠ヶ岳（右）と朝日岳（左）（一〇三頁）蓮華溫泉附近より雪倉岳を望む（一一〇頁）朝日岳頂上より白馬岳を望む（一一三頁）空木岳登路概念圖（一四三頁）百間梛のカールの下手（一四五頁）寸又川上流概念圖（一五一頁）東尾根上部より北槍を望む（一五八頁）上方より見たる東尾根の岩峰（一六三頁）

富士山遠望（東京・新宿より）　　山口成一

一月の尾瀬

石原　巖

本紀行は昭和五年及び昭和六年の正月を尾瀬ケ原東電觀測小屋に於て迎へたるときの記録斷片である。

（參照地形圖）二十万分一、日光、新潟、五万分一、沼田、追貝、藤原、燧岳、檜枝岐、糸澤、針生、田島。

一

沼田―追貝―鎌田―戸倉

汽車から下りるといきなり迎への人に荷物をとりあげられ、さて驛前からこの二十個あまりの荷を手際よく積み込んだビウイックを三臺も連ねて、幅廣い往還を走りはじめたときは、私たちは何か大きな探檢（エクスペディション）にでも出掛けるやうだと喜んだものだが、考へてみると、その日の朝餉を認めたのは東京の自宅だし、汽車だつて上野から沼田まで三時間もかゝつてはゐないのだから、まだそんな旅に出たと言ふやうな氣になれる程ではない。暮の迫つた沼田の町は何かしら慌しい氣配が漲つてゐた。

栗生峠の高みを越えて片品川沿ひの溪懷（たにぞこ）へ入ると、それでも漸く山へ入つたといふ感情が私たちの心を搏つて、しきりなしの話聲も途絶えて來た。いそ〳〵とした輕い緊張の心が動きはじめる。この栗生峠のみちは冬の

間は車が通らないのではないかと氣遣つてゐたのだが、聞いてみると餘程の大雪が降つた直後の事でなければ何時でも鎌田までは行くさうだ。眞赤な頰をしてゐる女車掌の乘つた乘合自動車にも行き會つた。

鎌田で車を捨てると呼んで置いた馬に荷物を托して私たちは身輕のまゝ歩き出した。荷のない氣易さに私は兩手を懷に突込んで、煙草をくゆらしながら、霜解けの泥濘みちを辿つた。これが去年だつたら雪を踏みながら行けたと言ふのに、これはまた何と言ふ雪の少さだらう。谷の正面に大きく蟠つた荷鞍山の腹もいちめん黑いばかりだ。たゞその頂を厚く覆つた雲が少し動くと、左手に陽を浴びた菖蒲平の眞白な頂が一瞬、眩しい程に輝く。私はそれを望んでどうやら安心する。

暮れ頃、片品川最奥の部落、戸倉に入つた。いかにも谷の行き詰めと言つた感じの、そしてまた古い匂のするいゝ村だ。一面の桑畑の日蔭に雪がしろくくつきりと浮び出てゐる。

二

戸倉—硫黄澤—富士見峠—八木澤—尾瀨ケ原東電小舍。

十二月三十日、朝、雪薄く積る。冷え〳〵とした朝の空氣が室のなかに入つて來る。前夜打合せを濟ませておいた人夫の二人は早くから宿へ來て呉れる。今日こそはあの北の國の果にでもありさうな原の深い寂寞のさなかにゆきつくことが出來るのだと思ふと、私の心はたゞわけもなく躍つてゐる。ちら〳〵と舞つてはゐるが大したことはないだらう。

裏をすぐ登つて十二平までゆくと私たちはスキーを穿いた。寒いので休む程もなく歩き出す。輕い粉雪で、積

雪はそれでも二尺位なものだつたらう。

硫黄澤の橋をわたつて、愈〻その流れに沿つて右岸のみちを辿りはじめると、私たちは折柄降りしきつて來た雪と、段々肩に喰ひ込んで來た荷のために、物も言へなくなつて來た。それに溪沿ひの道はとかく單調だ。

いつたい戸倉から尾瀬へ入るみちとしては三つを考へることが出來る。沼の方へ行くなら勿論三平峠のみちを採らう。峠の間近までは登りが少なくて、峠からさて沼の方へ降りるみちの素晴らしいことは大したものだ。これは後に書くやうに前年の歸途通つたみちなのだが、戸倉澤附近の雪崩が一番警戒を要するだらう。鳩待峠のみちは暢氣な春の山歩きには兎も角として冬は問題とはなるまい。何と言つても最も近くてそして安全なのはこの富士見峠を越す路だ。あの菖蒲平の南面の大斜面だつて、危なければ左手の尾根を傳つて平の最高點へ出れば、そんなに迂(まは)りみちではない。

正午過ぐる頃、私たちは漸くこの富士見峠まで辿り着いた。戸倉を出てから五時間である。私たちはその間の單調な道にもう充分に倦んでゐた。誰かゞ先頭にゐて「峠だ！」と叫んだときは、私は全く救はれたと思つた。先づ荷を投げ出してゆつくりと憩(やすみ)をとる。前年に較べて二時間餘も早いと言ふのが、この上ない容易な氣持を與へて與れる。形のいゝ唐檜の並んでゐるこの平らな峠をいま訪れたのは、私たち九人とそれから八木澤から硫黄澤へと逆に越してゆく、雪まじりの風ばかりだ。

この風は北の方から濃いガスを齎らして、それを八木澤の谷にぎつしりと押しこんでゐる。私たちは間もなくこのガスの中を滑り降りはじめた。落葉樹の多い密林の中を夏道を求めながらスキーを走らす。もう直ぐだ、もう直ぐだと思ひ乍ら、私たちは大きな期待に胸をふくらませて先を急いだ。

谷は行くにつれて漸く廣さを增して、私たちは何時か流れに沿ふた平を歩いてゐた。そのうちに私は前方の樹立を透して何かしら明るい天地を見たと思つた。間もなく私たちは曠漠たる雪原のさなかに吐き出された。たゞ眼を瞠(みは)つてそこに立ち盡す。冬の尾瀨ケ原はそのときの濃い霧のため、一層深みづけられてゐたかも知れない。灰色の吹雪のなかに溶け込んでゐる僅かばかりの樹立の影が一際(ひときは)茫漠たる感を唆つてゐる。

「來た、來た。」と私は低聲に獨語しながら、その茫漠のなかに足を踏み入れた。交互に前へ送り出すスキーは眞直に原を横切つて進む。「あゝ、あの左から二番目の高い樹立がそれです。」人夫の岩雄はパイロットのやうな鋭さで目標を指し示す。

只見川が急に北折する邊りで橋を渡ると、もう聲が聞える筈だと言ふので、私たちは最後の力を絞つて叫ぶ。「おーい。」とすぐさきの山鼻の蔭で返答があつて、私たちは間もなく暖かいその小舍の主(あるじ)に迎へられる。自分の心に湧いて來るのは高く來たと言ふやうな激しい感情ではない、しかしつく〴〵遠く來たと言ふやうな旅情が雲のやうにこみ上げて來てゐる。

三

尾瀨ケ原

只見川の北岸、ヨッピ川の合流點に近く、丈の高い山毛欅の樹立にとりかこまれてゐるのがこの東電觀測小舍だ。それは小高い丘の上にあつて、そこからは凍えるやうに冷たさうな本流の水が見える。この建物はまた小舍とは言へないほどの大きな、立派な、快適なものだ。この雪の中を冬ぢゆう留つて觀測を續けてゐる荻原氏夫妻

の好意によつて、私たちはこゝで甚だ愉快な一週間を送ることが出來た。與へられた部屋の中の大きなストーヴには思ひ切り薪をくべることが出來るし、さうしてまはりの椅子に腰をかけてゐると、ときゞは隨分煙たいこともあるが、まあ汗が出て來る位暖かい。

積雪は平均四尺。去年は隨分晴天の日が續いたと記憶するが、今年はそれが唯一日だけだつた。併しこの方が寧ろ普通ださうで、風も激しく吹いた。複雜な冬の天候の變化は、單調な雪原から樣々の眺めを引き出すのだ。

大晦日のことだつたか、僅かの晴れ間をみて洗水平の方へ行つてみた。平を歩くと言ふことは、この尾瀨を訪れてからまた別な興味を私たちに齎さうとしてゐる。スキーの尖端が積雪を切つて進むときの單一な音、凍つた締具の發する物倦い律音、そんなものを聞くともなく聞いてゐると私の心は何時しか遠い夢幻の境に沈んでゐる、それは幼いとき聞かされた子守唄の微かな想出にも似たものだ。私たちはそのときまつたくの童心に還る。この童心のなかに一樣に溶け込んで來るのは、なごやかな淡彩の畫だ。日本畫にみるやうなぼかしだ。雪野原のまんなかに小さな旋風がたつて輕い雪を舞ひ上らせる。

瀧ノ澤下の長い林は、葉が落ちたせいか思ひの外明るく、名も知れぬ鳥が朗らかに囀つてゐた。處々の雪面に殘された色々の小鳥や小さな動物の足跡は、また面白いものだ。樹の根から樹の根へ、大きな根元をめぐつて、眞直に、螺旋を描いて、しまひには醉拂ひのやうに左右に搖れて、彷徨した跡を見てゐると、その足跡の主の可愛いゝ生活が眼に見えるやうだ。洗水平へ出るとそこは一面の雪に埋れてゐて、どこを歩まうと勝手なのが嬉しい。

また別の日には沼へ遊びにゆく一行と檜枝岐小屋附近で別れた私たちは、そのまゝ下田代を西へ突切つて進んだ。六兵衞堀はそこにあつた二本の丸太橋に積つた雪を拂つて、危ない思ひをして渡つた。夏道の通りである。

川越岩から南に折れて少しゆくと、岩魚釣りの破(こは)れた小屋が捨てられたやうに雪に埋れてゐた。このあたりから見た中田代は實に廣い。低い雲の下に擴がつたこの漠とした雪原を眺めてゐると、北歐あたりの嚴(きび)しい冬のことなどが想像されて來る。

四

景鶴山、　與作岳

この邊一帶の調和を破つて砦のやうに聳えてゐる景鶴(ケイヅル)山は、新らしい雪を著けて一層嚴(いか)めしく見えた。これは標高も低くて、小舍からも最も容易に達せられるのに、いかにも尊大ぶつた山だ。頂に達するのは東南側の鞍部からで、そこまでは景鶴澤からも與作澤からも登れるし、與作岳から尾根傳ひにも行けさうだ。與作岳へは小舍のすぐ背後から尾根を傳つて行つたが、ブッシュは如何にもひどい。およそこの附近の山は平からの取り付きは何處もこの密生した灌木帶が續いてゐて、私たちはこれが冬の尾瀨だと諦めてはゐたものゝ、さてこの執拗な枝に引掛つて果敢ない perpetum mobile を繰返すときになると、少なからず悲觀しなければならないのだ。これは勿論春までにはすつかり埋れる。

景鶴山へ登つたのは一月二日のことで、珍らしく氣溫の高かつた朝には霧のやうな雪が降つた。濕潤(しめ)つた重い雪に惱まされながら林を拔けて景鶴澤へ入つた頃から、春のやうな陽がさして來た。林の大きな樹幹がいちど丈(たけ)の低いブッシュに變つて、それは更に黑木の森に續く。その頃、先頭はもう澤を離れて右側の尾根すぢへ向つて急なジッグザッグを刻んでゐた。小舍を出たのが九時頃で、それから二時間も經つたらうか、私たちは晝食をと

與作岳より見たる一月の平ケ岳　　飯島博

ることにした。それはもう尾根も間近い一七〇〇米あたりの大きな唐檜の樹蔭だつた。瞰下すと白い原の平面を陽のかげが急速に西から東へと走つて間もなく天候が變るらしい。

尾根すぢへ出た頃は先程から至佛山の向ふに蟠つてゐた雲が間近く迫つて來て、耳許に風が唸る。雪面は多少ウインドクラストに變じてゐる。幅廣い尾根を疎らに佇立してゐる黒木の間を縫ふやうに上へ〳〵と進む。鞍部附近でスキーを脱いで、狹い山稜傳ひに頂上へ達したのは零時三十分だつた。

目の前に大きく見えるのはこのあたりの盟主燧岳の圓錐體だ。それは隈なくたて込んだ森林に覆はれて殆んど眞黒な姿をしてゐる。その裾のこれも眞黒な起伏の間に、ちらと祕めやかに覗いてゐるのは凍結した尾瀬沼の湖面だ。それは人の心を惹き入れるやうな美しい瞳だつた。

私たちの身體は間もなくガスにとり圍まれてしまつた。登つたときの跡を辿つて降りはじめる。この附近は小舍からは近くてスキーで遊ぶのには一番いゝ處に違ひないが、このときはしかしそんなに愉快ではなかつた。澤へ降りて來た頃には氣溫も下つて、先のよく見えない位に雪が降りしきつて來た。景鶴澤の扇狀地を上から眞直にブッシュにはじかれながら夢中でとばすと、もう平に出てしまつた。頂を出てから一時間餘である。

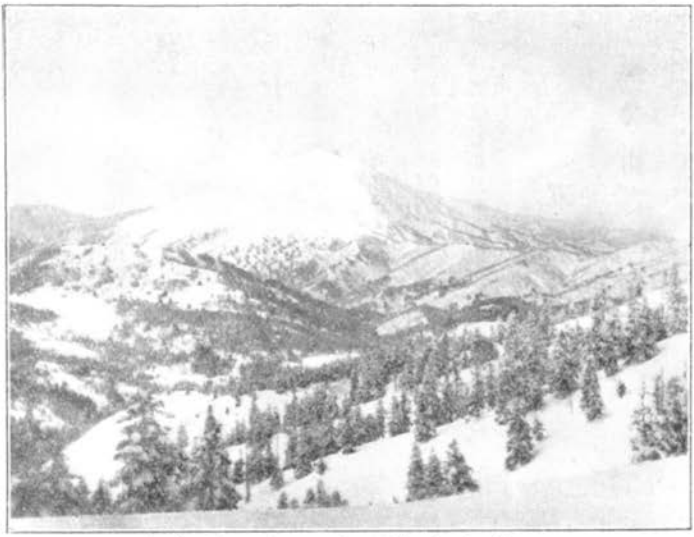
五

至佛山

到着した日が雪で其まゝ夜を送つた翌朝のことだ。私は便所へたつて何心なくあけた西向きの小窓から思ひもかけない眺めを發見して眼を瞠つた。「わーい」とわけのわからない叫聲をあげてしまつた。至佛だ！、朝の空に

端正な接空線を描き出してゐるピラミッドだ。鼻のちよつと歪んだやうな山巓だ。私はそのときの打たれたやうな驚きを忘れることが出來ない。

至佛山へ登つたのは偶然にも去年と同じ一月四日だつた。その前の日は朝から激しい吹雪で、氣溫も最低の零下二〇度を示してゐた。横なぐりに吹きつける風に息もつけない程だつた。兎も角天候の見きわめのつくまでと言ふので、私たちのうち六人は夜の明けると共に小舍を後にして西へ〳〵と向つた。四圍は薄明と溶けあつて、たゞ濛々たる灰色に包まれてゐる。考へてみると、前夜あれほど準備したのにと言ふ多少の意地もたしかに手傳つてゐたのだらう、長い間、綏みないまつしぐらの行進を續けて行つた。この荒れ狂ふ自然の猛威のなかを、あの林の中の小さい動物たちはどうしてゐるのだらうか。



大白澤附近より至佛山を望む

順番がまはつて來ると私は厭應なしに友の後につかなければならない。すると鼻の先には彼のルックザックに結びつけられた大きなゴム製の長靴が、悠然とぶら下つてゐるのだ。この長靴は夏のボーリングの人夫用のもので、私たちはこれを猫又川の徒渉に使はうと言ふので

借りて來たものだ。去年はこれが美事に役立つた。併しどう考へてもこんな煩はしいものゝ厄介にはなりたくない。だからこの吹雪のなかをどうせ登れないにしても、雪橋の存在はどうかして確かめたいものだ。

洗水平から水際をしばらく行つてせなかあぶりの田代に出たときは、物も言へない位だつた。一寸先はもう漠とした灰白色の空間だ。裂風に抗つて梢を震はせてゐる高い樹の傍を過ぎたことや、突然現はれた小さな流れの窪みを迂つたことなどを覺えてはゐるが、さて考へてみると私たちはいつたいどの邊まで進んでゐるのだらう。小舍を出てから二時間近くも平地を歩いてゐるのだから、もうよほど上の方に違ひない。そのうちに吹雪が稍〻薄らいだと思ふ頃、左手間近く連續した樹立が現れて、本流の存在が明らかになつた。これは翌日になつて判つたのだが私たちは川上川の合流點を通りすぎて貂澤對岸近くまで達してゐたのだ。しばらく川岸を進んで徒涉地點を探る。流れは五六寸の深さにすぎないのだが幅が廣く、雪橋は見付からない。私たちは此處で簡單に先を斷念して、手近の岳樺の幹に赤布を卷きつけると直に引返し始めた。

翌四日は夜半から素晴らしい天氣に變つた。溫度が低すぎるせいかスキーがよく滑らない。赤布の地點へ再び來たのが八時頃だつた。途中せなかあぶり田代から見た至佛山の薔薇色の化粧。あたりにまだ闇の消え殘つてゐる頃、眩しいほどに輝いた鼻のちよつと歪んだやうな山巔。雪煙を騰げてゐる貂澤の鞍部。今日こそは山はすつかり胸を擴げ切つてゐる。あの白い胸をかう行つて、あゝ登つてと考へてゐると無性にうれしくなつた。

直に手分けをして雪橋を探してみると、案外にもすぐ近くに大きな倒木があつて、私たちはスキーをつけたまゝなんなく渡り越すことが出來た。これは何よりも大きな時間の經濟になつた。それで私たちは九人のものが殘らず渡り終へると、そこの平で綏つくりと憩をとつた。いゝ氣持になつて歌をうたひ出す者がゐる。誰かゞそれ

に合はせる。峯すぢには風が鳴つてゐるが、此處では煙草の烟すら動かない位の靜けさだ。

私たちのいま休んでゐる平からは、直ちに貂澤右岸の廣い尾根の登りにかゝることが出來る。暫らくは一六〇〇米位まで針葉樹の氣持のいゝ森林帶だ。これを拔けると一面に開けた斜面で、雪は風のために硬化してゐる。ねばり强い偃松が處々に雪をはねのけて頭を擡げてゐる。九人のラッセルが三度目にまはつて來た頃には、もう可成りの高みに來てゐて、大白澤山の背後からは眞白な平ケ岳の平頂が覗きはじめた。そこで先頭は右へ大きくきれて貂澤上流の凹斜面につき、鞍部への最後の努力にかゝる。

十時五十分、遂に鞍部へ來た。利根側から吹き揚げて來る疾風が、雪を舞ひたゝせて時に視界を覆つてしまふ。私たちはそのなかに立ち盡して、焦げつくやうに網膜に映つて來る目前の輝いた山なみの映像を貪つた。それはゆるやかな起伏をなして連なる牛ケ岳、下津川山から越後澤山の尤物だ。それは全く雪を著けた山と見るより雪の塊に刻み込んだ山の形のやうだ。ふと誰かゞ、

「あれがみんな砂糖だつたら」と言ふ。これで皆は聲をあげて笑つてしまつた。今まで看てゐた奥日光の黑い山と餘りにもかけ離れたこの白い姿が、急には心の中で溶け合はうとはしない。そしてそれはときにとんでもない連想の糸につながつてしまふ。

風當りの少ない岩蔭を選んでシーデポーとする。それからは足場のいゝ尾根が續いてゐてシュタイクアイゼンも要らない位だ。痛いくらいの冷たい風に吹きさらされながら四十分の後には頂上に達した。

私たちは早速登山者の貪慾をもつて、潮のやうに泡立ち波打つた幾十座とも知れない山頂をひとつびとつ拾つていつた。私はこの越後境の山々には隨分暗い。さてかうして對つてみると、それ等はまるでいらだゝしくなつ

てしまふ程の夥しさをもつて二つの眼の中に迫つて來るのだ。雪を著けて氣取つた谷川岳、應揚な牛ケ岳、臆病さうに頭を出した兎岳、變りものゝ苗場山、獨り離れて傲然と構へた會津駒ケ岳、こゝから見る日光白根山は如何にも怪異な存在だ。「景觀の美しさ、調和といつたやうなものは、それが成生してから今日までに經過した時日の長短によるものだ。」と言つた人があるさうだが、私たちはさしあたりこんな新しい火山や湖などの眺めには好感が持てないわけだ。

空はすつかり雲に蔽はれてしまつて、頂の風は愈〻寒い。山を眺めてゐる時間は短かいやうで長いものだ。十二時三十分、私たちはそこを後にした。シーデポーで少憩して後、スキーを穿いて大きな斜面を滑り初めた。しばらく降りると風ももうない。私たちはもうそれからはたゞのんびりと滑つて行つた。樂しい心を抱いて煙草をくゆらしたり、殘つたものを頰張つたりしながら。森林帶へ入るともう解き放たれた悅びから、素晴らしい直滑降をやつた誰かゞ發した動物性の叫び聲すら聞える。それからまた行儀の惡いスケート滑走をやつてゐるはしやぎ蟲。

赤布の地點へ歸つたのが二時きつかりで、そこで主人たちを待つてゐた長靴を拾ひあげると私たちはそのまゝ行進を續けて、四時すぎ小舍へ入つた。九人と言ふ全員が揃つて、しかも何一つ支障なく目的の行程を了へたといふことが、私たちの胸に押へやうのない歡びを湧きたゝせてゐる。

六

尾瀨沼

一月の尾瀨　石原

沼はまこと尾瀬の瞳だ。靜かと言ふよりはもつと感情のひた盛りに盛られた寂しさの魅惑を、それは持つてゐる。いちめん凍結して動かないその湖面は、物言はぬ處女の瞳にもたとへやうか。蝦夷松か何かの厚く雪を載せてゐる間を白砂(シラスナ)の濕原から登つていつて、ふと沼尻へ出たときの歡喜。そのとき低く垂れた空からは雪片が思ひ出したやうに舞ひ降りて來て、湖畔にぎつしりと迫つた黑木の梢は雲のなかに沒してゐた。凍りついたやうに物音一つしない景色のなかに、雲だけが忙(せ)はしく動いてゐた。私たちは原から沼尻川の夏道を辿つてやつて來た。この一里ばかり、時間にして三時間足らずの登りは、尾瀬に於て最も好ましい道の一つだ。それだから私たちの心はもう沼へ出る前から幸福感に充されてゐた。

尾瀬沼附近は原に較べると二五〇米ばかりも高いためか、あの執拗なブッシュは無くなつて、形のいゝ針葉樹ばかりが白い湖面を擁してゐる。そこで私たちは樹蔭から樹蔭へ、平から湖心へと氣儘にスキーを驅つて歩きまはることが出來る。このことはまたこの附近がいかにも親しみ深い氣分を與へて呉れるのと相俟つて、沼のもつてゐる最大の魅力であらうと思ふ。曠漠たる原からはこんな溫情的な落着を得ることは難しい。

歸途についたのは三時すぎだつた。來たときのシュプールを辿つて森林を拔けると白砂(シラスナ)の田代へ出る。その頃は氣溫も降るし雪も積つて來てスキーはよくはしつた。小さな峠を越すと、次々へとならんで快い森林滑降だ。冬の森林はとりわけ美しい。途中で一度休まうと言つてゐたのが、思はずも魚止澤(イヲドマリ)まで降りてしまつた。この邊からは明るい濶葉樹林になつて、うちひらけた緩い斜面を眞直に下に向ふ。林を出はづれて檜枝岐小屋へ來たのが四時三十分だつた。興奮に上氣した顏を、冷たい風に快く吹かれながら只見川の橋へ向つて原を突切つてゆく。さうだ、今日は一月一日の佳き日だつた。

與作岳より望める一月の燕岳

飯　島　　博

前の年私たちは沼の長藏小屋にも泊つた。そのときは湖面がまだ歩けなかつたので、ほんの汀沿ひに行つた。「おーい。」小屋の人に聞えるやうにと思つて呼んだ聲は、無氣味な程に靜まり返つた空氣のなかに、すぐに吸ひ込まれてしまふ。長藏には來るとき鎌田の近くで會つたのだから居る筈はない。彼はそのとき長い髯を扱きながら「世間は虛僞が多いよ。」との言葉を殘して下つて行つた。「いつはりが多いよ。」かう言ひながらあの老人はいま何處を旅してゐるだらう。

一月六日、長藏小屋の朝は素晴らしい快晴に明けた。燧岳は久し振りに端麗なその全容を現してゐる。樹林に蔽はれた山腹には、陽を浴びて明確りと山襞が見える。どの襞を辿つて登つたらいゝだらう。頂上から眞東に、それから淺湖濕原の方へ折れてゐる一番大きな尾根を傳つて、とさう私たちは考へてゐた。併しこのことは私たちにとつてそのまゝ未解決に殘された。それは間もなく急變した天候は猛然と雪を降らせて來たからだ。頽雪窪から登つた人はある(登高行第七年)。それからまた今年は西側の赤なぐれ澤左の尾根を二一〇〇米位まで行つてゐる。それは丁度至佛山へ登つた前日の吹雪の激しかつたときで、それ故に頂は斷念して引返したのだが、さもなければ行けたらうと思ふ。この燧岳の西麓は小舍からも近いし、森林があつてスキーには面白い場所だ。

それはそれとして長藏小屋の私たちは、その日は附近の逍遙に費すことにした。檜ノ高山、三平峠、沼山峠などに。冬の森林はきれいだ。それは何よりも清淨だから。額際のはげあがつたやうな三平峠の笹原には風が强い。

この日友の一人(小林)は私たちと訣れて、沼田街道を北へ遠く會津盆地の方へ拔けて行つた。翌る日、私たちもそれを南へ、三平峠のみちを越して戸倉へ下つたのだ。終日降り續いてゐた雪も、粘澤あたりまで下りると些かの新雪の跡も見せなかつた。

七

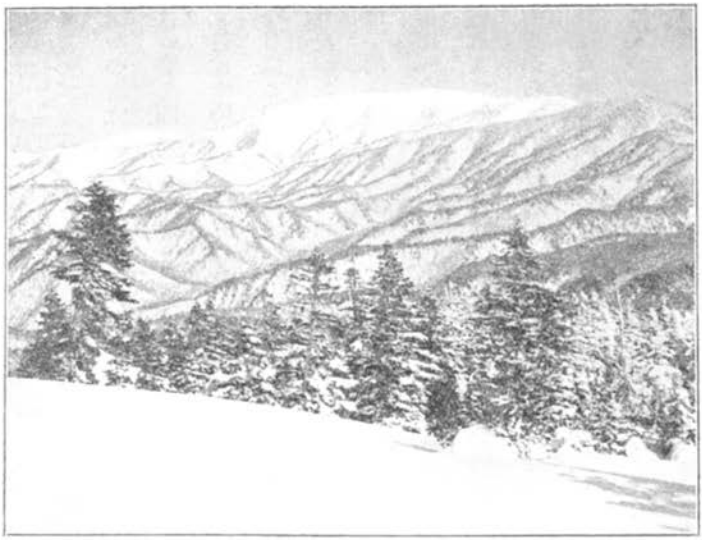
尾瀬沼—檜枝岐—會津駒ケ岳—針生峠—若松

一月六日、蒼空は九時頃から急に雪に變つた。皆が三平峠へ出掛けてから、たゞ一人小屋の長英さんに送られて沼山峠へと向つた。長い平地滑走の後一寸上れば直ぐ峠だ。この南斜面一帶は木が少く雪質は余り良くはないが一見素晴らしいスロープをなしてゐる。峠の邊で長英さんと一緒にスキーの練習をやる約束だつたが、風が強いのであつさり斷念して檜枝岐（ヒノエマタ）へと下つて行つた。瀧の處で長英さんと別れて愈〻本當にひとりになつてしまつた。峠の下りの雪質は相當良かつたが夏道が窪んでゐるのとルックザックが重いのとそれから前途の不安とで殘念ながら充分享樂出來ず、苦い印象を殘して赤法華（アカボッケ）に着いた。此處からはもう輪樏の跡のある街道を二里も行けば檜枝岐だつた。

雪に埋れた南會津の山村、圍爐裏をかこんで語り合ふ人達、さうした情景を私は何時も夢みてゐた。そして今その懷に入り込んだのだと思ふ時腹の奥から自分の幸福さを感謝した。そして又丸屋一家の山里らしいもてなしか無性に嬉しかつた。

翌日は終日吹雪、八日は朝少し雲が切れたので八時二十分喜び勇んで駒ケ岳へ出發した。案内には丸屋の爺さんの福太郎さんと村の屈强の若者茂さんとが銃を肩に輪樏で行つて呉れる。下ノ澤を渡つて夏路のある急尾根にかゝる處でスキーを脱いで輪樏に代へた。新雪が一尺余もある山毛欅の間の狹い急な尾根路を腰迄雪に埋めながら爺さんと茂さんとで代る代る踏んで呉れるので行程が意外に捗る。九時頃再びスキーをはく。山毛欅が盡きて

の疎林になるともう此方のものだ。膝位までもぐる粉雪の上を樂にラッセルして上つて行く。二人は尾根をはづれて兎を追ひながらからんで上る。



駒ケ岳　合津

今朝出る時から雲行が怪しかつたが、何時の間にか天候は全く崩れて吹雪と化してゐた。

一七〇〇米邊の栂の林の中で大きな焚火をして晝食をとる。コッヘルで紅茶を沸したら二人はひどく重寶がつてゐた（一二・三〇―一・二〇）。

森林帶を出れば最早スキーの方が遙に有利だつた。吹雪と闘ひながらゆつくりした歩調で上つて行く。時に呼び交しながら遲れ勝ちの二人を待つた。幻の樣に浮んで見えて來る雪の丘を幾つとなく越える。遂に最後の上りだ、振り返つて呼んでも返事もないのでそのまゝ頂上に上る。三時十五分、三角櫓の名殘の柱が一本僅かに出てゐた。大津岐側から吹上げる吹雪に目も開けられないのでそのまま退却する。夏池のある邊で二人と一緒になる。頂上迄行つてきたと云つたら自分の事の樣に喜んでゐた。

一月の尾瀨　石原

シールを脱して愈〻樂しみにしてゐた下り、視界を奪はれた爲思ひ切つて飛ばす事は出來なかつたが、久し振りで直滑降らしい直滑降を味ふ事が出來た。栂の間を縫つて一氣に下り晝食した所で二人を待つ。次第に木の間が狹くなつてくると今度は輪樏に遲れる樣になるので遂にスキーをぬいでしまつた。そして万物が皆闇につゝまれる頃やつと丸屋へ歸り着く事が出來た（六時）。丸屋では今直ぐに出迎へに出ようとしてゐる處だつた。

夜は祝宴を開いて會津駒ケ岳にスキーの跡を印したのを祝福して呉れた。

翌九日は十時三十分駒ケ岳と丸屋とに別を告げて會津街道を下つて行く。數日來の吹雪の爲通行は全く杜絶して、今日はこの邊唯一のスキー使用者の郵便屋も上つて來ないといふ。ラッセルの苦痛の覺悟はしてゐたが實に意想外だつた。スキーで膝を越す馬鹿雪、それに三四貫の荷もあるし、一人の旅には全く過大な苦痛だ。一里行くのに平均三時間かかつた。

又俗にへつりと稱して雪崩のツークになつてゐる所が幾つかある。例へば追分橋の先のもの、二重瀧附近のもの等何れも舌狀の小さい新雪雪崩を出して居た。

檜枝岐から大桃迄九時間もかかつてしまつた。

翌日は天氣もよし道も輪樏の跡があるので全く氣樂な氣持で旅する事が出來た。山口から右に踏み固められた峠道に入つた。月光に照された針生峠附近の景色は今も忘れられない。その夜は峠の茶屋に泊めて呉つた。

その翌日はスキーで針生へ下り檜澤（ヒサヘ）村の金井澤で自動車をつかまへ、四時頃若松の町に入つた。

附記　地名は武田久吉氏著「尾瀬と鬼怒沼」に依る。

ピヤナン越の山旅（上）

羅東より南湖大山、次高山を經て霧社へ

鹿野忠雄

一九二八年八月、本會々員出口一重、京大山岳部酒戸彌二郎、岩田權兵衞の三君と共に、羅東より入山、南湖大山、次高山を究めて霧社に出た。本篇はその紀行である。

日程

八月十八日＝羅東―土場―タボー―カラボー―ルモアン―シキクン
十九日＝シキクン―米良―ピヤナン
二十日＝ピヤナン―キレットイ（南湖大山第一露營地）
二十一日＝キレットイ―タケジン―プナッケ（南湖大山第二露營地）
二十二日＝プナッケ―南湖大山頂上―レゼック（南湖大山第三露營地）
二十三日＝レゼック―ピヤナン鞍部
二十四日＝ピヤナン鞍部―有勝―支良節―平岩山―シカヤウ
二十五日＝シカヤウ滯在
二十六日＝シカヤウ―カッショ（次高山露營地）

二十七日＝カッショ―次高山頂上―シカヤウ
二十八日＝シカヤウ滞在
二十九日＝シカヤウ―多保久―棟岡―松嶺―マリコアン―マレッパ
三十日＝マレッパ―ハック―舊ハボン―霧社
三十一日＝霧社―眉溪―埔里

一、山入り・シキクンまで

臺灣に渡つて初めての僕に、その物珍らしい異國情緒や、熱帶の有つ華麗さや、あくまで原始的な森林の外にその高山の有つ壯麗雄大な構へと、清淨冷徹な裝を、そして北の國を想はせる可憐な閑寂さと、又南の國にも淋しい美しさがある事を、知らせてくれたのは、ピヤナン越の旅であつた。

徑は北、羅東（ラトウ）から初つて、宜蘭濁水溪（ギランダクスイケイ）を溯り、大甲溪（ダイコウケイ）の源頭に出で、それより幾つもの山を越えて、霧社（ムシヤ）から埔里（ホリ）に拔ける。徑の東には、連々と南走する中央山脈が眉を壓し、西には之は又巨大な次高山彙が聳立して、東の空と張り合ふ。徑はこの二つの山間をかぼそくも行く、恰も山の威壓に慄へ戰く樣に。

思ひ出せば、初めてのピヤナン越の旅は、一九二六年七月の事で、もう三年前になる。平和な山旅であつた。毎日々々微笑む樣な晴天に感謝して、續けられた山旅の思出は、常に新たな懷舊となつて僕の心に蘇る。其處には、快活な沈默と陶醉を破らない靜かな空氣と、人の心を優しくする樣な和かな美と、又、少し許りの勇猛心を必要とする探究氣分があつた。徑の左右に望まれる山は青く透んで居たし、岩は見事であつた。森は眼に見えないガードナーが、手入れをした樣に整然と繁つて居たし、鱒の棲んで居る溪流は清かつた。そして綠の草原は、滑

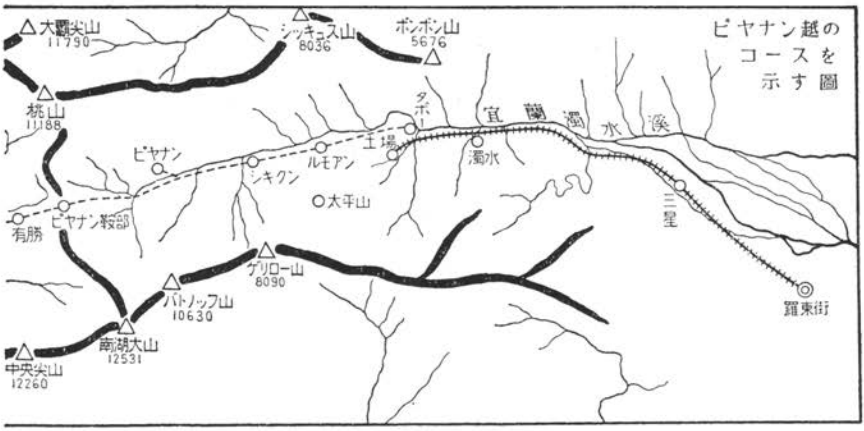
かなスロープを被ふて居た。山間に集團するタイヤル族の部落と、純朴な山の蕃人、そして、それ等が釀し出す奥山の旅に相應しい劇的情景。

それも之も、今や、三年前の思出となつた。然し部屋の隅に置かれた山行の荷物が、再度の訪れに就て、とりとめのない想像を撒き散らし、昔日の記憶を喚び起す。山又山に圍まれたピヤナン越沿道の自然と蕃人よ、三年後の今日と雖も、それは恐らくは變るまい。昔と同じく、自然も蕃人の心も、共に美しいであらう。

羅東から太平山森林鐵道に乘つて、ピヤナンの旅の第一歩を踏み出したが、臺灣名物の豪雨に祟られて、鐵橋が落ち、運轉不能の災難に先きを阻まれて、三星（サンセイ）の東鄕旅館とか云ふ汚い宿屋に雨止みをした。豪雨は益々甚くなる許り、水田は池と化し、河は氾濫した。余りの猛烈さに動きがとれず、遂に止むなく一晩を過したが、今日は大分いい樣だ。未だ降り足らない小雨が、庭にはびこつたトケイソウの果から、滴り落ちる。

よく降るもんだなとあきれ顏に、西瓜を割つて居ると、郡の理蕃課（羅東街）から出口君が今日、臺北から五時の汽車で羅東に着くと云ふ電話なので、晝から臺車を飛ばして、羅東へと出る。停車場に駈けつけて見ると、五時半の列車は間もなく着いた。吐き出される人込みの中にも、初對面の出口君の姿は、その山登りの服裝から、直ぐそれと知れた。燈の點き出した夕暮れの街に力車を走らせて、澤村旅館に宿を取る。

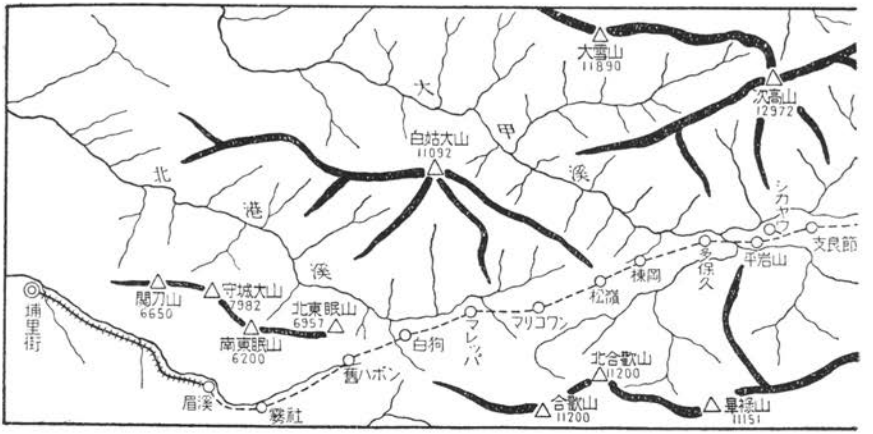
風呂と飯を濟ますと、戸外は完全な夜だ。之から奥山に入る二人にとつては、羅東のさゝやかな街の灯も、都會への袂別だ。一本しかない通りの人込みを分けて、甘味を仕入れたり、これから、どの位伸びるもんだか、頭を苅つたりする。明日の出發は早いのだ。こんなに街を歩きまはつて、徒に勞れるより、早く寢た方が好い。明日の行路を頭に描き乍ら、宿に歸ると、開け放された窓から飛び込んだガチャガチャが、蚊帳に止つて、忙しく夏



の夜を語つて居る。

八月十八日。これから少くとも暫くは、一分二分を爭ふ樣な、せゝこましい都會の時刻にわづらはされる樣な事はないだらう。六時半と云ふ發車に、早朝の眠むたげな街の通りに車を急がせて、竹林驛（羅東より十數町隔つた太平山森林鐵道の起點）に着いて見ると、發車にはまだ間がある。

雨模樣だつた天氣がどうやら恢復して來た樣だ。早い夏の陽が、雲間からもれ出して、驛近くに山と積まれた檜材の、雨にしとつた面からは湯氣が、陽炎の樣に立ち昇る。やがて車は動き出した。一臺の小さな客車と十數輛の空の貨車とを引っぱつて。宜蘭平野の澤地、宜蘭濁水溪の扇狀地を車はガタコト走る。廣く開けた水田が薄陽を受けて綠に光り、白い斑點を點ずるアマサギと、水牛の脊の上に戯れるオゥチゥは、此處にも亦臺灣一般の風景である。幾つかの竹藪に圍れた臺灣人の部落を車窓に送る中、山が次第に迫つて來た。水田は次第に減つて下界の色彩を消し、廣い荒々しい河原を、勢よく走る濁水が、いよいよ山の近い事を暗示する。車は濁水（タックスィ）に停る。車内を程よく滿して居た人數の大半は此處に下りて、殘るは太平山森林伐採事業の人夫と、



騎銃を持つた蕃界巡査、それに僕等二人である。發車の遲いのも無理ぢやない。長い貨車の連りが、轟々たる響をあげ、太平山の檜材を滿載して、下りて來る。蕃界の原始は傷はれ、森林の清淨は次第に汚される。この樣な勢では、年ならずして我々は阿里山の悲歎を太平山に新にしなければならないのか。原始を戀し、山を愛するものの必然の悲想と憂鬱。山は廣く、森は太平山に限らない。平地を去つても憂鬱は常に自らの胸に湧く。我々は、ほがらかに、あくまでほがらかにどうしてなれぬのか。

車は尙も我々を山近く運ぶ。右手には已に討伐當時獰猛を以て聞えたガオガン蕃の山が、眼近かに迫つて居る。濁水溪の左側に、突然削壁をなして連るこの山連は、ボンボン山（五六七六尺）を經て、シッキュス山（八〇三六尺）を起し、桃山（一一一八八尺）に至つて次高山彙に續いて居る。激戰地として名高いボンボン山の茅戸の圓い頭を後方に見送つてからは、土場（トバ）は程遠くない。鋭い車のきしる音と共に、一カーヴを過ぎると、九時には土場に着く事が出來た。

土場はこの森林鐵道の終點である。收容量優に阿里山を凌ぐと云はれる太平山の森林は、之より奥、ゲリロー山（八〇九〇尺）に至る約

六十方里の地域で、急勾配の軌道は更に急坂を攀ぢて太平山より源（ミナセト）（地名）に至る。製材小屋、人夫小屋、それに二三の臺灣人酒保。伐採事業區には通有の堀立小屋風景、それに強い木の香。空地には紅檜、扁柏、香杉、栂等の木材が無慘にも轉がされて、どうにもならない殖民政策をかこつて居る。

長い丸太の階段を踏んで駐在所を訪ね、荷物を運ぶ蕃人の世話をして貰ふと、もう氣は樂だ。今日中にシッキュンまで行けば良い。途中の呑氣な漫歩を樂しんで、早くも駐在所を辭し、空身に辨當と水筒に水を一パイ詰め込んで、早々土場を出發する。荷物運搬人夫の都合がついたのは何より好かつた。前の旅行では丁度蕃人が見當らず、是非なく臺灣人苦力を雇つたが、歸りに蕃人にいぢめられると云つて中々行かうとしないのには、少からず閉口した。

雨後の太陽は殊に暑い。カッと照りつける陽光が、又しても豪雨の前の炎暑を思ひ出させ、叢に鳴くクサゼミの暑苦しい聲が、蒸し暑い大氣の中ににじみ渡る。どうやら天氣も恢復する樣だ。之からの山旅が晴天に惠まれるならば、この位の暑さは何でもない。コバルトの空に誘はれる樂しい幻想の數々。スッカリ暢氣になつて、捕蟲網を揮ひ、蝶の影を追ひ乍ら行く。路は濁水溪の右岸、河沿ひの徑である。右手は濁水溪が文字通り濁つた水を波打たせ、白い河原をまぶしく反射させ、いよ〳〵迫つた對岸の山の斜面に樟の綠葉が鮮かである。

宜蘭濁水溪は、臺灣には少い縱谷の一である。地質圖を見るに、この溪谷は丁度、上部粘板岩系と下部粘板岩系の境界線を走り、面白い事には、夫れは全く一直線をなして居る事である。事實この溪谷の直線狀流下は、土場附近からも明に認められ、この溪の終點ピヤナン鞍部まで一眼に見通す事が出來る。南湖大山は前山に隱れて見えない。然しその西へ延びた尾根の低下して再び桃山の胸に續く所、ピヤナン鞍部は、遙か十里の彼方から、

我々を麾く。この溪谷の風景を特徴づけるものは、尙、多く發達した段丘である。河岸兩側の山の裾には、溪谷の右又は左に、何れも明かな段丘が、綠の草原に被はれて、獨特な景觀を描き出す。その中の大なるものは、ピヤナン社とマナウヤン社の段丘臺地だ。兩者共に約四千尺、廣い平坦地は耕地に當てられ、其處に營まれた集團部落は堅固な要塞を誇つて居る。

今日の目的地シキクンは程遠くない。溪の右岸に隆まつた稍臺地上の斜面は、シキクンであらう。行程の氣易さに、ボツ〳〵足を運んで居ると、網袋(タツカン)に荷物を背負つた蕃人に二三會ふ。流し髮に眼ばかり光らせた彼等は、出會ひがしらに、ニコリともせず、「ムサ・イノ」(何處へ行くの意)と太い聲を出す。何、バボー・バユ(南湖大山)に行くんだと云ふと、バライ?タラガイ・ルギャフと眼を圓くする。徑は少しく溪畔を外れて山際を通じて居る。徑々、ワタナベアゲハ、タイワンモンキアゲハ、それにタイワンタイマイが多い。雨後の濁つた水溜りに華麗な翅をはばたいて居る。溪畔を離れたので風がなくなつたが、その代り左手の密林からは、水量の豐富な小川が時折流れ出て來るので、その度毎に、尻を落ちつけて休む。水はあくまで冷く、岩角に玉を飛ばして流れ落ちる水は非常に淸いので、濁水溪本流の泥水に送るのが惜しい樣な氣がする。この邊の小川には、可憐な蝶ヲキナハカラシジミが稀でない。水面を速かに轉回し、しぶきを浴びる岩角に止つたかと思ふと、何處ともなく傍の叢に消え失せる。溪ある毎に、腰を下して、激する瀨の音と、凉しい綠蔭に夏の日を忘れ乍ら行く中に、ルモアンやシーセンを何時しか過ぎて終つた。もうシキクンまでは間近い筈であるが、余りに暢氣な足取りに、時計は已でに二時を廻つて居る。

二時と云へば未だ早い。然し先き頃から時雨れ出した空が、いよ〳〵怪しくなつて來て、雨雲を孕み出し、果

ては宜蘭平野に雷鳴さへ聞えて來た。山は早くも灰色に霞み、喧しく樟の林で鳴いて居たタイワンヲナガドリの聲が何時の間にか聞えなくなつた。いくら今日の行程が樂だらうと云つて、目的地に着いてから着衣を乾かすのは面倒である。急ぎ足に青い草原の一本道を行くと、竹鷄（テッケイ）が驚いて徑を横ぎる。遂に雨足は此處まで追ひ着いた。草原に點々と純白の花を咲かせて居るタカサゴユリ（テッポウユリの一種）は、雨にうたれて、心もち身を屈め出した。桑畠が現れて並木道の葉櫻がシキクン駐在所の門口を指し示す。石段を踏み石垣の門をくぐつて、三時半には駐在所に着く事が出來た。

シキクン社は、濁水溪流域に分布するタイヤル族溪頭蕃の中でも、ピヤナン社と共に最も勢力を有する蕃社である。古くよりこの地方に居を構へ、南澳蕃とガオガン蕃屈尺蕃に親戚關係を有し、領臺前も交通は之等の地方となされた。戸數八十三戸、人口四百十九人（昭和四年十二月）溪頭蕃中最大の蕃社である。蕃社は二段になつて居る。一は駐在所の裏手の斜面、他は河岸の平地である。集團した丸太小屋と足のついた穀倉、檜の皮で葺いた屋根は、この地方の特異な風景である。雨の日の蕃社は淋しい。皆家の中に居ると見えて、豚が二、三匹鼻を鳴らして居る以外には、何も見當らない。

駐在所の事務所の藥品棚に、蛇の様なものがアルコール漬になつて居る。注意すると、それはアシナシトカゲ（Anguidae）だ。これは分類や生態又分布上から見ても、極めて興味ある爬蟲類である。早速稍〻厚顏乍ら、卓上採集を試みる。聞けばシキクンと太平山の間の深林中で蕃人が見付け、駐在所に持つて來たのだと云ふ。筆者は尙この種の標本を所藏して居るが、この種がこの地方に產する事は分布上重要な事實である。この動物は、蜥蜴乍ら蚯蚓の様に土中生活の結果として、脚を退化させて居る。一貝蛇又はウナギの様であるが、頭上の鱗片、

腹面、皮膚等により素人でも明かに之を區別する事が出來る。全世界僅かに十五種の稀有な種で、それは南歐と印度、瓜哇に一種を有する他、何れも中米南米に限られる奇妙な分布振りである。ビヤナン越二度目の旅は、快い山幸の他に、この樣な收穫を與へてくれるであらうか？思ひ出した樣に若干の科學的興奮が暫し僕を支配した。

太平山の森林から伐り出した良材で建てられた檜御殿に案内されて、風呂から出て來ると、忘れた樣に雨雲は南の空に遠のいて、暗い菫色の薄暮が四邊に擴つて居る。湯上りの體を夕風に吹かれ乍ら、蕃社の附近を、そゞろ歩く。シキクンはその駐在所員に仍つて、四季薫と云はれるが、之は好い思ひ付きと云つてよい。標高二千五百尺、濁水溪を溯つたこの山境一帶の地は、四季溫暖で、且つ内地を思ひ出させる何ものかがある。蕃社を歩いて居る中に、生蕃犬（日本の秋田犬に似て耳が立つて居る。犬の中でも最も原始的な素質を保存して居る）が交尾して居るのを見る。確か春も過ぎた筈だ。内地と臺灣、平地と山地では異ふであらうが、この交尾期の不一致は面白く感じられた。夕飯を思ひ出して歸路につく。今では薄明は闇に轉じて、濁水溪兩岸の山が黑く、幽かな畫の餘光に河身が白く光つて居る。

晩餐には山には不似合な程上等なものを供された。海谷部長や他二、三の巡査の人々と共に、ビールの醉を含んで、蕃人の事やその行政に就いて、忌憚なく種々の事を談じ合つた。上よりの命令を如何ともする事の出來ない現蕃の人達である。然し中には眞面目な、眞に天眞爛漫な人達もある。今夜は何時になく愉快な一晩を過した。未だ旅の一日目が終つた許りだ。之からは加速度的に山行の好さが增して行くのではあるまいか？明日、明後日。それ等の幻想が二重寫しの樣に、僕の頭に覆ひかぶさつて來た。

二、ピヤナン社

八月十九日。今日はピヤナンまで行つて、明日の南湖大山行の支度をする日である。暖い寢床の中から心急いで、起きる早々空の色をうかがふと、青空は見當らないが、白い雲には明るい光が宿つて居る。早朝のスガ〳〵しい冷氣に蕃社の鷄が、今日の初めを告げ、河岸近く屯して居た白い雲が動くともなく動いて、廣い河原を緩く蛇行した河身が、次第に判然として來た。靜かな蕃社を一周りして居る中に、うらめしい事には、早くも細雨が下りて來た。今日の天候は、ひいて明日の天候である。少しく腐つて居間に歸る。

居間からは居ながらにして、濁水溪が見渡せる。そしてピヤナンの豪地は近く、ピヤナン鞍部はより遠く霧に霞んで居る。飯はとうに濟ませて終つた。何にしても氣懸りなのは天候だ。前から雲の行方を見つめて居るが、雲行は決してよくない。河岸近くの野面に作られた蕃人の畠の斑が、白雲の動きに現れては消える。明日の山行の支度もあるので、荷物をまとめて出掛けやうとするが、その度毎に強くなつた雨脚の縱縞が、四邊の風景を覆ひかくすので、思はずも時を過した。際限がないので十時にはシキクンに別れを告げてピヤナンへと急ぐ。

雨に打たれた山の綠は美しい。然し明日の日を思ひ、駐在所から借りた雨傘に雨を除け乍ら、濕つた徑を小走りに行く我々は、決して樂しいものではなかつた。米良（メラ）を過ぎて溪の右岸を通ずる徑を左に別れ、廣い河原の小石を踏んで、段丘崖の急な勾配を乘り切ると、ピヤナンの豪地だ（廣さ約八十甲あると云ふ）。平坦な草原の兩側には、水々しい赤榛の枝が我々を迎へ、その彼方にはピヤナン社の蕃屋が群つて居る。蕃屋の屋根に見られる千木（チギ）は、臺灣蕃社中このピヤナン社丈けに見られる家屋形式である。十二時前には、駐在所に着く事が出來た。明

日の南湖大山行の捜索隊長櫻（正兵衛）部長が、出迎へられる。

ピヤナン社は標高三千九百尺、戸數六十戸、人口三百餘人、シキクン社と同様タイヤル族溪頭蕃に屬し、その最南最奥に位置する。婚姻關係はガオガン蕃に最も近く、交通はシキクン社と異り、古くよりピヤナン鞍部を越えて、臺中州のシカヤウ蕃となされて居た。南湖大山より以北、ゲリローに至る北中央山脈の脊梁を境界として以西一帶の地は、ピヤナン社とシキクン社の狩獵區域である。明日の南湖大山行に、ピヤナン社の蕃人を道案内とするのは、以上の關係に仍るのである。

駐在所の前は大きな廣場である。そしてそれを圍む石垣と、その向ふの千木を交叉させた蕃社の屋根を近景として、南湖大山から延びた尾根が森林の密生に被はれて居る。畫飯を濟ませても細雨は未だ止まない。然し漂々として山間を彷徨つて居た白雲が、次第に空高く上つて行くのは、天候の好調を示すものではあるまいか。然し雲さへなくなれば此處から間近かに望まれるピヤナン鞍部が、見えないのは何にしても憂鬱の種である。今日我々二人に來り加はるべき、酒戸、岩田兩君は、今、ピヤナン鞍部にある筈である。駐在所の電話を借りてピヤナン鞍部駐在所に電話すると、初めて聞く聲の主は、今同地に豪雨が甚いから、雨勢衰へたら出發すると云ふ。ピヤナンとピヤナン鞍部とは、極く近い距離にあり乍ら、氣象的にも斯くも違ふのだ。

僕は再びピヤナンにやつて來た。南湖大山に登らうとして訪れた一昨年の旅。それは時ならぬ溪頭、南澳兩蕃の紛擾のため、中止を餘儀なくされた。溪頭、南澳の兩蕃は、中央山脈を西と東に隔てゝ居るが、互ひに親戚關係を有し、婚姻や交通も相互に行はれて居た。然し、一九二六年五月の事、南澳蕃の蕃人が山中に於て敵蕃たるガオガン蕃と誤つて馘首した蕃人がピヤナン社の蕃人だつた事は、不幸にして、濁水溪流域の平和を攪き亂し、

六千人の蕃人、月明の夜を期して相打つかの、撓亂を生ぜしめた。初めピヤナン社の蕃人を誤殺した時、南澳蕃ピヤハウ社頭目は、仇敵に對する怨みの一刀を加へやうとして見ると、ガオガン社の蕃人ではなくピヤナン社の蕃人なので、驚いて首も獲らず、蕃刀、槍、その他携帶品を謝罪の意味で死體に供へ誤殺の意を表はして引揚げたと云ふ。之を以て見るも南澳蕃はピヤナン社に對し敵意のなかつた事は瞭かであるが、激昂したピヤナン社蕃人が狩獵中の南澳蕃蕃人二名の首を獲るに及んで、事件は益々擴大した。溪頭蕃千五百人に、親戚關係あるガオガン蕃二千人、更に先頃飢饉の際恩顧を受けたキナジー蕃が之に加擔した。之に對し南澳蕃は三千人。兩者人數に於て略ゞ伯仲するが、ガオガン蕃が隱匿銃を多數有する事より、勝は恐らくピヤナン側にあると云ふ。然し乍ら、南澳蕃は古來慓悍を以て鳴る蕃人である。彼等南澳蕃に隱匿銃器のない事を知り、あくまで爭鬪するとの事であれば、彼等は止むを得ず一人殘らず討死するまで、戰ふべきことを決議した。之がため、太平山森林伐採事業の人夫は、萬一を慮つて山を下り、當局は之が和解に東奔西走し、遂にはルモアン守備隊の示威行軍を見た。然し之等風雲急な蕃界の空氣も、當局の慰撫に仍りて辛うじて事なきを得たのは、何にしても幸であつた。然し僕の山行は、之等の事件の前に於ては問題でない。僕はピヤナンの山旅を、終始南湖大山のおほらかな姿を、惜しくも顧み乍ら霧社へと拔けたのであつた。南澳、溪頭兩蕃の和解式は越えて翌々年、今年（一九二八年）になつてやうやく行はれたばかりであるが、今度の山行に於て、之等兩蕃の軋轢より來る危險は先づないであらう。僕は當時ピヤナン社蕃人が馘首した南澳蕃蕃人の生首二個を見た。蕃社から少し離れた茅原の間に、立てられた首棚。竹で臺を作り、之に檜皮で葺いた屋根がついて居た。一個は略ゞ白骨になり頭髮が殘つて居たが、他の方はどうしたものか、煉瓦色に木久伊（ミイラ）の樣になつて居たのは、どう見ても無氣味なものであつた。

白い雲は綿の様に絶えず密林の上を飛び迷ふ。然し細雨は何時の間にか止んで、山の面(オモテ)は何となく晴れやかだ。晴れてくれ！と晴れてくれ！明日の天候を祈り乍ら、蕃社を出はづれて、ダラ〳〵坂を下りかけると、ピヤナン鞍部を發した酒戸、岩田兩君に、ヒョッコリ出合ふ。之で明日の山行のメンバーは、全部揃つた筈だ。

明日からの南湖大山登行のプランは、比較的樂な行程である。エキジュウ溪を溯り、キレットイに一泊、タケジンを經て頂上直下のブナッケに一泊、登頂を完うし、途中レゼックに泊つてピヤナン鞍部に下りる。山で急ぐのは大嫌ひだ。四日間を費せば、南湖大山の山神もその美と崇高の一般を、我々に垣間見せて呉れるであらう。僕は事情の許す限りのユッタリした行程を選んだのであつた。

山行の荷物は十六人の蕃人に割り當てられた。雨の日の夜は何時もより早く來た。今は明朝の訪れを待つ許りだ。シキクンから態々越された佐々木警部補やピヤナン駐在所の櫻部長に、この四月に登られた本會名譽會員大平晟氏の逸話や、山の事情に耳傾けて居る中に、早くも夜は更けた。戸外に出て見ると、黑い闇に冷たい夜氣が振つて、物音一つ聞えない靜寂さである。

三、エキジュウ溪を溯る

八月二十日。いくら暖い寢床が離れ難くても山行の朝である。飛び起きて見ると、早朝五時半の空は灰色に曇つて。四邊の山々は、未だ朝の床を離れない。空こそ曇つて居るが、今日の天候は稍〻有望だ。天の色には明るい閃きがある。

飯は濟ませた。今は唯出發を待つ許りだ。荷物運搬の蕃人を待つて居ると、彼等は來た。然し初め態々選んで

連れて行く筈であつた、脂の乘り切つた四十才位の蕃人の姿は極めて少い。彼等の大部分は二十才前後の若者である。今丁度畠仕事が急がしいとか云つて、自分の子供を代りによこしたのには、一寸悲觀した。年少者と壯丁とでは、已でに體力に於て相違があり、且つ臺灣山岳の登攀を潤色する狩獵の技術に於て、はるかに劣つて居る。然し、網袋に大きな荷物を背負ひ、腰に尺余の蕃刀をぶち込んだ姿は、見て居て微笑ましくなる勇ましい姿である。何れも貸し與へられた銃を手に、五發の彈丸を嬉しさうに、いぢりまはして居る。

廣場に集つたものは、搜索隊を編成する隊長櫻正兵衞部長と他に巡査二名、警丁一名、我々四名に、蕃人十六人、都合二十四人の大部隊である。我々一行は蕃界の警備線を離れ、奥山へと足を踏み入れるのである。駐在所の電話が朝からしきりと鳴り響く（電話は蕃地警備の心臟である。臺灣山間の警羅線に電話は驚く許りに設けられて居る）。七時三十分。懷かしいピヤナンの蕃社ともお別れだ。我々はこれ以上のハート・スティーラーたる南湖大山の山懷指して、駐在所を後にした。我々一行の出發を郡の理蕃課に電話で報告する佐々木警部補の聲を我々と下界とを繋ぐ最後の音として、我々一行は純眞な自然の懷へと、ひたすら歩を早めた。

ピヤナン鞍部に通ずる警備線道路より左に別れて、エキジュウ溪を溯る。溪の幅は數十間位、水量は豫期したより少く、僅かに膝を沒する位、粘板岩の河床を淙々の響をあげて流れ下る溪水は、汚灰色に濁つて居る。河岸兩側は臺灣北部三千尺より四千尺に見られる深性植物の密林である。カハカミガシ、ハゼノキ、タイワンウラジロガシ、ホソバシラカシ、クスノハカヘデ、ヲガタマノキ、ニヒタカシログモ、ウスバヒサカキ、イトマキシマモミヂ、モクコク、タイワンイヌグス、タイワンニクケイ、アヲグスモドキ、タイワンシホヂ、サカキ、アカメガシハ、ナンバンドクウツギ、ニホヒタブ等の樹種が、枝をからみ合つて繁茂し、之にタイワンヤツデ、イハガ

ネ、タイワンゴトウヅルが混つて居る。股まで水にひたして、一行は溪水を右往左往して徒渉し乍ら、奥へ奥へと溯る。溪谷の徒渉は何故かより原始的な探檢氣分を增加する。加ふるに運搬蕃人の、溪聲を破つて、四邊に木霊する奇妙な掛け聲。身は何時しか、ボルネオの最高峯キニバルの探檢記中にあるの思ひがした。今にも崩れ落ちて溪水を浸さうとする樣な樹々の綠の美しい事よ。青灰色の翼をひらめかすカハビタキの飛翔。白っぽい河原に、ぬれた草鞋の跡を印し乍ら、無心に河床を辿り、見上げるともなく上空を仰げば、今し右岸を離れた白雲の斷片が、裕々として左岸に飛んで、山の一日のうつろひは、あくまで長閑である。

河傳ひを初めてから、已でに一時間になるであらう。左岸の岩床に水溜りがあつて、溫泉の湧出を示す湯氣が、朝の山氣に幽かに上つて居る。蕃線タカラウライと云ひ、此處には山鳩の群集する事が多いと云ふ。尙も右岸を傳ふこと暫時、右岸の山手よりは、水清い小溪が落ち込んで來て、傍には數十人の露營を許す平坦地がある。蕃稱テリューと云ひ、破れかゝつた小屋と、黑い焚火の跡が淋しく遺つて居た。エキジュウ溪の河身が次第に狹まり、傾斜が增して水勢が强くなり出す頃、河身は一曲りして、前面には三百尺位の懸崖が聳え立ち、森茂る四邊の綠に赭色の斑を描き出す。面倒ではあるが懷かしい徒渉も之で最後だ。我々の登路は此處から、エキジュウ溪より別れて、この懸崖を攀ぢ、稜線にとりついて、ひたすらに高きに近づくのだ。我々一行はこの急崖の下の砂礫上に、しばし腰を下して、この美しい溪谷に心秘かに別れを告げた。

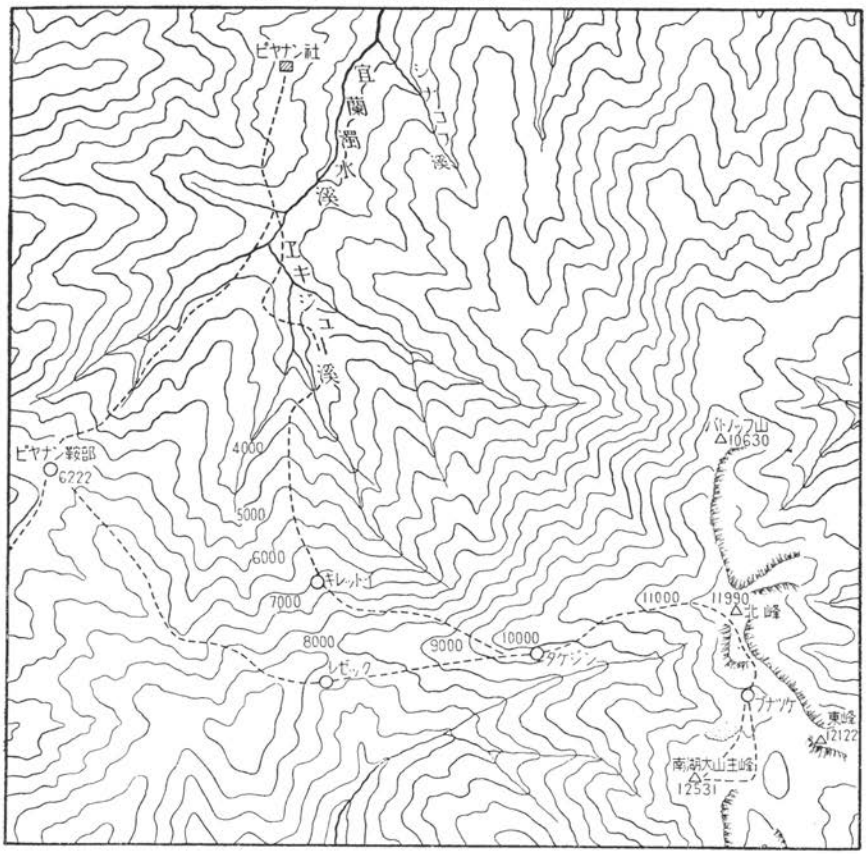
優に四十五度もある急崖。その面に幽かにそれと判ぜられる蕃人の狩獵路は、蚯蚓の跡の樣に匍つて尾根へ登つて居る。崖は粘板岩なので、手をかけ足をふんばる足場は賴りにならない。長々と續く一行二十四人、各自崩壞し易い足元を勞つて登るほどに、エキジュウ溪の瀨の音は遠く眼下に隔つて、稜線は直ぐ頭上である。タィワ

ンハンノキの林を分け尙も登ると、傾斜は左手に轉じて、稍廣い尾根の上に辿り着く事が出來た。時正に十時少し過ぎである。

我々一行がピヤナン駐在所を出發してから、もうかれこれ三時間になる。僅かに開けた立木の間からは、エキジュウ溪の河筋が密林に埋もれて居るのが見下され、その向ふにはピヤナンの段丘が昨夜の夢の樣に望まれる。十時過ぎと云ふのに、密林にかゝつた霧は去らず、陽の眼は仰げない。今日の天候はこんなものであらうか。少しく悲觀し乍ら、濕つた落葉に腰かけた尻を持ち上げて、露營地へと急ぐ。其處までは、唯この稜線の高まるに連れて、ひたすらに辿ればよいのである。

濕林の中の徑は淋しい。暗い森林の氣の中に、ヤブドリやホイビイの聲が、霧の精でゞもあるかの樣に滲み渡る。突然森の梢をゆるがして、鋭い聲と黑い影が走り過ぎた。見れば猿の群である。谷間に下つて行くその氣配では數は五六匹であらう。猿が行つて終ふと、又森の中は一層淋しくなつた。然し上り許りの尾根傳ひは、知らず〳〵我々を高きに運んで、高さは已に五千尺を越して居る。今では暖帶の樹種は漸く跡を絶つて、溫帶の樹木が之に代つて居る。その主なるものはムシヤダモ、タイワンクルミ、ナガバイヌグス、カハカミガシ、カハリシロダモ、ランカンシデ、タイワンヤツデ、タイワンアリドホシ、タイワンキハダ、タイトウガマズミ、アリサンヒサカキ、アリサンハヒノキ、コバノシロダモ、ヤマグルマ、オキナハソヨゴ、タイワンイヌガヤ、アツバヒサカキ、ニヒタカヒサカキ、ミヤマシキミ、ヒガンザクラ等で、之に混つてタカサゴカヘデ、トガリバカヘデ、クスノハカヘデ、フンキコカヘデ等が眼についた。臺灣に於ても、山地には楓の種類が珍らしくない。晩秋の候ともなれば、之等の楓は一時に紅葉して錦繡の美を織りなす事であらう。垂直的臺灣、熱帶より暖帶へ、溫帶より

南湖大山登路概念圖


ビヤナン社
宜蘭濁水溪
シナコ溪
江キシュー溪
ビヤナン鞍部
6222
4000
5000
6000
7000
8000
9000
10000
11000
キレット
レゼック
タケジュー
パトノッフ山
10630
11990
北峰
ブナツケ
東峰
12122
南湖大山主峰
12531

寒帶への變貌、臺灣山岳の登攀は、顯著に森林帶の更る面白さがある。

下生えの羊齒が、オヒワケメダケに遷り變ると六千尺近い高距だ。ホウゴウシデ、ツクバネガシ、ハナイカダが現れ出した。ヒラギソヨゴの固い葉が眼につき出した。尙も徑は登つて木の種類は、移動カメラの樣に移り變る。ウラジロヤツデ、ミヤマシキミ、ヒメユヅリハ、ヤマグルマ、タイワンリンゴ、タイワンモクレイシ、イヌツゲ、ヒラギガシ、それ等は一去一來、淋しい森林の氣に滅入つた一行の眼を慰める。

四、キレットイ

白い霧が糸の樣な雨を降らし出した。濕林の空氣は心なしか、より冷かに身に迫る。正午近い腹具合に、何處か休み場所はないかと先を急ぐ中、密林の帳は急に開けて、前面には急な茅戸の尾根が長々と續いて居る。タカネスヽキの赤い穗が、秋の近きを思はしめ、霧の中にものうくゆれて居る。

此處がキレットイである。尾根の右手は一帶の凹地で、淋しい狩小屋が遺つて居る。低地に蔓夏草と蕀の藪、清い水はその滴を集めて滾々と湧き、附近にはタイワンゴエウの大木が伸びて居る。標高約七千尺。先きの急崖の附近に流れ落ちる小溪の源頭だと云ふ。

未だ十二時前で、一日の行程としては容易過ぎるが、降り出した雨を冒して尙も進み、一萬尺のタケジンに露營するのは、一寸强行である。初日としては更に進んで置きたいのであるが、重い荷を脊負つた蕃人達は、更に進むのに好い顏をしない。今日此處で緩り休養するのも無駄ではあるまい。靜かな雨の日である。山の木を靜かにぬらして行く雨を見て居ると、この小屋に泊りたくなつたので、今日は此處で休養とする。

小屋は二、三ある、大平氏の登攀の際のものだが、何れも斜面に脊を向けた破風式である。蕃刀を揮つてメダケの蓆を豐富にし、雜木の枝を伐つて屋根を一層完全にするべく蕃人の手傳ひを終へると、後は用はない。小屋の中に寢ころんで、ボンヤリ、前の立木を眺めて居る。わびしい小屋に、幾日振りかに人は訪れた。集められた薪は燃やされ、立ち昇る青い煙は白い霧に夢の様に溶けて行く。芋を食べ終へた蕃人は、サッサと銃を擔いで露しげき叢を拔けて行つた。鹿でも獲れると賑かな夜が迎へられるのだが。

山の靜かな味ひは、過激な登攀の最中より、却つて退屈な雨の日等に求められるのではあるまいか。樹を眺められる露營地はいい。眼の前にスク〳〵と立つタイワンゴヱウの幹十數本。横に延びた優しい枝は、サルヲガセにクリスマス・ツリーの様に飾られて、そのか弱い糸の尖は、幽かな霧の呼吸にも、惱ましくゆらぐ。

大勢の人間共がやつて來たので、先き程から遠慮して居たタイワンジュヅカケバトが、皆が寢入つて靜かになつたのを見すまして、タイワンゴヱウの頂邊から、よせばよいのに霧の日の歌を歌ひ出した。之を聞きつけた蕃人の一人が、スル〳〵と攀ぢ登つて行くと、彼は雛を置いて森の彼方へと飛び去つた。やうやく毛の生えた許りの雛は捕へられて僕の所へ來た。氣分を亂した蕃人に稍〻憤を感じたが、鳥や動物を捕へろと云つて置いた手前、怒る事も出來ない。雛を元の巣へ返して置けと云ひつけたが、蕃人の事だ。大方、雛は蕃人の腹中に巣を構へた事だらう。

霧の日の夕暮れは何時もより早く來る。霧は益々深く、迫り來る闇に、タイワンゴヱウの枝に營まれた山鳩の巣は、もう分らない。雛を置いて逃げて行つた親鳩は、暗くなるのに遂に歸らない。狩に出掛けた蕃人の獲物を當にして、可なり夕飯を延したが、際限がないので、さゝやかな獻立で飯を濟ませて、横になる。樂な一日であ

つた。これ丈休養すれば明日の元氣は數倍する。それにしても、明日の天候は如何であらうか。眞暗になつてから、蕃人が歸つて來た。皆、默りこくつて居る樣子では、何も獲れないのは、聞かなくても、分つて居る。

五、レラック（州界）まで

八月二十一日。今日は南湖大山の胸元近くブナッケまで强行する日である。昨日の埋め合せを是非ともしなければならぬ日である。暗い中から心急いで、ゴヱウマツの梢が闇から朝の冷氣に浮び上ると、直ぐ飛び起きて、冷たい身を切る樣な溪水で顏を洗つた。寒い風の日である。早朝の空に雲の徂徠が急である。匆々として朝飯を濟ませ、六時にはこの親しい狩小屋に別れを告げた。

露營地の左手より上方に續く茅戸の急阪。一行は又しても長列を作つて、高きを目指して歩を運ぶ。甚い風だ。タカネス、キが强風にあふられて、波を打つ。天氣は好調に進むらしい。この樣な風では山をうろついて居た雲や霧もいづれへか吹き飛ばされて終ふだらう。事實、彈力を增した雲が、斷雲となつて千切れ飛び、その裾からは視野を增した山と谷が展けて來た。坂は急であるが、蕃人の踏み跡が判然とついて居るので、汗を流せば足りる。タカネス、キの純群落に混つて、そろ〳〵高嶺の可憐な花が見え出した。蕃人の脊に結び付けて置いた胴籃を取つて、花を摘み乍ら行く。タイワンイタドリ、タイワンヘビノボラズ、ナンバンドクウツギ、タイワンアキグミ、ニヒタカイバラ等の小灌木が點在し、アキノキリンサウ、ニヒタカシヤジンが寒い强風に震えて居る。この急阪は凡そ、六、七百尺もあつたらう。露營地を立つて一時間余、七時十分にはこの急阪は終り、一寸した茅戸の階段地が擴つて、附近には乾いた水溜りの跡がある。これからは森林帶に入るので、皆、荷物を下して少憩する。

タケジン附近より大甲溪を隔てゝ劔山(右)及び白姑大山(左)を望む　　江島勝一

此處は標高約七千七百尺位なものであらう地勢上强風を除けたこの草原に於て、僕は初めてユックリこの附近を飾る花の種類を算へる事が出來た。此處は南湖大山御花畠の前庭だ。種類は少いが其處此處には、已でに高嶺の純潔を誇る花が咲いて居る。タイワンアセビ、クロゲツヽジ、ニヒタカイバラ、タイワンシモツケ等の小灌木がつゝましやかに生え揃ひ、ニヒタカシラタマが白い實を光らせ、ニヒタカシヽウド、アヲヤギサウ、アキノキリンサウ、ニヒタカシヤジン、ニヒタカチヽコ、アスヒカヅラが思ひ思ひの色と香を放散させ、ニヒタカマツムシサウや、ツリガネニンジンの淡青い花が特に一行の眼を惹きつける。

余り花に氣を取られて居たが、眺望も又次第に雄大さを加へて來た。この草原の北面は急な斜面が落ち込んで、森の密生した對岸との間には、深い谷が食ひ入り、その末端は急な懸崖に終つて、細い瀑が一本白絲を描いて居る。美しい谷、その溪身を辿れば、それは昨日別れたヱキジュウ溪の源頭だ。雲が次第に上昇して、現れ出た濁水溪の河身は銀色に光り、それをめぐる高低遠近の山々は、折から雲間からのぞいた青空の餘映に、晴れやかに微笑み出す。桃山（一一一八八尺）が見えて來た。次高山が現れた。大丈夫恢復する天候の動きに、氣はづみ心勇んでこの草原を去る。

之からは森林だ。南湖大山の襟卷だ。足十數歩にして我々一行は、水々しい上部溫帶林の綠に抱きすくめられる。ニヒタカガマヅミ、ヒヽラギソヨゴ、ヒメユヅリハ、コバノシロダモ、ホソバシラカシ、コニシガマヅミ、ニヒタカツゲ等の喬木灌木が枝を交へ、之にユズリハアヂサヰ、ヤマニンドウ、タイワンツタウルシ、タイワンキヅタ等が纏絡して居る。

臺灣の高山の胸元には、千古斧鉞を入れない原生林が多い。然しこの南湖大山の原生林の壯麗さはその最も美

しいものの一である。枝を張り王者の誇を持して天を摩する老木、樹齢已でに盡きてその巨體を靜かに横に眠るもの、巨木の傘下に追ひ越さんとあせる壯年の樹、更に僅かに洩れる陽炎を慕つて數尺に伸びた弱々しい若木。天地存續の限りは、永久に繰り返さるゝであらう破壞と創造の嚴肅な生きた掛圖、協調と爭鬪の渾然たる構圖。青い苔は深々と下地を被うて千古の經緯を秘め、足を踏み込んで鼻をつくその香には、清淨化された過去の殘骸が浮び上る。

徑は森林の枝を分けて、絶えず可なりな急阪を登る。ニヒタカスグリの棘に刺され、ツルリンドウの稀品を見つけて心躍らし乍ら行く中に、高距は加はり、ミヤマアカマツ、ヒヽラギガシ、タイワンヘビノボラズ、タイワンヨウゾメ、アリサンコセウが現れる中、遂にはニヒタカトドマツが漸次數を增し、次第に寒帶らしい趣を添えて來る。

八千五百尺になつて、今迄の喬木は影を潜め、ニヒタカトドマツの單純林が現れた。俄に木の下道が暗くなつた。九千尺邊りからはタイワンツガがこれに混淆し、下生えには、サイカチモドキ、アツバヒサカキ、ニヒタカガマヅミ、タイワンビャクシンが茂つて居る。モリシャクナゲの茂みが澤山あるが、時期が遲れて、可憐な淡紅色の花をつけないのが、如何にも殘念だ。一萬尺近くなつて再び、徑はニヒタカトドマツの純林を拔ける。漸く現れ出したニヒタカヤダケの藪を、こえて行くと、突然前面は展けて、茅戸の稜線上に出た。此處が標高約一萬尺、南湖大山の北峯（一一九九〇尺）から眞西に延びてビヤナン鞍部に落ちる稜線で、臺中、臺北兩所の境界に當り又濁水、大甲兩溪の分水嶺になつて居る。蕃稱レテック、途中急いだので未だ意外に早く、時正に九時十分である。

キレットイ附近より宜蘭濁水溪を望む　　江島丁

六、タケジンを經てブナッケへ

相變らずの風だ。森林帶を拔けて茅戸の稜線に出たので、臺中州側から吹いて來る强い風に、ヘルメットの帶革を引き締めなければならない。天氣は好くなる事請け合ひだが、空は青灰色に曇り帶狀にほぐれた雲が、中央山脈の脊梁を風に流されて行くので、見える筈の南湖大山の勇姿も雲に隱れ、僅かにほの見える胸の邊りの青黑い山の色に、大山の輪廓を偲ぶのみである。南の臺中州側は常に北の臺北州側より晴天に惠まれるらしい。此處から直ぐ下に刳れて居るシラガン溪を下つて、平岩山への長い尾根や、松嶺の松の並んだ隆起や、其他總ての山と谷が見渡されるに反して、臺北州側は白い雲が、忘れ物でもしたかの樣に、グヅ付いて居る。

暫時草原に腰を下して雲の動きを見て居たが、寒くなつたのでタケジン指して、レテックを後にする。これからは終始南湖大山の一連を眺め乍ら進むのだ。北の雲が徐ろに移つて居たが、南湖大山の北峯（一一九九〇尺）が、漸くなだらかな頭をもたげ出した。そして其處から續いた茅戸の尾根は、幾分の弧を描いて我々一行の立つ足元に連つて居る。

此處からタケジンまでは直きである。タカネスヽキやメダケの短生を踏み乍ら、尾根上を傳つて行くと、徑は少しく右手にそれて、低下した斜面に一行を導く。其處には雨あれば小溪をなすであらう。凹地が谷の樣に刳れて、その向ふには薪の豐富なトドマツの林が茂つて居る。時正に十時。蕃稱タケジンと云ひ、海拔約一萬五百尺と推定される。

正午は已でに近い。晴天なれば根松の森林は青い空に映り榮え、茅戸の滑かなスロープは緣に輝くであらうが、

今日は兎角陰氣で、强風が吹きまくり、暖い小屋にでも、もぐつて居たい樣な日である。蕃人は重い荷物に可なり參つて、一萬一千尺を上下する、それからの徑を辿つて、此處より更に高い、そして露營の夜も更に嚴しいであらうブナッケまで行くのに、稍ゝ不服顏で是非とも今夜此處に泊りたいと云ふ。然し、今日此處に泊つて明朝出發したのでは、南湖大山の登頂は遲くなり、早く湧く白雲の惡戲は四圍の展望を奪つて終はぬとも限らない。まあ飯でも早い乍ら食はうと云ふ事になつて、岩陰に身を寄せて辨當の折を開く。

幸な事には風が幾分おさまつた。そして更に嬉しい事には薄陽さへ射して來た。今迄蔓つて居た雲が、綺麗に取り拂はれると、南湖大山の主峯（一二五三一尺）を、初めて間近かに迎へ仰ぐ事が出來た。眞に大山の名にそむかない神々しい山である。胸の厚い、包容力の大きな、重厚な、さりとてあくまで純な淸純さを失はない美しい山。それは男性的とか女性的とか云ふ、人間界の性を超越した、氣高い山の姿である。稍ゝ屋根形をした山の頭部顏面には何の粉飾もない。眞實赤裸な岩の伽藍その面には深い縱皺が貴く彫まれて居る。南湖大山の稜線は密生した針葉樹だ。胸元から裳裾にかけて、果ても知らずスク〳〵と生ひ立つた針葉樹の樹海。森林に圍まれた綠の小草地は、大山に仕へる鹿や羚羊の放牧地。足元に食ひ入つた深谷は、溪身も見えず、唯森林の襞（ヒダ）となつて、複雜な線を描き出す。

主山の雄渾豪磊神さびた趣なるに對して、北峯は、その前哨に適はしい、なでやかな線だ。圓い頭はその頂上近くまで石南（後でナンコシャクナゲだと分つた）の潤葉をからみ、その下は又亭々たる針葉樹の殖林だ。立枯れの白い幹が銀針の樣に並び立つ。

アルプスの語原は、アルプス山地半腹の放牧に當てられる、綠深い草原であると云ふ。筆者は臺灣の山岳に臺

タケジン附近より見たる南湖大山

江島勝一

灣アルプス等と云ふ、糊付細工の様なジャーナリスティツクな名稱を與へるに、少くとも、寒氣（サムケ）を覺えて全身粟を生ずるものだ。然し北峯から、西にかけて展開された滑かな草原は、それがアルプスのそれと成因を異にし、微細な景觀に於て區別されるとしても、アルプに劣らないであらう美しさである。それは森林美に感ずる神氣澄み渡つた感銘とは、又違つて閑散にして自由濶達な心のときめきである。山の優劣は比較したくない。然しそれは立山の彌陀原や五色原に、數倍するスケールである。

白雲は尙も消し飛んで、南湖大山より南走する中央山脈の連脈が現れた。主峯より南に續いて小さな乳首狀の突起を示す南峯（一一九五三尺）を經て、中央尖山の岩の尖塔も眼近かに聳え立つた。二週間前に極めた最後の岩塔。尖鋭無比な中央尖山の近寄り難い姿も、先日の登頂者には、それは云ふに云はれぬ慈味に富んで居る。臺灣の山は內地の山でもなく、又外國の山でもない。それはそれ自身獨自な臺灣の山である。初め筆者が臺灣の山を歩き出し、次高山を極めた時には、それはノスタルヂアを誘ふ異國的な山に見えた。然し山行の數が增す每にそれは親しむべき姿に遷り變つた。それはあながち所謂灣化した爲めではない。臺灣山岳の山神が、僕の氣持に打ち解けたのであつた。少くとも針葉樹林の森林帶を拔く高山の裝ひは、內地山岳に、系譜を別にするものでは斷じてない。それは殖民地の山ではなく、我々の山である。

晝食後三十分の休憩は、我々一行を周圍の展望にまどろませ、全く元氣を恢復させた。ニヒタカリンドウやミヤマコケリンドウの花が、一行の出發を待つて笑つて居る。いくら晩が寒いからと云つても、漲る陽光の放射に蕃人の口は封ぜられて、十時三十分タケジンを出發する。

徑は尾根を右寄りに進む。一行は相變らずメダケやタカネスヽキの短生を踏んで行くと、陽光に誘はれたナガ

サハジャノメが、黑褐の翅を羽ばたいて、三々五々草原を散歩する。平らな廣場を過ぎると、其處には乾上つた水溜りの跡があり、鹿の足跡が亂れ續き、堆い糞が代々木練兵場の馬糞の樣に、澤山轉つて居る。

再び尾根の右側の傾斜が增して來た。快い草地の觸感を草鞋の裏に樂しみ乍ら行くほどに、南湖大山は常に一行に微笑みかけ、北峯はいよ〳〵近づいて、草地の綠衣は破れかけ、黑っぽい岩は、大山の地肌を見せ初めた。葉裏の褐色なナンコシャクナゲが見事に群落して居る。ニヒタカシャクナゲも混つて居る。ニヒタカビャクシンも現れた。岩角にはグンダイモジズリの桃色。木蔭にはフクトメキンバイの黃金色が、高山の歡びを撒き散らす。

中央尖山が晴れやかだ。その岩塔は東に近づくに連れて次第に、烏帽子狀から三角錐に更つて行く。尖山を眺めて居ると、タロコの蕃人を思ひ、その小意味好い程の勇猛果敢さが偲ばれる。今、斯うやつてピヤナンの蕃人を連れて、南湖大山を目指して行くが、若し彼等に出會つたら、それこそ面倒だ。ピヤナンとタロコとは古來仇敵關係だ。南湖大山の四面は勿論、シカヤウとピヤナンの狩獵區域だが、タロコの蕃人は、己が强力に賴つて、常に中央山脈を越えて、こちら側まで荒しに來る。先年も、彼等は大膽不敵にも、ピヤナン社近くで數名の首をはねて行つたと云ふ。若し彼等に會つたら、ピヤナンの蕃人は、その敵ではないだらう。我々第三者の日本人は先づ彼等の攻擊に對しては安心していゝだらう。然し、供の蕃人をやられたのでは、南湖大山登高どころの騷ぎでなく、又、飛ばっ散りの流れ彈でも食つた日には堪らない。何はともあれ、僕は先日タロコの蕃人に和して、中央尖山を極めた許りだ。何と云つても、彼等には會ひたくない。敵蕃ピヤナン社の蕃人達とやつて來る僕を、彼等が見付けたら、さぞかし友達甲斐のない奴だと思ふだらう。

七、ブナッケ

尾根を北に踏み越えて、左側を傳ひ出すと、南湖大山主峯の姿は、尾根に隱れて見えなくなつた。いよ〳〵多くなつたニヒタカビャクシンの香に高山の氣分を味ひ、岩片の堆積を渡り乍ら行く。再び南湖大山の姿が、より一層鮮かな近影を以て現れ出すと、いよ〳〵ビヤチンの險にかゝつた。

已でに一万二千尺近くの高距である。尾根は何時しか可なりな痩尾根となつて、右側は急な斜面に石南が群叢し風にいためられたニヒタカビャクシンが、年老いた幹と枝を曲りくねらす。ビヤチンは蕃語岩石の崩壞を意味すると云ふ。左側は殆んど直立した崩壞地で、粘板岩の碎片が積り、あやまつて蹴飛した岩片は、勢づいて溪谷の底へと轉落して行く。岩角や枝につかまつて、急な岩登りをしなければならない突起が、二個所程あつた。谷底で吠える風の音が、一層我々一行を緊張させる。ビャクシンが狹い尾根一面に蔓つて居るので通過は可なり困難だ。顏を引搔いたり、腰元を捕へて動けなくしたりするビャクシンの惡戲に、終ひにはやり切れなくなつて、慾張つて、大きな胴籠を首にしばりづけて僕は進んで居た。

ビャクシンの藪が突然開けたので、ホツとした。見れば足元は砂地で、一度低下した尾根は左方に續き、左側は火口壁の樣な崩壞地だ。南湖大山の主峯が、手にとる樣に近い。屋根形から次第に山形を變じた山は、此處からは三角形に近い。背後に遠のいた中央尖山が、その右肩に、此方をのぞいて居る。

今夜の宿は直ぐ下だ。粘板岩の細かい岩屑の斜面を下りて、五百尺の下方には、南湖大山の三つの峯に取り圍まれて、平らな砂場が見下された。未だ一時を少し過ぎた許りだ。正午をまはつた太陽が、暖かい陽光を降り注

ぎ、砂場を大理石の様に白く反射させる。前から高山植物の可憐な花を、ビャクシンの下に見て來たが、此處に到つて、それ等は擧つて、美事な花壇を現出した。ニヒタカシモツケ、ニヒタカクハガタ、ニヒタカシホガマ、オカダハグマ、ニヒタカアヅマギク、カハカミウスユキサウ、タイワンアカバナ、ニヒタカハタザヲ、タカサゴカラマツ、タイワンアカバナ等は、砂の白地に色鮮かな花模樣を摘き出す。南湖大山特別の珍花、タイリンアカバナやナンコシホガマも珍らしくない。前者はサツキツヽジの樣な桃色の合瓣花を砂の間から顏もたげ、後者は深い紫色の總狀花をゆるがせて居る。

露營地の近いのに安心し、陽の未だ高いのに心躍り、美しい四圍の風景に、夢見る樣になつて、花を摘み乍らそろ〳〵と下りを續けたが、快よい砂走りの斜面に、足は早くも捗つて、間もなく露營地ブナッケに着いて終つた。時正に一時二十分。

ブナッケは、蕃語岩屑砂場の平坦地を意味すると云ふ。標高一万一千五百尺、三峯鼎立する南湖大山に圍まれて、此處は丁度火口原の樣な感じのする所である。南湖大山主峯が頭上にそゝり立ち、東峯（一二一二二尺）が程遠く、北峯の頭は今下りて來た砂の斜面を前にして仰がれる。

時刻は未だ早いが、直に露營の準備にかゝる。臺灣山岳の露營地の中でも、此處はその最も高所なるものの一つであらう。加ふるに略〻平坦無樹の廣場、今夜の寒氣は今から思ひやられる。水溜れば西南に流れて、大甲溪の源頭に注ぐであらう空澤が、岩間を刳つて居るので、其處に露營の陣を張つた。附近に茂るビャクシンの大枝を拂つて支柱とし、之に天幕を張つて、下にビャクシンの葉を思ひ切り厚く敷きつめた。天幕の裾を轉石で圍み、夜風の入らない樣にした。岩間から僅かに流れ出る水を集めて、湯を沸し飯の支度をした。蕃人はと見ると、已で

に山の様にビャクシンの枯枝を、堆く積んで居る。

準備は約一時間にして片づいた。炊事係が尙も、夕飯の支度に急がしい間に、僕は數名の蕃人を連れて、尙美しく輝いた露營地を歩き出す。砂地から稍ゝ隆まつた野營地の附近は、砂漠のオアシスの様に綠濃く美しい。風當りが少いと見えて、ニヒタカビャクシンは、一丈にも伸びて居る。メダケの草原は、此處より短く、美しいカーペット、それに圖案化された花紋様は、ニヒタカフウロとニヒタカキンポウゲ、ナガサハジャノメが、花から花へと蜜を追つて居る。

蕃人數人と、散々追ひ廻した擧句、やうやく捕へた高山の鳥は、キンバネホイビイ (Trochalopteron morrisonianum Grant) であつた。從來新高山より他知られなかつた珍鳥、それは之に仍つて、北部にも分布する事が知られる。夕暮れの訪れは意外に早く來た。漸く加はつた夕風の寒さに、天幕内に引き込んで、今獲つた許りの鳥を剝製して居ると、夕食の知らせがある。

ビャクシンの枝が勢よく燃えて居る。火の子はパチ〳〵と鳴つて、青い煙は濛々と立ち上つて夕暮の色に溶ける。高山の冷い水と、淨い薪に仍つて出來上つた、得難い夕飯、我々は之に仍つて、長かつた今日一日の疲勞を恢復し、明日への元氣を、スッカリ養つた。そしてそれからは、夕飯の後の樂しい憩ひがある。

今日半日の山を美しく輝かせた太陽は、已でに沈んで終つた。高い〳〵雲が夕空に浮いて居る。今日一日の終りだ。明日への休息だ。最後の余光に美しい夕燒けが輝いた。雲を緣取るライト・ピンクの純潔さ、下界を思へばそれはピーチアイスクリームの色。それも、やがては襲ひ來る寒氣に堪えられないかの様に、遂に闇にしぼんで終つた。明日は斷然晴れである。斯くまでにして慕ひ寄つた我々を、今日まで見守つて居た南湖大山も、明日

の歡迎を約すかの樣に、遂に消えた。急に闇が深くなつた。夢にも憧れた南湖大山の登頂、そしてその上から望まれる周圍の山への再會。睡眠は待遠しい時間を短縮する。僕は思ひ切り、焚火に一あたゝまりすると、天幕をかきわけて、狹くるしい闇に歸つた。寒暖計を見ると、一五度だ。

夜の寒さは甚かつた。夜が更けるに連れて、脊中に當つて痛かつた下地のゴロタ石が感じなくなる位、冷えて來た。皆も眠むれないらしい。起き上つて、今にも消えやうとする焚火の火をかき立てた。ウヰスキーを一あほりあほつた。深夜の寒冷に對しては、火は最大の慰安である。之を見た南湖大山は、生物の人間を心から愍れんだかも知ない。

八、南湖大山登頂

八月二十二日。南湖大山登頂の朝は、ほがらかに明け離れた。昨夕の夕燒けは我々の期待を裏切らず、見上る弧空は水々しい空の色だ。陽の未だ昇らない透明の空には、曉の明星が輝いて居る。早朝の冷氣に襟を正す四圍の山、その中でも主峯の姿は、殊に美しく神々しい極みである。

昨夜の夢は冷かつた。そして今胸深く吸ふ空氣はあくまで新鮮であるが、今朝はどうも頭が重い。皆に聞いてもさうであると云ふ。それはどうも高山病らしい。この山に早く登高された野呂寧氏の一行も、矢張り高山病にかゝり、何れも食事さへ攝れぬ狀態だつたと云ふが、我々一行の迎へた朝も、然うであつた。僕は內地、北海道、樺太、或ひは臺灣の他の山行に於ても、今迄高山病にかゝつた事は、曾てなかつた。然し今朝の重い頭は、明かにこの被害を示して居る。

山行の朝は元氣でなければならない。南湖大山の山神は、我々の出發に當つて、先づこの種の試練を加へたのであつた。然し飯を終り、太陽の昇天に空が色づき出す中には、我々は又、昨日にも增して、大山の讃美者の强壯に立ち還つて居た。南湖大山の頭が旭光を浴び出した。輕裝して露營地を後にしたのは、時正に六時十五分であつた。

之からは唯大山の頂點を目指して、進む許りだ。我々一行のとつた路は、露營地の隆起を下りて、廣い平坦地の砂を踏んで行く。大平晟氏の登山以來、今日まで五十月は、人に訪れられなかつたであらう。清淨化された砂地の純潔さに、我々の踏む足跡はたゞ醜い。間もなく主山の北東面に着いた。之からは、頂上から直下する斜面を、ひた走りに登るのだ。

今や漸く昇つた太陽に、粘板岩の碎片が、ガレの斜面を雪溪の樣に光らせる。露にぬらした銀色の睫毛。旭光に紅潮した可憐の頰。それは朝化粧を濟ませた許りの、高山植物の風情だ。ニヒタカシラヤマギク、ニヒタカシャジン、カハカミウスユキサウ、コダマギク、グンダイモジズリ、ニヒタカマツムシサウ、それ等は思ひ〳〵に花咲いて、晴れやかな天の饗宴に參加する。

ガレの斜面は盡きて、胸を突く急坂が之に代つた。ニヒタカビャクシンがいよ〳〵低く岩を圍ひ、手をかけるニヒタカシャクナゲの枝に潜んだ、ニヒタカヘビノボラズの棘に、驚かされ乍ら尙も高きを目指せば、垂直に近い岩は屢々行手を塞いで、一行を當惑させる。然し之も大山の無邪氣な惡戲に過ぎない。如何なる岩場も、余り困難なく通る事が出來て、七時十分には頂上に立つ事が出來た。

略ゞ平らな絶巓、それは縱橫共に略十間はあるであらう。周圍は程よい傾斜を落ち込ませ、荒々しい絶壁にも圍

まれない。粘板岩の碎片を積きつめ、ビャクシンとシャクナゲを植ゑつけた莊園の簡素平穩なたゝずまひ、それは奇を好まない南湖大山山神の性格に全く適はしいものだつた。東の一角に、風雨にさらされた三角臺が、崩れかゝつて居る。

夢は、永年の憧れは、現實として現れた。熱望するものは遂に與へられるものか否かを、我々は知る事は出來ない。然し今こうして我々を載せて居る暖い大地は、まがふ方なき南湖大山の頂上だ。完き幸福感の祈り。それは歡びを超えて、人間の宿命に對する心からなる反省だ。

皆が揃つた。蕃人達も登つて來た。僕は此處に於て、現實的に眼覺めて、ワインの乾杯に、皆と再び登頂の成功を感謝した。

南湖大山より北東を望む上頂

九、頂上の展望

標高一萬二千五百三十一尺、臺灣島を南北に連走する中央山脈は、北部に於ては、北のこの南湖大山をその盟主とする。此處より眺められる周圍の山の展望は、何と素張らしいものである事か。そして更に又、此處から見周した南湖大山自身の姿は、如何に雄大と崇高の姿を

見る者の胸に刻み込む事だらう。雄偉壯大を語る臺灣山岳の幾つかの高峯の中でも、南湖大山は、その最たるものと卽座に斷言する事が出來る。この山程、所謂腰の廣い山はないであらう。登る者はとく見給へ。登らぬ者は貴下の豐富な山の經驗に輪をかけて想像し給へ。北西から右に眼を轉じて、東南まで百八十度の眼界に群り聳える幾つかの雄峯、それ等は何れも皆、主峯の率ゐる南湖大山の眷族だ。北には北峯（一一九九〇尺）が間近かに向ひ立ち、前面は昨日滑り下りたガレ斜面を押し擴げ、左はビヤチンの瘦尾根だ。更に西にはタケジンの廣い草原が見渡せる。北峯から東峯（一二一二二尺）にかけては、連續した山の連りだ。そしてそれは更に東南に續いて東南峯（一一六三五尺）を起すまで、又長い岩の屏風の連りだ。此處から眺めた連峯は、直ぐにでも登つて見たい好い山だ。ガレと針葉樹林のスロープの上に、稍ゝ屋根形をした見事な岩峯が尖つて居る。

眞に家の子郎黨相寄つた南湖大山山塊の山容は、その感銘の雄大なる許りでなく、地形學的に見ても、水成岩の山脈として極めて珍らしいものだ。この樣な山は中央山脈は勿論、臺灣何れの地方にも、恐らくないであらう。それは或る種の火山彙の複雜さを思はせる。然し奔放粗豪さりとてリズミカルな線は、水成岩の山體なる事まぎれもない。諸峯に圍まれた圓い凹谷は、宛然火口原の樣だ。廣い砂原に描かれた若干の起伏、昔時湖ありと稱へる人があると聞くが、水溜ればそれは見事な湖水をなすであらう。今朝立つて來た露營地の天幕が白く明かに、一千尺の足下に認められる。

南方を顧れば、それは奔騰する中央山脈の怒濤だ。眼前眼近かに迫る中央尖山（一二二六〇尺）が、威嚇する樣にその尖塔を中天に突き上げる。雲を冐し岩と鬪つた初登攀の思出、それは八月九日の事で、未だ二週間をも過ぎてない。晴天に照らし出された岩面のディテール。それを見つめて、僕の頭には當時の緊張した印象が走り

過ぎた。雲間にそれと察した尖山と大山の間は、案じた通りの險惡な荒尾根だ。然し岩黨にとつてはそれは興味あるコースに違ひない。幾度も見直す尖山の岩塔、僕は先日此處から眺められる右肩を攀ぢたのであるが、タウサイに落ちる左肩の尾根は、より緩かな岩稜だ。登攀の苦闘を分ち合つたタロコの蕃人は、今頃如何して居るか。タロコの蕃地には、早くも雲が出て、僅かにタロコ大山（一〇八六三尺）の頭が、雲表を拔いて居る。

尖山の左肩にかぶさつて居る山は、奇萊主山（一一六九五尺）であらう。右肩から此方をのぞき見る岩山の上に鋸齒を並べて居るのは、畢祿山（一一一五一尺）に違ひない。その右手に合歡山の一塊が大きく蟠り、その中でも北合歡山（一一二〇〇尺）は、ヴングリした廣い頭を魔物の樣にのさばらせ、長大な緩い尾根を大甲溪にし落て居る。霧社方面から鈍頭に見えるハック大山（一一〇五二尺）は、此處からは秀麗な富士形だ。之等の背後に尙も、一重二重に重なり合ふ、中央山脈の遠い山波よ。新高山は流石に中部臺灣の重鎭だ。遙かなる空に尖立する三個の鋸齒は、北山、主山、東山だ。

南湖大山の周圍に激する多くの山波の中で、その最も雄偉奔放、激烈を極めた造山力の跳躍は、勿論云はずと知れた次高山彙だ。雨の空に天空を摩して連々と聳え立つ岩の障壁。それは中央山脈を敵として、揮ひ立つた大軍の、息をもつがせぬ攻擊だ。或は中央山脈一呑みと押し寄せる津浪の息卷きだ。少くとも、日本版圖內に於てこの次高山彙の半にも及ぶ山脈の大きさを具へるものはないだらう。一萬一千尺を水準として、之に雄飛する群峯の壓迫感。そして、それはその情感に於て、如何に中央山脈とかけ離れた存在だらう。それは異國的な、怪奇的でさへある妖魔の整列だ。北から次第に眼を南に轉じやうか?。大霸尖山（一一七九二尺）の角砂糖の樣な岩塔は、沼井鐵太郎氏に仍ればトルコ帽、生駒高常氏に從へばメンヒルだ。その左手の小さい突起は小霸尖山、桃

山（一一一八八尺）を經て長い尾根を辿れば、首魁次高山（一二九七二尺）は、その斷崖をアフリカの砂漠を思はせる赭土の樣に輝かせて、駱駝の脊の樣なスカイラインを際立たす。その斷崖の下は露營地にあてられるカッショであらう。萬尺の脊梁は尙も南に走つて、バットアノーミン（一一八二五尺）を起し、劍山（一〇八三九尺）は尖つた双峯に次高山彙の最後を飾つて、その裾を大甲溪の横谷に落ち込ます。そして大雪山（一一八八〇尺）の連脈はバットアノーミンの背後から、此方をのぞき見る。

我々は周圍に群聳する曾見の山々の送迎に追はれて、その足下に百千の谷筋を皺立たす溪谷の存在を忘れて居たのか？溪谷も亦此處よりは、山嶺峯頭に劣らない雄大と壓迫感の酵母だ。山を無造作に斷ち割つた溪谷の深さよ。濁水溪の簡單なる流路に引きかえて眼下に廣く分掌する大甲溪の谷の複雜さよ。高山の連聳に漸く忘れかけた島國の境界は、北の空宜蘭方面の汀線を見るに及んで、思ひ出された。今や旭光を受けて、白金に光つた太平洋に、龜山島が夢の國の樣に浮んで居る。

絶頂の展望を一わたり貪り見ると、僕は頂上の一角に腰を下して、高山の頂に陽光惠めば必ず釀し出される、あの夢みる樣な瞬間に恍惚とした。心ゆく許り鮮かな朝の色彩にまどろむ四邊の山と谷。陽を浴びた山稜は歡喜して晴天を迎へ、山陰は沈默して昨夜の夢を追ふ。スレートの崩壞地の放つグリスローズの輝き、テレベルトの草地に斑なす森林の濃淡。それは閉ぢられた網腹に映る光の交錯だ。今や八時をまはつた太陽が、さん〳〵と麗光を放散させ、その溫い熱を以て、皆を華胥の國に引き入れる。

突然、陶醉の境を攪亂して、蕃人が銃を引っつかんで馳け出した。何事かと驚いて直樣後に從へば、タイワンカモシカが、岩を蹴飛して足元の急崖を下りて行つた。後は再び元の明るい沈默だ。

何と靜かな高山の朝だ。今頃は何時も現れる惡戯者の白雲も、斯くまで澄み切つた大氣からは生れない。余す所なく滿ち渡つた陽光は、昨夜嚴しかつた寒冷を慰めるかの樣に、岩と森林を溫める。大事にとつて置いたアブダラの一本に火を點けた。万尺の雪を泳ぐ紫煙の輪、今日は煙草の輪が容易に消えない程、風一つない靜けさだ。

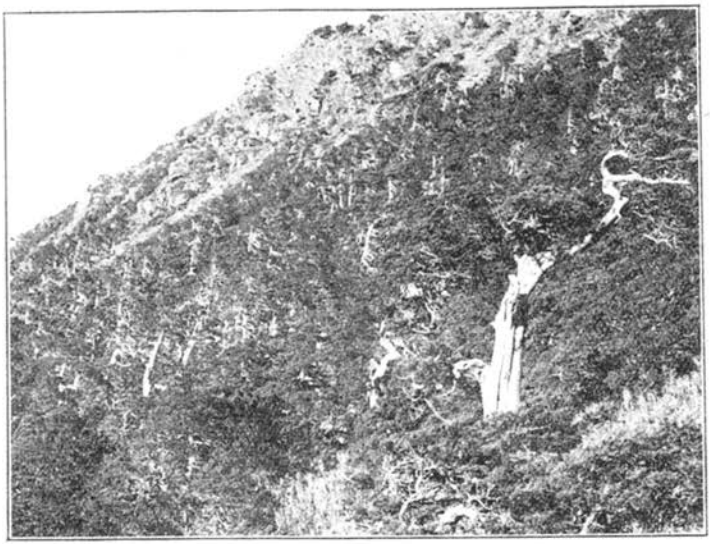
此處一万二千尺の頂に、生を營む動物の可憐さ。然し暖い陽光に元氣づいてかヲジロヒカゲは素早い翅を揮つて頂上を飛びまはりマルハナバチは花から花へ急がしい。空高く輕い翅を浮ばせるヱゾトンボ（Cordulia）を見つけ、散々頂上を驅けまはつて捕蟲網を振りまはしたが、高くて如何しても採れない。それは確かに驚いて好い事實である。北海道、樺太、日本アルプスの高所にのみ發見せられる珍奇な蜻蛉、舊北洲的色彩の濃厚な種。それも臺灣山岳の高距と寒冷に思ひをめぐらせば、當然の事かも知れない。

頂上に費された二時間の展望とまどろみは、我々一行をして益々南湖大山の性格と風貌に愛着を增さしめた。何時までも居たい、何時までも居たい。然し道には雲が來て寒い夜が迫るだらう。結局人間の山への愛は、憂愁への追分に過ぎないものか？。我々は唯南湖大山に離別の情を味ひに來たのではない筈だ。然し長い露營地への道程は、現實的に我々一行の腰を持ち上げさせた。下界からの登攀者は又之に戻るのが間違ひないのである。隨分樂な行程を選んだ積りだつたが、何と云ふせゝこましさだ。蕃人は歸路を勇んで斜面を下りて行つた。今度來る時は更に余裕ある日程を選ばねばならない。僕は再度の訪れを大山に約すと、眼がしらが熱くなつて來た。

十、歸路・レテックまで

南湖大山の頂上を辭したのは、九時二十分であつた。下りは登路と別なコースを取つて頂上を東にからんだ。

粘板岩の斜面を少し許り下ると間もなく一面のシャクナゲとビャクシンの波である。今迄確かに人間の香に觸れた事のない、純潔な枝や葉を押し分けて進むのは、これが困難なれば困難なる程、嬉しいものだ。時に身動きもならない様になる事もあるが、如何にか、羚羊の様に、角でない手でかき分けて尙も進む。眼の前で小さなチメドリが、人の來たのを恐れずに枝を渡つて居るが、手獲りにする事も出來ない。ビャクシンの香に興奮し、汗をビッショリかき乍ら、尙も爬蟲類の様にゴソ〳〵と、原始人の快感を唯樂しんだ、が時刻は早くもうつって、三十分の後には、東峯との間の鞍部に下りる事が出來た。



南湖大山主峯の東面のニヒタカビャクシンの純群落

今登つたばかりの南湖大山が、頭上から一行を見て笑つて居る。正午に近い太陽がいよ〳〵明るい陽光を漲らせ、周圍の情景をまぶしい許りに反射する。南の太陽の人を幻惑する様な光の魔術よ。今や白陽を受けて輝いた南湖大山の樂園は、正に南歐の風物だ。前までフレンチブリューだつた空は、今ではメディテレィニアン・ブリューだ。ビャクシンの針葉はサイプラス、シャクナゲの茂みはオリーブの森だ。それ等は匂ふ許りに

輝いて、何と南歐の華麗を思はせるものだらう。臺灣の高山は南の山、熱帶國の高山だ。海を拔く事高ければ、北の國を思はせる孤獨と寂寥は增し、所謂高山的風貌を呈するとは云へ、否めない南國の生ひ立ちだ。其處には、少くとも陽照れば、打ち消す事の出來ない華かさがある。

露營地の天幕が一行を呼んで居る。然し附近一面を埋めて居る高嶺の花の美しさに、そしてそれに群り集ふ蟲の影の賑さに、足は俄に去り難く、散々暇取つて、天幕に歸つたのは十時十五分であつた。

少し早いが、快い日光にぬくもり乍ら、晝食を採つた。眼は常に南湖大山に向いて居る。頂上の秘密を示してくれた今では、大山の姿は殊に親しいものだ。懷しい昨夜の宿、天幕は外されて荷になつた。他の荷物は纏められて蕃人の背に擔がれた。大山ともお別れか。さらばである。徹頭徹尾大山の美に魅せられた僕は何時かは、再び此處に吸ひ寄せられる事もあるだらう。十一時四十五分、我々一行はブナッケを後にした。

振り返り顧る大山の神々しい姿。我々一行はガレを登つて、ピヤチンの痩尾根を渡り、一時過ぎにはタケジンの草原に來た。南湖大山は終始晴れやかに輝いて、我々を見送る。最大の敬意と讃美を獻げるものには、山も又打ち解けるものか?。大山は明に我々に好意を示して居る。あくまで我々の印象を深めやうかとするが如く、明朗たる青空に南湖大山は、何時までもその勇姿を、くつきりと寛げて居る。

一時半には、初めて南湖大山を仰いだレテックに着いた。ニヒタカトドマツの立木の下に、落葉を集めて、アカヤマアリ（Formica）が、火山狀の堆積巢を營んで居る。之は僕が一九二六年七月初めて、次高山で發見して、臺灣にも斯く許り寒冷を好む舊北州系の蟻が、產するものかと、學界の注意を喚んだものである。

十一、レゼック

今まであれ程澄み切つて居た青い空にも、遂に輕雲が現れた。そして懷かしい山の姿をボツ〳〵と隱し初めた。然し思ひ切り眺め盡した今では、雲の自由な運動をうらむ氣にはなれない。反つて亂雲の跳梁は山の姿をより潑溂たるものにさへする。

レテックより後のコースは、僕には初めての徑である。相變らず茅戸の尾根上を傳つて行くと、その兩側のスロープの下には、ニヒタカトドマツやタイワンツガが生ひ茂つて、その境界は、切り開いた樣に判然として居る尾根上の徑は長かつた。尾根は廣い脊を陽にノビ〳〵とぬくませ乍ら、僅かな傾斜で何處までも續く。ナガサハジャノメが此處にも居る。

今夜の宿は如何なる所だらう。登頂を果して、心にも身體にも、稍〻疲れを覺えた。早くも露營地の姿が懷しまれた。蕃人に其處までは遠いかと聞くと、近いとの言葉に慰められて、足を引きずる中、徑は尾根の左側(南面)に下りて行く。ニヒタカアカマツの散生林を拔けた。ニヒタカトウヒの梢をくぐつた。やがて急轉直下、五百尺以上もある急斜に膝を痛め乍ら下りて行くと、疲れた頭を一時に恢復させる樣な、高鳴る谷川の音が聞えて來た。レゼックだ。今夜の露營地だ。時正に四時を少し過ぎた許り。標高八千尺足らずであらう。

何と嬉しい夜の宿だらう。ニヒタカトドマツの林立した直幹が、スクスクと立ち並んで急斜を埋める壯觀さ。木の下闇に暗い激流が半分瀧になつて、森林を靄かし、氷の樣に冷い水が白い玉を躍らせて居る。遠い祖先の血を湧き立たす原始の趣。小屋は附近に丈なすニヒタカヤダケで作られて居る。

飯を終つた我々は、小屋に敷きつめたニヒタカヤダケの上に寢ころんで、更めて南湖大山の美しさを談じ合つた。我々は唯嬉しかつた。わけもなく心が躍つた。

その夜の狩小屋は、永久に忘れられない程魅力あるものであつた。森々と夜が更けるに從つて、谷音は次第に高鳴つて、四圍の山と森を不可思議な旋律で震はした。それは確かに、淨い岩と冷い水と汚れない木と、それに山の妖精が加はつて、合奏した交響樂に違ひなかつた。

此處は未だ南湖大山の山懷である。明日は次第に大山を離れて行くのかと思ふと、淡い憂愁さへ感ぜられた。

十二、ピヤナン鞍部に下る

八月廿三日。南湖大山はあくまで親切であつた。健康な眠から覺めると、黑い森の際間から湖の様に仰がれる空は、眞珠の様に光り、見下すトドマツの純林の頭は、ヴァーミリオンに輝いて居る。續く山幸、今日も晴天は我々に微笑みかけた。

昨夜賴んで置いた鼠罠がかゝつたと云つて、蕃人の一人が Kashigya と Katol を持つて來た。一夜ブナッケの夜は寒かつたので、一頭も得られなかつたが、此處は高距も下り、食物も豐富と見えて、之等の珍種を得る事が出來た。僕はこの收穫を喜んで、定めた賃金を拂つた。然し後からやつて來た蕃人は、前の蕃人が自分の構へた罠にかゝつた鼠を、僕の所へ持つて來たのだと云ふ。他の二、三人に聞いても之は眞實の様だ。僕は心から不快にならざるを得なかつた。僕をアイディアリスト、ロマンティストと笑ふ者あれば笑ひ給へ。僕は蕃人を純朴な山の者、虛僞を知らない自然人と解して居たのだ。僕の憧憬と信賴が深かつた丈に、それは抑える事の出來ない

憤を感じた。然し、山の氣分はあくまで攪したくない。ピヤナン鞍部に下りてからでも遲くはあるまいと、強いて氣分を轉換しやうと努めて見た。

山を離れ都會に近づくに從つて、眞實も又虛僞に近づくのは、開化地方に止らず、地球上共通の現實であらうか?。それにしても、小氣味よい程の蕃人らしいタロコの蕃人が思ひ出される。ツイ先年までは慄悍無比、大仕掛な討伐までも要求したタロコの蕃人は、一度日本人に好意を示せば、その情は眞實である。ピヤナンの蕃人は比較的古くより支那人等と交渉を有し、所謂穩かな蕃人である。然し其處には斯くの如き虛僞が湧く。而して、この行に連れて行つた蕃人の動作を見ても、それはタロコの蕃人に劣る事數等である。之は南湖大山行の蕃人が、何れも二十才前後の若者に仍るためと云はれるかも知れない。然しそれは明かに間違ひである。それは斷じて、所謂「この頃の若い者は意氣地がない」の言葉を裏書する以上のものだ。僕は常に理蕃の人に云ふ。「徒に猫見たいな蕃人許り作つても駄目だ」と。

出發は八時になつた。暗い森林の中を上りつめて昨日の尾根へ出ると、淸い朝の大氣と旭光が、僕を又しても晴やかにした。山が靑く透んで居る。南湖大山は昨日にも變らない溫容を以て。そして中央尖山はその右に。

南湖大山から別れる淋しさは、我々の足の步びを無意識にする。徑はこの長大な尾根を傳つてピヤナン鞍部に下りる丈だ。途中の尾根は綠の茅戸だ。そしてそれにタイワンツガやニヒタカアカマツ等が、二次林を作り、足元の優しい影には、アキノキリンサウや、ニヒタカシモツケが咲いて居る。それは實に美しい情景だ。下りるに連れて、そして高く昇る太陽と共に、蝶の姿が增して來た。アケボノアゲハの夢見る樣な翼。ミドリヘウモンが秋の野を思はせるタカネスヽキの上に舞ひ、モンキテフがお轉婆の子供の樣に馳けまはる。途中、松の木蔭に(九

千五百尺の高距）黑褐色のハブ（Trimereseurus）を得た。臺灣でも高山帶に、平地に居る普通の毒蛇は居ない。然しこのハブ丈は間々發見せられる。恐らくは新種であらう。

十時過ぎ、一行は比較的狹い尾根に出た。此處に一息入れる。約九千尺であらう。開けた立木の兩側からは、次高山等と中央山脈が見渡せる。西南には次高山、大覇尖山が眼近く、東南の空には、南湖大山、中央尖山が、最後の容姿を美しく、我々一行を見送つて居る。

之で南湖大山の勇姿ともお別れだ。我々は間もなく針葉樹林に入る。下は身長を沒するニヒタカヤダケの深い藪だ。我々の徑路は、唯、ピヤナン鞍部に派出した長い尾根を辿る丈である。然しその尾根の複雜さ、左右にまぎらはしい側尾根を出して居るので、仲々道を求めるのに困難する。我々一人の心覺えでは、到抵一人歩きは不可能だ。

長い森林の徑を拔けると、又しても茅戸に出た。次第に高さを增したタカネスヽキが、いよ〳〵ピヤナン鞍部に近い事を暗示する。然し實際は、中々長い。尾根に隆まる幾つもの突起、之を過ぎれば、ピヤナン鞍部の駐在所が見下せると思つて、何度休み度い歩みを續けた事だらう。然し物は何でも思ふ樣にはならないものだ。途中には數個の水溜りがあつた。然し、遂に、十二時半には、ピヤナン鞍部駐在所に一行全部、揃ふ事が出來た。

ピヤナン鞍部は霧が多くて有名な所である。今まで晴れ渡つた青空も、此處では已でに雲が濛々とやつて來て、四邊の風景を早くも陰鬱にした。南湖大山登攀の意圖は、此處に於て完全に果された。一行の面には、否めない喜びがある。

大山登攀の捜索隊の解散式は行はれた。我々は山中の生活に、あらゆる面倒を見られた警察官に對しては、深

厚の感謝を捧げねばならない。僅か四日の山旅ではあつたが、思へばそれは共に慰め合つた一入深い喜びと苦しみの連續であつた。

蕃人は我々の周圍を取り卷いた。そして彼等も亦、名殘り惜しいと寄つて來る。彼等の或る者は涙さへ浮べて居る。僕はオヤと思つてその眼に見入つた。いやそれは嘘ではない。眞實の涙なのだ。情深き人達よ。先きの憤りも此處に於てか、消え失せた。僕は尙も傍を離れない蕃人三人の名を、永久に忘れまいと、心に强く思つて見た。それは、ワタンタックン、タイモブユン、ユーカンアリの三人であつた。僕は彼等に誓つた。來年は必ず來る。そして皆と一緒に、桃山に登らうと。然し僕は未だにこの言葉を實行しないのを、心から濟まないと思つて居る。

出來れば皆と今晩を共に飲みたいのではあつたが、皆は振り切つて、今日中に、ビヤナンに歸ると云ふ。是非もない。さらばである。僕等は途中まで皆を見送つた。草原の間の一本道に小さく列を作つて消えて行く姿を見るのは、人の世の淋しさを思はせる幾つかのものゝ、一であつた。

何と現金な雨だ。暗い雲からは、夕立が下りて來た。皆は歸るまでにはズブぬれになるであらう。淋しい氣持になつて、僕は駐在所の重い扉を押して中へ入つた。

（一九三一、六、一一）

初冬の大井川の旅

冠　松次郎

（參照地形圖）二十万分一。靜岡、甲府。五万分一。清水、南部、井川、赤石岳、身延。

眺山の旅行ともつかず、冬山登攀ともつかずに、少しの暇を見て大井川へ出かけた、そして大日峠から赤石連峯を眺め、更に椹島に入り、赤石岳へ登山を試みた。一日吹雪かれた爲に餘日がなかつたのと、今年は雪が深く小屋を利用することが困難な爲、日歸りで途中まで上り、又椹島へ引き返した。椹島から二軒小屋まで溯り、デンツク峠で惡澤岳の雄姿を心往くまで眺め、新雪の赤石、聖、上河内などの美容を見つめて、甲駿國境を離れて新倉へ下つた。よく晴れた冬空に、裾を美しくなびかせてゐる富士の麗姿を眺めながら。それは昭和五年十二月十三日から十九日迄の一週間の山旅であつた。

大日峠まで

（十二月十三日）

靜岡へ着いたのは午前四時四十二分、夜明にはまだ隨分間があつた。安倍鐵道の初發が七時五十分であると云ふので、一休みして朝餉をとつて行かうと思ひ、暗がりを驛前の旅館に入り、七時迄假眠をとり、それから朝食をすませて自動車に乘つて安倍鐵道の井の宮驛についた。

輕便鐵道で安倍川に沿つて走つて行く。朝日を下流から浴びてゐるこの川筋は非常に明るい。四十分程で牛妻に下り、連絡の自動車で唯間へついたのは午前九時十分、それから重い荷物を、五貫目近いやつを脊負つてぽつ〳〵と出かける。直ぐに落合であつて道はそこで二つに分岐してゐる。左のは平瀬、内匠などの部落へ行くもので、私は右の方の闊い往還を行く。この沿道にはさして美しいと思ふ處はない。長妻田、柿島、上落合に出て、口坂本へ午後三時についた。唯間から四里强の行程である。

流石に峠路だけあつて、上落合から上は山峽の深い趣はあつた。日脚の短かい冬は、そして冬枯の山や谷の明暗の隈りは一層强い。夕陽に照されてゐる山々の脊は鮮かに光つてゐるのに、谷に落した影は殊に暗く、寒い感じは一入身に浸みるやうだ。さえ切つた冬空に浮ぶ赭い山々の波、その懷から騰つて行く炭燒の煙などを見て行くのも冬の山旅らしい。

口坂本で峠へ行く人に荷を托して、寫眞器だけ携へて峠路を上つて行つた。堤のやうな大日峠につゞく山々を見ながら、途中の茶屋でウドンを一杯食べて空腹を癒し、それからやゝ急な山坂を上つて行くと間もなく水呑茶屋へついた。午後四時十五分。

今からでも井川までは日のある中に行けるし、夏ならば田代迄でも明るい中に行けるのであるが、折角のことだから朝の大日峠から奥山の雪の姿を眺めたいと思つて、この峠の茶屋に泊ることにした。

夕方から風が非常に强くなつた。日暮近くの峠の冬は、壓されるやうな寒さと淋しさとがあつた。山の頂に殘つてゐた夕日影は最後の光りを收めて、上空のみ紅く燒けたゞれた下に、暮れて行く來し方の山々、南に夷陵して駿河灣にそゝぐ安倍川の行衞を眺めて、私は暫くの間茶屋の前に佇んでゐた。それから爐邊に安座して榾火に

身體を暖めてゐると、夜行の汽車の疲れと今日の疲れとが出て、何となくがつかりしたやうな氣持になつた。暗くなつてもまだ井川の方から越えて行く者が時々この茶屋を訪れた。

七間に三間程の大きな家には、夫婦の者が常住して菓子やうどんなどを粥いでゐる。如何に人里に近い峠とは云へ、秋から冬にかけては、そして風雪の日などには隨分淋しいことであらう。この親切な人達は私の爲に風呂を沸してくれた。

お入りなさいと云はれたが、私は外面の寒風の叫ぶ聲を聞いてたじ〳〵となつた。風呂場は母家から離れた掘立小屋である。私がもじ〳〵してゐると「入つた後は溫かになりますのに」と云はれ、思ひ切つて旅服を脱いだ。そして借りた單衣を着ると手拭をもつて母家から風呂場にかけ込んだ。入口に戸のない開けっ放しの一間四方位の小屋で、三方には形ばかりの圍ひがしてある。僅か三間ばかりの小屋へ行く迄に、寒風は峠下の方から叩きつける。單衣を脱ぐとガタ〳〵胴ぶるひがして齒の根が合はない。少し熱い湯を我慢して、風呂の中へ入つたらもう中々出ることが出來ない。中で身體を洗ひ了つて、頭の方から拭きながら身體をせり上げて外へ出ると單衣を羽織つて又母家へ駈け込んだ。然し成程入つて後は身體が溫まつて非常に具合がよかつた。山旅をする人は寒い湯を經驗することが多いだらう。殊に秋から冬にかけては寒風の胴ぶるひの味を嘗めることが多いものだ。曾て信州梓山の白木屋でも風呂でちゞかんだことがある。今度も大井川の奥椹島で、矢張り外にある吹通しの風呂場で、流し板に厚氷が一寸以上も凍りついてゐた。その上に立つて身體を流してゐると足の裏が針で刺されるやうだつた。

それでもこの湯のおかげで暖まつた爲に、寒い峠の小屋の一夜も翌朝の三時頃までは、よく寢むことが出來た。

田代まで

（十二月十四日）

午前五時頃まだ夜の明けないのに、もう表をゾロ〳〵と人の足音がする。戸を叩いてお早ようと云ふ。中から締りをはづすと、四五人入つて來たらしい。障子一重で私には見えないが、口坂本から井川へ行く持子の人達だ。爐を中にしてこゝの内儀と何か大聲で話しをしてゐる。女も二人ばかり交つてゐるやうだ。口坂本から井川へ荷を運び歸りには井川からのものを口坂下へ屆ける。それがこの人達の仕事である。不景氣の爲運賃が安くて困ると云ふ。さうだらう往復したからとて、一日一圓何がしの日當にしか當らないと云ふのだから。口坂本から上げるのは主に食料品で、井川の方から里に出るものは茶、山葵、ロクロ、炭の類である。この峠も賑ふ筈だ。大井川の奥の物資は皆一度はこゝを通つて行くのだから。

その一團が出て行くと、又幾人かがこの茶屋へ寄つて休んで行つた。外は風が凪いだやうだ、まだ暗いので蒲團の中で暖まつてゐると、出て行つた持子の一人が「外國の方まで曇つてゐらあ」と戸外で元氣よく叫んで行つた。私は困つたなと思つた。曇つてゐては折角昨日ありあまる時間を無駄にして、この茶屋へ泊つて見た、その目的の峠上の展望が出來ないだらう、ほんたうに馬鹿〳〵しいことをしたと思つた。昨夜はあんな星月夜で、霜風が吹き荒んでゐたのに、私はいつそ早く井川へ下りてしまはうかと思ひ蒲團を拔け出で、顏を洗ひに表へ出て見た。曇つてはゐるが雲は切れて、東の方から朝日が差し込んで來た。下流の山々はよく見えてゐるし、さう惡い空模樣でもないと思つて爐邊に戻り、朝食を認めて午前八時少し過ぎに水呑茶屋を出た。

暫くヂクザクに上つて行くと、やがて道は平坦になつて峠につゞいてゐる。峠には何か祀つてあつて、その先には御堂がある。右に曲ると眼界は急に開けて、奥山は大井川の谷を隔てゝ折れ重なつてゐる。よい案配に雲は殆どかゝつてゐなかつた。私は荷を下ろしてそこで休んだ。

峠の井川向の、落葉松の枯林の上から、間から、雪の連嶺は朝日を受けて光つてゐる。左から茶臼岳、上河内岳、聖岳、赤石岳、悪澤岳が岩巣を見せない程の深さに雪を頂いて、その主稜から谷へ下りてゐる大尾根の森林の隈には、新雪が肌寒く粉を吹いてゐる。それが雪山の中腹を埋めてゐるのだ。随分な雪らしい。この峠から最も大きく見えるものは上河内岳で、聖はその右後に河馬の脊のやうになつてうづくまつてゐる。やゝ離れて赤石岳と小赤石と二つの塊りが、どつしりとしてこの山脈の中堅をおさえてゐる。これは流石に立派であつた。悪澤岳はやゝ遠のいて、その右から雲霧は山稜を壓して動いてくる。脚下には大井川の谷が深く大きい。然しこの峠からは奥山は少し遠いのでその雄姿をまざ〳〵と見ることは出來ないやうだ。徳本から穂高を見、針ノ木から奥越中の山々を見る程強い印象は勿論ない。

寫眞器を出して山の方を見てゐると、道の曲り目から落葉松の林の中へ五六歳の男の子がひよっくりと現はれた。後から父親が赤子を脊負つて上つてくる。口坂本の方へ用足しに行くのだらう。暫くすると賑やかな聲が又その方で聞える。村の娘達が三人、桃色の襷をかけメリンス模様の蹴出しをなびかせ、少しばかりの荷を脊負つてはしやぎながら峠へ上つて來た。こゝは峠とは云ふものゝ朝夕は街道のやうな賑やかさだ。雪の奥山、落葉松の林・村の娘達それだけでも氣持のよい畫になると思つた。

峠からだら〳〵降りを行くと、道は右横に可なり廻つてゐる。カヤトの原の上から雪の連嶺は更によく眺めら

れた。夏では草藪が一寸勝手が惡い處であつて、眺山の旅は冬に限ると私は思つた。降るに從つて谷の方が見えてくる。そして井川の村家が、對岸の山裾や段丘の上に靜かに現れて來た。山坂は何處を見ても伐採の跡か植林した處かである。そして谷近くの山足は皆開墾されて、四角に劃られた畑は無數に重ねられ山峽に亙つて目のとゞく限りつゞいてゐる。もう大井川の流れが脚下に見えてゐる。闊い〳〵川瀨の中は殆ど洲に埋められて、その間を綾千鳥に曲走して行く水は底の石まで數へられる。闊い洲には畑が耕やされ、村の人達はその中に小さく動いてゐる。私は川邊に下りつくと、六十間程の大釣橋を渡つて井川の里についた。峠から一時間半の行程であつた。

それから一時間程休んで井川を後に、川沿ひの道を上流へ辿つて行つた。大井川は何處を見ても濶い、そして磧は到る處に溪川を包んで展びてゐる。崖側の道を左へ〳〵と廻つて行くと中山の部落が現はれた。その上を山峽を壓してゐるのが上河内岳の雪の姿だ。大島の部落を行く手に眺めたときにもこの山はその上に光つてゐた。然し他の奥山はこの附近からは見ることが出來ない。

百二十餘間の大島の釣橋、それを見ると大井川の幅がこの邊でさへ如何に濶いかが判る。井川から一時間餘も歩いて、左に崖道へ出ると、もう田代の部落は山峽の平地に點在して、その對岸には小河内（コンガウチ）の村家が山裾に沿つて川近くまで下つてゐる。私は正午少し前に田代に入つた。そしてますや旅館瀧浪益吉氏方へ旅裝を解いた。

丁度そこへ瀧浪要太郎が來合はせてゐたので、大井川の奥の樣子を尋ね、それから惡澤岳か赤石岳へ登りたいと云ふことを話し、明日早朝宿へ來てくれるやうに賴んだ。

冬枯の山村は何處を見ても淋しい。家々は大きな山や谷の間にいじけてゐるやうだ。畑は茶色に變りつくし、

人家の軒には干柿がつるしてある。家々の戸は皆ぴつたりと閉されて、人は殆ど外へ出てゐない。靑さを保つてゐるものは杉の林、茶畑、竹藪位なもので、周圍の山々の地肌は蔦色に焦げてゐるやうだ。

寒い風は川沿ひの平を渡つてくる。私はドテラの襟をかき合せながら散歩に出かけた。もう夕燒した亂雲は收まつて、空は水のやうに冴えて來た。夏ならば壯快な感じがするのであらうが、今は空まで何となく蕭殺の氣に充ちてゐる。顧みると小無間の懷から炭燒の煙が長く立ち昇つて、山々は木枯の風に時をおいてはゴー〳〵とうなつてゐる。

大井川は川狩（流した材木を狩り集めては下流に下ること）がすんだ後は急に寂しくなる。もうそれからは谷奥には人が入らない爲に、部落はひつそりとして死んだやうだ。

秋十月の末溪水に隨つて材木と共に下つて行く人達は隨分寒いことであらう。濶い磧の處々に焚火の跡の殘つてゐるのもこの人達の暖をとつた跡である。宿帳を見ると越中蛎波郡の者が多いやうだ。黑部川で小屋を建て、船を造る爲に、上流から木材を流してくる、そしてそれを、輕舟に乘つて引き上げてゐたのも皆蛎波郡の人達であつた。宿の者に聞くと越中の人は骨身を惜まずによく働く、そして巧者であると云ふことである。こんな遠い處まで來て働く人達、その中にはあの御山谷の出合で、驟雨に襲はれて駈け込んだ私達を、親切にしてくれた人も交つてゐるかもしれないと、私は何となくなつかしく思つた。

今時分奥山へですかと、宿の者は驚いてゐた。秋でさへ寒さうに思つてゐるのに、十二月にはまだ登山する人は來たことはないとさへ云つてゐた。總じて南の方の人は雪の深い季節には山へ上らないらしい。獵師でも里山

で充分獲物がある爲に、高い處まで登らうとはしない。谷奥までがせい〳〵である。それだから輪樏などもあまり用ゐないやうだ。要太郎にしても六月に山へ登つたのが一番雪の多い時の登山だつたと云ふ位である。去年遠山の人夫が雪に弱いのに驚いたが不思議はないと思つた。

話は少し枝道に入るが、大井川は奥から開けたと云ふことだ。井川よりも田代や小河内（コンガウチ）の方が先で、それから井川へも人が住むやうになつたのだと云ふ。今から七八百年も前、信州からの落人が遠山川を溯り信濃俣河内に降り、その上流の矢平へ八戸を營んだ。それが別れて四戸は寸又谷の大間へ、他の四戸は井川の田代へ下つて部落を造つた。今の田代や大間の先祖と云はるゝものがそれである。同じ谷奥の部落でも小河内の者は甲州から入つて來たのだと言ひ傳へられてゐる。

昔は田代の人が信州遠山の和田へ買物に來たと云ふことを、今だに遠山の者が云ひ傳へてゐる。それは今の信濃俣入りを易老から遠山川を下つて和田へ出たものである。兎に角それはこの部落の者が信州からの落人であることを裏書きするやうに思はれる。大日峠を利用するやうになつたのはそれから暫く後のことらしい。田代や大間に瀧浪、森竹、大村など〻云ふ姓の人が多いのもこの事實を物語るやうだ。

かうした谷奥の部落には往昔移住した人達の口碑や傳説がよく殘つてゐる。然し多くは谷を溯つて生活を求めたものであるが、これは反對に谷へ下つて來た例で、明かに落人と云ふ境遇におかれた人達であるらしい。

大井川の谷も年々多くの人が伐採に入り込んでゐる。それにも係らず田代や井川の人達がその純朴さを、今だに失はずにゐることを私は嬉しく思つた。

椹島へ

（十二月十五日）

田代から椹島までは八里半の行程で、日の短い今では餘程早發しなければ日が暮れてしまふ。

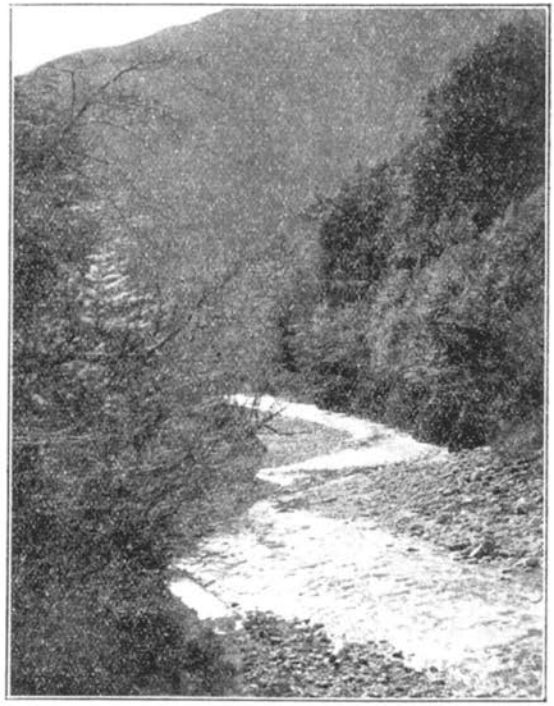
午前四時に目を覺まし、暗い中に朝餉をすまして要太郎の來るのを待つた、午前六時戸外が白み初める頃に宿を出た。夜來の風は中々やまずに外は肌を切るやうな寒さである。明星は山の端に冴えて、おく霜は雪のやうに白い。この寒さにそして仕事の少ない今は、どの家もまだ起きてはゐず、軒の周りから炊煙が白くむせび出てゐるのを處々に見るのみで、寂寞とした村の道は犬の聲さへも聞えない。凍てた道の上を行く靴の音が高く響いて、水溜りには厚氷が張りつめられその上を行く足許は危く辷らうとする。

視界は一歩〳〵明るくなる。小河内の部落を見て畓道を行くと、道は左へ〳〵と曲つてもう大井川の川瀬は脚下に大きくうねつてゐる。田代近くには小家は處々に建てられてある、スガ山の一軒家、それから對岸の潤い磧に人夫小屋が幾棟か建て連らねてあるがどれも今は無人である。

午前八時に日は谷に射し込んで來たが、烈風は益々吹き募るばかりで、長い釣橋を渡るときには思はず首をすぼめる。帽子をおさへて風に搖れる釣橋を渡るのが骨が折れる位である。左岸から東河内の大きな流れが入ると間もなく崖嘴の小さな平に出た。午前八時四十分、そこが高瀬島で狹い處に建て込んだ家は皆戸が閉してある。右岸から左岸へ支流の釣橋を渡つて、今度は長い釣橋を左岸に渡り崖側を行く。この附近は道は棧道の形をしてゐる。暫くの間谷が美しくなり、枯林下に蒼黑色の岩壁は膝を立て連らねて、清流はその方へ深く淀んで流れて

ゐる。この附近は近頃大井長瀞と呼ばれてゐる處で可なりの距離を流れは美しく走つて居る。

高瀬島（コウセンジマ）から一時間餘も崖側を辿ると、左岸に闊い平が數町の間を延びてゐる。下（シモ）の島であつて、小屋が一つと大きなバラックが建てられ、日當りの良い前の廣場に畑が作られて、その中に老人が一人麥藁帽を冠つて何か仕事をしてゐる。この附近は冬の谷間とも思はれない程暖かさだ。バラックの傍の小谷には見上げる程の高さ迄山葵が一杯に培養されてゐる。さすが名産地だけあつて地味のよい所には山葵を作ることを忘れない。こゝまでの間にも可なり大きな山葵田があつた。然し茶畑はもう見ることが出來ないやうだ。こゝも夏には人の往來が可なりあるので茶屋を營んでゐる處である。下の島の出端れから左へ上るものは信濃



大井川高瀬島附近

俣入りの道になつてゐる。

時計はもう十時だ。それから三十分も行くと上流に雪の山が見えて來た。その天上はすばらしく光つて、裾の森林帶は銀粉をまいたやうに新雪が吹き出してゐる。上河内岳の一角らしい。コシボソといふ所には麥畑が出來

てゐた。然しそこにも最早人はゐなかつた。

溪幅が又闊大になつて左から支流が入つてゐる。磧の中を銀蛇のやうにくねつてくるそれは信濃俣の流れである。私等は十一時にその向ひの沼平の小屋に着いた。沼平の對岸信濃俣の出合にはド平といふのがある。沼平は隨分闊く、こゝにも畑は造られてゐるが、洲に埋められた轉石は到る處に散亂してゐるので、多分の收獲のあらう筈はない。

沼平の小屋には冬を通して人が棲んでゐる。丁度私の行つたときには、もう寒くなつたので椽の下の方へ家財を運び、そこで穴居のやうな生活の仕度をしてゐる處だつた。私は沼平で中食を使ひ一時間程休んでゐた。

大井の谷筋では冬も人の常住する處は、この沼平と椹島と、それから二軒小屋の東電の小屋との三ケ所である。そして田代から椹島の中間に位するのが沼平で、その距離は田代—沼平四里十六町、沼平—椹島四里四丁である。

信濃俣の落口から瘦尾根を一つ隔てゝ仁田河内が入つてゐる。私はその附近から仁田河内岳の雪の姿を仰いだ。この谷筋も左岸白峰山脈の方で、山は急に谷は荒れてゐる。カレキド谷、諸の澤などは隨分な荒れ谷である。

上河内の落口に着いたのは零時三十分、そして二時には中の宿の小屋の上手で暫く休んだ。椹島も大分近くなつて、粉雪は岨道に吹き積つて處々斷續し始めた。そして日影の崖側から落ち込む谷の水は、どれも皆厚い〳〵氷柱となつて鏡のやうに岩の面にへばりついてゐる。

烈風は中々收まらない。大きな谷筋を風の響きと共に枯葉は翩々として流れてくる。天氣は素的であつて、白く輝いた斷雲は赤石の方から大井川の谷を跨いで斷え間なく東へ飛んで行く。崖側は又高くなつて、溪水を遙か下

に見るやうになつた。古生層の黒ずんだ岩壁の裾を洗つて行く谷水も同じやうに黒味を帶び、その中に蒼紫色を溶してゐる。美しい淀を見るにつけ、伐採された跡の慘めな、ひからびた溪側の森林にあきたらない私の旅心は崖側を下つてその水に口づけをしたい程の誘惑を感じないわけには行かなかつた。

左に崖頭を廻つて危くその角に立つと、行く手に當つて雪山は夕日にきらめいてゐる。やゝ櫻色を帶びてゐるその丸い頭、夏では氣付かずに過ぎてしまうものであらうが、それはまがふ方なき千枚澤の頭だ。深い雪だ。私は十二月の中旬に、南の方でもこんなに雪が積るものかと思つた。これではあすこまで上るのでさへ容易でないらしい。岩巢は少しは現はれてゐるが、小屋はもう埋まつてゐるに違ひない。私は輪樏の用意のないことを殘念に思つた。田代で間に合はない位なら東京から持つてくればよかつたとさへ考へた。

間もなく私等は赤石澤の落口、赤石澤の渡についた。そしてそこに架けられた釣橋を渡りながら大流を顧みてこの附近の變り果てたのに呆然とした。

何と云ふ慘めな樣だ、あの蔚々とした晝も尙ほ暗い程に茂つてゐた大森林は、その幽邃な美觀の全部は、伐採の爲跡方もない程に荒れ果てゝ、谷筋は徒らに闊くガラリとして、昔日の俤とは似てもつかない荒涼たるものに變つてしまつた。聖、赤石の兩大支流を併せた溪水の量こそ多いけれども、處女の誇を失つた溪谷は最早私等の觀賞の對象としてはあまりに貧弱である。

この附近は大井川中での雄大な溪趣をもつてゐた處であつた。濃密な森林の底を溪川はかすかに閃めく程深く谷川の寫眞を撮るのでさへ、岨道からは容易にスナップ出來ない程の幽深さがあつたのであるが、今では聖澤は大タル附近迄、赤石澤は北澤の出合の數町下流の惡場の下手迄伐採されてゐるので、最早その雄大な景趣に接す

ることが出來なくなつた。

大體大井川は、少なくともその東俣西俣の出合から下は、闊い磧の間を流水は蛇行迂曲して、下流に到る迄殆どその一本調子で通してゐる。森林によつて變化を與へ、その溪觀の優れた大部分を領してゐたのであるから、伐採後の比較出來ない程見劣りのする溪川に、自然美に鋭敏な私等を喜ばす程の景趣を悉く沒了されてしまつた。

奥山のあまり見えないこの谷間の崖側には、材木にされた殘りの、大木の尖や、大きな枝は到る處算を亂して引き懸つて、その間をボサが藪となつて茂つてゐる。伐採道は縱横に山側をきづつけてゐるのが雪の爲に餘計に目立つ。美しい岩壁や淵があつてもその上部は皆禿頭病にかゝつた後の頭のやうだ。白峰山脈も赤石山脈も大井川の側面では、全く裳を剝がれた珊瑚たる姿である。胸壁や頭顱のみ僅に舊態を保つてゐる偉人の群像のやうだ。その血は枯れ、腰脚は極端にまで虫喰はれてゐる。どう最眉目に見ても奥秩父の笛吹川上流の景趣とでさへ比較出來ない程の衰へ方である。

然しそれを私には決して苦情は云へない。私有林であるから、そして初めから伐採を目的として買收されたものであるから。それでも今後この谷を保護して森林の繁茂するのを待ち、景勝として保存したならば、一世紀も經てば又立派な光彩を放つやうになるであらう。私はさうならんことを願ふものである。

私は現今でも赤石連峯に登る登山路としてこの溪谷を利用することを躊躇しない。赤石岳も聖岳も、悪澤岳にしても奥西河内岳にしても實際何處に向つてよりも大井川方面に於て、最も優れた姿を展開してゐるから、そしてその方面に氷雪も多く小屋等の便利もあるから。

赤石澤の出合から先は、雪は追々深くなつて椹島では五寸餘の深さになつた。私等は午後四時三十分思つたよりは早く、そして樂をして椹島に着いた。

椹島の一日

椹島へ着いて見ると、山際の闊い平にある多くの家は皆戸が閉され、川添の下にある一軒の小屋に冬營する爲の住家は移つてゐる。上の丘は風當りが强く、雪が深くなるので、冬營するのには暖かな下の方を選んだのである。

小屋へ入ると留守居の內儀が夕餉の仕度をしてゐる處で、他の人達は仕事に出て不在であつた。まだ冬も淺い十二月なので、この小屋には十人程の人が泊つてゐた。そして夜明けそこそこ仕事に出かけ、日暮時分に戻つてくる。何をしに行くのかと問ふと、寒栩を伐りに行くのだと云ふ。寒鮒をつりに行くと云ふことは東京にもあるが、寒栩を伐りに行くと云ふことは私には初めてゞある。話を聞くと、今伐つておいた栩が何の材料にしても一番良いと云ふことだ。

この人達の多くは獵師であつて、仕事を休むときには犬を連れて谷筋をあさる、鹿、猪、兎などがその主な獲物らしい。

上の丘には旅舍、事務所、バラックなどが二十幾棟か建てられて一つの部落を爲してゐる。そして上手には社が新しく建てられ、故大倉男の筆で井川山神社と云ふ扁額がかゝつてゐる。

椹島の對岸の山側だけは、せめてその美觀を保存しておきたいと云ふ心やりからか、前面には伐採されてゐない

森林が一山殘つてゐる。背後の荒廢した山側とは比較にならないその美しさに、大井川の水まで華やかに眺められる、青薙山の一角が下流に聳えて、新雪に肌寒く裝はれたその姿を見ると、私は何時の間に、こんな大きな雪の山々にとり圍まれてゐたのかと不思議にさへ思つた。

私は椹島で三晩厄介になつた。丁度着いた翌日吹雪だつたので登山を見合せた。その日は夜明頃から寒風が猛烈に谷筋に吹き荒んで、ちら〳〵と花瓣のやうな雪片が舞ひ降りて來た。「風花」ですと小屋の內儀が云つてゐる中に、生憎とそれが細かく繁くなつて、遂に山上から吹き下ろす烈風につれて、卍巴と狂ひ始めた。呼吸もつけない、眼も開いてゐられないやうな吹雪だつた。それでも午後からは時々上空が明るくなり、その奧から碧い光りが見えて來たが、粉雪はやはり時をおいては烈風と共に襲つて來た。まるで嵐の日のやうだつた。

この邊は冬は總じて風が強く、快晴の日でも山上から吹き下ろす風に追はれて、雪片はヒラ〳〵と下りてくる、それを風花と云つてゐるので、さう云ふ日には山上は雪煙が吹き靡いて手がつけられない。

さすが茶の名產地だけあつて、小屋の人達は自製のものを罐へ入れて持參してゐる。朝嗽ひをして爐邊に暖をとつてゐると、てんでに自慢の茶を入れて呑ましてくれる。急須にさしたものを、小さな湯呑へついで出すのも茶所らしい。私は大井川の奧でこんなに美味い茶を御馳走にならうとは思はなかつた。茶の好きな私はかなりよい氣持になつて、井川名物の干柿をむしりながら山の人達の話にきゝ惚れた。

この谷奧には贅澤な食物は勿論ないが、味噌汁に香の物、それから鹽引位はある。焚たての飯を溫い汁で食べてゐると何だか勿體ないやうな氣持がする。あの峠道を越して、長い峽道を通つて運ばれた物だと思ふと、米粒の一つでさへ忽せに出來ないやうに感ずるのも當然だと思つた。湯にも毎日入れてくれた。夜は酒も出してくれ

た。そして泊賃は僅か金九拾錢を拂へばよかつた。私は小屋の人達の好意を深く喜んだのである。

吹雪の翌日は今迄にない程の朗かな日和であつたので、私は赤石岳へ日歸りの登攀を試みて見た。今年は雪が六十日も早く來たので、迚も千枚の小屋や赤石の小屋へ泊ることは出來ないと云ふので、山の一番よく見える赤石の東尾根を選んだのである。

赤石岳へ

（十二月十七日）

今日は珍らしく良い日和である。椹島まで入つてから一日吹雪かれて、翌日の快晴に赤石へ上りたいと、東京で虫のよい予定を考へてゐたが、丁度そのやうな廻り合せになつたことを、私は竊かに喜んだ。然し一日吹雪かれて日數を減じたのと、今年は例年より六十日も早く雪が積つた爲とて、頂を極めることが出來ず、正午まで上り森林帶の上部に辿りついただけで引返してしまつた。

夜明けは午前六時である。私は明るくなるを待ちかねて、小屋の人達が仕事に出るのと共に、赤石岳の登山についた。

表へ出ると二十八日の月は、明星と抱き合つて青薙山の上にかゝつてゐる。風こそないが寒さはすばらしいものだ。丘へ上つて、建て連らねた家棟の間を行くと、そこに吹き溜つてゐる雪は凍つてカン〳〵になつてゐる。土の出てゐる處は五寸以上もふくれ上つて、霜柱がその下で光つてゐる。

井川山神社の横からすぐに尾根にとりつき、椹島を下に見て伐採された跡の痩せ崩れた山側を、急な上りを三十

分程行くとやゝ廣い平に出た。もうそこから赤石岳が見えてゐる。赤石澤の奥から、その尖頭を右に、肩を怒らして左へ主稜を雍ぎ落してゐる。そこから聖岳の一角は空に向つて挺聳してゐる。岩頭の雪は飴のやうに光つて、懷の森林は氷雪を破つて蒼黑く息づいてゐる。

私等の上つて行く尾根にも朝日は輝いてきた。伐採された尾根からは雪の山がよく見えることがせめてもの取柄である。七時四十五分に雪は一尺餘の深さになつたので、私は靴とハバキの間にゲートルを卷きつけた。尾根の左手の懷を行く。勾配は大分緩くなつて八時には雪の深さ一尺五寸、どこを見ても全く雪に埋まつて、時々木の上に積つた雪が落ちてくる。上河内岳が聖の尾根の左を壓して、大きな姿を現した。聖は愈々高くなる。今迄一つに見えた峯頭は二つに割れて、側面から日を受けた山の陰影は、濃藍色に霞み始めた。

先刻から赤石の尖頭を旋つて狹霧のやうなものが、むら〳〵と延び上つてゐた。日に光る無數の銀糸の綾の靜かに擴がつて行くのを見て、私はこんなに早くから雲が出ては堪らんと思つた。然しそれは雲ではないのだ。烈風に煽られてゐる山上の雪が、銀煙となつて舞ひ騰つてゐるのであつた。遠くからは靜かに上つて見えるが、近くではハヤテとなつて渦卷いてゐるのであらう。要太郎はあれが出來るのでかなはんと云ふやうなことをつぶやいて、先へ上つて行つた。山上は餘程の烈風らしいが、尾根の懷は風が死んで、至極穩かである。

主に尾根の左懷を行くので、赤石、上河内、聖がよく見える。赤石の頂から左に落してゐる急斜坂と聖との間から丸山と兎岳が眞白な頭を並べてゐる。

九時十分尾根の脊へ出ると、烈風は急に襲つて來た、木に積つた雪は絶えず崩れ落ちてくる、それが首筋へ入るのを防ぐ爲に手拭を卷きつけた。雪の深さは二尺を越すやうになつた。併し北方が開けたので、奥西河内岳の

向ふから惡澤岳が大きな圖體を眞白になつてはだけてきた。惜いことには森林が貧弱なので寫眞をとる氣にもなれない。やがて右に惡澤岳、左に聖岳、上河內岳を見る位置に出た。そこで私等は第一回の中食をとつた(九時半)。咽喉が渴いても雪を嚙む氣にならず、一杯の水筒の水が隨分役立つた。

道は尾根筋のみを絡んで行く。雪が深いので棧道が判らず、うつかりしてその間に足を落すとポケットの中にまで雪は入つてしまふ。拔き足で漸くそこを通ると、瘦尾根に雪庇がつゞいて、雪の深さは三尺餘となり歩速が著しく鈍つてくる。十一時近くに白檜の密林に入つた。白檜帶を拔ければ岩稜になり、そのはずれに赤石の小屋があるのだが、そこ迄はまだ二つの大隆起を越さなければならない。伐採はこの白檜帶の處までゞ止つてゐるので、山相は漸く原始的になるが、眺望は却つて惡くなり、木の間越しに小赤石の方まで見えて來たが、雪山の大觀を貪ることは出來ない。

午前十一時半、私等は漸く崖側のやゝ見通しのきく處に下りて、赤石岳から上河內岳に到る山々を近く眺めた。赤石の尖頭を繞つて雪煙は盛んに騰つてゐる、聖の双峯の間からも、上河內岳の頂からも、吹き出した銀煙は東に向つてなびいてゐる。山上は非常の風だ。雪煙がハヤテとなつて行く山頂の壯烈な景色を見て、私はそれから密林に戻り、すぐ鼻先に聳えてゐる大隆起に向つて上つて行つた。

時針はもう正午を過ぎ、深雪は四尺に達したので、たうとう前進を諦めて歸途についた。富士の頭が森の切れ目からよく見える。雪を冠つた岩稜が、午後の强い日に輝いて、その複雜な皺は浮み出てゐる。北アルプスの嶮山のやうな峨々たる美しさは、裾を見せてゐないだけ私等に强い印象を與へた。富士の右には笠ケ岳が、濃密な森林の中から氷雪につる〳〵に光つた圓頂を差し出してゐた。

下りは早い。森林の間を、右に左に午後の日に影らふ雪山を眺めながら、三時間近くも下る中に、もう椹島は脚下に近く、冬營の小屋から煙が靜かに上つて、風呂の下を焚きつけてゐる人の姿まではつきりと見えてゐる。最後に赤石岳に一揖して、私等は午後三時半小屋に戻り、そこで又一日の宿りを求めた。

冬期は赤石岳にしろ、悪澤岳にしろ、小屋が利用出來なければ、登頂は無理であらう。この期節には日の短かいことが第一の弱味であつて、雪の少ない年の十二月、千枚小屋或は赤石の小屋へ泊ることが出來れば、悪澤岳へ上ることも赤石の頂上を極めることも可能であると思ふ。それにしても風の強いこと、雪煙が山上を吹き荒んでゐることはどうしやうもない。

デンツク峠越え

（十二月十八日）

今日はいやに暖かい日だ。生溫るい風が谷下の方から強く吹き上げて、四邊が何んとなく騒々しい。空は全く晴れて、星の光は美しいが、天氣は又變るらしい。

こゝで又吹雪かれては出るも退くもならないので、早くデンツク峠を越えたいと思つて、三日厄介になつた禮を厚く述べ午前六時三十分に上流へ辿つた。

奥西河内の道を行く。途中で寒椨伐採の人達に別れ、私等は右岸を奥西河内の釣橋を渡つて、つま先上りを行く中に、山坂は漸く急になつて來た。これから奥西道卽ち悪澤の登山路との分岐點までは、峠道のやうな可なり

の登りである。

道が高くなると下流の山峽の上から、上河内岳が見えて來た。上るに從つて千枚の頭、惡澤岳が全容を現し登り切つた處からは奥西河岳（荒川岳）の櫻色を帶びた頂稜が、曉の空から浮び出てゐる。今迄で最もすばらしい雪の深さだ。そして美しさだ。

惡澤岳登山路の分岐點に出て休む。夏ならばこの登山路も相當人の往來があるのに、今日は寂寞として鳥の聲一つ聞えない。谷道はそれから下りとなり、やがて對岸に移り、今年出來たと云ふ左岸の新道に通じてゐる。椹島から二軒小屋までの間は、新道が開鑿されたが、まだ岩壁の大きな箇所、崩れの横などは完成されてゐない爲可なり長い廻りや、崖へつりなどがあつて中々惡い。東京から問ひ合せたところ、その間は約二里で、然も坦々たる大道だと云ふことに喜んでゐたが、椹島で聞くと約三里、道が處々出來てゐないので三時間半を費やすと云はれた。それでも舊道よりは半道以上も近いらしい。椹島から二軒小屋の間は、谷筋は更に蕭々として冬枯の趣は強い。

私等より一足先へ、銃を擔いで行つた小屋の者は、何か見つけたらしく、一しきり犬の叫聲が止むと、銃聲が谷にこだました。

椹島から上流には雪は一尺程の深さで、二軒小屋までつゞいてゐた。千枚澤の荒れ谷の對岸を通ると、上流は開けて兩岸の山々は著しく低く、源流地らしい谷の樣は、空の明るさにも、山々の姿にも現はれて來た。もう向ふの山裾に二軒小屋の家棟が見えてゐる。私等は東海紙料の幾棟も建て連らねてある小屋の間を拔け、午前十時半取入口の處にある東電の小屋を訪れた。

その昔紀文がこの附近の木を伐り出したと傳へられてゐる。千枚澤の名はその時分から呼ばれてゐるので、丸太を筏にしたものを千枚程重ねた上を、伐採した木を滑らせたのであるが、それは出來ると間もなく崖崩れで埋められ、その名だけが今に殘つてゐる。そして今でもその一部が見える處があると云はれてゐる。

二軒小屋には東海紙料會社のバラックが十棟程並んでゐる。東電の小屋はそれより一段高い處堰堤の左上に建てられてあるが、何しろ寒いので窓は皆固く閉され、家棟の中を縱に貫いてゐる長い土間に向つて、障子が引き廻され、その中の部屋には小屋の人達は十人位ゐたやうだつた。

東海紙料の人はこゝにはゐない。椹島で幾人かゞ冬營をするだけで、下の沼平のは茶屋を營む一家である。日當りのよい廣場であるが、高度がある爲に雪は凍つて解けやうともせず、流れの一部は氷柱となつて堰堤の壁面に下つてゐる。こゝでは大井川はその形まで改めてしまつた。過去の幽深の俤は夢のやうに消え去つてしまつたのを見て私は名殘り惜しく考へた。

小屋の人に聞くと、峠は今、三尺位の雪の深さがある。併し道が踏んであるので通るのに心配はないと云ふことだ。何でも大雪の降つた翌日には、二軒小屋の方から幾人か、それからホウリ澤（甲州向）の小屋からも幾人かゞ、輪樏を穿いて道を踏みにくるのだと云ふ。

椹島までは下の方、田代の方から交通があるが、二軒小屋は冬になると、新倉方面からの交通だけで、デンツク峠がその主要の交通路になつてゐる。年中電力の人が通つてゐるこの峠路は、多いときは雪は八尺位になるさうだが、それでも通れるのだから都合がよく、雲の深いときには、雪崩の多い谷筋をのみ辿らなければならない椹

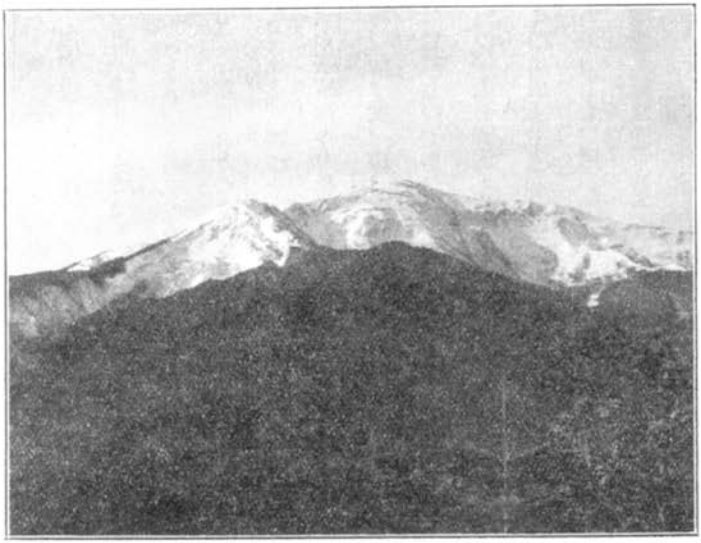
島よりも遙に便利である。そしてそれは私の豫期してゐなかつたことであつた。

小屋で飯をよばれ、そこを出たのは丁度十一時で、私等はそれからデンツクの登りにかゝつた。潴水池には氷が一面に張りつめて、その下に濃碧の水は凄い程凝つてゐた。小屋の下を左へ廻り、道標の處から左に折れ、小谷を暫く上つて潴水池の上に出た。それから山懐の道を、横に上手に向つて廻りながら上つて行つた。約三十分程で支尾根にとりつき、やゝ急な上りを行くと、東俣の谷向ふに、三伏峠方面のなだらかな山背が堤のやうに延びて見える。雪はその方にも隨分深い。森林が伐採されて居ないこの附近の尾根の懐はすばらしい美しさで、私は漸く原始林の中を辿るやうな喜びを感じた。

栂、檜、樅、椹、五葉などの喬木林の強い姿、それはこの谷へ入つてから、卽ち大井川の溪谷へ入つてから初めて見たものであつた。深林の間に光る雪山の姿を喜びながら上つて行く中、尾根上へ出ると、東俣の支流が、反對の側面を雪溪となつて黑木の間を延びてゐる。

この尾根は本流と東俣との間に出てゐるものであつて、道はその脊筋を南に、デンツク峠に向つてゐる。雪の深い尾根上も、雪が踏みつけられてあるので甚だ歩きよい。昨日の赤石の登りとは比較にならない。漸く西向きの崖側を道は通ずるやうになつた。木の間越しであるが、黑澤岳が大井川の谷向ふに、大手を擴げてゐるのが見える。その左に赤石岳も光つてゐる。どこかでよく見たいものと、森林の切れ目を探しながら進んで行つた。やがて斜面が急に落ちて、森林の切れてゐる屈强な崖側道に出た。私等は荷を下して、つい谷向ふの溢れるやうな雪山と相對した(零時四十分)。

矢張り惡澤がと、私は一人で叫んだ。どこから見ても、概ね不等邊三角形のやうな形をしてゐるこの山は、こゝでは北から南に、同じやうに大きく裾をさばいて、悠々たる姿を横へてゐる。それがすぐ鼻先にだ。どの山よりも一番近くにだ。



デンツク峠より惡澤岳を望む

左に千枚岳を起して、大井川の谷に延びてゐる尾根も立派だが、右にすばらしく根張つてゐる西俣の尾根は頗る雄大であつて、その兩方へ曳かれた均衡のとれた大きな線が、この方面から見た立派さを背負つて立つてゐるやうだ。

午後の日をやゝ後から受けてゐる爲に、雪稜は鋭い輝きを發し、その懷に錯落としてゐる谷皺、惡澤源頭の峻嶮は紫藍色の深く沈んだ樣々な色と形をもつて、尤大な山懷を象徴してゐる。雄大な形容と力强い色調、私はそれを眺めて、惡澤が赤石山系でも最も雄大な山であることを眞劍に感じた。いくらそれは高く大きくとも、赤石方面から見たこの山は、その形が不揃ひの爲、奥西河内岳の一角のやうに思はれてならなかつた。

私はこの旅では、デンツクから見た惡澤岳、それを第一に期待してゐたのであつたが、來て見ると矢張それに

違ひはなかつた。そして豫想以上の雄大さを見て私は喜ばずにはゐられなかつた。

惡澤岳の左後に赤石岳が、その左後には聖岳と上河内岳とが雁行して、その峯頭はどれも皆、午後の紫光にむせんでダイヤモンドのやうに光つてゐる。その中でも赤石岳は流石に立派である。小赤石から左に本岳を重ねてゐる、その崔嵬たる山塊は何と云ふ力強さであらう。赤石澤に向つて無數に曳いた、雪に飾られた美稜と、この山のみがもつ丸いどつしりとした山相は、そして大井川方面から見た懷の立派さは、南アルプス最高の榮位を占むるに充分な威嚴をもつてゐる。私は南アルプスの名がこの山によつて象徴されてゐるのを喜んだ。

デンツク峠の上は可なり廣い平であつて、國境附近には伐り株が一面に殘つてゐる。もうそこは森林の中なので眺望は全くない。私は愈〻甲駿國境を離れて、甲州側を內河內につけられた峠道を下つて行つた。雪は深くとも降りは早い。やがて森林の上から、夕日に染め出された富士の麗容が現れて來た。雪路を駈けて下りてホウリ澤の小屋へ着いたのは午後二時、そこで中食の第二回目をとつて、それから間もなく廣河原の發電所の處へ出た。雪はホウリ澤から五六町下の處までつゞいてゐた。私は下りながら見た內河內の立派な壁、秩父古生層(?)の魚のヒレのやうに逆立つてゐる、大きな立壁の立派さに驚いた。そしてこの谷も隨分よい筈のものだつたと思つた。內河內を拔け出ると、もうすぐに新倉である。

今から十數年も前に通つたことのある新倉、まだ水電の工事が始まらずに、周りの山々におさへつけられたやうな新倉のことを考へて、私はこの山村が電力の御蔭によつてのみこのやうに開けたことを知つた。高い山の上にも、發電所の周りにも、强い光の電燈は暗夜を破つて、イルミネイションのやうに光つてゐる。私は午後四時四

十五分に、それでもまだ日暮前に新倉に出て、茂倉河内の深澤廣吉の家に辿りついた。

夏とは違ひ登山者のない爲に、この宿はがらんとして、家の中まで冬枯のやうだ。然し氣のおけない、素朴そのものゝやうな主人夫妻の樣子、滑稽な程間ののびたその扱ひは、私等山登りの者の一夜の泊りにさへ安樂な感じを與へてくれた。家の者だか客であるか判らないやうな愛想振りに、却つて山小屋へ泊つてゐるやうな氣輕さと、自由さがあることを私は喜んだ。

この方面から入らるゝ方は、新倉の發電所より數町下の、深澤廣吉を尋ねてそこに厄介になり、案内者でも人夫でも必要の場合には、矢張りこゝで求めらるゝのがよいと思ふ。兎に角便利になつたものだ。トロで飯富まで下りさへすれば、それからは自働車で甲府まで、一時間半もかゝれば出られるのだから、飯田町を夜行で發てば、翌日はゆつくり新倉で泊れる。その翌日には二軒小屋までは樂である。

私の大井川の旅も終つた。歸路富士川を跨いで、その姿を水にうつしてゐた富士の美しさも亦捨て難かつた。甲府近くになると、八ヶ岳の雪に飾られた連峯が私を喜ばした。樓臺のやうになつて、西の方に高く延び上つてゐる地藏、鳳凰の雪の光、それを見て、私は崇高な感をさへ味つた。甲府へ着いて尙時間があつたので、甲斐山岳會の人達と一時間程歡談をして、午後三時過の列車で歸京の途についた。

勝沼あたりで、亂雲の收まらんとした西の空に、白峯三山、地藏、鳳凰、甲斐駒などの冬の姿、夕陽に包まれた深い色を色いて、天半に氷雪の姿を重ねてゐるのを見て、私は再び喜んだ。先刻の金峯山もよかつた。その御蔭で久しく餓ゑてゐた私の腹もふくれたやうだ。私はこの旬日のよい旅をしたことを回想しながら家路を辿つた。

利根川水源

角田吉夫

（參照地形圖）二十万分一。日光、高田。五万分一。八海山、藤原、十日町、湯澤。

昭和五年八月七日東京發、長岡廻りにて上越北線浦佐驛下車、水無川より魚沼駒ヶ岳に登り中ノ岳、兎岳を縱走利根水源地の山、大水上山（大利根岳）に達し、それより利根川を下つて上州藤原に出て八月十九日歸京。同行者は大木長藏、寶幽義文、角田喜久雄の三君、人夫は越後南魚沼郡土樽村の劔持榮作、半澤忠善、高井孫兵治の三名。

水無川、駒ヶ岳より兎岳迄

駒ヶ岳、中ノ岳より源を發する水無川（ミヅナシ）と利根川の水源の二つが、私に非常な興味を抱かせたものであつて、この計畫を樹てる時には尠からず頭を惱ましたものがある。それは全行程に亘つての詳しい案内者と參考文獻を求める事であつた。八海山の麓の東村（ヒガシムラ）小學校に手紙で色々と問合せをした結果は水無川溯行不能と適當な案内者なしとの報告であつた。依つて案内者は私が嘗つて仙ノ倉山方面を歩いた時に連れた事のある越後土樽村の獵師を同行者として依頼し、案内の責任は全然除外してゐた。たゞ劔持榮作が利根川の越後澤の小屋迄、一度獵に來た事があるに過ぎない。參考文獻は水無川に就ては全然得られず、他は「山岳」十六年三號與上州號に依つて概念を得る事が出來た。尙利根川については「山岳」二十四年三號一三六頁の山形高等學校「山岳」部消息「魚沼駒ヶ岳

より利根川」の記錄と群馬縣廳利根川水源探險隊著「處女地征服大利根川水源紀行」である。右水源紀行は事實上唯一の參考書となつたものであつて、旅行中常に隨所にひらいては暗中模索の灯にかえた。それだけ、又この書に對する疑點も尠らず見出した譯である。

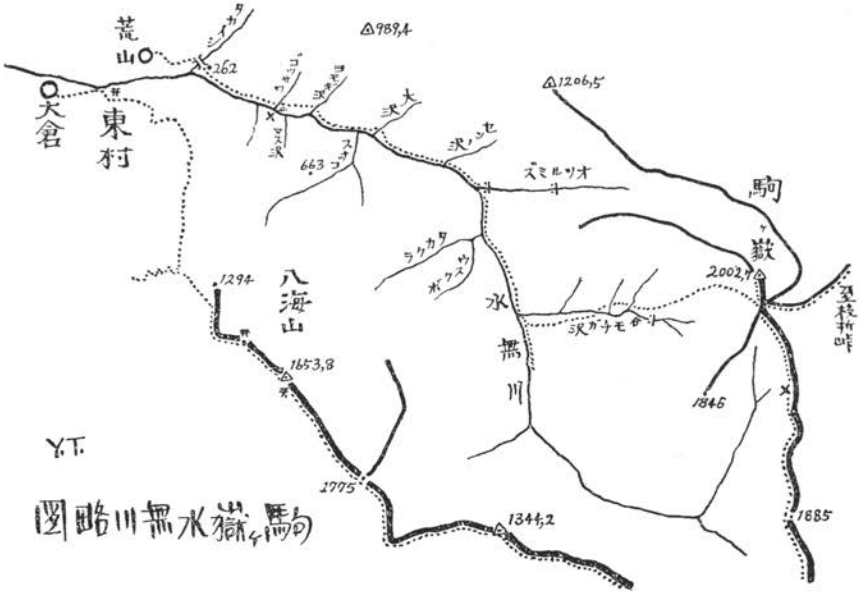
八月九日、晴、浦佐驛—東村小學校—荒山より約一時間水無川について登り、幕營する。

川幅の廣い水無川の奥には駒ヶ岳、八海山の山裾が見える。朝霧は頂を包んで、午後の酷暑を想はせる。一行七名、いづれも荷は堪え切れるだけ脊負つてゐる。午近く、八海山の大倉口の道を行き、東村黑土の小學校を訪れる。僅か一本の手紙の交渉に過ぎないのに、忘れもせず、校長を初め、學校の人々は喜び迎へて下さる。汗をしぼる日中の熱砂の途を辿りついた我々に、冷い西瓜の御馳走は何に比べやう。

水無川溯行の計畫は學校の人々は引留められたが、駒ヶ岳に行く登山道のある事を敎へられた。八海山を廻るか、引返へして栃尾又の大湯から枝折峠を經て駒ヶ岳へ登るかとまで二段三段と構えてゐた我々には耳よりな話であつた。この登山道といふのは八海山、中ノ岳、駒ヶ岳の三岳廻りの裏道らしく、道はさほどよくないがモチガハナの澤について駒ヶ岳の頂に走るといふ。米、味噌の買入れまで先生が自轉車を飛ばして御世話して下さつた。荷物を輕くする爲に荒山（アラヤマ）の人夫を一名駒ヶ岳迄頼んで、一行は村端れの河原に第一夜を送つた。

澤の奥に駒ヶ岳の鋭峯が恐ろしく高く、怪奇的な風貌を以て屹つ。オツルミズの急谿に輝く殘雪と見えたのは大きな瀧であつた。（地形圖、八海山圖幅水無川の無の字に東より入る澤）

八月十日、晴、幕營地（六、四〇）—オツルミズ（七、二八—四五）—モチガハナ（八、〇〇）—五合目（八、〇五）—六合目（九、一五）—七合目鏈あり（一一、四二）—九合目駒ヶ岳直南尾根（二、二〇—三、五〇）—十合目（四、〇〇）—駒ヶ岳（四



駒ヶ嶽水無川略図

一五―五、〇五）―中ノ岳よりの九合目幕營（五、四五）

露營地の直ぐ側に新しい石塔が立つてゐる。

「駒ヶ岳山道開祖、行輝靈神、明治十五年開、昭和四年十二月、小千谷長谷川久次郎建。」

天候に惠まれ、朝のすが〳〵しい微風に送られて駒ヶ岳に向ふ。オツルミズの落口に近く大きな瀧が懸つてゐる。その下の一枚岩に足場の刻んである所が駒への山道、針金が一條更に足場を助けてゐる。次の右岸に入る澤がモチガハナ、山道は本流に沿うて約十町程あるといふ、八海山より中ノ岳につゞく鋸齒狀の褐色の岩尾根が鋭い。一行はモチガハナの澤に入り、その左岸の山腹を卷いて行く。約半時間歩いて河原に下れば、谷の奥には立派な三段の瀧が懸つて居るのが窺はれた。道は右岸に移り、やがて急峻な尾根となる。六合、七合目と刻んだ標石の現れるのが唯一の慰めだ。信仰の山に相應しく時折、鏈が一寸した岩場に置

いてある。駒ヶ岳へのこの尾根道の峻しさ、高瀬川の山毛欅立尾根よりも、又飛騨笠ヶ岳のクリヤ谷の山道よりも峻しいと思はれるのはあながち荷物が重過ぎた爲ばかりではない。

九合目は駒ヶ岳の直南で、中ノ岳からの道が合してゐる、地形圖に一九〇〇米の數字のある邊りである。中食以後一滴の水も口にしなかつた渇きがすばらしい、草原も駒もない、ひたすらに水無川の水源へと一行を走らした。

完全な三角櫓の立つてゐる駒ヶ岳。靜かな夕霧に包まれた一刻を送る。雲の切れ目から北に名も知れぬ未知の山々が足下には栃尾又の村落がうかゞはれた。駒の東側に殘つた僅かな雪田が喉の渇きを思ひ起させる。灰の又、荒澤岳等あこがれの山々が東に浮ぶ。巨大な山容、緩斜面の山稜、夏には根曲り笹と偃松とが頑强に我々を近寄らせない事であらう。

駒ヶ岳より中ノ岳へ、南へ尾根を下り、一八八五米の隆起との最底鞍部に近く、九合目の標石の處に、小さな二尺四方位の池を見出して第二夜を送る。水無川の兩岸は恐ろしく切れ込んで居て、トラヴァースも側尾根に取付く事も到底出來さうにない、文字通りの溯行のみであらう、初夏の候豐富な殘雪を利用すればその本流の溯行も可能であらうと考へられる。

八月十一日　晴午後霧深し夜快晴　幕營地(八、二〇)—一八八五米(九、三五—五五)—中ノ岳(一一、二〇—二、五五)—二〇八五米の三角點(三、一五)—中ノ岳小兎岳最底鞍部東側約百米下幕營(五、二五)

小さな池の水で朝飯を辛じて作り得た、然も褐色の泥水。雪は水のある所で炊く事とする。

幾つかの隆起を越えて、山稜を中ノ岳へ向ふ。根曲り竹と偃松の尾根、しかし道は充分に切開らかれてゐて、七合目、六合目と標石の數字は減つてゆく。處々の岩影や松の大木の根元に焚火の跡が見える、三岳めぐりの人々

が露營の一夜を明した處であらう。

兎岳が中ノ岳の左肩に綠色の山膚を見せてゐる。十時頃から霧が總てを包んでしまつた。短い芝草に覆はれた平坦な中ノ岳、山頂には大きな淺い池があつて、四、五寸位のサンショウ魚が珍らしくもこの高い山頂に生きながらへてゐる。その側に銅の神像が二、三體、劍や蠟燭か無數に奉納されてゐる。池の水を使つて、晝と夜の飯を作る。八海山、駒ヶ岳を望みを得ないのは遺憾であつた。

中ノ岳の三角點は池の直ぐ南に在る。一行は忠實に尾根を傳つた爲に尠からず藪に苦しんだのだが、東側を一寸絡めば草地もあつたのだ。三角點より僅か南へ下ると、新らしい切開きに出合つた。それは五十澤村へと一五六〇、八米の三角點に延びた尾根を下る新道である。その後の一行の尾根傳ひは藪との激しい戰爭のやうなものである。偃松、根曲り竹、ナヽカマド等の根强い敵陣、惡戰苦鬪、汗みどろの奮戰。二時間余を費して僅かに兎岳との最低鞍部まで三百米を下つたに過ぎない。

東側、北ノ又の水源に小さな丸池と平地を見出して蘇生の想ひで今宵の露營地と決めて下つた。求めた池は空沼であつた、失望のあまり、人夫達はしきりと池の堀り下げを試みた。殘雪のない事と、旱天つゞきの爲め今日も又一行は水に苦しむ、人夫二人は明日の二食分の米とぎに、水を求めて北の又を下つて行く。

灌木に圍まれた池のほとりには相當の平地もあり、露營地としては絶好の場所である。この四、五坪もある池も平年は恐らく水の涸れる事はなからう。然しながら幸にも水は一町程下つた所に發見する事を得て、灰ノ又と荒川が月光に美しく輝く夜を迎へた。

八月十二日　快晴　午後四時頃より强風　露營地（八、〇〇）—小兎岳と兎岳の鞍部（一一、二五—一、一〇）—兎岳（一、

三〇―二、三〇）―大水上山（三、二〇―三、四五）―瀧1（四、〇〇）―瀧2（四、四〇）―瀧の下（五、〇五―一五）―左岸幕營（五、二〇）

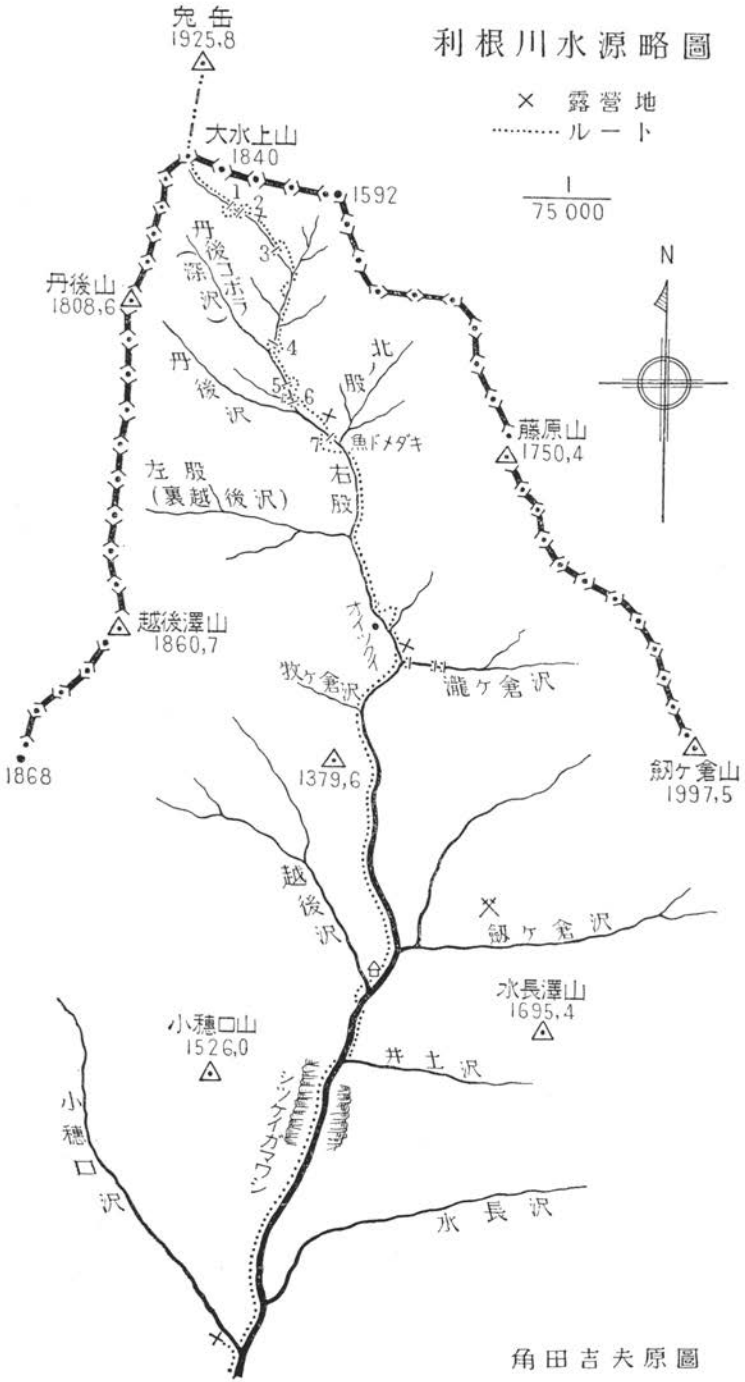
小兎岳（兎岳の北の一八四〇米の峯）まで藪は相當に手強い。小兎岳に近くなつて漸く丈の低い笹のみとなる。それに針葉樹が散在して一段と風致を添へてゐる。露營地より兎岳の鞍部まで約一粁程の所を三時間半も要したのには一驚の外はない。眼鏡も手拭も、足につけたカンヂキも皆枝にとられてしまふ。兎岳の鞍部にも小さな池があつたがこれも涸れてゐた。半澤と高井は北の又へ一時間半近くを要して水を汲みに行く。

兎岳の登りは草地で非常に歩きよい。急な斜面も重い荷も藪に比べたら問題にならない。山頂は平坦な笹地、三角點の西側には偃松が繁つてゐる。雄大な平ヶ岳の高原を初めて仰ぐ、夏の雲、積亂雲が東南の天空を劃して重疊たる山波に相接してゐる。

大水上山は兎岳の直南脚下に横はり、丹後山につゞく山稜の一角に過ぎない。僅か一八四〇米の峯は大利根の水源地の山としては餘りに振はざる姿である。北に仰ぐ中ノ岳、八海山、駒ヶ岳の三岳は正に群峯中の雄であらう。

利根水源の山々へと心は馳せて、二時半兎岳の頂を辭す。鞍部の近くから、大水上山迄は又藪に少からず苦しめられた。兎が二、三足下から驚いて飛出すのも、この山には相應しかつた。藪に對する悲鳴はやがて、國境を傳ふ立派な切開きへの言葉となりたきものである。

大水上山より利根川を下る


利根川水源略圖
× 露營地
……ルート
1/75 000
N
兜岳
1925.8
大水上山
1840
1592
丹後山
1808.6
丹後コボラ
(深沢)
丹後沢
北ノ股
魚ドメダキ
右股
左股
(裏越後沢)
藤原山
1750.4
越後澤山
1860.7
オイツクイ
牧ケ倉沢
滝ケ倉沢
1868
1379.6
劔ケ倉山
1997.5
越後沢
劔ケ倉沢
水長澤山
1695.4
小穂口山
1526.0
井土沢
シツケイカワシ
小穂口沢
水長沢
角田吉夫原圖

阪東太郎の水源の山には色々な傳說と歷史がある。文珠菩薩の乳より滴る水が源なりと傳へられ水源の山を文珠山といはれた事もあると聞く。明治廿七年の利根探險隊はその水源溯行を試み、水長澤迄到り、それより本流を斷念して水長澤に入り、國境に登り尾瀨へ下つてゐる。大正十五年の群馬縣廳の探險隊深田雅治氏一行は遂にこの溯行に成功して、初めてこの大利根岳（大水上山）の頂に立つ事が出來たものである。

大水上山の頂には當時の壯擧を記念すべく携行した標柱と日の丸の國旗が今日でも殘つてゐる。「命名大利根岳大正十五年八月十六日、群馬縣利根水源探險隊」と書いた柱も明かに、又日の丸の旗も長い間の雨風に朽廢してはゐるがなほ殘つて居る。ウキスキーの空瓶には其後山頂を訪れた人のものであらう、名刺が二三見られた。私達一行は早く利根川の溪谷を觀望したい欲求から僅か南の下つたガレの上に立つた。この頃より激しい東風が吹きはじめて、すこぶる不安な天候と化して行つた。

水源地の頂に立ち、これより向はうとする利根川の深谿を緊張した面持で見凝める。左右より走る尾根は屹ち兩岸相接するばかりで、水流を認める術もない。川筋の曲折は激しく、恐らく水源より廊下の連續としか判斷は下し得ない溪相である。「水源紀行」に瀧は一ケ所とあるのは、むしろ不思議な位であつた、更に我々に失望を與へたのは殘雪の全然ない事である。

三時四十五分一行は遂に意を決して水源へと下つた。しばらくは灌木の急傾斜地、間もなく岩場が現れ、水滴にも接しない中より既に崖に會ふ。水流を認めたかと思へば、瀧又瀧、十米位の二つの手懸りの悪い瀧に出會ふ。五時二十分、瀧の高卷きを終つて、左岸に緩斜面を求めて無理矢理に露營地とする。谷側へ岩を置き、灌木を横たへ、イタドリの葉を敷いて、辛うじて上下二段に分れて二組の天幕を張る事を得た。下流の見通しもきか

ず、前途暗澹すこぶる心細い水源の第一夜である。空には星一つ見られない。

丹後澤の下まで

八月十三日　曇　強風　夜風激し　幕營地（八、〇〇）—一五九二米より入る澤の出合（九、四〇）—丹後コボラ（深澤）出合（一二、三〇—一、二五）—丹後澤出合の瀧6の上（三、二〇）—丹後澤下左岸尾根幕營（四、五五）

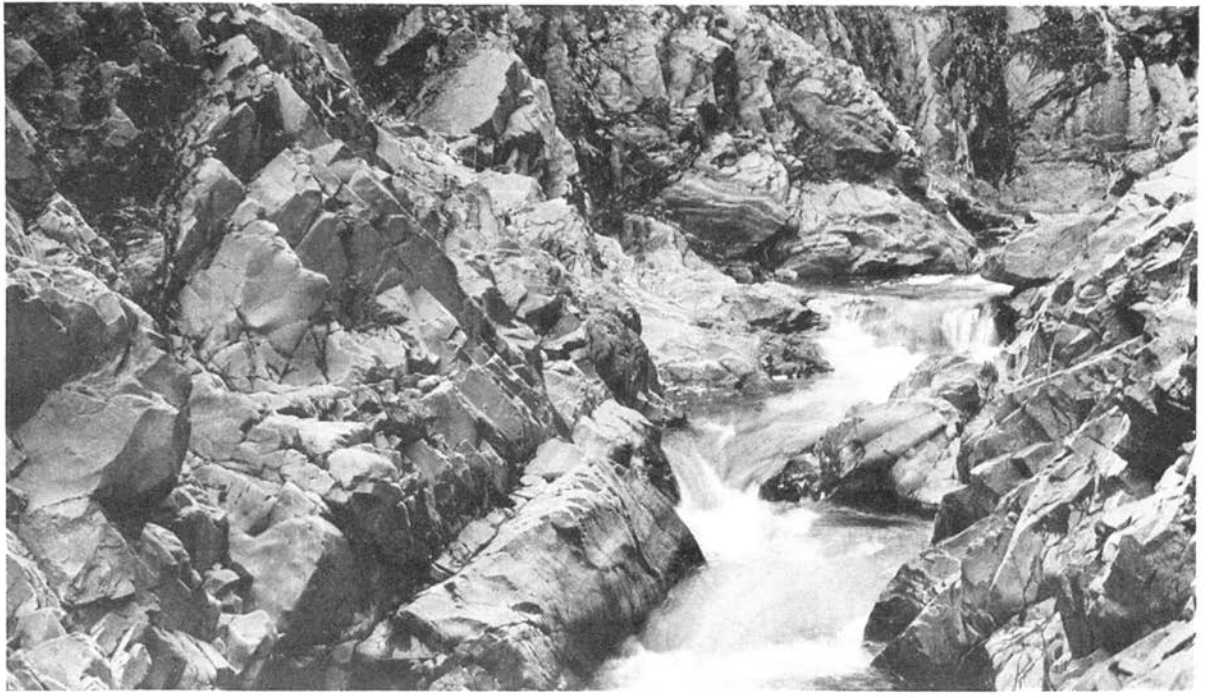
風の強い薄曇の朝を迎へる。地形から想像しても一五九二米の獨立標高點より入る澤の出合までは落差も大きい（この澤は探險隊は東小澤と命名してゐる）。瀧を待構へて、この溝の中を行く樣な狹い廊下の底を下つて行く。五分も歩いたかと思ふと、七、八米の立派な瀧にぶつかる。略圖に3と記したものである。早速左岸の藪に入つてこの惡場を避ける。東小澤の出合まで尙三つ四つの瀧があつた。出合の近くで、本流は急に右折してゐる、その出合の近くで、右手の低い尾根を乘越して瀧を避けた。出合を過ぎると流れは比較的緩かになる。一町近くもイタドリやフキの密生した河原もあつた。更に廊下がつゞいて瀧も現れる。一個所などは兩手を擴げれば左右の岸に觸れるばかりの狹さであつた。そしてその下が深い潭で通過も出來ず、非常に不確實なトラヴァースをした所もある。

十二時十五分、十米位の大きな瀧の上に出る。オーバーハングになつてゐて、瀧壺も見えない、たゞゴウゴウと物凄い響きが聞えるのみだ。略圖に第四の瀧と記したものである。左岸を卷いて、下つた所が丹後コボラの出合であつた。澤を通して丹後山附近の緩い尾根が見える。谷筋も本流とは比較にならぬ程よさゝうである（寫眞參照）。探險隊が溯行したのはこの丹後コボラの澤である。この一行は深田隊の名に因んでこの澤に深澤の名稱を

與へ又、その上流の幕營地は持參した傳書鳩の死を記念して鳩平と呼んでゐる。本流に懸る瀧は丹後コボラの出合より僅かに上流にあるが、谷が右折し、瀧壺の岩壁に阻まれてその姿を見る事は出來なかつた。「水源紀行」にはこの瀧については何等記してゐない、恐らくこの附近は雪渓があつた爲であらう。たゞ丹後澤附近に大きな魚止の瀧があつたが、雪渓によつて難なく通過す、との事で我々にはこの一つの瀧のみが尠からず氣に懸るものであつた。

根尾山後丹と流上その点流合コボラ後丹

丹後コボラの出合で晝食と休養に約一時間を費し、更に下流へ、魚止の瀧を期待しながら進んで行く。出合の下には約二町程、のどかな河原があつた。氣の輕い谷歩きも瞬時に過ぎない、やがては又、險惡な谷筋と變る。丹後澤まで地形圖では半粁位の距離であらう、それを二つの大きな瀧にぶつかつて三時半も要してゐる。初めの瀧も十五六米はあつた。瀧壺に白く渦卷く水は更に一段、瀧となつて落ちて行く、その間へ、右岸より一本細い非常に長い澤が瀧となつて落込んでゐる。地形圖には全然この澤の記號がない。その後藤原の獵師林主税より聞いた「重ね瀧」といふのはこの事と思はれる。左岸の岩壁をへつり、藪を押分け、一時間を費してこの重ね瀧の下に下ればすぐ又下流には十米位の瀧が待構へてゐる。高廻りにも尠からず弱つてゐる



左俣合流點附近の利根川

角田吉夫

一行、今度はザイルを使つても瀧を下らうと意氣込み、空身で偵察を試る。瀧の下には右から丹後澤の合流點が見えた。兩岸の岩壁も高く、下流は左に急に折れてゐて全然樣子が判らない。魚止の瀧は恐らくこの瀧に違ひなからうとお互に慰めあふものゝ、瀧は下れず、前途暗澹。最後の勇を振つて、もう一度左岸の高巻きをした。丹後澤の落口へ下る積りで巻いて行くが、岩壁は手强く、どうしても下る事が出來ない。川筋も見えず、疲勞も增し遂に一行はこの尾根の大きな岩の側に一夜を送るべく余儀なきに到つた。本流と北の俣との尾根の川に近い針葉樹の記號のある個所が、不安な一夜を送つた露營地である。天幕場もすこぶる苦しい、谷側へ櫓の柱に木を組合せ、その上に木を列べた、その上である。水が近くの小澤にあつたのは何より幸といへやう。その夜は激しく東風が吹きまくり、この岩陰の天幕も吹き飛ばされるばかりの物凄いものであつた。雨が伴へば一行は前進も退却も出來ない位置にある、食料の殘りを調べたり、逃げ道の研究など、その夜は一同非常に憂欝となつてしまつた。

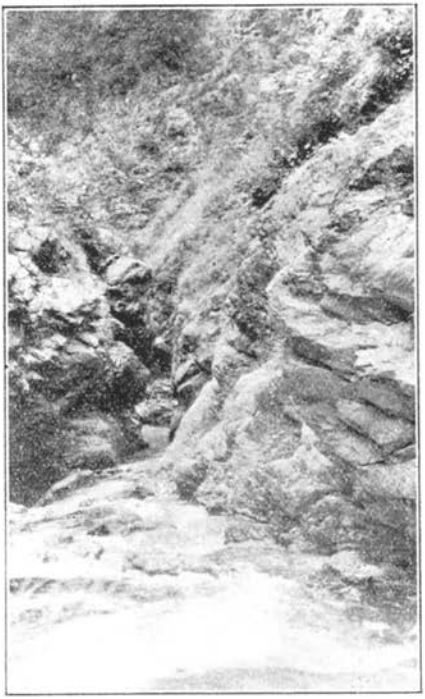
瀧ヶ倉澤まで

八月十四日　曇强風後晴　幕營地（七、五〇）—魚止の瀧（九、一〇）—瀧下（九、四五）—左俣（裏越後澤）（一一、五〇—一、〇〇）—オイツクイ（二、四〇——四、三五）—幕營地（五、〇五）

薄曇の朝、昨夜の强風の名殘りを留めて、雲足は早い。恐らく利根川に於ける最も不安な氣持にとらはれた朝であらう、高廻りのあまりに大き過ぎたのが原因となつてゐる。

先づ急斜面を、ブッシュを唯一の手懸りに流れ迄下る事に努める。大きな岩を落下させてはその音響で、谷の

様子を窺ふ。半時間を要して、下つた所はやはり廊下の中心であつた、恐らく丹後澤から續いてゐるものであらう、水量は未だ恐れる程の事もない。やがて現れた巨大な飛瀑はまた悪い、目測十米を越えるものであらう。右岸の僅かな草付について登り、藪を分け瀧の下に出る。鱗、鱗、眞黒ろな大きな姿が上へ下へ慌しく走る。その數、その大きさ、皆一尺を越えるものばかり。魚止の瀧だ、もう下流には瀧のない事を思ふと急に氣も輕くなる。



魚止瀧と左股出合の中間

廊下はなほ果しなく續いてはゐるが、水は淺い。糸を垂れながら谷を味うては進んで行く。兩岸の相迫る、オーバーハングの個所は左を卷いた（寫眞參照）。

左俣の落合で晝食をとる。本流と等しき水量をもつ左俣、落口は靜かに流れてゐるが、支流は悪いらしい。探險隊の裏越後澤と呼ぶ澤である。又好露營地があると聞くが、それらしいものも見當らない。左俣の出合より下には屢々美しい川床が見られた。キメの細かい、青味がかゝつた岩がつゞく。

ザイルで一度荷を送つた處もあるが更にオイツクイでは馬鹿らしい程時間をつぶして仕舞つた。谷幅六尺位の廊下のところで、一米程の瀧の下は蒼い深い潭が一町もつゞいてゐる。その下には僅かな河原も見え、流も緩か

になつてゐる。然し泳ぐか、ボートでもなければ到底行かれさうにもない。余儀なく左岸の壁を空身で登り、荷を送つては草付を愼重にトラヴァースした。この二時間を要した狹い廊下はこの時はオイツクイ（咋生）とは知る由もなかつた。その後林主税に聞いてその位置を明かに知つたものである。オイツクイとは岸の岩壁が相咬み合ひ、その下を水が流れると傳へられてゐた。

谷が比較的開けて、下流左岸に飆ケ倉澤附近と思はれる大きな尾根の見えるところで、計らずも初めての大きな河原を左岸に見出した。五時五分。二百坪位の廣さはあらう。小石のある美しい砂地、山腹には立木もある。時間は早かつたが、絶好な露營地なので一行はこの河原に荷を置いた。

天候も全く恢復する、テント場もよし、のんびりとした流れでよごれものを洗ふ氣持も明い。食膳には大きな鱒が刺身に或ひは鹽燒となつて、一しほ賑かな夕であつた。

小穗口澤まで

八月十五日　快晴　幕營地（七、一〇）—瀧ヶ倉澤（七、三〇）—牧ヶ倉澤（八、二〇）—越後澤小屋（一一、四五—一、五〇）井土澤（三、四〇—五〇）—水長澤（五、四〇—五〇）—小穗口澤に入り幕營（六、二〇）

夜明け近くザアーと一雨來たが、朝は雲一つない輝かしさ。越後澤の出合まで行けば、地形圖に示された道もあるに違ひなからうと、朝の足も輕い。瀧ケ倉澤の出合は川幅も更に廣く、落口と、やゝ上流とに瀧が懸つてゐる。この流れを加へて、水量は一段と增すのが目立つ。小さな牧ケ倉澤までは無難に進んだ。やがて地形圖にも示された岩場に入ると、川幅は又狹ばまり、オイツクイの惡場を想はせる。非常な惡場も現れないけれども、歩きよ

い處でもない。そして狹い、長い〳〵廊下が四時間もつゞいた。地形圖の距離も疑はしくなる、一行の位置も一寸ぐらついて來た。一尺三寸もある大鰡をヤスで突き刺したのはこの廊下の單調を破つた唯一の出來事であらう。地形圖にはこの廊下の中へ左岸より入る大きな澤があるが、これは見出し得ずに終つた。正午近く、右岸に立派な人間の踏跡と鉈目とを見出したのは左から入る劍ケ倉澤の落口の瀧の所であつた。

下流には間近く、ブナの林の中に越後澤の出合の小屋が建つてゐた。幾日ぶりかで、山から里へ下つて來た樣な喜びをもつて小屋を懷しく見た事であらう。道の側のブナの大木には、明治二十七年清水の何某などゝ幹に刻みつけた刃型が、數知れず大きく成長してゐる。劍ヶ倉の鑛山に働いた人か、獵に來た者の殘したものに外ならない。

小屋は越後澤と本流との出合の、小高いブナの林の中にある。七、八人を泊める位の小さなものであるが、用材は恐ろしく大きなものばかり。劍持榮作は、初めてこの小屋へ獵に來た時の話をする。嘗つては立派な鑛山事務所が此處に軒を並べた事であらう。今日その昔を偲ぶ面影もない、總てが大自然の靜けさに還つてゐる、僅かにブナの幹がありし日を語るに過ぎない。小屋の中の焚火の灰は未だ熱いほどであつた、恐らく數時間前迄は人が居た事を語るものである。

晝食を終えて、小穗口澤附近まで下る豫定で出發する。劍ヶ倉澤、越後澤を合流した利根川は急に幅もひらけて明るく迷路より大道を踏みしめた感がある。左岸へ涉つて、地圖の鑛山道の跡を尋ねた。山毛欅の林を、ぐんぐんと登つて行くが、遂に道らしいものにも會はず、空しく歸つた。越後澤の小屋附近にあつた明かな道が、全く消える譯もない、次に右岸の斜面を尋ねる。ブナの彫刻が唯一の導標となつて行く。然し道もすぐ消えて、時

折河原の砂地に見える足跡が唯一の道しるべに變つた。川幅は廣くなると共に、兩岸の岩壁は更に一段と大規模なものとなる。大岩壁は黒部川の廊下にも石狩川の大箱にも匹敵するものであらう。嘗つて私が石狩川で仰いだ柱狀節理の美しい壁に似通ふものがある。「シッケイガ廻じ」の險とはこの岩壁の一部を指すものであらう。獵師は親子連れの羚羊がこの岩壁を通過する事が出來ず、他へ廻つたとか云ふ。

一行は主として右岸の壁の下を流れに沿うて歩いた。水量の少いのは、徒渉にも勞力を費さず、幸といふより外はない。增水時であつたなら、あの高い岩壁の上を羚羊の樣に廻らなければならない。

廊下は水長澤の近くで漸く終つてゐる。綠の山毛欅林が一段とさえる。左岸より水長澤は靜かに合流してゐる。廣い谷、緩かな流れは此處に到つて初めて大利根の洋々たる下流の雄大さを眼前に彷彿せしめるものである。然し又小穗口澤は出合の岩床に飛沫をあげて、勢ひすさまじく合流してゐる。六時二十分、一行は小穗口澤を僅か溯つて、右岸の廣い河原に宿泊地を求めた。

寶川溫泉へ

八月十六日　終日快晴　休養滯在　八月十七日　曇小雨後晴　幕營地（六、二〇）—赤倉澤小屋（六、三五）—湯ノ花（八、二〇—四五）—奈良澤川（九、五五—一一、〇〇）—八木澤（一一、五〇—一二、一〇）—芦澤（一二、二五）—寶川溫泉（四、三五）

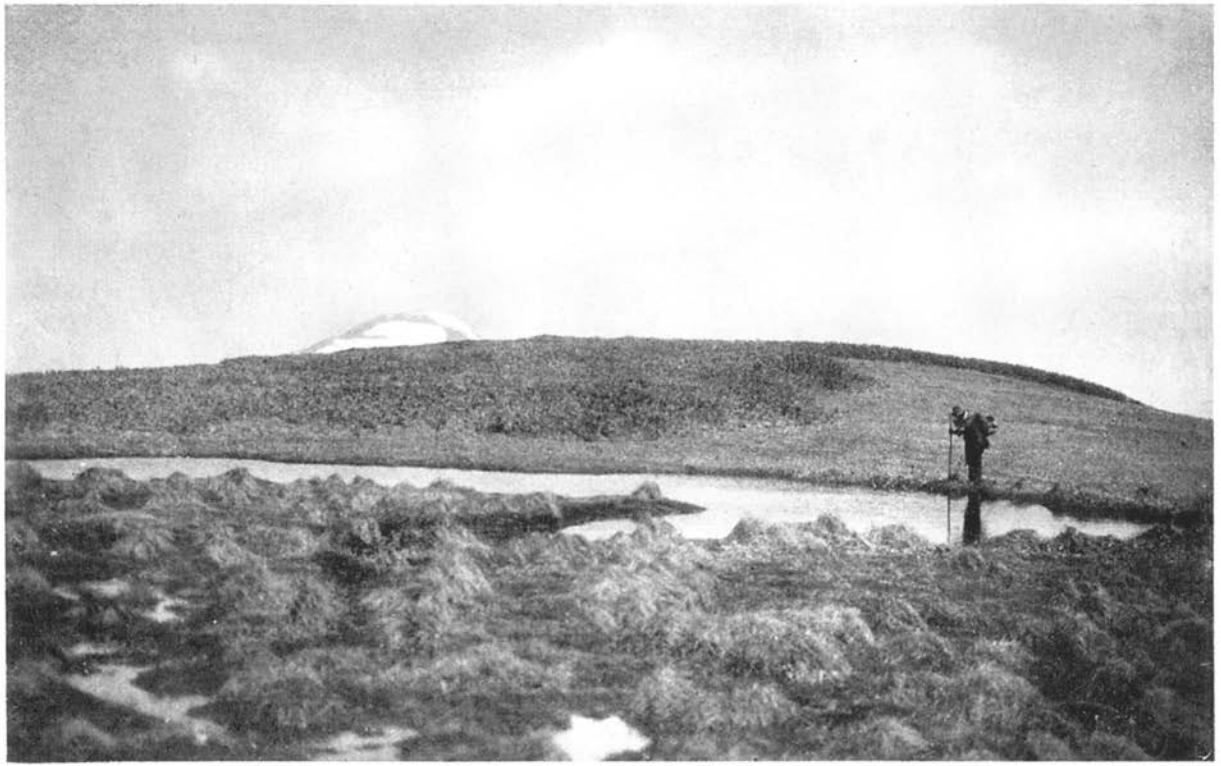
休養の一日は小穗口澤を上流へ一里程溯つてみた。河原のつゞく、緩かな流れは前日まで歩いて來た本流の廊下とは想像も出來ないほど歩きよい明るい谷である。たゞ小穗口澤の露營に蚊の猛襲に遭つた事は不愉快な想出の一つである。夕暮よりテントに集る數百の蚊は存分に荒し廻つて、夜が明けると引揚げて行つた。

翌日の朝は早く、小穂口澤を出發した。雨もよひの雲行に、道のある湯ノ花までを急いで行く。左岸に渉つて一寸した岩角を卷くと赤倉澤に出る。小さな獵師小屋が澤の左岸にある。地圖の道はないらしい、河岸の踏跡を辿つて、ワレ澤、ワレノカヤと二つの小澤を越える。この附近の本流は既に開けて、四、五十間の川幅もあらう。右岸に移る頃より小雨が降りはじめた。右より入る小澤が西センノクラ澤、その下の左岸の大きな澤は東センノクラ澤、共に落口に小さな瀧が懸つてゐる。

湯ノ花溫泉は河原に湧出する自然のまゝの姿である。湯の溜りが二つ三つ見える、熱い、透明な湯が滾々と湧いてゐる。裏の小高い所に木の皮で作つた小屋がある。村人の湯治場ともなり、獵の根據地ともなるべきものであらう。小屋を覗くと、二人の鯰釣りがゐた。山を越えて來た私達には非常に人が懷かしい。早朝の訪問と、利根を下つて來た事は尠からず二人を驚かしたらしい。然し小屋の人も大正十五年の探險隊の一員であつた。未だ大水上山の頂上に殘る日の丸の旗も、谷の惡さも、總ての話を一番素直に受け入れて呉れる人々である。

湯ノ花の小屋からは山道も明かに大芦へ續いてゐる。大きな奈良澤川の奥には國境の山が一寸顏を出してゐた。雨あがりの空の下、綠の山は殊に輝かしい。八木澤を渡ると右手に獵師の小屋がある。

利根川に架る最奥の橋は粗雜なものではあるが、甲州の猿橋を思ひ浮べる。橋の板は大きな石を置いて押へてあるのみだ、渡り終へた橋の傍には小祠が淋しく立つ。萩の咲き亂れる草原の彼方には大芦の白壁の家が輝いてゐる。秋だ、スヽキや萩を吹く風も何となく頰に冷たさを覺えた。



槍倉ノ頭(一七四四・三米)より柄澤山の一部を望む　角田吉夫

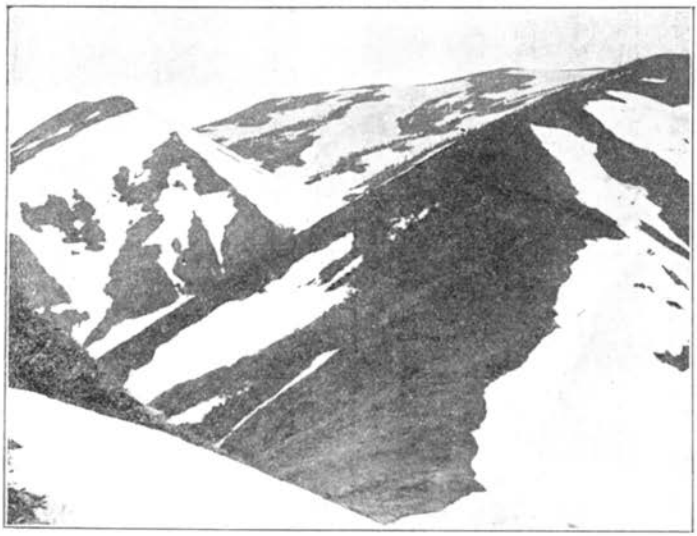
後記

利根川の水源大水上山より大芦迄は流程凡そ十三里と云はれてゐる。以上記した如く私達は水源より下るに五日間を要してゐる。谷に全然雪渓の殘つてゐない事は尠からず行程を鈍らした原因であると思ふ。大正十五年の探險隊の溯行された時は同じ八月の中旬であつたが、シッケイガ廻し附近より既に殘雪を見、魚止の瀧、丹後澤附近は雪を利用して無難に通過してゐる。丹後コボラの合流點附近などは大きな雪渓であつたらしく、瀧の存在も認められてない。探險隊が左俣（裏越後澤）附近より僅か一日で丹後コボラを溯行、大水上山の頂上を極め、鳩平と稱する地點に戻つて露營をしてゐる事實より見ても如何に谷の狀態が良好であつたかを想像するに難くない。又藤原の獵師林主税の經驗より聞いても、水源地に殘雪の全く消える事はないと云はれてゐる。然し私達の利根川を下つた年は殊に稀な雪の早く消えた年であつた。信州白馬岳の大雪渓が全部姿を消した同じ年でもある。それだけ私達は眞の谷筋を歩き得た事を幸運と言はなければならない。

水源地略圖には私は七つの瀧を記しておいた。之は皆十米以上の大きな瀧のみを擧げたものである。それ以外にも十數ケ所に小さなものはあつたが問題とする程の瀧でもなかつた。思ふに、利根川は魚止の瀧までを第一、越後澤出合までの狹い溝狀の廊下を第二、水長澤附近まで及ぶシッケイガ廻しのある大岩壁を第三と三段の明瞭なるそれ〴〵異る地形を認める事が出來る。そして湯ノ花より下流大芦迄は大體に於て岩壁も尠く、洋々たる流れが續いてゐる。

水源地の山名に就ては山岳十六年三號奥上州號に木暮埋太郎氏が詳細に記述されてゐるので、詳しい說明は此

處では略す事とする。たゞ水源地の山を探險隊は大刀根岳と命名してゐるが、古い記錄にも明かに見られる大水上山の名稱が正統なものであると信ずる。澤の呼稱にも探險隊の專斷が尠からずある。然し之も木暮氏が大正九年に小澤岳より北へ國境を歩かれた時、研究せられた資料を拜借するに及んで、多くの相違を見出した譯である。私は主として木暮氏のものを採り、それに藤原の人々の意見を併せ用ゐてゐる。



米子頭山附近より卷機山(左)と割引山(右)を望む

「八海山」、「藤原」の地形圖には、利根川流域の地形その他について二、三の明かな誤謬を認めた。水源より水長澤附近迄は川筋兩岸を岩壁の記號とすべきであらう。丹後澤の直ぐ上流には同じ方向に走る可成り大きな澤が記入されてゐない。地圖に井上澤と書いた澤は劔ヶ倉澤である。井上澤はその一つ下流のものを稱する。劔ヶ倉澤の北側より本流に合流する澤は事實上認められない。劔ヶ倉澤に合流するものと思はれる。尙劔ヶ倉の鑛山より湯ノ花迄の道は現在ではほとんど認められなかつた。

水源地の地理に詳しい案内者は水上村藤原の人々であらう。探險隊には三十人の人夫が同行してゐる。その中

雄四　島　荻　　岳ケ牛の月五るめ望りよ近附山機巻

でも中島清松、林主税の兩名は、その後今年の五月に私が奈良澤川に行つた時、色々と話を交はしたが、第一に推奬し得る人々である。

追　記

利根川水源の一文と共に、五月の奈良澤川溯行、牛ヶ岳、卷機山、柄澤山、朝日岳、笠ヶ岳を經て清水峠に下つた紀行を書添へる豫定であつた。然し編輯の〆切期日までに、書き終える事が出來なかつた爲に余儀なく割愛せるものであつて、寫眞のみを掲載し、何等それについて言及しないのは私の責を負ふ所であり、又心よく寫眞を提供して下さつた荻島君にも申譯ない次第である。

北方より仰げる笠ヶ岳(右)と朝日岳(左)

奈良澤を溯つたのは昭和六年の五月の末である。同行者は荻島四雄君と藤原の林主税外一名。あの廣い奈良澤川の出合の砂原にはゼンマイ採りの人々が、小屋掛けをして賑はつてゐた。奈良澤は非常に明い谷で、落差も尠く、到る處に中の島があつて、其處には大きな山毛欅林が繁つてゐる。エゾ柳のスッキリとのびてゐる石狩川の上流を想ひ浮べては一人そのなごやかな氣分を喜んだ

のであつた。コツナギ澤の出合に第二日目の露營をし、三日目は小澤の出合に荷を置いて、小澤の四番目の澤を小澤岳目指して登つた。然し中腹にて夕立に會ひ、退却を余儀なくされ、その夜は雨の中に小澤の出合で冷たい一夜を過した。次の日は奈良澤を溯つて本谷の奥に泊り、翌三十一日雪溪を登りつめて、米子頭（ヨナコズ）山の北の鞍部に出たが、あの穏かな奈良澤にも、一三〇〇米附近には二つの十米程の飛瀑があつた。卷機山の平坦な山頂は平ヶ岳の規模を小さくしたかの感がある。ベットリと殘る雪、栂の森林が美しい。寫眞は卷機山の東側より見たる牛ヶ岳である。牛ヶ岳の頂には測量の檜柱が一本殘つてゐて北側には小さな池があつた。その日は更に引返して、米子頭を越え、柄澤（カラサハ）山の北側で幕營した。國境の尾根は皆東側に殘雪があり、ショート・スキーは痛快なほどよく走つた。翌六月一日は朝日岳、笠ヶ岳を縱走して、水峠に立つたのが午後の六時、雪の街道に惱まされて白樺ヒュッテに入つたのは十時半であつた。

牛ヶ岳より清水峠までの尾根は想像してゐた程激しい藪もない。卷機山の南側の一部、朝日岳の北側及び笠ヶ岳より清水峠までの數ヶ所に過ぎない。他は大體に於て一尺位のシバと笹のみである。柄澤山の南、一七四四、三米の峯には大きな池があつた。五、六坪はあらう、サンショ魚が無氣味な姿を見せてゐた。そしてこの池には柄澤山や、朝日岳、笠ヶ岳等の山々の姿が浮んでゐた。清水ではこの峯を檜倉ノ頭と稱するものと思はれる。

蓮華温泉より朝日岳へ

渡邊　漸

（參照地形圖）二十萬分一。富山、五萬分一。白馬岳、泊、黑部。

三月二十六日はどんよりとした生溫い日だつた。昨日まで馬橇が通つたが今日からはもう通はぬと聞いてがつかりした。然し「神城」の驛から四ツ谷まで食糧や防寒具など二人ではとても持つて行く氣にはなれない。Sも自分もつい昨日まではラボラトリゥムに燻つて居た身體だ、加之に夜汽車の疲れで生白い顏は尙更ぼんやりして居る。

生れて始めて荷馬車に乘り込んで雪解けの道を搖られながら北に向ふ。空は薄く霞で掩はれて日も强く射さないのだが、やがて天氣が惡くなる前兆でもあらうか、少しも寒くない。道の片側だけに雪が埋高く殘つて居る處では今にもひつくりかへるのではなからうかと思はれる程に車は傾く。遠見の尾根から八方の尾根へと北に進むに從つて雪は次第に多くなる。やがて鑓、杓子、白馬と鈍いスカイラインをぼんやりと浮立せ、大池近くのあの見覺えのある白い平もそれと指呼する事が出來る。

四ツ谷で、豫て打合せのしてあつたIとM、それに新らたに我々と行を共にしようといふTとSとが加はつた。切久保の少し先からとう〳〵雨が降り出して來た。それでもう行手は僅かなので餘り急ぎもせずスキーを穿いて進んだ。昨年の一月三日の日暮れ近く雪が降り頻る中を只一人、この道を辿つた時には橋を渡つてから先が馬

鹿に長い様な氣がしたが、今日は亦、案外に近かつた。あの懷しい藁葺の家！　くぐりの障子をがらりと開けて中に入ると先づ目につくものはあの馬だ。土間を横切つて階段の近くにスキーを立掛け、そして上りかまちに腰を下ろした時には自分の家に歸り着いたといふ感じが深かつた。主人もやがて歸つて來たので共々に語り合ふ。見慣れないものは昨年の五月とかに生れたと云ふ双兒の孫の女の兒だけだ。圍爐裡の中に落ち込まない様にと二人とも長い紐で、ぴか〳〵と黑光りのする太い柱に縛りつけられて居る。餘り人の訪れないこの邊りでは物覺えがいゝと見えて、婆さんは「Iさん」「Tさん」等と昨年の正月來た連中に呼び掛ける。「Hさんは來られなかつたが、どうしたのです？」等とも聞き訊される。

夜になつて雨は益〻ひどくなつたが、翌朝起きた頃には一寸ばかりの濕つた新雪が積つて居た。午前中、親ノ原へ行つて歸つて暫くすると、遲ればせにMがやつて來た。

翌日は昨年の冬幾度か通つたあの思ひ出深いコースを大池へと辿つたが、天候が段々と險惡になるので天狗原の下手の青木の蔭にルックザックを一纏めにして、天幕を被せて歸つて來た。その頃からチラチラと雪が降り始めて來た。

その翌日は朝四時頃起こして貰ふ約束だつたが、その時分にはまだ空模様がはつきりしないので、どうも今日は駄目らしいといふのでわざと起こして呉れなかつたのだが、七時頃になると實に素晴しい天氣になつた。殘念がつたが如何とも致し方がないので、悠々と一日を過ごす事にして、晝頃までこたつで寢て居る者もあれば、一人で親ノ原へスキー練習にと出掛ける者も居る。さては亦、三人ばかりで街道筋の川内へと菓子と煙草を買ひ出しに行く連中もある。スカイラインはぴんと張切つて居るが、風が強いと見えて尾根では遠慮なしに雪煙が吹き

上げて居る。こんな風では大池附近はとても近づけないだらうとせめてもの慰めにする。もう明日は三十日だ。どうしても越さねばならない。

翌朝になつて見ると天氣は何だか少し物足らぬ處があるが、出發する事にする。水電の取入れ口近くまで登ると急に霧がとれて、鎚、杓子の眞白な姿が現れ、行手には天狗原の平も見えて來た。殆ど空身と言つてもいゝ位なので行程はずん〳〵と捗つて、雜木の尾根を辿り、栂の大木に包まれた平を横切り、青木の疎らに生へた廣い尾根筋に取付き、一昨日荷物を置いて來た點にまで達するのには四時間しか掛らなかつた。昨年の一月にはこの少し上の平に出た頃に長い〳〵夜がやつと明けて、淺間の方が薄赤くなり始めた。あの時寒さに慓へながら、凍りついたサーディンの一片とかち〳〵のパンとで朝食を濟ました岳樺の三本生へた地點ももう間近かに望まれた。あの時には前夜八時頃に出發したのだつたからこの邊りまで八時間も掛つて居たのだ。

空は次第に曇つて薄日が射すだけで風も少し出て來たやうだ。白馬の大雪溪を眞正面に眺めながら晝食を濟ます。杓子から鎚へ掛けては全くどんよりとして仕舞つてやがては自分達の居る處もさうなるのではなからうかと思へた。

重いルックザックを脊にすると急に元氣がなくなつて先頭がずん〳〵進んで行くのが癪にさわつてならない。暫くして岩のごつ〳〵とした天狗原のお宮の前に出た。昨年の一月には往復ともこのお宮より西の方を進んだので、白木造りの小さい神殿の前に立つて山旅の幸を祈つたのは、一昨々年の九月から二度目である。大池から森上へと人影一つも見る事もなしに、霧深い九月始めの或る日、とぼ〳〵と一人降つて行つた旅人は如何に深い感銘を以て濕原の片隅に建てられたこの小さい祠の前に頭を下げたのであつたらう。寂しさと言ふものを冬の山に

でもなく、又、春の山にでもなく、盛りの過ぎた後のひっそりとした夏の山に見出すといふのは、有峯の様に曾つては人が住み、そして今となつて荒廢した家ばかりが、ひし〳〵と旅愁を感じさせるのと對照せしめてよくはないだらうか。然し今は自然の暈圍氣が釀し出す寂しさでなしに友との別れの寂しさが其處にはあつた。限られた日數しか持つて居ないSは久し振りの山旅の半ばで理性に眼覺めねばならなかつた。蓮華温泉まで行つて見て、若し天氣が惡い様なら引返へす事に定めて居た彼も、またそれを極力勸めた自分達も、天氣が惡い時に蓮華温泉からこの尾根を越えて落倉へと歸る困難さを想像しなかつたのだ。一人下り行く彼、大きな叫びを擧げて彼を見送り、新しい勇氣を揮つて未知の境に踏入らうとする我等、この重苦しい氣分にも相應はしく空は低く垂れ、風さへ薄暗い影を持つて居る様に思へた。

大池まで登らずに乘鞍の東の裾を絡んで大所川の領域にと踏込むと、對岸には黑負山から長栂山へと續く眞白な山稜が空を限り、更に暫らく降ると朝日岳が見えて來た。あれが明日登る山か、そして登つただけではなしにあの山の頂を越えて長い〳〵イブリ山の尾根を黑薙の北股へと降り、越道峠を越えて小川まで出ねばならぬのだ、それにしても如何に朝日の遠い事よ！

尾根が急に落ちて居るので暫らくはアイゼンを付けてスキーを肩にしながら下らねばならぬ處もあつた。そのアイゼンを付けた場所では南からの風が强くて一度はスキーの杖を吹き流して仕舞ふ位だつた。

緩傾斜の尾根となつても、雪は土藏の壁とでも言ひたい様な狀態でスキーは一寸とも面白くない。尤も五貫目はある荷物を背負つて居るので雪がよくても餘り痛快な滑降は望まれないであらう。雪倉岳は近いだけあつて流石に大きい、そしてそれと鉢ヶ岳に圍れた半圓の谷奥は一面に眞白で豫ての期待を裏切らなかつた。

平岩から來る夏道と交叉する點から少し降り過ぎて仕舞つたので、急傾斜を上下して一つの枝谷を越さねばならなかつた。疲れ切つた身體に鞭打ちつゝやつとの事で溫泉のある臺地に出たのはもう六時頃で、夕闇はもうとつくに忍び寄つて居た。上手の方に溫泉の建物を見出してそれに達するには更に十五分ばかりも必要だつた。北西の棟の隅の部屋は獵師達が冬の間宿を借りるとかいふので、いろりの形もあるし、鍋や茶碗等も具へてある。

曾てこの溫泉を訪れた事のある自分は冬の間も埋らずに湧いて居るといふ黃金の湯を探ねて、もうスキーも穿かずとも落込む事のないクラストを踏みしめつゝ、心覺えの儘にあの無色透明の快い湯をば探ね求めたがどうしてもそれらしいものを見出し得ずに空しく引返へさねばならなかつた。帳場のある棟——落倉でいふ「別當」の住んで居る棟——の東の端には薪木が積んであると聞いたが、棟木も見えない位に埋つた今では、とてもそんなものを當てにする事は出來なかつた。それと向ひ合つた北の棟も僅かにその西の端が少し出て居る限で、この附近の雪量の多いのには全く驚かされた。

薪の貯へがないので樺の枯枝を集めて火を起こさうとした。細い枝がぱち〳〵と燃え上る時には全く景氣がよささうに見えるが、暫らく經つてそれが燃えきつて仕舞ふまでにはどうしても太い枝に燃え移つて呉れない。我こそはと代る〴〵膝を乘り出して、焚火術の蘊蓄を傾けるのだが、徒らに腹が減るばかりでどうにもならない。然し最後に代つたMが必死の努力を試みる頃には漸く太い幹にも燃えつくに至つた。

雪を溶かした煙くさい湯を沸かし、パンの幾片れかを嚙つて形ばかりの夕食を濟ましたのはもう十一時過ぎだつた。

「月、月、おい出て見ろ！」とIが聲高に叫んで躍り込んで來る。晝間の、薄暗い天氣が次第に崩れつゝある事

を危惧せしめたあの空は何處に行つたのだらうか？一點の雲もなく冴え渡つた空、林は靜かに沈默を守りその彼方からは夜目にもそれと著るき朝日、雪倉の峯々が輝いて居る。

蓮華温泉附近より雪倉岳を望む

雪の下深く埋れた、里から入るのには案外に厄介なこの温泉を再び訪れる時があるであらうか？落倉の人々は輪樏で一日で往復するといふ、然し我々に取つては一日で到達する事さへ難しかつたのだ。平岩の方から木地屋を經て入るとすれば困難はもつと加はるであらう。我々の採つたルートもスキーには不向きな、二度通る氣は餘り起らないものだつた。一旦大池まで登つて夏道通りに降つた方がよいと思はれた。

煙の捌け方は思つた程でもなくてさう煙たくない。明日は快晴だと見込みがついたのが疲れた身體には寧ろ怨めしい。時々吹き込んで來る冷い夜風に眼を覺まされながら、やがてぐつすりと寢入つたのも一刻、僅かに四時間ばかりの睡眠を貪つたに過ぎなかつた。

小川までの行程は一日としては無理に近いものとは知りつゝも、出發はかれこれ六時になつて仕舞つた。出來るだけ荷を輕くしようといふので、夕食にだけ食ふ積

で携へて來た米も殘し、中にはワックスだとか齒磨きだとか大した目方に關係のないものまでも殘し去らうといふ者もあつた。

然し何と言つても嬉しい。三年前の夏、雪倉の頂きから望んで、あの邊りをスキーで訪れたらと心ひそかに憧れを覺えたあの朝日岳、そしてその頂きを越えて黑薙の最大の貢流たる北又へと降り、北アルプス北端のトラヴァースを爲し遂げようとする今日なのだ。山腹を絡みつゝ、暫らくすると黑木の深く茂つた中を拔け、また地形圖に濕原の如くに示された雪原を橫切り、雪倉の方から來る澤と朝日の方から來る澤との合流點近く達したが、岸が急で越せないので、雪倉の方から來る澤に沿つて暫らく登り、二、三十米ばかりも下に降つて對岸に移つた。この邊りは餘り氣持のいゝ所でなく、加之に、天氣はまたどんよりとして生溫い風が谷の上から吹降して來るのでいさゝか陰慘な氣持になる。

これから雪倉岳から東北に出た尾根先を絡んで、朝日から來る谷に、先刻の合流點から可成上の方で出る事が出來た。此處では谷は一面に埋まつて廣い平を爲し、雪面は大まかなうねりを刻み、その緣を飾るものはすくすくと生ひ茂つた樺の林だ。天氣はまたどうやらよくなりさうだ。雪も柔かくなつて來たのでアイゼンを外してスキーをつける事にする。

元氣一杯のMが先頭に立つてジックザックに谷筋通り登り初める。赤男山と雪倉岳との鞍部から來る澤の落口には堆高いデブリの擴がりを見た。蓮華溫泉はもう自分達の立つて居る地點より低くなり、谷の傾斜が稍ゝ急になり更にまた緩かになると、放射狀に集つた多くの枝谷の奧に朝日岳のどっしりとした胸の邊りを窺ふ事が出來た。赤男山の北寄りの鞍部はもう間近かで、あれから四百米も登れば頂上の筈だが、自分達が今仰ぎ見て居る邊

りはまだ可成下の方らしい。この谷の奥の平に出た頃にはもう雪になつて、岳樺が三四本塊つてある邊りで腰を下ろして中食にする。天氣はすっかり落着いてこれからの登りが思ひやられる程、日射しは強くなつて來た。先刻谷を越えて來た時、一杯に入れて來た水は成るべく使はずに、コッヘルで雪を溶かして用ゐる。何時もなら許される食後の午睡も許されない。

赤男山との鞍部が餘りに近く見えるので一時は左に採つてその方に向はうかとも思つたが、兎に角豫定通り長栂山と朝日岳との中間に出る事にした。こんな暑い登りは初めてだ。夏だつてこんな事はない。汗が入つて眼が開けて居られないし、頭はふら〳〵として今にも倒れさうだ。仕方なしに雪を手拭に包んで額に當てゝ進む。風の當らない四方から暖氣が集中する地帶に入つて居るのだつた。

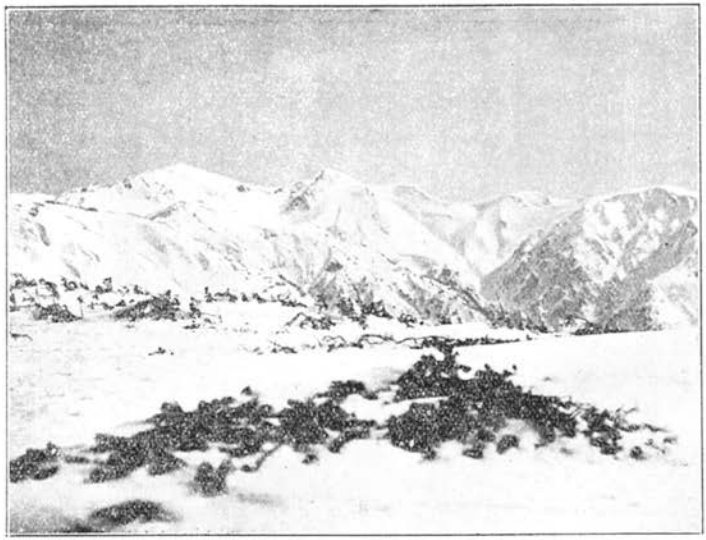
もう木の影も見えず一面の雪。この邊りは北アルプスでも雪量の最も多いと言はれて居る處だ。周圍の狀況から推して積雪は三丈或ひは四丈にも達して居るらしい。こんな處を滑つたらどうなるだらう、恐ろしいスピードが出てどうにも始末に終へないだらう等と語りながら登つて行く中に風當りがよくなつて、ウインドクラストは次第に硬くなつて來る。もうスキーの領分ではないので、僅かに雪面に殘された岩角に立つてアイゼンに穿き換へる。

長栂山から朝日へ續く頂稜の上に立つと流石に風は強い。これから朝日への最後の登りは僅かに二〇〇米ばかりだがその長い事辛い事。もう頂かと思ふ事幾度の後、やつと吹曝しの廣い頂上に達する事が出來た。

北から見た白馬及びそれを取圍む峯々、一面に眞白で、細い襞を刻みつけられた清水、猫又の尾根の彼方には劒か鋭く突立つて居るが、稍ゝ逆光線の氣味で薄く掩はれた霞の彼方に鈍い光を照りかへして居る。

大所川源流より朝日岳を望む　　渡邊　漸

積雪期の北アルプスに殘された頂きの一つに立ちつゝ、今朝出て來た蓮華溫泉が遙かに低く小さく見え、またこれから越して行かうとする小川の谷にはもう雪も見えずに白く光る川筋が遠く日本海へとうねり行くのを眺め、このトラヴァースの如何に長いものであるかを再び思ひ直ました。風當りが恐ろしく強い上に、行手はまだ〳〵見通しがつききらないので休みもほんの一刻で、直ぐに降りに掛る。頂上から西に稍ゝ進むと、二〇九八米の峯からイブリ山へと續く尾根が眼前に展開された。午後の光を斜めに受けた、緩かな曲線を描いたあの雪峯こそ、今度の山旅での最も美しい印象を殘して呉れたものだつた。寫眞を撮るべく重いルックザックを態々下ろして、先へ〳〵と勇み行く友の姿が小さくなつて行くのを眺めるのは寂しい氣がする。



朝日岳頂上より白馬岳を望む

スキーに穿き換へても、雪はウインドクラストだし、荷は重いし、米の飯は食はず、先日前の强行と三拍子も四拍子も揃つて居るのでなか〳〵に捗らない。

イブリ山の近くで獵師の輪樏の跡を見出して、それを傳ひつゝ北又へ〳〵と痩せ尾根を降りて行く中に、何時

しか日も全く暮れて仕舞つた。

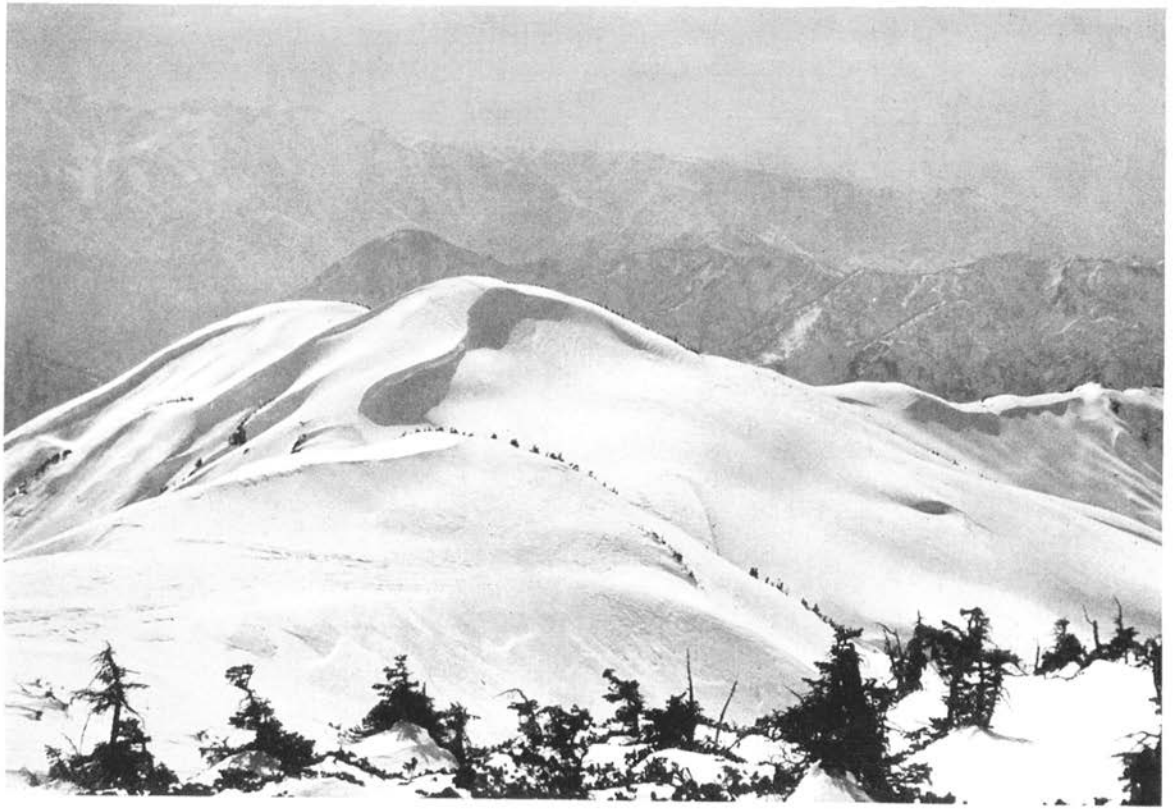
一二九九米の地點から左に折れて北又の谷へと降るのだが、輪樏の踏み跡はそれを間違ひなく導いて呉れた。若しこの踏み跡が無ければ、我々は更に數時間を絶えず不安の念に馳られつゝ果して越道の谷の落合に丁度巧い工合に降り着けるかどうかを危ぶみつゝ一歩一歩、降り行かねばならなかつたのだ。この最後の降りはそれにも拘らず意外に時間を費やして、下の方で焚火をして合圖をして呉れた獵師達の姿を間近く見たのはもう十時頃だつた。

ぼんやりと霞んだ朧月夜は我々に取つては實に有難かつた、電燈を照らしたりする必要もなく足許を定かに踏みしめつゝ降る事の出來たのはその故だつた。北又の流れを徒渉し終つて獵師達の宿つて居る藁葺きの掘立小屋に辿り着いて、尾根の上から今日の降りの間中、常に叫んで居た「水」「水」への憧れ、腹一杯呑んでやらうと語り合つたその北股の水をぐつと一息に飲む。

獵師達と一緒に一夜を過ごして、さて出發と言ふ頃に雨が降り出して一日中止まなかつた。昨夜はがんばつて河原にツダルスキー天幕を張つて過ごしたIもMも耐らなくなつて遂に小屋に引上げて來て、猿の生血を啜らされたり、ウヰスキーを飲ませてやつたりして緣りなくも二晩もこの小屋にあかして仕舞つた。

翌日は獵師達は朝早くから仕度をして二手に分れて熊を狩りにと出て行つた。雨はあがつたが天氣は何となく落着かない。越道峠までは地圖で見るとほんの暫くの筈だが、中々に遠い。それに時期が遲いので、谷筋は水流が現れて居て自由に辿る事が出來ない。峠の近くになると流石に雪が多くて、峠の小屋は屋根まで埋れて居た。

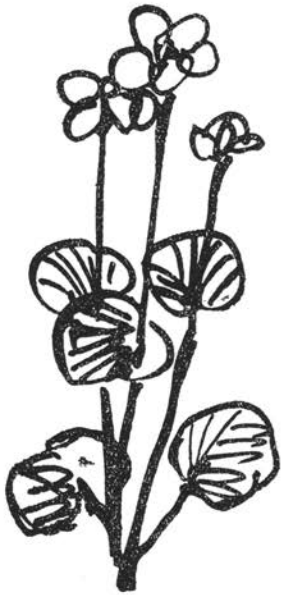
山には雲が掛り風も強くなつて來て、天氣は甚だ怪しくなつて來た。誰がこの次ぎこのトラヴァースを試みる



朝日岳よりイブリ山及び北俱を望む　　渡邊漸

だらう?さらば朝日よ!と聲高に叫んで小川の谷へと降りを急ぐ。スキーを走らせる事の出來る間はまだしも、それから先は中々に惡くて、再三の徒渉を强いられる。殊に最後のそれは腰の上までも及んで半身びしよ濡れになつて大いに氣を惡くする。時々突風が川下から吹き上げて來る、その中に大粒の雨が横なぐりに吹きつけて來て、半身どころか全くの濡れ鼠となつて、眞黑な顏をした六人が小川溫泉に辿り着いた時の姿は、一體何處から來たのだらうかと番頭を驚かしめるに充分だつた。

（一九三一・六・五）



山岳讃仰の歌

山は生身の神體だ
それは大虚の金堂に鎮座する
碧空に卷雲を浮彫する天蓋
芳草に百華を賦彩する磐石坐
寶冠に蘚苔の花開き
裸身に白金の殘雪を塗り
高根の花は瓔珞をかけ
霧の天衣は靡き搖ぐ
裳裾を織る香しい綠樹
その深い襞に走り浣む溪流は
貴い乳糜を下界に施す
× ×
太陽は金堂の天井を旋る

朝日に神體は誓ひの立像
亭午には雲霧の中に半跏を組み
夕陽には悲願の坐像
夜は灯る月の御あかし
或は遠い恒星の百萬燈
そこに神體は假の涅槃像
夜の雲はもすそに取りつき
雷鳥も荒鷲も眼をとぢ
熊も鹿も雲間に眠る

× ×

夏には裸形の威嚴
冬には白衣の崇容
秋天の優姿
春光の圓融
雷電をはためかす忿怒相

風雨を驅使する冥罰の姿
晴天には清淨國土の勝樂

× ×

堂前に集ふ善男子善女人
願はくば雪代の御手洗に身を清め
仰ぎ崇み讃め頌へ
もろ〳〵の心の汗穢を放下し
高き深き御教に
心耳を澄まさう

緑蔭草堂の主　敬白

雜錄

Hans Morgenthaler に就いて

井田清

序

私は久しい以前から、彼の生前の頃から、彼の事を書きたいと思つて居た。彼の死後尚彼について語られる事の少ないのを寂しく思ひ乍ら私の無精さと怠惰とが自分を引きもどす儘に今日まで長びいて終つた事を心苦しく思ふ。

私はふと或る友人の死に出會つた。そして眼先を眞暗にさせられ乍らその暗い心の中で私はぢつとして居られなかつた。友人への追慕の情が私を驅つて彼、モルゲンターレルの事を書かせたのである。それを彼に限りない愛着と尊敬とを感ずる自分の拙い内氣な心で描いて見るも無駄ではあるまい。

私には、堅苦しく言つたならば彼の小傳すら書けないのかも知れない。だが彼が殘して行つた幾多の詩を通じ其處に彼の生涯を浮び上らせ、又彼の想ひに自分自らをも耽らさずには居られなかつたのである。そしてそれを、生前の彼との物語の續きとして私は心樂しい山と彼の思ひ出にふけらうと思ふ。

失つた二人の友とモルゲンターレルの事とが私の心で或る親しさと懷しみを以つて綴り合はされて居る。

私はその人慕しさに惹かれ私の無精さを引きちぎつたのかもしれない。

一人の病身の男、しかも山の好きな男、命を擦り減らし乍ら山を登らずには居られなかつた男、遂には階段を登る喘えぎの裡に山をなつかしみそつとあきらめた男が、山に行けない長い日を山のうれしさと怠惰と

を一所にして終つた自分と、冬はストーブの傍で、野外の暖かな半年の間は近所の丘や峠や海邊の斷崖に山を共に樂しみ乍ら好きな山の事や人の事を、山の好きな男達のよくする、訥辯ではあるが時には熱い烈しい心のために話が倒樣になつたりするそんな樣子を思ひ浮べながら讀んで下さればと虫のいゝ前置をさせてもらふ。

彼の事を書くに先立つてこの拙い一文を故大島亮吉、故中村邦之助二氏の深い心情と友情とに捧げる。君達二人は今きつと地下で心ゆくまで語り合つて居るのだらう。まだ地上で拙い詞を繰り返して居る僕の事を笑はずにゐて呉れ給へ。

そして生きて居る自分が三人の故人の魂を想ひ乍ら自分の心情を心の奥でそつと山に捧げたく思つて居る事も——

一

ハンス・モルゲンターレルは死んだ。

彼の死と共に何か或る大事な一つの心がふと私達の目の前から消えて行つたのを感じる。私達を寂しがらせる彼の死が何に基因してゐたか彼の生涯を私達はもう一度ふり返つて見たいと思ふ。

彼について何時何處でどの樣な家に產れ何處でどの樣にして死んで行つたかも知らない私がさういふ事に筆をとるのは或ひは滑稽かもしれない。だが彼の作品や彼の友人の言葉を通して、又一番私達の心をひき、そして彼に結ばれて居た山を通して彼の事を想ひ考へ、彼を失つた寂しさをたづねて見たいと思ふ。

私達は彼の中にその登山生活の初めに餘りにそれが冒險的で物語風な事件があつたといふ唯それだけの事で彼に興味を感じて居たのか、或ひはそれ故に彼のその暗い宿命的な山につきまとはれた彼の生涯に心惹かれて居たのか、何れにしろ若し唯それだけの事であつたとしなら、それは唯ごつちやにこねあげられただけの教養と肩書だけで世間へ堂々と押し出て山の意味について仔細振り乍ら、實はそれに就て全く感ぜずに、ただ山を論じて居る他の群小登山家と彼を同一視して居るに過ぎない。

或ひは彼がスポーツ的見物人に口のしまりを忘れさせなかつた人馴れ悪い登山家であつたが故か？彼の姿、作品を思ひ浮べる事が私達をうるさい學問的な事から自由にとき放つて呉れる爲か？そしてその彼の心を通して山のもう一つの深い世界を私達が感じさせられる故に彼を愛するのか？冷笑し乍らも矢張り心には頷ける尊敬の念を覺える彼のその夢想的憧憬の心の故か？それ等は確かに彼の大きな魅力ではある。併しモルゲンターレルを畏敬せしむるものは彼のその生涯を通じてのその熱烈さである、彼の山への熱情は人生と藝術とを他の偉大な創造者の愛し得た如くに愛しそして山を又人生と藝術のそれの如く描いたのである—それである。

彼も亦山を見、しかも心ひそかに願はずにはゐられなかつた「愛し、愛される」といふ事を戀愛の中に幾度となく感じ繰返しはしたが、彼は山のお花畑を過ぎる様にその結婚と情事の花園を通り過ぎて唯ひたすらに「生命の頂」なる山に生きた。

峰や谷間の高さ深さは山の好きな彼の心に丁度喜びや苦しみの高い波となつて、それが唯「登山生活」といふそれだけの期間ではなしにその一生を通じその生きて行く生命の態度といふ「かたち」を通じてその生活の上にのしかゝつて來た事は彼の作品の如何なる點にもうかがはれる事である。

一見小さな遊戯的に見える山登りの世界ではあるが其處には山の好きな人達のみが苦しみ、喜び得られた（…と敢へて云ふならば）ものが科學者のそれの様に幾世紀の間その餘りに遊技的な外觀を持つて居たと信ぜられた登山史の裡に變る事のない脈動を波打たせて居た。

山登りの技術は彼のあの指のない手にとつても亦、「智識」であつた、彼が顯微鏡を使つた如く彼はその手で山の「智識」を又喜びを掴んだのである。

幼時彼が好んで蒐集した草や石の代りに彼は遂に永遠の「山」をその生命に蒐めとつたのである。

私と彼との間に若し理解といふ二つの同じ道が生長するとすれば、それは彼の「山の好きさ」が彼の生きて行く生命の態度としてとらへられたその一點である。

彼の心を常に一杯に、それ故に切なく張り詰めて居た「山」こそ日曜日や休日に慰み半分の暢氣な心持で、ただそれだけで創り產み出されたものではない。同時にまた紀行文の持つイヤミたつぷりな「當て込み」でもなかつた。或ひは又植物、岩石、氣象それらの學名、術語によつて、綴り合された所謂初物の馬鹿氣た偉らさでもなかつた。或ひは又山岳專門家振つた理論でこね上げられた意味でもなかつた。

それらの余りに買ひ被られた嫌味を取去つて殘るものは、それこそ彼が誠に正直に唯生きる事に苦しみその苦しみに依つて「山」を嚙みくだき得たその山への生涯を通じて變らぬ營みであつた。

彼は唯山を「一枚の繪」の如くその心を以つて畫いた、山は彼の心の畫面であつた。彼の眞情と本音とをたゝきつけられるたつた一つの畫面であつた。

岩壁につき當る山風の樣に彼は彼の本心を、その余りに輕侮された彼の眞情の呼吸を山といふ彼の生命にふきつけて居る。

山が彼にとつて何であつたか私は知らない。だが山が彼にとつて少くとも「生きる事」を願ふ人々に見られる內在性を表象した「生命」であつた事は、私は口幅を廣くし乍ら敢へて言ふ事を辭さない。

一生涯を客人の樣に地上に招待されて過す人々と反對に彼は凡てを招くが如く山をも招いた。山に招かれ又山を招きそれ故にこそ彼のあの悲慘と暗い運命と深い高い明るい喜びとが山を通し彼の心を貫いて私達の眼前に表はされたのである。

彼の小さな "Ihr Berge" の喜びと美はしさこそ、藝術に關係しない他の理由から來る何等の庇護に因るものでなくして實に單なる彼の生命を生きる事にかけた心の勝利である。彼が Dr. であつたからでない。彼がシャムへ旅したからでない。彼が多くの初登攀をなしとげたからでない、彼が全くうつかり知らず知らずの間にその心を山に投げかけたからである。

山の岩・氷・万年雪・氷河—山肌にふれた彼のその手は死ぬまで美はしく、山の喜の外觸れて見た事もなかつた。繪筆を握らうとして遂に果たさずに彼は病床に逝つた。彼こそ本當に山に住む人の手と心とを持つて

居た。その彼の心と熱烈な才能とに依つて唯彼の思ふ儘山を描いた事は一番單純な普通な行爲であつたかもしれない。

彼の詩の隅々に感じられる彼の手法(?)それこそ彼のその樣な心が無意識に見出し得たものでなくて何であらう。山を觀た彼の素のまゝの心こそ決して看者の眼を對照としたものではない。彼は永遠の山の許に彼自らの眞情を書き送つたに過ぎない。信ずるもの愛するものに唯ひとりひそかな彼の純情を書き贈つたものこそ彼の小さな山手帳であつた。

他人の眼を考へに入れる事で人々は如何に凡庸な又余計な山の事を書き綴つて居る事よ……と私は彼のものを讀む度にさう思ふ、如何に美しい趣味が他人眼を狙ひ他人に媚び英雄的な退屈な虚榮を狙つた山の文章によつて綴られて居る事よ……さう思ふのである。

"Ihr Berge" こそ數え切れぬ彼の心の度合によつて描きあげられた一枚の純朴な畫面である。

多くの人々は少くとも或一つの山の喜びを知つて居た—頂といふ最も解りいゝ慰められ安いものを。だが果して幾人の人の心がチマエテルナの喜びを靜かにその心に任せて居たであらう。

その住ひこそ又アイヘンドルフの聖ゝ住家(Andächtger Aufenthalt)であつたらうか。私はさうであつた事を信ずる。彼は山の中に永遠の山といふ一つの靜かな嚴かな言葉の書かれてあるのを見た(Da Steht im Wald geschrieben ein stilles, ernstes Wort von rechtem Tun und Lieben, —Eichendorff)。

思ひあがつた幾多の山岳專門家はその心の代償に誠に指を二三本山の頂きに切り棄てゝ來たならば—山の苦痛が絶えず心に襲ひかゝつて或ひはその無恥な心も山に暖められたかも知れないのであるが。

モルゲンターレルの「苦しみ」こそ彼がその生涯をその衷に苦しみ拔いたのであつたらう。

「苦惱」

「もう何年となく久しい間の凡ての希望や憧憬は山を目指して居た。そして私は唯それ計りをひたすら願つて居たのだ。私には幾多の高い峰々四千米もの山々は貴らかな響きを持つた名であつた。

一歩一歩私は「永遠の山」に近づいて行つた。

私は自分ももうそろ〳〵一かどの登山家であると得々と信ずる樣になつた。

だが私は小さな名もない—誰一人として振向きもしない辛うじて山と名附けられるそんな山のもとにあつたのだ。

あゝ何と云ふ失望、私はどうする事も出來なかつた。

そこで自分は長い長い間ぢつとその灰色の曇硝子のやうな世界を寂しい心持で見るともなく眺めて居た——全く重苦しい不安にとらはれた儘—そして何一つ希望する事もなくて。

私は友達の或る天才畫家の衷に見た。

深い深い苦惱が彼の頰の上に蒼白くしみついてゐるのを。

彼は靜かに默りこくつて繪を描き續けて居る。心からなる傑作を創らうとして居たのだつた。

朝から晩まで彼は如何に精進した事であらう。ヒバリの囀りの樣な明い澄んだ色調をどんなに彼はその畫布の上に希んだ事であつたらう。

けれど彼の筆は永遠に灰色に〳〵にぬり續けて居たのだつた。」("Ihr Berge": S. 80. Schmerz)

私は彼のこの「苦惱」の一章を彼の登山生活の底に流れて居た或る一貫した心持として、或ひは又彼のドンヅマリであつたかも知れないのだが、深い感銘なしに讀む事は出來なかつた。

色々な意味で仲よしであつた彼の友人の畫家が唯灰色に〳〵にその筆をぬりそめて居た姿を彼モルゲンターレルは—山をいくら登つても下つても眺めてもぬりつぶし切れぬ彼はこの心の畫面を思ひ浮べ乍ら彼の熱烈なその眞情をひきつらせ引きちぎり山に生きよう生きようとしてあの熱情の生涯を終つたのであらう。

彼等の時代になつて、やつと山に生き、山を生き拔かうと言ふ苦しみが彼を通じて尙明かに私達に迫つて來たのではなからうか。

山と山を登る人間との私語を苦しみつゝ冷然と彼の如く言ひ切つた男を私は限りなく尊敬する。

仔細振らない彼は他のあらゆる高名な登山家、學者よりも登山の行動を理論づけなかつただけでも遙か高

い所にゐる。唯彼は山の意味について――彼自身の生きる意味について、生きる事なしに生きる事について彼これいふ暇を持たなかつただけの事かもしれない。

彼の心を「灰色に〳〵」と暗くはしたが、その心の暗さの上に築れた彼の山の明るさは堅雪をふちどつた濃い綠の草の様に慕しいものであつた。

彼はアラインゲーヘンの中で云つて居る。

「小さな山も私にとつては信ぜられぬ程大きなものとなつた。」と或ひは又

「若者は幸福には素直なものだ。ほんとうに私はもう幾度となくひとりで歩いて居たのだ。

輕卒にもか？否氣輕にさ。」

("Ihr Berge": S. 111. Alleingehn)

山を苦しみ乍ら又ぢつと落ちついて山を自分の心として居つた彼の衷によく私はEduard Möörikeが Fussreise の中で歌つて居る

「神のおゆるしに依つて

わたしの一生が

輕い旅の汗にぬれつゝ

この様な朝旅であればいゝが」

と云ふそんな心持を感じて居る。

メーリケは俯いて丘を上つたり下つたりし乍ら旅の事を想ひつゞけだであらう。旅といふ心のぬくもりの中に身をひたらせ様として彼は神といふ自然の内在―愛にその一生を願つたのであつた。

彼は現實から逃げたのではない、祈りがなければ耐え生きる事の出來ない心を旅の裡に感じたのである。

(註モルゲンターレル)も亦さうであつたのだ。山から去つた様に見えた彼の晩年こそ山が彼の心の内で最も熱して居たのだ。それがなくては彼は生きて居る事も出來なかつた。

彼は衷に山を凝視める、そしてひとり旅の中に旅よりも山よりも大きな深い自らの孤獨の相を觀て、それに微笑する彼であつた。

若者は幸福には素直なものだと云ふ彼も亦その一生を素直な孤獨にまかして寂しいが苦しいひとり旅を仕方のない氣輕さで續け終つたのかも知れない。

小さな山も彼にとつて高さを越えた大きな山であつ

たに違ひない。

「やつと吾々は尾根の高さまで登りつめた」（Nach hartem Austieg ist die Grathöhe unser.）と彼がさう言ふといつも私達は彼のその言葉の裏に或る情感のむくれあがりを一丁度彼の心の中にも山のやうな或る感情の高いかたまりがうつしだされて居るのを感じさせられる。さうして彼はそんな山登りを重ねる度に一つ〳〵或る高さへその心をも登らせ登らされて行つた。或る山行きの出鼻を生命保險屋に驚ろかされて、彼はそれを「Das Omen」（前兆）と題して彼の山登りと云ふ營みと現實との間の糸のほぐれの事を書いて居る。自愛の瞑目の世界から屢〻眼を見開いて衆生の硬い心にふれ乍らそれに觸れゝばふれる程彼の心の中では山の世界が深まつて行つた。

Oskar Erich Meyer の "Tat und Traum" よりも彼モルゲンターレルは Ihr Berge の中から山の好きな人間の心を行爲と夢想の微妙な境目により深く、より輕妙に時には重苦しい切實さをもつて、その深い世界に想ひふけらすであらう。

感情の個體的發現も亦登山家モルゲンターレルの生命であつたのであらう。本能から啓示される感情に身を委ねるには余りに彼は强く感情の（山と彼との間の）個體的發現の種々な相に心惹かれて居る。

彼の "Ich Selbst" に刻み込まれたものこそ悲しみを悲しみ寂しさを淋しがらねばならなかつた——皮肉といふ暖い血でつゝまれた彼の本心に外ならない。

山のなやみから人知れず人間の惱みを汲みとらなければならなかつた彼のその心にこそ人間的な親しさを感じさせられるのである。

彼は "Mein toten Mutter"（"Ihr Berge" S. 57.）の中で

「お母さん、いたづら小僧も今日は大人になつて、危險を屁とも思はぬ人馴れの惡い登山家になつて終ひました。あなたはそれをどうお考へですか？」

と云つて居る、彼が云ふ人馴れ惡い登山家になつて終つたればこそ尙一層そこに或る人間的な人慕しさを感じさせられるのである。

私は嘗つて人馴れ惡い登山家（rauher Bergsteiger）といふそのrauher といふ小さな形容詞に妙に心に惹か

れて、ふとそれを讀んだ時に"Ihr Berge"の全體に漂つて居る或る親しみの事が解つた樣な心持がした。

又 OH.HA.MO. ("Ich selbst": S. 88.) の中で

「お前の小さな作品 "Ihre Berge" だつてそれを一千部も五千部も互に積み重ねれば四十米位の塔が出來るのだ。道程にしてもきつと一キロメートルは連がるだらう……hailla……。」

とさう書いて居る、こゝで彼は明らかに彼自身の rauher であつた「むくひ」を世間から受けて居る。

考へて居た程の結果を讀者から得られなかつた彼の "Ihre Berge" は彼の心の中で積み重ねられ、或ひはつながれて或る高さや長さになつて畫かれたのであつた、だが私達は彼の死後に見るであらう、彼の貴らかな心の事を。そしてモルゲンターレルよ、今日さうでないと呼びかけてやりたいのであるが遲い。

山を何の當ても(?)なく放浪した彼、そして歐洲もシヤムも故鄕の土も彼には唯さまよひ拔いた魂の國々であつたに過ぎなかつた。

「お前の叔父さんのあの畫家が何時も云つて居たのだ。藝術家はひとりで居なければいけないと」さう彼は云ひ乍ら寂しい心に耐え乍ら旅に出て居た。

私はふと思ひ浮べる。彼が "Ihr Berge" の "Schmerz" の中で書いて居る畫家の事そして彼の戀人であつたであらう畫家の姪——Woly——。だがそれは余り私だけの甘い想像に終るものかもしれない、だが私は何時か私のその想像もはつきりと信じる時があるだらうと思ふ。何故なれば私はまだ彼の Woly といふのを讀んで居ないからである。

woly は彼の Freundin の名であらう。彼はよく "Ich selbst" の中で彼女に話しかけて居る。

彼の心が求めてやまなかつたものを、彼は岩水晶(ベルククリスタル)に托して次の樣に言つて居る。

「まだ小さな小學生の頃私はキラ〳〵輝く寶石が好きでたまらなかつた。休みの日にはグリンデルワルトの氷河のモレーンの上をあちこちと一日中岩水晶を探して歩いたのだつた。

至る所にそれは小さくチカ〳〵と光つて居た。私は何度も〳〵腰をかゞめたのだつたが、唯貧弱な破片を

見つけたのに過ぎなかつた。

素敵な奴だと思ふと只ちよつと頭が缺けて居たり、余り角張つて居たり、さうでないと思ふと稜(カド)が全く磨り減つて居たり歪んで居たり、これは薄いと思へば又他のものは厚すぎたりした。

たう〳〵私は美しい型のを見つけたのだが、ひびがはいつて終つたし、その一番めぼしいのも一晩のうちに破れて終つた。

或る水晶採りの爺さんが私にかう言つて呉れた。お前はこんな廢址の樣な下の方で何を探して居るのだ。お前は黑い谷間の上高く岩や氷の間へどん〳〵登つて行きなさい、其處で山水晶(ベルククリスタル)は産れ育つのだからと。

私はその言葉に隨ひました、それから何年も私は倦まずに歩きました、誰も行つた事のない山の心臓の中までも這入つて行きました、だが矢張り私は之をみつけ出す事は出來ませんでした——私の理想も燦然と輝く鏡の樣な美々しい山水晶(ベルククリスタル)もみつかりませんでした。

私は今も尙探ねにたづねて居ます。何時になつたら私はそれをみつけるだらう。若しみつかつたとしたら、それは紫水晶(アメシスト)であらうか黑水晶(モリオン)だらうか黃水晶(チトリン)だらうか……紫色の黑の黃の棕色のブロンドの……。」("Ihr Berge": S. 56. Der Bergkristall)

彼女 Woly の事を心に置くとこの山水晶(ベルククリスタル)の一章は或る明い童話風な心持と "Schmerz" に畫かれた重い心持とを二つ乍らに想はせられる。

この山水晶(ベルククリスタル)と言ふ一個の岩をノヴァーリス(Friedlich von Hardenberg)の次の言葉の中に入れて見ると山と山を好きな人々との間のある調和といふ樣なものが頷かれるのである。

「特殊の自然的事實は特殊の精神的事實の象徴である。自然界の事實は皆夫々に或る精神的事實の象徴であつて、自然に存する個々の相は或る心的狀態と相通じて居る。そしてその心的狀態はこれを說き明かす繪として、その自然の相を示す事によつてのみ記述され得る。」(ノヴァーリスのフラグメントより片山敏彦氏譯)

又彼モルゲンターレルは "Ich Selbst" の冒頭に

「長い回想の後に秋は „Ich Chaos" (Gefühl) といふ

この本の表題を放棄して終つた」としるして居る。

彼は自分自身の中に、ただその中にこそ山の相を見出し得たのであつたが、それは Chaos でも selbst でも本心にふれるならば何れでもよかつたのであらう。

若い大學生の――山仲間の――賑やかなつどひを想像する。結婚の話、戀人の話、が何時となくお互の心の間に通ひ出す。すると微笑み乍らこれだ〳〵だとビイッケルを掴み上げるモルゲンターレルの姿を――ふと私は思ひ浮べる。又彼の心の裏で切ない程に深まつて行つた孤獨の事を想ひ出す。

「私の産れた町は非常に小さくて、辛じて一萬人程の人しか其處に住んで居ない。

だが私は其處を Nestligen と呼んで居る。誰か――少くとも或人にはそれが大切なのだが――併しブーフフィンク(うそ(禽)の頭)が葉の片(きれ)を組み合せ作つた巣の樣に、或人は彼等のその巣といふ事を感じて居るのだ」と彼は「故郷」といふ一章に書いて居る。

又彼はその終りに

「…併し人は藝術家として故郷を訪れはしない。小いぽっけな激勵を期待しながら――藝術家は願はくは其處でぢつと默つて居たいものだ。その上の色々な苦勞も棄てゝ全く一人の豫言者の樣に！

でなかつたら自殺を覺悟しなければならないのだが！」と書いて居る。

歸り付き樣のなかつた彼の放浪の魂、そしてそのさまよひの旅の中に不知〳〵深くとらへられ何時の間にか、その寂しさを喜んで居た彼に私は何となく日本人らしい、大和民族らしい血潮を以つてする同感を感ずる事が出來る。

陰氣臭くはあつたかもしれない彼に妙にヂリ〳〵と惹かれる人懷さを私はかくす譯にゆかない。

彼が寂しさをタバコとアルコホールにぬれ浸つて故郷を訪れた姿を想ひ浮べると、輕く思ひ過せぬ息苦しさを感ずる。

彼の親友 Carl Egger は一九二八年の "Die Alpen" に彼の事を次の樣に書いて居る。

二

デイ・アルペンの卷一、頁二百八十一をひらくと其

處に四つの若い生命が今にも犧牲として山に捧げられやうとした、一九一一年三月　テディ（Tödi）で起つた冬の夜の怖しい宿命的な物語を、諸君に再び讀み返されるであらう。

何如にも小說にでもありさうに巧みに物語られて居るが、―しかも全くそれは眞實なのだ――彼等はそれに書かれた通りそのまゝを經驗したのだつた。

若い登山家の卵 Karl von Allmen ――彼は輕卒にもこの苦しい山行きに引張り込まれたのだつたが、山慣れした仲間に全く英雄的な心醉を感じ乍ら、最初は氷河のシュパルテンから次には凍死から救はれたのであつた。その上たつた一本の指を殘して他の指は悉く失つて終つたのだつた――それこそハンス・モルゲンターレル自身であつたのだ。

この怖しい經驗こそ彼の全生涯の上に宿命的な暗い影を投げかけたのであつた。

彼はこの肉體的な痛手を潑溂たる若さの裡で咲きはしなかつたとは言へ、その爲に彼は彼の仕事と生活とに倍加された力を以つて働き進んで行つたのではなからうか。否私が彼を知つた時は既に彼は傷き歪められて居たのだ。併し何人も學生としてあの樣に快活であつた彼を、又山の問題にあの樣に熱心であつた彼を、信ずる事は出來ないかもしれない。

アンデルソン・グラートこそ彼の熱烈な心の現れであつた。

彼は顯微鏡を使ふには不便を感じたかもしれないが熱心に正確に彼は誌した。そして彼の美しい手蹟は常に明確に又如何にも彼らしくあつた。

人々は――クルブヒュッテで、或ひは又寂しい山の頂きで彼の滾々と迸り出て盡きぬユーモアと彼の美しい心とを忘れる事は出來ないであらう。

あゝ彼はもはや Hamo ではなかつた。だが彼は尙吾々の古き懷しき友である。

泡立つ樣なお祭騷ぎの最中でも彼の眼は寂しく痛々しく光る事もあつた。兩手の古傷のいたみを訴へ乍ら高く揚げて「見ろ、これを見ろ」と叫ぶ事もあつた。

そして彼は突然言葉少なになり、默つて寂しい小徑や町はづれを一晩中歩き廻るのだつた。彼の本格的な

登山生活は六年といふ短い年月であつた。

その不幸な夜から彼は直ちにA·A·C·Z（チュリヒ大學山岳會）に入會を許されたのだつたが、やがて彼は熱烈な山への心と暖い友情とを表はしたのであつた。

彼のその心こそ山の經驗なくしては他の何人も到達し得ぬものであつた。歡喜と孤獨なさすらひのその心を。

彼は幼い頃銃を持つてアチコチと動物や植物を集め歩いたのだが今日植物學から地質學へと移り變つた山の專門家になつて終つた。

「もう何年も久しい間私の憧憬と希望とは山を目指して居た。私は唯そればかりをひたすら願つて居たのだ。私には高い峰や、四千米もの山々は貴らかな響きを持つた名であつた。

永遠の山へ一歩〳〵、私は近付いて行つたのだつた」（前述苦惱參照）と彼は言つて居る。

グラルネルアルペン特に彼のTödiと、ベルナーアルペンこそ彼の山行きの心からなる望みであつた。又新しい登路（Hinter Fischerhorn, Finsteraarrothorn, Vorder Tierberg, Kammlistock, Piz Urlaun, Porphyr, Ruchen）も他の數多い冬季登山と共に記錄さるべきものである。

モルゲンターレルは又優れたスキー家でもあつた。計畫にも危險にも大膽であり驚く程重い荷も擔いだ。

チュリヒ大學山岳會のジルヴレッタとベルニナの案内書刊行の際に於ける彼の協力は最初この方面に興味を抱かせたが後には他の方面に向けられた。（Linardに依つてkSi- Jahrbuchの第十二卷二十七頁に書かれたBietschhorn, Shien, Nest, Lötschen- Breithorn等の冬期初登攀及びLinoardのトラヴァースがそれである）。

そして彼が幾度か高い峰々に立ち又幸運や成功に惠まれて運が開けて來た時にはテディの事件が猜ましく思はれた。

一九一五年この登山家は「ハンス・モルゲンターレルと言ふ一人の登山家の山手帳からの抒情豊かな畫、"Ihr Berge"」といふ一冊の本として熟した果實を突然吾々の前に落して呉れた。

それは全く他のあらゆる在來のもの（屢〻貧弱に模倣されたのだが）とは異つて居た。

一人の登山家のこの心よりの贈物は彼の兄弟である凡ての登山家に傳へ難い經驗を大膽に美はしく物語つて居る、そして彼は直ちに山の最もよき著者の列に創造者として頭をもたげて來た。

他の多くのものが退屈な旅の描寫の上で文學的なマンテルを、それに被せ乍ら山の下でそれが成功するだらうと信じて居た――そんなものの中にあつて、彼のものは全く確乎とした決定的なものであつたのだ。

其處には詩情豐かな泉があり、それは岩の山々から滾々と清らかに流れ逝つて居る。

若々しい靈感と、ベルナーアルペン獨特の氣持のありのまゝの表現とが正しくこの處女作の特色をなして居るのだと考へられる。如何に美しい自然への觀察と細やかな心情の深い理解とが、この小さな作品に溢れて居る事であらう。それは退屈な內容でも「當て込み」でもない。

其處では凡てが躍動し生々として居る。心細やかな純朴な若者の姿がたゞよふて居る。

モルゲンターレルの第二の深い經驗はシャムへの旅行であつた。彼の豐かな美はしい作品―MATAHARIに彼の經驗は詩的情熱となつて靜かにたゝへられて居る。

山の許に在るかの如く彼の魂は其處で熱帶とその植民地とをしっかと摑へて居るのだ。彼はそれを立派な抒情畫の中に獨特な方法で描いて居る。

彼が再び故郷に歸つた時は彼は病の人であつた。そしてそれ以來もう立つ事がなかつた。

「故郷では仲々寒い」と彼は最初にはさう云つて居たやがて彼の容態は隱し終はせなくなつて來て彼は絕えず苦しみ通した。

彼が公けにした "Ich selbst" と "Woly" とは人事上の創作であつたが、識者は其處に多くの美と喜とを見出される事であらう。彼の樣な宿命を負はされた詩人の寂しい戰ひを、その環境の裡に「彼自身を見出し得ぬ」惱みをはつきりと見られるであらう。

懷しい Hamo よ！　君の苦惱はもう君について行きはしない。君は若くして逝つた。

君の最後の病床にはより善き未來への希望の輝きが

まだ明るく射して居たのだ。君は眼に寫つた澤山のものを色彩の中にとらへ様とした。君は畫家にならうとしたのだ、丁度君が以前 Coué や Ereud に求めようとした如くに、勇士も貴族も君と共に彼處に居るであらう。若しも君が私達にたつた一つの "Ihr Berge" を贈つて呉れたとしても、凡ての登山家の君への思ひ出は永く美はしく盡きぬであらう。

三

エッガーの言葉は私の思ふ自分の心持に對しては余りに短かつた、何度繰り返して讀んでも半ば途ぎられた口惜しさを感ずる。

G. I. Finch の "The Making of a Mountaineer" の中に Maxwell B. I. Finch は「テディの冬の夜」と題して一九一一年三月の事を書いて居る。

歸路の暴風雨—寒氣—午前二時—クレヴァスに落ち込んだフィンチの其記錄は詳細を盡して居る。遂に雪の中に四呎位の深さの穴を掘つてスキーを下に敷き這入りこんだ四人の姿を思ひ浮べるとそしてそこに書かれてあるモルゲンターレルの姿、恰好を想像する事は彼の暗い宿命といふその事に氣付くだけでもふと彼の魂にふれたのではないかと思はされるものがあらう。

私達が彼の死を寂しがるのは——そして私達が彼を愛するのは、或素晴しい人間の姿を彼の裏に見るからではなからうか。山を彼のその熱い心でとらへた、その心の生きた物語をもう再び私達は耳に入れる事が出來ないからであらう、或ひは又彼の逝いた後は再び長旅に倦きたその退屈さで山の理論と山の文章を讀まざるを得ないその寂しさの故であらうか。

彼の心こそ親しく山を私達に物語つて呉れた—或ひは又彼の好きであつた唯一つの Dulu' dulu の世界であつたかも知れない。

私は自分の心の中で——そこにある彼の墓碑に——Es war einmal (dulu, dulu.) とさう書いて置かう。

一九三一—二、二五

一月の北穂高岳

桑田英次

凡そ自己の解決し得る問題のみを提出するのが人の常であるとするならば、私もこゝに北穂高岳の冬の登路を誌すに當つてこれによることとせねばならぬ。

北穂高岳の登路は大別して涸澤側、横尾谷側、及び飛驒側の三つに分れる。然し私が取上げるのはたゞ涸澤側登路のみである。他の二つのものに屬する登路は余りに手强いと思はれるので少くとも自分にとつては問題とはならないし、從つてそれに就いては少しも考へて見たことがないからである。

涸澤よりする登路は更にこれを四つに別つ事が出來る。

(一)涸澤圈谷底より北穂高岳—涸澤岳間の最低鞍部(涸澤乘越)に達し、それより主稜を傳ふ登路。

(二)北穂高の二つの頂(註)から略ゝ東に派出して居る二つの支稜の間に挾まれて居る北穂高澤を登りつめて何れかの頂に向ふ登路。

(註)——北穂高岳には南北二つの頂があると私は考へて居る。南峯に立つときには北峯が幾らか高く見え、反對に北峯から南峯の方が高く見えるといふ目測の感じから斯く考へるのであるが、別に測量をやつた譯ではないからこれに就いては會員諸氏の御教示を得たいと思ふ。

(三)北穂高澤の南側の尾根——假に涸澤尾根と名付けておく——による登路。

(四)北穂高澤の北側の尾根——假に横尾尾根と名付けておく——による登路。

登攀の技術的な難易をしばらく度外視するとして、冬季登山の成否に大きな影響を與へる客觀的な要素は雪質、具體的には雪崩と風である。雪崩の危害については今更喋々するまでもないけれど、風といふ奴もなか〳〵馬鹿にならない。登山者を結び合はせて居る長い綱に受ける風壓は豫想外に恐ろしいものである。だから多少なりとも微妙な身體の平衡を要する樣な岩登りを含む尾根傳ひは、冬季風の强い日には全く絶望である。以下主としてこの二つの點について前記の四登路を考へて見よう。

第一の登路は云ふまでもなく、涸澤岳北穂高岳間の

廣い斜面の雪質或ひは積雪狀態の如何によつて先づその安全さが決定される。この斜面は圈谷南壁の斜面と異り日當りが相當よいため、一日の快晴を經れば雪の落付きは案外急速に行はれるものらしい(註)。ともかく積雪が登山にもスキーにも好都合な落付いた粉雪をなして居るか、或ひはケークト・パウダー乃至は板狀雪崩を惹起せざる風成堅雪をなして居るならば絶對安全と考へて差支へない。然し斜面一帶が不愉快なブレーカブル・クラストを形成して居る場合には登行に甚だしい勞力と多くの時間を費すから、この登路は實際には不利である。

(註)——或る年の一月上旬、降雪—快晴の各一日を經た次の日に涸澤岳直下の大斜面を登行したことがあつた。この時積雪は風成堅雪をすら形成して居なかつたに不拘極めて安全な落付きを示して居た。今度の登山においては一度は(一月一日)余り堅固ならざる——スキーで破れる程度の——風成堅雪に、二度目(一月四日)には比較的堅固な——ケークト・パウダー程度の——堅雪に遭遇したが、何れも降雪後それ〴〵一日以上或ひは一日の快晴を經た後であつた。當日(一月四日)の積雪が降雪時に如何なるものであつたかを推定する根據は次の如くである降雪は涸澤において一月一日正午頃霙混りを以て始まり德澤小屋附近では當日より二日終日にかけて春雪の樣な大きな雪片を舞はして居た。氣溫は一日正午頃涸澤において零度内外、一日正午より二日正午にかけて德澤小屋における最低氣溫零下三度である。これだけの貧弱な材料から雪質と日射による雪の落付きとの關係を概括的に考察するわけには行かないが、一つの實例として擧げておく。

次に注意すべきはこの斜面を登つて主稜に取付く地點の狹い急谷である。この急谷は最低鞍部と更に若干北穗高寄りの小鞍部とに導く二つのものがあるが、何れも主稜によつて卓越風を遮られ流動性に富んだ弛い粉雪が積つて居るから、たとひスキーを脱ぐとしても急谷内の粉雪を搔き分けて登るのは危險である。附近に適當な支稜を選ぶのは當然のことであらう。主稜へ出てからの問題は天候と時間の見透しの他にはたゞ風の威力のみである。然し幸にして交替前進を要する箇所は最初の涸澤側を絡む六十米程の間だけである。山稜上に出れば綱を殆ど必要としない容易な尾根傳ひにすぎないから、風に對する服裝上の準備が充分になされてあれば登攀が不可能となることは少いであらう。

然し長い綱は恐ろしい風壓を受けて前進は全く阻まれることがあるから隊員間の間隔は著しく詰めなければならない。この山稜を傳つて南峰に達するまでの間には一ケ所廣い岩蔭があつて絶好の避難所となる。かくの如くしてこの登路では主稜上半において極度に猛烈な風を受けない限り尾根傳ひそのものの成功率は相當に大きい。そしてスキー・デポーを可成り上まで上昇させることが出來る場合には、登行全體の時間及勞力の上から見ても可成り有利な條件を具へて居るものと考へられる。私達はこの登路によつて南峰に達したのであるが、昨年二月R・C・Cの加藤文太郎氏が登頂せられた際の登路も多分これに由られたのではないかと推察する。

北穂高澤の登路は概して雪崩の危險が大きい。私達が登頂の機會を摑み得た日の樣に涸澤一帶の積雪が素晴しい落付きを見せて居る場合でも、尙この澤の上部には雪崩の懸念を認めない譯には行かない。それは北穂高澤の地形と風に對する向きによるのであるが、又この事は當日の涸澤乘越附近の急谷における積雪狀態からも容易に類推される。然し若しも積雪が安全であると假定したならば、この登路は主稜に達して以後頂に至るまでの距離が極めて小さく、それに要する時間も短くてすむから——恐らく數分を出でまい——飛驒側の强風に曝される苦痛が最も少い點において優れて居るであらう。

第三の涸澤尾根による登路は雪崩に關する危險が最も少いと云へる。圈谷底から尾根末端近くに至る比較的短かい距離を安全に登行し得る雪質の際には、涸澤圈谷上部の積雪狀態が如何に危險であらうともこの登路はそれによつて影響されることがない。そして風當りも主稜におけるよりは弱いに違ひない。だからこの登路は四つの中で最も合理的なものであると考へられる。私達の登頂と同じ日に、慶應大學山岳部の一行が頂に登られたのはこの登路によるものであつた。但しスキーによる登行區域が比較的短いことよりして、登行全行程に要する時間は幾分長くなるであらう。

最後に横尾尾根の登路については雪崩に關する限り第三のものと同樣である。然し風當りは涸澤尾根より

一月の奥穂高岳　　高橋榮一郎

も激しいと思はれるし、又岩登りとしての困難さは前三者に較べて最も大きいと考へられる。それ故、寒氣と風の強い冬季は可成り問題となる登路であらう。

登路の記述は以上を以て終るのであるが、次に一寸氣付いた點を述べておきたい。

冬季の高峻山岳と云へば私達は直ちに氷と岩の混成を聯想する。又嚴冬季の山稜に見出される氷は春季の氷よりも硬度が高くて登攀に困難であるとも云はれて居る。この前提から云ふならば、正に冬季登山は他の何れの時季における登山よりも技術的に因難でなければならない筈である。ところが幸にして今度の登攀に於ては昨年の場合と同樣に山稜における氷の怖ろしい期待は全然裏切られた。岩場には最初から最後まで殆ど一片の氷も見出されず、そこにあるものはたゞ穀雪と粉雪、そして夏と異らない露出した岩稜であつた。これに反して、未だ何年にもならない私の貧弱な經驗よりすれば、意外にも手剛い蒼氷のために惱まされたことが多いのは冬季ではなく却つて春季及晩秋季、殊に十一月頃の新雪季なのである。最近數年間、一月から三月の高峻山岳において實に驚嘆すべき足跡を殘して居られる加藤文太郎氏も確か冬季には氷が少いと云ふことを述べて居られる樣に記憶する。この樣な事實を正常な狀態と看做すならば、一般に冬季登山では所謂氷上の技術と稱せられるものを必要とする場合は甚だ稀であり、そして又このことは冬季登山に使用される用具に對して何等かの意味を持つのではないかと考へられるのである。

日程と時間記錄

十二月廿九日(一九三〇年) 曇後晴 松本—中之湯

十二月卅日 曇少雪、夜は晴 中之湯—德澤小屋

十二月卅一日 晴、夜明け頃一時曇り 出發(四、〇〇)—澗澤入口まで登つて引返す—歸着(一〇、〇〇)

一月一日 晴後雪(濕潤雪)出發(四、一〇)—澗澤に入り岩小屋より二百米上方(一〇、〇〇—一〇、三〇)より引返す—歸着(一一、〇〇)

一月二日 雪(濕潤雪)滯在

一月三日 晴 滯在

一月四日 晴後曇後雪 出發(一一、三〇)—横尾岩小屋(三、四五)—澗澤出合(五、一〇)—閻谷底(六、〇〇)—スキー・デポー(八、三〇)主稜に取付く(九、三〇)—北穗高岳(一二、四五)—スキー・デポー(三、三〇)—澗澤出合

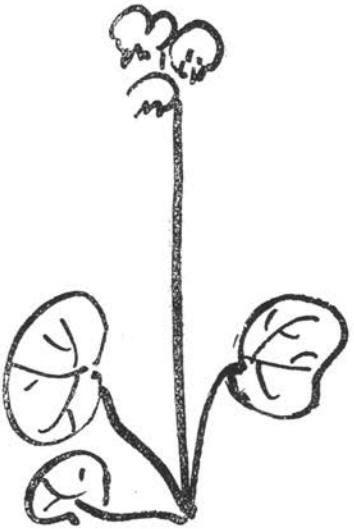
(四、三〇)—横尾岩小屋(五、一五—六、〇〇)—歸着(七、三〇)

一月五日　雨　滯在

一月六日　雪(濕潤雪)中之湯廻りで下山

一行——小出博氏　高橋榮一郎氏
桑田英次　織田明

(附記)　小出、高橋兩氏とは中之湯で偶然お目にかゝり以後下山まで行動を共にした。兩氏の御好意と協同、並びに私達が登頂の歸途岩小屋において厚いもてなしにあづかつた慶應の方々に對して、この紙面を藉りて深謝の意を表したい。



春の空木(ウツギ)岳

小池文雄

（參照地形圖）五萬分。一赤穂。

昨夏八月單身、オンボロ澤、溯行を企て、中途にて追ひ返されて以來、南駒連峰は手應へある山の一つとして、自分の腦裡に深く、こびり付いてしまつた。過ぐる正月の冬もこの山に入らうかと考へたが、一段異なる複雜なる急峻なる山勢と積雪と、加ふるに根據地の皆無なるを思ふとき、その登高の勞苦の前に戰慄して比較的日足の長い氣溫の高い春に行く事にした。この山は何れの方面からも全く隔絶して居り積雪期の登高など思ひもよらぬ事と思つてゐたが全く遇然の事の運びが、然らしめたのであつた。南駒ケ岳は、夏期摺鉢窪の小屋が僅かに使用に堪えるのであるから積雪期に於ては二五〇〇米程度の高度にあるその小屋は全く使用の考慮には入らなかつた。只與田切川の奥のショージ平には炭燒小屋が二棟あるので、その小屋を使用すれば越百(コシモ)山を經て仙崖嶺を通り南駒ヶ岳に往復するのが漸く可能の程度で隨分一日の勞苦は多いものに違ひない。小屋の位置が一三〇〇米附近であるから、越百に到る能無澤の坂路が積雪期に於て未知なのと、仙崖の北面の降りが疑問とされて居つた、併し春の日長を利用すれば一日存分使用すれば薄明に小屋に歸還し得るか、又は、登頂後適當な谷間に避けて露營も敢へて辭せずと腹を決めて居つた。

三月—四月の余暇は轉居やら、何やらでごたついて居つたが遂に萬障を排して飛び出してしまつた。

三月卅一日この日は薄どんよりの日で廿九日の快晴の後を受けて、天候はあまり順調に向ふ方でもなかつた。午後一時頃、辰野乘換、花曇りの空合ひの下に鈍く光る左右の南アルプスと、木曾駒連峯の雪峯を見ながら南下する。東駒は非常に遠く見えたが、赤穂を過ぎる頃より西駒の寶劍下の千疊敷のカールが午後の陽に光つて眩しい。その中に前駒ケ岳(空木岳)、南駒ヶ岳が近づいて來る。百間梛(ナギ)の頭が殊に物凄く突角を表はしてゐる。午後二時飯島着、岩本旅館に落着き着物

を着換へ、青年會の小川清志君は夏山の時も色々指針を受けたので今回も色々希望を述べて相談する。獵師の唐澤金十郎氏には前以て書信を出して置いたし、今日も汽車中で打電して置いたので、兎も角一先づ行つて見ねば話がわからぬと思つたので、旅館に引返し人夫を連れて梛(ナギ)の脇(ワキ)まで行く（五萬分一地形圖幅には記載がないが飯島村西北端の無名の小部落だ）。

午後四時頃着いたが、金十郎は赤穗に行つて留守との事で一先づ家の中には入つて歸りを待つてゐた、七時頃歸つて來て明日一日は待つて呉れと云ふので氣勢を殺がれる事夥しかつたが如何とも仕方がない。夜から雨になつて風さへ加はつたので幾分諦めも付いた。

四月一日朝起きて見ると雨は小降りになつたが、山は吹雪いてゐるらしく一七〇〇米邊より上は樹林に新雪がふんわり被つてゐて、谷奥は曇つてゐる。今日は一日滯在だ、昨日迄は與田切川のシ。ージ平を根據地にする豫定であつたが、昨夜の相談で、中田切川の奥の岩小屋を利用して空木岳に登攀し、餘裕があつたら、南駒ケ岳へも廻らうと云ふ事に決めて、中田切川を溯行する事に變更した。この中田切川筋は岩小屋に到る迄と、又それから先には大きなタルが幾つもあるが上の方は或ひは雪崩の爲に埋つて通過可能かも知れぬとの事だ。そんな理由で、小雨に煙つた四月一日は一日中炬燵にあたつて地圖を見飽きると、外へ出て谷奥の空木岳の暗い雲に閉された形相を窺つて居た。

午後になつて時々家の外に出て空の模樣をうかがふと幾分風が出たらしい、雲足が西北より東南に向つて流れ出した、先づ明日の天候は大丈夫らしい。裏山からは絶えず鶯の聲が聞え、筧の水が澄んだ音を靜かな山家の雰圍氣に一段の朗かさを添へる。年老いた日本犬が二匹、何時も眞暗な土間に、うづくまつてゐて知らぬ者が入つて行くと吠え立てる。汚い風呂桶が台所の土間にあつて、毎晩立てゝ呉れるが、底の方には砂のおりが溜つてゐて、あまり氣持がよくない。家人の氣持は淳朴なる事無類だが、食物の惡いのには我慢が出來なかつた。金十郎は漸く雪輪を取り出して、藤蔓をひねくつて皮をむいて强靱にしたもので、カンヂキのタナを造り始めた、持物、用意、凡てが簡單で仰山

でなく、板に付いてゐる。山には入る位そんなに大事には考へて居らぬらしい。夜十時頃、晴れ渡つて明月が皎々と照り出した。山の方は未だ雲に蔽はれて居るが大丈夫らしい。

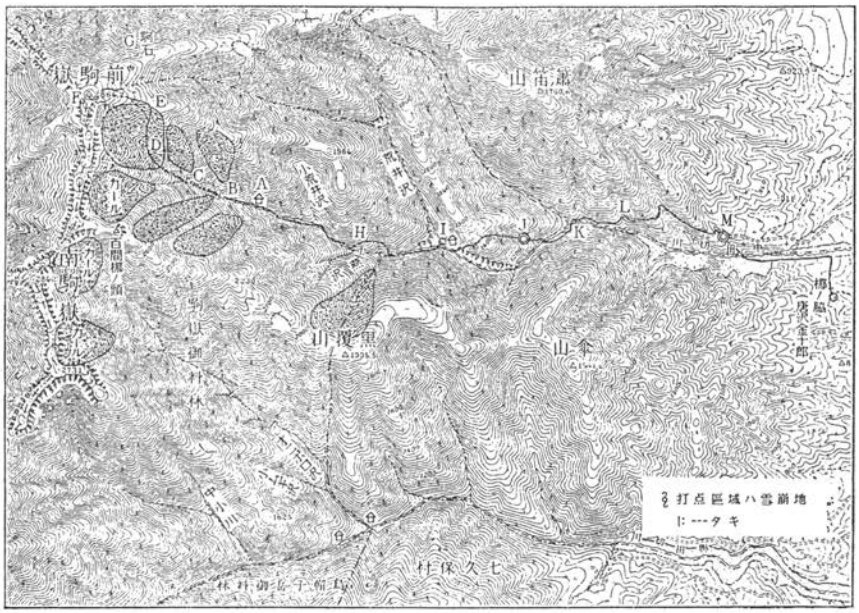
四月二日今日は山に入るの日だ、昨夜の中に用意して置いたが、それでも五時には起きた、素晴しい天氣だ。家の眞正面には、白根三山が偉容を整へ、仙丈岳は大きく、駒、鋸、は夫々怪偉に、鹽見の尖頂、赤石、魚無河内、悪澤の塊磊が眼を射る。

八時には用意が整ひ、一米四〇許りの夏スキーを携へ、スキー靴は穿かず草鞋を履いて、ふくらんだルックザック一つ宛脊負ひ、雨上りの心持よい寒さに身震ひし乍ら出發する。谷奥の空木、駒石、百間梛の頭の峯頭は皆眞白だ、暫らくして中田切川を北岸に移る。徒渉の時うつかり凍結してゐる石に足を掛けて、滑り轉んで左半身を水にぬらしてしまつた。材木切り出しの小屋場(M、附圖參照、以下同じ)で小憩、これより川に傍うて、簫の笛山の南側をからむ。三箇所許り、路が崩落して(L)、用心深く渡らねばならぬ所があつた。

第一の左岸より入る大きな支谷の落合ひの所(K)は一旦谷底に下り、本谷を右岸に渡り河原を五六町行くと、又北岸に移り殘雪ある斜面を上ると上が比較的平らで、十數年前山師の木地屋と稱する材木師が材木を伐り出した小屋跡(J)の荒廢した箇所に着く。二十分許り休み、これからこの尾根(簫の笛山より一つ奥の二三四二米より落つる尾根)を南に越して、荒井澤と本谷との合流點より五町許り下流に出る。この尾根の高廻りは三百米許りで、本澤通りは行かれぬさうだ。尾根を越して河原に出た所に小屋の破れたのが一つ(I)あつて路は此處で盡きてゐる。少し早いが晝食にする。これから先は河を左に右に徒渉して溯るのだ。磊々たる岩石の間を積雪が埋めて、河原通しは割合に通りがよいが所々悪い所もある。雪は既に中田切川の千米邊の谷底より散見したがこの邊になると日蔭には俄然多い。荒井澤の合流點も平凡に過ぎ北岸を行く。午後になつて氣温が昇つて來たので、雪がぶかつて仕方が無いので勞多くとも雪少き日當りのよい北岸を撰んだ、日蔭の南岸は一面の雪で、朝、雪が硬い中ならば

行程は隨分捗る。稍ゝ暫らく行くと黑覆山の正北面より落ちる急峻な小澤を正面に見る位置に來た。本谷の奥には高い瀧があつてその邊一帶に惡い。愈ゝ高廻りだ(H)。今日の溯行の途中の最大の難關だ。北岸の急峻な笹と藪の密生した中をかき昇る。夏スキーが藪に引掛かつて、焦れつたい事夥しい。夏山と冬山を一緒にした樣な今度の山行は行程の然らしむる所とは云へ、つくづく荷厄介な氣持にもなつた。約一時間を費して燕澤との合流點に降り立つたのは午後一時頃だつた。落合の所に徑七尺許りの圓い岩の上に雪が三尺程の厚みに笠になつてゐる。ドードーといふ水音に心奪はれ乍ら眞冬のこの邊の情景を心に描いて見る。ゆっくり休んで今度は右岸を岩と岩との間の雪に踏込み乍ら次第に奥へ奥へと進む。小荒井澤の合流點を過ぎると、雪は昨日降つた粉雪をそのまゝで尙一層もぐる、遂に此處で、草鞋を脫ぎ、靴に穿き換へてスキーを付ける。金十郎は雪輪を付ける。未だ積雪はこの邊で五、六尺あるので、夏はゴロゴロして歩き難いこの澤も今は存外に捗る。南岸を行くと河身の突き當つた急崖の上に出て其處を横へつりする時には、スキーを脫がねばならなかつた。更に横へつりを二度程したらそれから先は所々雪橋が掛つてゐて北岸(左岸)に樂に移る事が出來た。その北岸の大きな花崗岩の一塊りが、岩小屋のそれで(A)、岩の上には、唐檜の小さいのが二三本、立つて居る。小屋の附近ではスキーが充分に亨樂出來る。何とも云へない氣分だ、救はれた氣持で岩小屋に潜り込む。

中は六疊敷位で低い所には氷が張つてゐて、雪が三分の一許り吹き込んでゐるが隅の方を片付ければ一晩二晩は充分泊れる、小屋の中にも雪解けの滴がぽたぽたと落ちてゐる。雪をかき出し偃松を伐つて入口を塞ぎ、穴の奥の乾いた砂をかき出して火床を造つた。一休みしてから、薪の採取だ、生の木を伐つて來ては適當の長さに切つて燃し付けるが、生木の煙は煙くて目も口も開いて居られぬ。煙が岩小屋の中に停滯して出ないので、下の方に四ツん這ひになつて辛うじて火にあたる。時刻が未だ早いので外に出てスキーを試みたが、休養の設備さへよかつたらこの谷間の樹林を縫うてのスキーイングは興あるものに違ひない。



空木岳登路概念圖

M…木材搬出場
L…土砂崩壞の箇所
K…第一の澤の出合、本谷を右岸に渡る
J…木材搬出の小屋跡
I…道の終り、破れ小屋あり
H…第二の高廻り、瀧あり
燕澤は相當大きく、その合流點は本谷は北方に迂曲し、正面に燕澤が落込み本谷と間違ひ易し。燕澤より一つ下手の黒覆山直下の谷は頗繁に乾燥新雪崩を起す。
A…岩小屋あり。雪崩の危險絶對に無し
B…ゴルジュ。タルを成す、その上手に於て左右より大なる支谷落合ひ降雪時危險なり
C…最も大なるタル。解雪時は通過に時間を要すとの事、左方百間棚のカールより來る雪崩に注意すべし
D…谷の奥、FE間、急峻
E…鞍部、シーデボー
F…山　頂

午後五時半頃から上空は曇つて微かな粉雪が舞ひ始めた。然し天候の心配をする程の事はない。少くとも明日の午前中は大丈夫らしい。又小屋の中へ這入つて、眼と鼻から涙と鼻汁を出して泣いてゐる。これでは全くやり切れぬ、肺の中まで生木燻しになりさうだ。河岸迄は三十間程で水は近い。葱の味噌汁に、唐澤氏の所で昨日搗いた許りの餅を雜煮にして食ふ。夕食が濟むと生の太い丸太を積み重ね火が燃え付く樣にして、有り丈けの衣類を身につけて、シュラーフザックに入り横になつたが、煙いのと、身體の置き場が傾斜になつて居るので中々寢つかれぬ。岩小屋の中が暖まるに連れてしみが融け、身體の下の乾いてゐたと思つた砂が濡れて腰が冷える。曉方近く薪が少くなつたら煙が少くなつて漸く眠る事が出來た。

四月三日、谷の右岸の雪の急斜面の明るみから希望の朝は明けた。昨夕の粉雪のちらついた天候から解放されて空は靜かな薄青色に晴れて居る。仙丈、間の岳の上空が稍〻朝燒けしたが、天氣を確信してゐる我々に取つてはそれは何でもなかつた。靜かな朝は鳥の啼聲一つしなかつた。用意を整へて小屋を出たのが午前六時五十分。金カンヂキを穿ち、スキーは脊負つて暫くは雜木の疎林の中を行く。四五町行くと今迄の左岸が急に迫つて惡くなりへつられなくなつたので右岸に移り、一、二町溯ると谷底はすつかり雪に埋れて居る。間もなく、兩岸が迫つてゴルジュをなした點(B)に達する。兩岸が相接して谷幅は三十米位しか無い。左右とも絶壁をなして夏期には大なタルを形成して居るらしい。この一段と急なゴルジュを通過すると雪質は急變し粉雪となりもぐる事甚しい。タルの上は緩傾斜の廣い谷底となり此處で左右兩岸から可成、大きな支谷が、對象的に落ち合つてゐる。左岸からは二三日前に出たらしい大きな濕潤舊雪表層雪崩、右岸からは同じく、乾燥新雪表層雪崩が押出してゐる。後者は一日の降雪に依つて昨日(二日)出たものらしい。此處まで岩小屋より四十分餘かかつた。これからスキーを穿いて進むと傾斜は次第に急になり、餘り廣くもない谷底にツィックツァックの數を重ねる。雪崩の走つた跡が無數で左右の小ルンゼからは降雪中から絶えず、雪崩

を起して山稜及び斜面の雪は皆この谷底に吹き落すものらしい。從つて谷底の積雪量は莫大なもので北アルプスのそれに毫も劣らず、眞冬には非常な雪崩の危險地であらう。やがて、谷底の傾斜が階段的に急峻となり、雪崩の擦つた蒼氷の裸出した所にかかる(C)。此處が金十郎の最も心配した所で、積雪が少くてこの大きなタルが出てゐる樣な事があると此處を超えるために非常な時間と勞力を費さねばならないのださうだ。タルの高さは七十米もあらうか。然し幸にも多量の雪崩で埋つてゐたので、スキーは脱いだがステップカッティンをして漸くタルの上に出る。右岸から大きな雪谷が落込んで居て百間梛の頭の西北面の大カールの雪を集めて此處に運ぶのだ。再びスキーを穿ち金十郎は雪輪を付けて默々として進むと傾斜は段々急になる。左手(右岸)から小さいが相當長いルンゼが落ちてゐる。九時二十分遂にカールの底に達した。四方から急谷が集り雪崩が堆積してゐる。差當り不必要のものを岩蔭に置いて、スキーを脊負ひ(D)、右手の急谷をピッケルで確保したりカットステップしたりし乍ら登る。六十米許り登るとこの澤は上から落ちて來て途中の岩のコブに當つて一方は眞直ぐに本谷に落込んでゐるのだ。

百間梛のカールの下手

その方が傾斜も緩く、登り易いのに、吾々は殊更に分支流の急な惡い方を登つた事に氣付いた。傾斜は相變らず急である。時刻が移つて來たので氣溫が昇つて、アイゼンの齒の間に雪が詰まつてよく利かぬ。一番の右手のルンゼは日も未だ當らぬため雪が堅いのでそれを登る事にする。傾斜は次第に角度を加へる。最後の急斜面は避けてルンゼとルンゼとの間の小さいリッヂの岳樺や偃松の幾分手掛りあるのを登つた。金十郎は金カンヂキを下の岩の蔭に置いて來たため、雪輪の爪が唯一の頼みで、隨分不安を感じたが、六尺もある長い嶌口を携へて居るので幾分はましだつた。十時二十四分遂に空木岳東方の、二六八〇米圏のコブとの鞍部に登りつめてほつとした(E)。

正面には駒石の尾根が長く東北に派出し、こちらの尾根との間に、コンケーヴの廣大な斜面を包藏し、仰げば空木の主頂は雄大な雪の堆積と云ふ感じで、大きな擴りを誇つて悠揚迫らざる態度を持してゐる。此所から主頂迄は廣大な雪原の擴りと云つた感じである。眼を遮へぎる物なき一面の雪原、主頂の北側の山稜近くと南側の餘程下つた頂稜の邊りの岩の點綴が眼をひく。

これから登らうとする雪原の尾根は雪面の縞が特に目立つて美しく、主頂の東面に出來た雪庇と共に造化の妙を極めてゐる。疲れを覺えたが早く主頂の頂きに立ちたいので休みもそこそこにして、スキーは、鞍部より一寸西の小隆起の岩の上に置いて、滑かなウィンドクラストの雪面にカンヂキの齒を氣持よく喰ひ込ませ乍ら登る。近くに見えてゐても中々に遠い。やがて南駒ケ岳の頭が見え出した。百間梯の頭は相變らず物凄い。空木の南に續く稜線は東に幾多の急峻なクーロアールを抱いてゐる。途中、二回程少憩し、主頂の南を卷いて、十一時六分遂に頂上に達した。

西側は東面に優る岩と氷の絡路。紫紺の袴に純白の胸をひろげた御嶽。雪の色鮮かな乘鞍岳はその東にその奥に蟠居する。何故かこの日は穗高以北の山々は赤い灰でも撒かれた樣に鈍い雪の色だつた。近くは西駒の一連、前岳が長く脊を延べ、寶劍、中ノ岳、本岳と指呼されるが、此處よりの眺めは南アルプス又は、八ヶ岳

よりする東方からの景觀程映えぬ。四阿、猫岳の二股澤の疎林までが見えるのが故郷の山の故爲か特に慕しい。妙高、火打、焼、戸隱、黒姫、飯綱と遠き彼方を指呼して金十郎に此等の北の山の名を敎へてやる。蓼科の色がよく、淺間も薄く煙を吐いてゐる。一わたり眺めまはしてさて寫眞をと、フィルムを取り出したが肝腎のパックホールダーを忘れて來たため萬事休す。この絶景を前にして地團太踏んで口惜しがる。せめてもの慰籍にと、プリズムを出して一々眼底に燒き付ける。鹽見岳の上に富士が頭を出して居り、頂上から大澤の裂ケ目を正面に、右手に劍ヶ峯、左手に釋迦ヶ岳がそれと判別される。甲斐駒、鋸も雄偉に、白峯三山、惡澤岳は飽くまで高きを誇り赤石は山貌雄大に更にその南には聖、上河内等が續く。惠那山は黑く一巡して白山はその名を現し、更に名知らぬ霞の奥の西の山々は加越の山か定かでない。太陽にはハローがかかり、その爲か風は無くこの高嶺に數十分の長い時間佇んで居られるのだ。餅を食ひ乍らプリズムを眼に當てて見る。南駒のディテールが一々手に取る如く見えその北峯・南峯が此處からは判然とわかり、摺鉢のカールはその上半部だけが見える。此處から南駒までは更に二時間はかかるので、今日は稍ゝ疲勞して居る爲これは又の機會に讓つた。

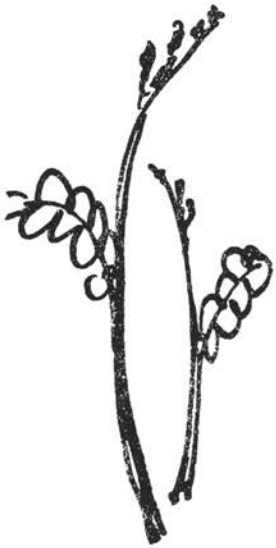
正十二時主頂を辭す。登りに喘ぎ〳〵登つた主頂東下の斜面も、サクサクとカンヂキの音をさせながら一直線に下り、十分で鞍部のスキー置場に達した。この雪原でスキーを樂しんだならと思つたが未だ大切な降りを控えてゐるのでそれ所では無い。併しこの尾根と駒石との尾根に狹まれた雪原は無比のゲレンデであつて窪の底の樺の大木が餘程埋つてゐる所を見ると雪量も莫大なものであらう。落ちるべき新雪雪崩はこの地形では降雪中又は降雪直後大部分落ち盡してゐるので直ちに降る事にした。それに、金十郎は雪輪の爪が唯一の賴りなので三時四時と時刻が遲れて雪が凍つてしまつてはこの長い急谷に一々ステップを切らねばならぬので前の登路より一つ南寄りの幅の廣いルンゼとも付かず、細長いカールとも付かぬものを降り始めた。傾斜は急ではあるが登りよりは幾分緩かであつた。二

十分許りで前の登路と一緒になつた。後は矢張り愼重に降つて鞍部より一時間を費して、岩のコブも降りは南側を降りて午後一時カールの底に達した。雪はひどく濕つて、アイゼンの下に五寸も付く。これから先はスキーを擔いだままゆっくり降る。空木岳の南稜の最低鞍部（寧ろキレット）から落ちる細く長いルンゼを瞬く間に過ぎ、百間梛のカールの落口を右に見て、又例の大きなタルの所に來た。スキー杖が荷厄介で困つたが此處も難なく降り、スキーを穿いて、雪で埋つて廣くなつた澤をボーゲンで降る。雪が濕つて所々滑度が異り、夏スキーの前部が廣いので雪質の異なる所に入る毎にショックを受ける。ゴルジュを通過した後も左岸に移らず登路とは反對の右岸を降り、餘程下で左岸に戻り雜木林の中を滑降すると小屋の前に來た。一時四十五分。ゴルジュから下は寧ろ水氣の多いザラメで痛快な滑降が樂しめた。三十分許りして金十郎も追ひついた。

今日の午後も、谷間のザラメ雪にスキーを樂しまうか、そして明日早く、ゆっくり下山しやうかとも考へたが、岩小屋の中での煙攻めを想ふとき凡ての悦びはそれに由つて消されてしまふ。この上又昨日の苦しみを重ねる事に避易して、少し無理だがこれから下山すれば少し暗くなるが里に出られるので、直ちに小屋内を取片付け、荷を外に出して取纏め、二時四十分出發、身體が重いのと、夕刻で雪が凍り始め不愉快な滑降となる。三町許り降つて右岸に移るとき徒渉に手間取り靴の中まで濡らしてしまつた。小荒井澤の合流點でスキーを脱いで三四回河を渡り三時半、燕澤合流點に着いた。登りの時とは逆に降るので變な所に來たなと思つたが大きな丸い岩の上の笠雪に依つてやつと前の所とうなづけた。十五分休憩、相當へばつた上、更に餘分の强行なので二人共疲れて休むにも默つてゐる。これから下は例の大きな瀧の高廻りで左岸を高くからむ。笹藪で足が滑つて仕方が無い、スキーは藪に引掛る、笹の根元が凍つてゐる所もあり又、殘雪の斑らな所にも出遭はす。こんな時にはほんとうに、何故山に來てゐるのか自分にもわからなくなる。大荒井澤の落合には材木流しの「せき」が作つてあり、荒廢してゐた。

昨日晝食をやつた小屋跡には四時半に着いた。

谷間の雪もこの邊では消失せて居る。今日は午後であつたが靴の儘でもあまり落込まなかつた。尾根を越すと木地屋の荒れ跡には春の陽に伸びた蕗玉が土をもたげてゐた。前日通りの道を辿つて疲れた身體を谷合の道筋を默々と下り、陽は全く落ちて林は一きは黑ずみ里の燈光る彼方へと流れて行く中田切川の水音のみ獨り高き頃梛の脇に歸り着いた。



寸又川溯行

工　樂　英　司

昭和五年八月九日（曇後雨）京都—金谷—地名（ヂナ）—堀ノ内—千頭

十　日（曇）千頭—大間—上閑造

十一日（晴）上閑造—下日向—尾崎

十二日（晴後雨）尾崎—大根澤出合—露營地

十三日（雨）滯　在

十四日（晴）溯行—兵治の泊場

十五日（晴）溯行—ヒウチ澤廊下の上手の露營地

十六日（晴後曇）溯行—光岳—イザルケ岳—露營地

十七日（晴）露營地—信濃俣河内—露營地

十八日（晴）露營地—洞平—大桑—田代—井川

十九日（曇）井川—大日峠—坂下—落合—中妻—靜岡

一行　田中喜左衞門　工樂英司

人夫　宇治長治郎　野口松五郎　大村雄作　殿村茂樹

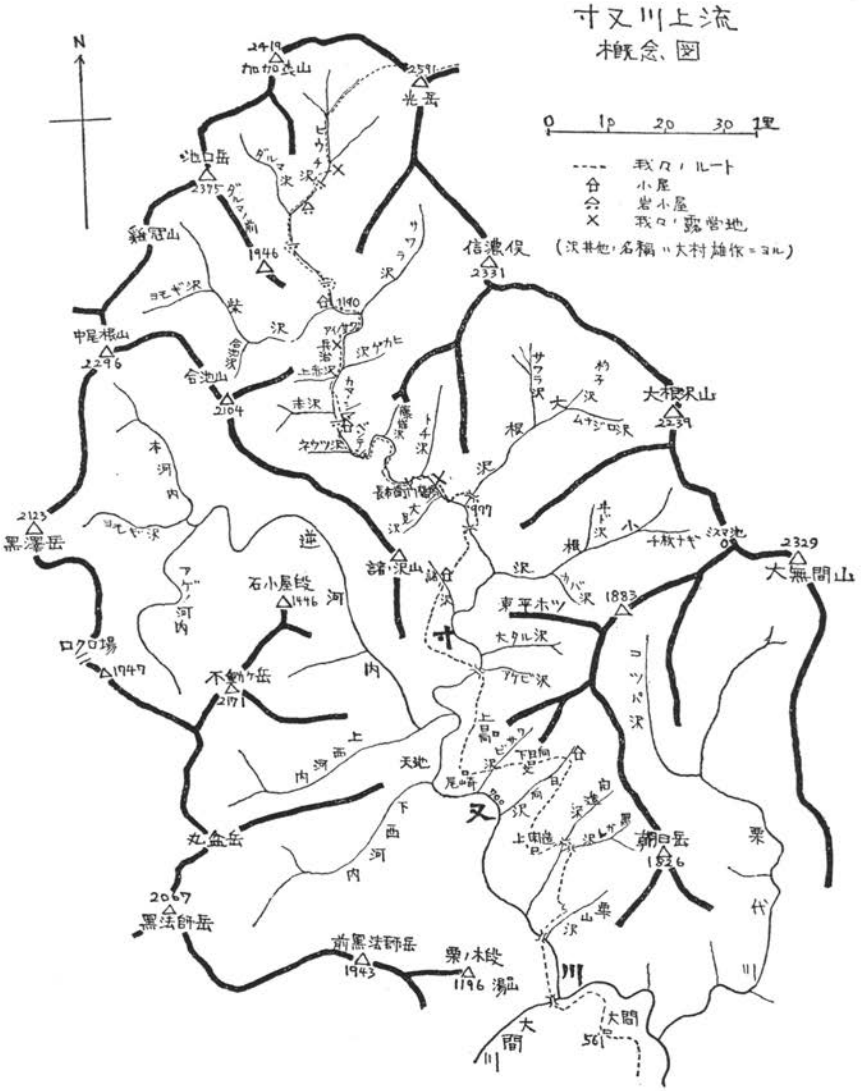
（參照地形圖）五萬分一。千頭、井川、赤石岳。

この方面の文獻としては平賀文男氏「日本南アルプス」がある（同著六九頁—一一八頁）。

寸又川方面から南アルプスの南端光岳に達するルートは我々の取つた澤そのものを溯行するもの以外に、東にある信濃俣の尾根に取付くものがあり、西の池口岳の尾根を縱走するものもある。後の二つは既に知られたルートではあるが、共にあまり愉快でない尾根縱走であり、その上適當な水のある露營地を得られないと云ふ不便がある。

八月九日　東海道線金谷驛から大井川鐵道の終點地名（ヂナ）へ行く、それから一時間餘をプロペラー船で堀ノ内まで出て堀ノ内から千頭まで二里餘、宿に着くと雨が降り出した。このプロペラー船は一日一往復と云ふ不便なものであり二里余の道もあまり良くない。大井川鐵道がもつと奥まで進まない限り靜岡から洗澤峠を越えて千頭入りをする方が便利である。

十日　一行は昨日米原驛で一緒になつた宇治と野口に今日から加はつた殿村とを加へて五名、蒸し暑い道

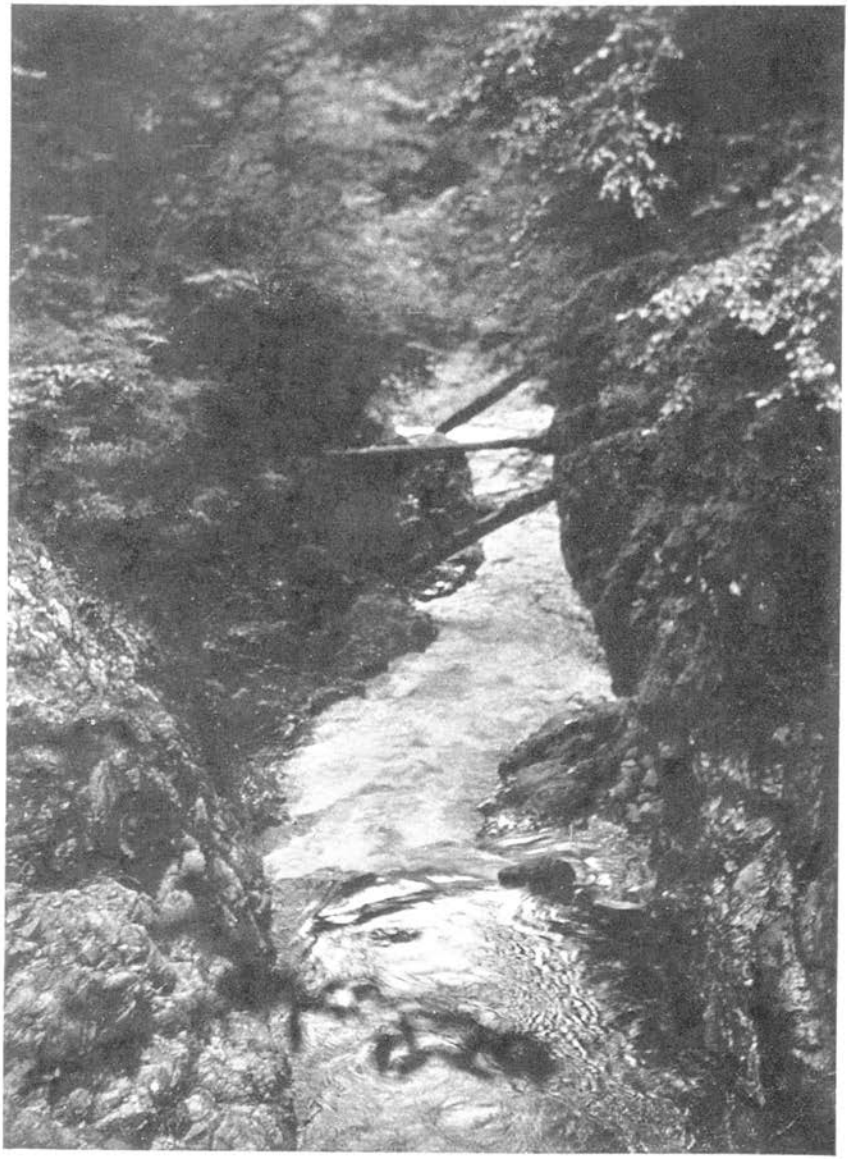

寸又川上流
概念図
N
0 10 20 30 里
我々ノルート
小屋
岩小屋
我々ノ露営地
(沢井他ノ名稱ハ大村雄作ニヨル)
加加登山
光岳
池口岳
編笠山
信濃俣
中尾根山
合池山
大根沢山
黒澤岳
大無間山
石小屋段
諸沢山
東平ホッ
ロクロ場
不動ケ岳
丸盆岳
黒法師岳
前黒法師岳
栗ノ木段
湯山
朝日岳
寸
又
川
大
間
川

H.K.

を荷馬車の後になり先になりしながら行く。寸又川は澄んでゐるだらうと大井川の濁流を流し目で見て行つたが、數日前の雨で寸又もまだ濁流だ。大間で遲い晝食を取つて午後六・三〇上閑造に着いた。御料林の造林小屋がありそこで泊めて貰ふ。今日の出發は八、一五だつたから荷物があれば上日向又は尾崎まで千頭から一日で行くにはもつと早く出なければならぬ。

十一日　日向澤に材木を切出す小屋がある。下日向の分敎場を過ぎ山腹をトラヴァースして居るこの道を尾崎の大村雄作方に着く。此處は一軒家である。造林人夫がたくさん入り込むので宿屋の樣になつてしまつたのださうだ。之から先の溯行に連れて行くつもりの雄作が湯山へ行つて居ないので代りの人夫を都合するために此處で泊る事を餘儀なくされた。然し夕方になつて雄作が歸つて來たので同行する事になる。此處から二百米位尾根を登ると上日向である。そこで僕等は米を分けて貰つた。對岸の天地にはもうずつと以前から住む人もなく此處（千頭尾崎）が寸又川にある最後の人家である。

十二日　七・〇〇出發。逆河內の出合が木の間がくれに遙かの下に見えた。八・〇〇アケビ澤の釣橋に着く。昔の小屋がけの跡はくづれてもう使へない。寸又の水はこのあたりになると大分澄んでは居るが底をすかす樣ではない。橋を渡つて道は二つに分れる。左へ行けば逆河內の上流へ出る。右に取つて諸ノ澤山の尾根を登る。三〇〇米餘も登ると道は二つに分れる。此處で魚釣りの父子に會ふ。河は水が高くてその荷物なら半分も浸るだらうと云ふ。道を右に取つて諸ノ澤山の山腹をトラヴァースする。一〇・二〇諸ノ澤の小舍に着く、まだ少々早いが晝食にしようと這入るとすぐ夕立が來た。對岸の小根澤に低く雲が垂れて大無間山から續く山稜が時々ボンヤリ顏を見せる。二時間程してやゝ小降になつたので出かける。道は段々荒れて雨に洗はれた草の葉がズボンをビッショリ濡してしまつた。三〇〇米の急な下りを飛ぶ樣にして降りると一本橋へ出る。このあたり兩岸の岩壁は差迫つて寸又の「猿飛」だ。二・三〇大根澤の釣橋。橋を渡ると道は全く荒れてすぐ本流へ出る。早速膝頭を深く沒する徒涉。雨



カマノシマの廊下　　工藤英司

に濡れた河原の石が黒くどよんで雲の低い空からは今も又降りさうだつた。とてもよく滑る石だ。また激しく降り出した雨の中をトチ澤の手前でやつと廣くなつた左岸の河原にテントを張る（四・〇〇）。

十三日　第二日は終日雨だ、時々の晴れ間に雄作が糸を垂れるが魚が少いのかあまりかゝらぬ。

十四日　雨は晴れた。八・二五出發、兩岸の低い壁をへつりながら一時間で長右衞門の橋場に着く。こゝには昔橋があつたのださうだ。三十分程右岸の藪を拔ける。河原でしばらく日向ボッコをやつて休む。流れは一一〇五米の獨立標高點を一周しながら北から藤崩（フヂクヅレ）澤を入れる。獨立標高點を周り終へて上手では澤は急に廣くなり八月の陽がギラ〳〵と照りつける。左岸の河原へ出て晝食にする。此處をベンテンと云ふ。

河原を右に左に徒渉しながら二・二〇兩岸の差迫つたカマノシマに來た。左岸に魚釣りの小屋がある。そして此處の廊下と瀧をからむために彼等の通る道がはつきりと踏みならしてある。豪地になつた林の中にルックザックを置いて瀧を見物に行く。廊下に懸つた瀧は餘り高くはないがすばらしい水勢であたりを響かせてゐた。赤澤の落口を眼下に見て道を辿ると右岸へ徒渉する。水量が少なければ澤通りを樂に通れるとの事だが水嵩があるので朽ち果てた道を傳つて三・五〇兵治の泊場へ出る。廣い河原だそして氣持のよい泊場だ。

十五日　泊場（七・二五）—アイノサワ—柴澤出合（八・四〇—九・〇五）—瀧—晝食—リンチョウ（一・一五）—ダルマ澤出合（一・四五—二・一〇）—瀧—露營地（四・一〇）

澤へ入つてから第四日目のこの日のコースがこの澤での惡場と云へば惡場であり又一番愉快な所でもある。

兵治の泊場のすぐ上手にアイノサワの泊場がある。が、じめじめとした草地で兵治の泊場の比ではない。それから柴澤の出合までは兩岸の河原と岩の上を濡れた草鞋で踏みしめて行けばよい。

柴澤の出合は廣い。出合の北西に魚釣りや獵師の小屋が一つある。そして彼等は此處からしばらく澤をはなれて尾根を行く。それは此處から上流が惡場の連續

でしかあり得ないからだ。

谷は急に狹くなり河原がなくて大きい石がごろごろとしてゐる。そしてあまり大きくはないが谷は瀧の連續である。長治郎が器用に下したロープを摑んで瀧をからむ。地圖にある廊下と瀧の位置は示されてゐる樣にはつきりとはしない。晝食を濟ませてからの谷は稍〻荒れた感じを僕等に與へた。そしてそれは文字通り瀧の連續だつた。だが其處を過ぎると谷は急に廣くなりリンチョウの河原へでる。リンチョウと云ふのは澤の名でなくてその廣い河原に付けられた名である。それ故にこそその名はダルマ澤の出合を過ぎて最後のヒウチ澤に入つてからもしばらく河原の廣い所にそのまゝ用いられてゐる。そしてヒウチ澤の左岸にある岩小屋をリンチョウの岩小屋と云ふ。其處には生新しい草の葉が敷かれて最近まで魚釣りの居た事を物語つてゐた。リンチョウはこんな谷の奥にこんなに廣い河原がどうして出來たのかと思はせる樣な廣い河原だつた。大井川の出合からこゝまで寸又川がこんなに廣い川幅を持つてゐた事はなかつた。だがしばらくして谷は又もとの荒峽に歸る。そしてそれは遂に小さな瀧に突きあたりそれから奥は暗い切立つた廊下である。長次郎が第六感で、先に行けば露營地があると云ふ。右岸の林の中へ取り付いて五〇米位も上をからむ。そして澤へ下りたら左岸に臺地があつて、僕等に適當な露營地を與へてくれた。

十六日　いよ〳〵尾根へ出る日である。七・二五出發、午前中空には一點の雲もなくたゞ青空のみが兩岸の間に青く青く澄み切つてゐた。西側のガレから出た押出しが谷を荒してゐる。地形圖が「井川」から「赤石岳」に移つて谷が二つに分れる右へと行く。谷の突きあたりは急な岩壁になつてゐる。最後の細いギャリーの上に冷い水が泉の樣に流れ出してゐた。

一・三〇僕等は光岳の頂上に立つた。カモシカ道に迷はされながらイザルケ岳の頂上へ出た時にはもうあたりはガスで包まれてゐた。少し引返して鞍部の北に露營する(三・〇〇)。

水は鞍部の南へガレをずつと下つて取りに行かねばならなかつた。

十七日　七・二〇出發。露營地のすぐ北の凹地に水が流れてゐた。有るか無しの尾根の道を時々に拾ひ當てながら一〇・〇五易老岳手前の十字路へ來た。信濃俣河内へと下る。信濃俣河内は殆んど全く荒れ切つてゐる。寸又川上流に比してひどく陰慘な感じを與へる。朽ち果てた道を辿つて中の俣の出合の上で新道に出る。大ヨキ澤出合上手の河原で最後の露營（五・四〇）。

十八日　坦々たる道を井川へ。

十九日　大村と殿村は大井川を千頭へ、そして僕等は大日峠を越えて夕方靜岡へ。

以上自分は我々の寸又川溯行の記錄を甚だまとまりのないものとして書上げた。

そして自分が此の山旅をふり返る時未だ殘されたこの方面の多くの澤の名を數へ上げる事が出來る。

逆河内、大根澤、大間川、栗代川、明神谷等等。

登山路として擇ばれた澤通しのルート以外に「澤あるき」と云ふ事を一つの別な問題として見る人達にこの方面の谷は更に多くの事を敎へるであらう。

五月の鹿島槍ヶ岳東尾根

田口一郎

（參照地形圖）五萬分一。大町

鹿島槍ヶ岳の東尾根は一九三〇年の夏冠、渡邊兩氏のパーティーによつて初登攀されたものであるがそれ以後一九三一年五月中旬の私達の登攀までに誰もこれを登つたものはない樣である。その最初の登攀に關する記事が發表される前に私達の登攀に就て記すのは何だか順序が轉倒して居る樣に思はれるが、日本内地のものとしては人の臭ひの少ない所だし、相當の變化もあり、とに角面白い山登りが出來る場所なので、今簡單に紀行文と云ふよりは雜錄的に此處に書くのも無駄ではない樣に思はれる。

冬、或ひは春の山としての鹿島槍ヶ岳が相當面白いものと認められたのが極く最近であるのに、それと殆んど同じ時分から、その登路としてはむしろヴァリエイション ルートであるこの東尾根の雪稜が京大や其他の人達によつて幾度か試みられた事は注目すべき事である。そしてそれらの試みが皆一ノ澤の頭か或ひはもつと進み得てもその附近を出ない所まで〻失敗に終つて居る事は東尾根が余程手强いものに違ひないと云ふ豫想を私達に抱かしめた。その上、去年の夏既に登られたと云ふ事も知る由がなかつたので可成の期待をもつて鹿島の新綠の谷に入つたのだつた。

東尾根は北槍の頂上より冷澤と大川澤との出合まで約一八〇〇米の高差をもつて落込んで居る尾根であつて、上から二二〇〇米位までは偃松及び短かい草が生えて居るのに過ぎないが、それ以下は實にひどいやぶである。尾根自體のもつ惡場は二四〇〇米から二七〇〇米位の間約三〇〇米しかなく、それも一寸見掛け倒しの所が多い樣である。だから本當に岩らしい岩はあつた所で上部の一〇〇米程の壁であつて、其處においてすらも穗高や劍などで云ふ所の「岩場」と何等異なる所がないのである。それよりも私達が行つた時に時間を喰つて、苦勞させたのは尾根に取付く前から、或ひは尾根の上で殆んど絕間なくやらされたステップカッティングだつた。

京大の人達が昨年の一月に試みた時も一ノ澤の頭まで往復十七時間かゝつて居る。もつともこれは一月であつた事を考へに入れなければならないが、法政の人達が行つた時も五月だけに可成上まで進まれたらしいがそれでも隨分時間は掛つて居る。之は後から聞いたのであるが冠氏等の時も矢張一の澤の頭で野營して行つて時間が一杯だつたさうである。その上今年は色々の狀態から見て雪も多く、季節がおくれて居るらしいので私達は途中でビヴァックをやつて登つた方がいゝと考へてその準備をした。

五月十三日夕刻鹿島の村に入つた私達はその夜狩野氏方で一泊し翌十四日午前六時に同氏方を出た。パーティーは僕と甲南高等學校山岳部の西村である。鹿島槍ヶ岳を冷澤から登らうとする同じ甲南のパーティーと共に私達は朝の氣分が未だ濃いこの高原を奥へ奥へと歩いて行つた。三〇分程で冷澤が大川澤と分岐する附近の河原についた。昨夕散歩に來た時に徒渉がいやさに流木を拾つて掛けた橋を渡つて河原の中で一休みする。まだ一寸三月の樣な雪の具合を見せる山容に朝日が赤くかゞやいて此上もなく美しい。見上げるばかり高くそびゆる東尾根の一角はヂャンダルムになつて居るらしく、容易く登れさうにもない。

小冷澤、一ノ澤と奥へ入つて行くにしたがつて斑らな殘雪も多くなり西俣と北俣との出合では最早川筋を完全に埋めて居た。この出合でシュタイクアイゼンをつけて初めの中はデブリが新しいのが、ごろ〳〵して居る所を、後になると二月末か三月初めに出たらしい巨大な二次雪崩の溝を登つて中岩澤の出合につく。この頃より雪崩の低いひゞきが廣い谷にこだまする樣になつた。これよりやゝ、北俣を登つて私達は午前八頃時カマ尾根から頂上に向ふ甲南のパーティーと分れて右側の雪溪に入つた。これは一ノ澤の頭からしばらく西走した東尾根が急に北折する所に入る相當大きなルンゼであつて、夏には可成の瀧がかゝる所らしい。しばらくはデブリも何もなくスキーをもつて來たらよかつたと思はす位の所であるが、やゝあつて右折する所からは全くデブリの山である。殊に最近降つた新雪が押し出した奴は非常に軟かくその上は登り難い事およ

たゞしい。

デブリの所を可成時間をかけて登るとこの雪崩のバーンに當る所に出る。こゝが夏の瀧らしく下にゴーゴーと水の音がして居る。雪崩のバーンではあるし、又瀧のしぶきが下からかゝるためか此處は硬く氷結して居て一つ一つ足場を刻まなければならない。アンザイレンして一時間程登り、上のテラス狀の地に着く。こゝから上、尾根までは一頑張りである。

丁度正午に東尾根の上に達した。まだ雪は三月の樣で此處邊りでは可成もぐる。アラ澤側は殆んど垂直に落ち、その上に可成の大きい雪庇が張出して居て一寸グロテスクである。こゝで晝食をとり一時頃まで寫眞を撮つたりして休んだ。

東尾根上部より北槍を望む

斷然ほがらかになる。こゝからゆるい下りをすぎると、下から見てヂャンダルムの樣に見えるピークの下までのずつと急傾斜の登りとなる。この急傾斜は夏とか其他コンディションの良い時には何でもないのだらうがこの時には殆んど全部と云つてよい位ステップを切らされて、上のピークの基部についた時には三時も大分すぎてしまつた。この上いくら時間がかゝるか判らないのでこゝの雪を少し掘つてビヴァックする事とした。

この上のヂャンダルムの樣なピークはどうも見掛け

五月の鹿島槍ケ岳東尾根　　田口一郎

倒しで冷澤側は傾斜も左程急ではなく密生した偃松におほはれて居る。アラ澤側は一寸手の付けられない程の凄味をもつに反してこちら側はその基部の一寸した岩の部分も今は深い積雪に埋められて何とぢゝむさくなつて居る事だらう。私達はこの偃松の中を泳ぐ氣は全然なくなつてしまつた。それかと云つてアラ澤側の岩壁は仲々登れさうにもない。結局冷澤側の岩の基部に沿つて少しばかりこのピークをまく事にした。翌朝の勞苦を少しでも減ずる爲にステップを作りに出かけて一時間程先まで行つて野營地に引き返した。

ハムのスープと黑パンで夕食を濟して熱いポスタムを啜る頃、あたりは最早暗くなつて眞下に大町の灯がまたたき出した。さう澤山もない防寒具を着こんで私達はツェルトザックをかぶつて坐りこんだ。夜中に滑り落ちない樣にアンザイレンして太い偃松の幹にその端を結びつけたまゝ。それ程この場所は危つかしい所だつた。けれどもそれだけに私達は今までパイオニアー達が偉大な山々でやつた數々のビヴァックの辛さと價値との片鱗を僅かに偲ぶ事が出來た。

その夜は寒かつた、豫想以上に寒い夜だつた。耐へ切れなくなつて一度はアルコールを燃して暖まつた。

それでも夜明にはどうやら眠つて袋の外の明るさに氣がついた時は十五日の午前四時半近く、日本の中部地方は一帶に雲海の底にかくされて高い山々のみが島の樣に浮いて居た。その雲海は恰も嵐の海の樣に非常に凹凸のはげしいもので今日一日の天氣のもたない事をよく示して居た。

昨夜と同じ食事をとつて場所を片付けてアンザイレンしたまゝこゝを出發したのは七時前だつた。昨日のステップを辿つて更に新しいステップを刻みつゝジャンダルム狀のピークより高い所に登つてしまつた。このピークは下から見るとジャンダルムの樣であるが實際はさうではなく、そのまゝ上の方につゞいて居る。

この上は尾根は一〇〇米程の垂直に近い岩壁でさへぎられて居る。この岩壁は東尾根中の唯一の惡場でこれさへすぎれば北槍まではもうゆるい尾根である。

實際の尾根筋は殆んど垂直に近く、その上私達は僅かな鋲しか打つてないスキー靴を穿いて居たための精

神作用も手傳つて、一寸登れる確信がつかなかつた。然しこの岩壁は、その中部を冷澤側に向けて斜に走る可成の幅のバンドを持ち、そのバンドにはまだ下から見ては氷ともつかず殘雪ともつかない樣なものを殘して居る。とにかくこのバンドに達すれば後はステップを切るだけでこの岩壁の上に立てると云ふ見込みがついたので、一寸したクレヴァスを渡つて岩に取付いた。此處から上のバンドまでの私達が取つたルートはヴァンドと云ふよりもむしろ急な（約七十度程）半分は草付のガリーで、シュタイクアイゼンをつけたまゝ登ると非常に樂であつた。このガリーは、私達は二〇米の間隔で各自が五回動いたから一〇〇米程になるわけである。この上の雪のヴァンドは下から見たよりは案外急で、手掛りまで切つて登つた位で、これが一〇〇米程續いて私達はこの岩壁の上に出た。丁度九時だつたから二時間餘りかゝつたのだ。こゝに一つケルンがあつた。後から渡邊氏から聞いたのだが、氏等のパーティーはアラ澤側をまいてアラ澤の中に下り、アラ澤の頭と此處との間の小鞍部に出たので、ケルンはその翌日この邊りまで遊びに來た時に積んだものださうだ。

もう東尾根の最難場をすぎたので、のんびりした心を抱いて私達はゆるい尾根の上を登つて行つた。朝から怪しかつた空にはカナトコ雲が出現してもう天氣は長く保たない事を示して居る。早く下りないとずぶぬれになる、それだけならまだいゝが先刻から始まつた雪崩が雨となつてはもつとひどくなるので睡眠不足の身體を勵ましつゝ登つてゆく。カクネ里の最上端の凄い岩壁を見下して急な細い雪稜を登ると鹿島の北槍の頂上だつた。十時一寸過ぎであつた。空は一面に曇つてしまひ、溫い太陽も照り來らず、風はだん〳〵ひどくなる。とても寒い。劍も淡くくもり、毛勝猫又の山々もいつものやさしさを見せない。

もう間もなく天氣が崩れると考へて、北槍と南槍との鞍部まで馳せ降りて晝食をとる。最初の計畫では南槍を越えてカマ尾根から冷澤に下る筈だつたのだが南槍は割愛して北俣の雪溪をグリセードで飛ばす。少し下つてからザイルをといて自由の身になつて下へ下へと滑つて行つた。傾斜がゆるくなる頃からは例の新雪

の雪崩のデブリがもぐつていやな思ひをさせられた。途中で兩岸から幾度も雪崩が落ちてひや〳〵させられたが廣い北俣の眞中までは來ないので安心だつた。昨日希望をもつて登つた道を今日は滿足な心を以て下つて行く。三時には鹿島の村に着いた。

往復に要した時間のみについて云へば敢て二日をかける必要もなかつたのであるが、矢張り一日では可成辛い。特に冬に登るには必ず二日以上を要するだらう。今の日本の山登りの中では可成大物の方だと云へやう。

東尾根を冬登るのは相當難しいものだと思はれる。第一尾根に取付く方法が大問題だし、私達の時には容易だつた所も冬の狀態ではどうかわからない。上の岩壁等も冠氏等のパーティーの採られた樣にアラ澤側をまくのも相當困難に思へるし、私達の行つた所も一寸登れないのぢやないかと思へるのである。いづれにしてもまづ三月頃に試みて見るべきである。

東尾根の岩の部分は案外硬い樣である。殊に途中のジャンダルムのアラ澤側なんかは見ても氣がすつとしさうな所である。その他上の岩壁邊りから冷澤側にかけては可成廣い範圍に亘つて植物の少ない硬さうな岩がある。之等は前のものより傾斜もゆるく容易に取付けるだらう。併し前のものにしろ、之等のものにしろいづれもさう大きいものではなく、せいぜい一〇〇米か二〇〇米位のものであつて、登つた所で面白くないと云へばそれまでのものである。

（一九三〇年六月一三日）

鹿島槍ヶ岳東尾根に就て

渡邊　漸

前掲の田口氏の記錄を補ひ且つこの機會に自分等の登攀に就て述べるのも万更無駄ではないだらう。

本誌の四年三號の口繪に辻本氏の撮影された「祖父ケ岳より望める鹿島槍ケ岳」といふのがある。その寫眞を見ると東尾根が急傾斜のスカイラインを限つて雲の中にと落ち込んで居るのが分る。この寫眞を自分に示しつゝ東尾根が面白さうだと言ふ事を敎へて呉れたのは會員今西錦司君で、確か一九二六年の秋だつたと思ふ。一九二八年の五月に會員田中菅雄君がこれを試みられたと聞いた時には自分達は殘念な事をしたと思つた。然し後で「山想」に發表され、又同君に直接聞いた處に依れば、所謂田口氏がジャンダルムと言はれる岩峰の下まで達せられたものであつた。

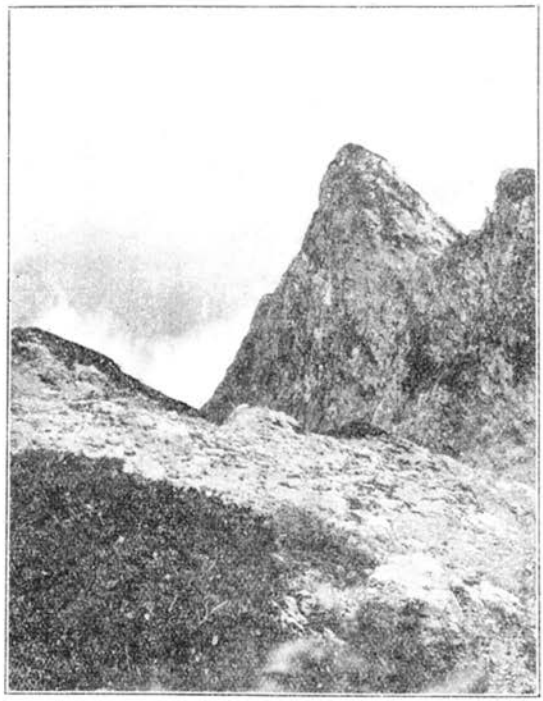
今日、一の澤の頭で通用して居る、大冷澤一の澤の頭に當る二〇〇三、九米の峯へは已でに一九二八年の夏、今西君等が荒澤側から登られてゐる。

一九三〇年の一月一日に、會員四手井綱彥君外四名よりなる京大旅行部のパーティーは營林署の小屋を夕刻出發して尾根筋を辿り約十時間を費やして夜明け方漸く一の澤の頭に達し、到底一日の間にこれを往復する事の不可能を知つて往路通りを引返したのだつた。

この經驗よりして一の澤の頭に於て野營を試みたらば先づ成功は疑ひないものだと言ふ事を知り得た。同年四月十日、會員、今西錦司、同四手井綱彥、同西堀榮三郎、同高橋健治、奥貞雄及び自分の六名より成るパーティーは早朝、營林署小屋を出發して一の澤の頭に達したのがまだ晝にならない時分だつた。尙前進して適當の個所に於て野營をする積だつたが、この頃からスカイラインは鈍く氣溫は上昇し濕度は增加して、翌朝の雪面の凍結は到底望まれぬものとなつたので空しく引返へさねばならなかつた。その時下降に際しては一の澤の頭を少し過ぎた邊りから大冷澤へ落込む小さい澤を採つた。

同年八月、冠氏と共に自分は幸にその初登攀を試みる事が出來た。この時には春、自分達が降つた枝谷を

大冷澤から溯つて一の澤の頭に達した。田口氏が登られた澤からの登攀は雪が殘つて居る間でないと不可能で、自分達も最初はそれを登らうとしたのだが、途中に數多くの瀧のある事を遠くから望見し得たのでこれは止めにして、もつと下手の小さい谷を選んだのであつた。春には何の變哲もなく降る事の出來たこの澤も夏にはさう樂ではなく、一寸した岩場を攀ぢたり、或ひは瀧の横を絡んだりする事を強いられた。一の澤の近くは恐ろしく濃い藪で掩はれて居るし、加之に尾根が痩せて居て狹いしするので、其處での野營はともすれば轉がり落ちさうになるのだ。これから例のジャングルムの下までは猛烈な藪續きであんな處をよく行つたと後で笑はれた位である。然しあの時に大分切開いたから今後行く人々に取つては可成便利な事と思はれる。



上方より見たる東尾根の峰岩

冷の河原からよく見える鋭く尖つた大きな岩峰、この岩峰の下で一の澤の頭からの尾根はその平らなフェイスにどんとぶつかつて此處で終つて居るかの感がある。そして向つて左手には田口氏等が登られた澤が延びあがつて來て居て、更にその先はずつと上の方まで續いて居る。右手は荒澤側に垂直にきれ込んで居て尾根筋と言ふより荒澤に面した斷崖の端を歩んで居ると言ふ氣がする。この岩峰が

尾根と相接する處は約十米ばかりの間、岩が露出して居るが、それから上は偃松がびっしり生えて居る。少し右手に取つて小さいリンネに略〻沿うて登つて行くと案外樂にその頂點に達する事が出來る。そしてその頂點からだら〳〵と十米も降ると、其處に例の田口氏等が登られた澤のどんづまりが延びて來て居る。この鞍部を隔てた向ふ側の岩峰は登れない事はないだらうが多人數のパーティーに取つては恐ろしく時間を喰ふに違ひないので、自分達は荒澤側に斜め下に走る草付きのバンドを見出し得て一旦荒澤の底まで降り、ガラガラとした雪溪の雪の消え失せた後の不愉快極まる細かい脆ろい岩滓の堆積を谷筋通り百米ばかり登つて尾根が急に北に折れる地點にと登り切る事が出來た。此處が五月には果してどうであらうか。恐らくは夏よりもずつと樂だらうと思はれる。然し積雪期に於ては日射の影響を受けない粉雪を多量に貯へて居て登攀者を惱ますであらう事は想像に難くないし更に雪崩の危險を考慮せねばならないから、田口氏等の採られたルートの方が適當して居る樣に思はれる。兎に角、一月にはこのピッチは相當の困難さを要求するものとみて差支へない。

このピッチを過ぎると荒澤とカクネ里とを分つ、所謂天狗の鼻の尾根が來り合して居る。この尾根からする登攀は一の澤の頭の尾根續きよりするものよりは手強いもの〻樣に思はれる。一九三〇年の八月に今西君等はその登攀を試みたが天候不良の爲、中途より斷念せねばならなかつたとか聞いて居る。

この二つの尾根の一緒になる地點から先は坦々たるもので、一時間も掛らずに北槍の頂きに達する事が出來る。一の澤の頭から頂上まで夏期に於ては一日の行程と見て間違ひない、最も行程の捗る五月に於ては早朝營林署の小屋を出發すれば一日で吊尾根の野營地まで到達する事は可能であらうと思はれる。

四月の鹿島槍ケ岳東尾根

渡邊　漸

東京から見える山の寫眞

山口成一

寫眞「富士山遠望」は昭和六年三月一日の朝東京市外角筈、三越新宿支店屋上から寫したもので、この企てに一方ならぬ厚意を寄せ特別の便宜をはかつて下さつた三越新宿支店長茂木作太郎氏、會員松宮三郎氏及び冠幹事に深く感謝する次第である。

使用器材、撮影要項をあげると、レンズはロツス製ホモセントリック、七吋とテレネガチヴ、一・七五吋との望遠組合せ。フィルターはラットゥン・エイ。乾板はイルファード・スペシャル・ラピッド・パンクロマチック。ポジチヴ・レンズの絞りはF・一一。露出は一一秒。カメラの有効伸長は一二吋。焦點は約五吋。

東京からの山は昭和五年から時々寫してゐるが研究不充分と技術未熟のため網版の原稿に適する原畫を得るに至らない。昭和六年の撮影のうちから、いくらか出來のよいものを提出したところ幸に掲載せられることになつたが網版の出來榮は不安に堪えない。始めてまだ間もない不完全なものを發表するのも如何かと思ふし、霞ケ浦から名古屋築港の撮影、米國スチーヴンズ大尉の一七、〇〇〇呎の高空から二二七哩の遠方にあるレイニヤー山の撮影に比べて余りに貧弱な結果であるが、方法の大略を説明して望遠寫眞に興味を持たれる方々の教示を得たいと思ふ。

ラットゥン・エイ・フィルターは波長五八〇ミリ・ミクロン以下の光線を吸收するからエイリヤル・ヘイズの大部分を除くことが出來るが眼に見える程度の明瞭さしか得られない。眼によく見えない山まではつきりと寫出すには赤外線を用ゐなければならない。イーストマン・インフラレッド乾板は赤外線用フィルター・ラットゥン、八八號エイに對して倍率八八、〇〇〇倍以上となるのと、前記の組合せレンズは絞りをF・八八位にして用ゐぬと焦點が甚だしくぼけるのとで結局露出は八時間内外の計算となつて實用にならない。この露出はやゝ過度かも知れないし、乾板を豫め處理すれば感度を高めることが出來るから、もつと短かい露出で濟むが、どんなに方法を講じても二時間位の露出は必要と

思はれたので赤外線の利用は一度ためしただけで中止した。レンズはロッス製エクスプレッス、五・二五吋。フィルターはラットゥン、八八號エイ。乾板はイーストマン・インフラレッド。絞りはF、四・五。露出は一分四〇秒。昭和五年三月二二日午後一時快晴。赤外線を用ゐるにはF、四・五位のレンズを要するので費用の點で斷念する外なかつた。この撮影には焦點三〇吋以上でないと結果が思はしくないのでF、四・五とすればレンズだけでも高價な上にフィルターも直徑七吋以上といふイーストマンの定價表にもない大きなものを要し、オプチカル・フラットに挾んだものが必要だから、これまた、可成高價と思はねばならぬ。その上蛇腹附きのカメラはレンズとフィルターの重量に堪えず振動が烈しいから、堅固な箱型とし脚をずつと強固にする必要があつて仕掛けも余程大袈裟となつてしまふ。

赤外線に依らずラットゥン・エイ・フィルターを用ゐると前にも記したやうに山のよく見える時でないと、うまく寫らない、山のよく見える日はきまつて風が強い、從つてカメラが動搖して畫像がぼけてしまふ。そこで山は明瞭に見えるが風はさして強くない時を選ぶ必要がある。しかし、そんな日は一冬にさう幾度もあるわけでなく、それも殆んどその場にならぬとわからない。自宅の屋根から見て今日こそは大丈夫と大急ぎで新宿へ馳せつけて見ると、すでに山は霞に薄ぼんやりとしてゐる。また今日は到底見込のないものとしてあきらめて外出し、電車の窓からふと北西の空を仰ぐと思ひがけなく雪を載いた連山がくつきりと見えてゐることなど度々あつた。然し大體に於いて雪又は雨の翌朝或ひは、その後に續く快晴の日に機會があるやうで、また、そこをねらふわけだが本當によい條件に出遇ふのは運といふ外はない。

オーエン・ウイラー氏の著書にもある通りレンズの前には深いフードを付けると焦點を合はせるものに容易であるし、乾板のかぶりを防ぐ事も出來る。長さ四・五吋で長方形の窓をもち、內部を艶消し黑色ニスで塗つたものを用ゐて居るが相當効果があるやうだ。レンズの組合せ筒の內部は艶消し黑色ニスを塗つた上に光線除けを取附けて筒の內面から反射せられる餘分の光

線を遮斷して、かぶりを防ぐやうにしてゐる。カメラのなかは暗くて焦點を合せるのになかなか困難であるので一〇倍のルーペを用ゐてパララックス法により出來るだけ精密に焦點を合せて居るがまだまだ未熟である。露出には手でレンズの蓋をとつてゐるが振動をさせぬやう注意を要するやうである。

乾板はイルフォード・スペシァル・ラピッド・パンクロマチックが何時でも手に入るしよく保存に耐へ感光度高く赤色感度にも優れ、ラットゥン・エイ・フィルターに對して倍率、六に過ぎないので、これぱかり使つてゐる。感光度增進處理は保存力を著しく減ずるので試みない。この點で天氣が正確に豫知出來ないのは大變に不便である。

現像はイルフォードの處方によりタンクを用ゐてゐる。相當コントラストのある原板を得るには攝氏一八度で三〇分間の現像を要する。こんな長い現像はかぶりを生ずるやうに思ふが他の處方を試みるまでに至らない。（Capt. Owen Wheeler, F. R. P. S. — Modern Telephotography 參照）

風致の保存に就て

冠　松　次　郎

風致保存と云ふことは隨分久しい間喧傳されてゐるが、それにも拘らず、私等に最も交渉の多い、原始的の自然美を持つてゐる勝地の保護に就ては、最近までに識者の間にさへあまり注意を拂はれてゐなかつた。そして反對に營利を主とする事業家達は、何時も、自然美に親炙して滿足してゐるやうな超世間的、非人情的な人達よりの遙に鋭敏であり、冒險的であつて、前者は後者に先鞭をつけることが常である。人にあまり知られなかつた高山と深谷を、多くの人が漸くその風致の優れたものに着目する時分には、既にこれ等事業家達は、その自然の核心にまで喰ひ入つてゐることは珍らしくない。

登山界の仕事、たとへば日本山岳會の人達が、研究し實現しつゝある冬山登攀についての雪崩の研究とか、岩登りの研究とそれに要するガイドブックの編輯とか、又は山小屋建設及びその改良とか云ふやうな、登山に缺くべからざる施設や研究は、勿論珍重すべきものであるが、さう云ふものゝ必要を認める爲め對象とすべき自然、山岳を中心とする自然美の保護は、更に根本的であり、緊要なものではないか。然るに「山岳」誌上でさへそのことの發表さるゝことが甚だ少ない、或は殆どなかつたのは、不思議であると思へば思へるのである。

然しその主なる理由は最近まで幸ひに、登山家が興味を集中してゐた高山地方には、その風致を害するやうなことが少なかつた爲と、もう一つはあまり賞めたことではないが、保勝の爲に奪ひ立つやうな有力の團體がなかつた爲であると思ふ。然るに今や日本山岳會は更生の意氣を示し、內務省に於ては國立公園に對する施設を急がんとせらるゝ好時期が到來したので、今後實際について研究調査して、保勝の實を擧げやうとすることは、或は少し立ち後れの感はあるとしても、是非にも遂行しなければならないことであらうと思ふ。

地方にも保勝會と云ふものは到る處にある。然しその多くは眞の意味での保勝を目的とせず、空宣傳をこと〻し、遊客を迎ふることにのみ急であつて、肝腎な自然美は、却つてその似而非保勝會なるもの〻、俗惡な施設によつて害はれつ〻あるものが少くない。

殊に地方の保勝會の多くが賴むに足らないことは、他の大きな經濟的施設が、その保勝區域に創始された場合、これを阻止する力が甚だ微弱であると云ふことである。

たとへばある溪谷に水力電氣の工事が始まつた爲、その形勝の一部、而も主要なる部分が破壞されんとするとき、風致保存の爲には極力反對すべき筈の地元の保勝會は、これ等水電工事の爲に、その郡村は勿論縣下に到る迄、却つて經濟的の恩惠を受くることが甚大なる故をもつて、反對を爲し得ない事情に陷ることが多い。そして僅かに水電の糟粕をなめ、その工事に破壞された以外の箇所を、名勝として保存することに甘んぜざるを得ない立場にあることが多いのである。それであるから直に徹底せる意味にこの保勝運動は、その地元の保勝會によつてのみは望まれないのであつて、少なくとも全國的な官民相携へて立つやうな、運動を必要としなければならないのである。その官民提携に最も支障を來たすものは政黨と事業家達との關係であるが今はそれを述べない。

更に溯つて考へれば、日本の代表的風景として推賞すべき程優れたる地域に於て、當然その自然美を破壞する工事を施すべき水力電氣會社に向つて、何故に水利權の認可をしたのか。その認可を與へる以前に於て豫め調査機關を設けてその實地について調査し、保勝問題その他の事について考究せる後、差支なき區域に於てのみ許可をしなかつたのか。若し實地に就ての精密の智識を缺いてゐる者が、漫然として認可を與へたとしたならば、それは實に沙汰の限りであると私は云ひ得ると思ふ。

認可を與へた結果工事は漸次に進捗する。數年の後に到つて保勝の聲の大なるにつけ、漸くその優れたる景勝地なることを發見する。今更認可を取消す事も出

來ず、さりとて工事が進捗すればその勝地は殘害される。工事は部分的であるとしても、勝地がその中心地點に於て回復出來ないやうに破壞されゝば實に國家的の大損失を來すばかりでなく、子々孫々に對して申し譯がないことになる。結局當局者も事業家も非常の苦境に立つことになるのである。

越中の黑部川の例がそれであつて、現に立山群峯、後立山連峯、藥師岳、水晶山に跨る黑部流域を國立公園に設定せんとすれば、水電の工事は現在より深入せしめないやうにしなければならない。否現在でさへ既に入り過ぎてゐるのであるから、何とか阻止することが焦眉の急になつてゐるのである。然るに電力會社は、道路に測量に、小屋の建設に重要地點の買收に、巨額の費金を投じてゐる爲に、今日となつてはその補償を爲すことさへ容易でなくなつてしまつた。さうかと云つてこのまゝに放擲しておけば、高山風景を具備せる大峽谷、島國日本に於て又と得られない雄大な風景はとり返へしのつかないことになる。

今から八年前、私は黑部川保勝のことについて、都下の有力なる、そしてさう云ふことに同情を持つてゐる、ある新聞紙に投稿したことがあつた。その時分には世間では水力電氣の工事が風致に及ぼす破壞性が甚大なることを今日の如く感じてゐなかつた爲か、或は拙文が一顧の價値を持たなかつた爲か、それは遂に掲載されずに返却された。その後當局に對して一片の意見書を呈したが、それには丁寧な返書があつた。要するに水利權の認可があつた以上、その工事に便宜を計ることは已むを得ないと云ふ至極尤な理由が書き添へてあつた。兎に角私等のやうな一介の登山家、何等背景を持たない者が、まだ世間で認めてゐない、目覺めてゐないこのやうな問題について、建言し運動したところで無効であると思ひ、私はそれ以來方向を變へ、黑部川と云ふものを廣く世間に紹介するのが得策と信じ、禿筆を以て何冊かの小著を刊行したのである。

以上は水力電氣のことのみに限らず、森林の伐採、鑛山の採掘等にもあてはまるのであつて、要するに風

致保存と云ふことが國家的大事業であるとされてゐる今日、吾人はよろしく過去を資料として、將來に向つて大いにこの問題の爲に考究し努力すべきであらうと思ふ。

終りに一言附け加へておくが、元來視野の狹い私、殊に外國のこの種の事情に不通なる私が、かう云ふことについて書くのは甚だ潛越であることを知つてゐるが、私はこの拙文が一つの手引となつて、更に優れた意見をもつてゐらるゝ方が、續々とその所見を發表せられ、この問題について貢獻せられんことを望む情の切なる爲に、敢てこの蕪文を草したのである。

（昭和五年十一月稿）

「山日記」一九三一年版の發行

角田吉夫

「山日記」一九三一年版は梓書房を發賣所として、昭和六年五月十日本會より發行せられた。昨年の六月多年の懸案であつた「山日記」は初めてこの試みとして刊行されたものであつて、本年はその後を次いで、內容に增補訂正を加へて、編纂されたものである。

內容、目次

一、暦　自昭和六年六月一日、至昭和七年五月三十一日
一、登山經歴欄
一、自由日記欄
一、登山の注意（木暮理太郎）
一、冬期登山に就いて（松方三郎）
一、服裝と用具及び食料（同）
一、登山用品表（同）
一、遭難信號
一、應急手當及び登山衞生（渡邊漸）
一、本邦主要山岳高度表（一五〇〇米以上）（木暮理太郎）
一、外國の高山百座（同）
一、本邦主要峠高度表（一〇〇〇米）以上（角田吉夫）
一、高山植物採取規定
一、山小屋（角田吉夫）
一、山案內（同）
一、日程表（渡邊漸）
一、山岳語彙日本の部（藤島敏男）
一、山岳語彙外國の部（同）
一、山岳文獻抄
一、氣象表
一、寒暖計比較表、度量衡
一、郵便規定、鐵道規定、各計三七〇頁
一、全國五萬分一地形圖區劃一覽表
一、旅館、溫泉、商店廣告欄　以上別頁

定價壹圓、會員豫約頒配價八拾錢　以上

編輯經過は次の如くである。

昨年山日記が刊行された時には熱心なる登山者より

その内容について、多數の意見、希望、叱正、誤謬指摘等を寄せられたる事は實に驚く可き程の數にのぼり、本會として深く感謝した次第であつた。その數は千數百件に達し、殆んどこれ以上に新事項の提案は不可能であらうと思はれるばかりであつた。

一九三一年版の山日記の編輯に着手したのは昨年の九月であつた。編輯委員浦松佐美太郎、藤島敏男、藤田信道、槇有恒、松方三郎、渡邊漸、角田吉夫の七名であり、大體の方針は前述の多數の寄せられたる提案に基き、之を分類し、統計表を作成したものを根底とした。そして發行を昨年より一ケ月早める事、携行に便なる事、簡潔を旨とする等であつた。

今年度版の内容に新らしく加へたものは登山經曆欄、外國高山百座、本邦主要峠高度表、山岳語彙日本の部等が主なるものである。其他の項に於ても大部分は稿を新たにせるもので、執筆者も昨年と異る所が尠くない。尙新らたに調査せる項は山小屋、山案内、山岳語彙日本の部の三である。山小屋は昨年の一七五に對し三一三、山案内は昨年の七三に對し九三の數字の如く、非常なる增加を示してゐる。本會より發したる調査に對し心良く回答を與せられたる諸氏に對し深く感謝をする處である。又山岳語彙は各地の篤志家の好意によると共に、會員柳田國男氏より多年蒐集せられし多くの貴重なる材料を全部提供して下さつた事は望外の喜びであつた。

尙「山日記」の爲に熱筆下された諸氏に對し此處に感謝の意を表するものである。惡性の風邪におかされてゐた木暮氏に多數の原稿を御願ひした事は誠にお氣の毒に堪えなかつた。曆の欄は昨年と同じく、編輯に苦しんだ所で、昭和七年一月乃至五月の分は黑田正夫氏の御盡力によるものであつて、月の出入までも詳細に計算されたのであるが、編輯の都合上割愛した。峠の高度表は法政大學山岳部員の手によつて調査されたもので、約一週間に亘り、本會圖書室に集合してはカードを作成して下さつたものである。

山小屋と山案内の調査は一月早々問合せ書の發送に着手し、四月十日を以て終了した。本年は各小屋の所有者も組合、案内者の住所も判明したために、問合せ

書の發送部數は昨年の二倍位にのぼつてゐる。問合せ書の內容は昨年と大差はない。山案內者の冬期登山經驗及びスキー能力の有無の項を除いたのは、會としてはその能力の程度を測る事の不可能であつた爲である。充分なる冬山の案內の資格を有する者には勿論それを認める事は當然である。けれども、又その反面には僅か一圍の經驗者に過ぎないものでも同等の資格を與へた結果にもなつた。信州南安曇郡の案內組合に今年度より等級別の制度が設けられた事はこの問題を解決に導く一つの方法とも見られる。來年度の調査迄には案內者の資格の問題について、充分研究しておき度いと考へてゐる。

會員への販賣方法については、昨年は發行日の遲れた事と、時間のなかつた爲に充分なる便宜を計る事が出來ず、十五錢の割引券を發行したが、今年は發行日を〆切として會員に對し二割引の豫約を募集した。

其他山日記のために特に原稿を書いて下さつたものに、槇有恒氏の「氣象に關するもの」佐々保雄氏の「登山者のための地質學」の二編があつたが、頁數の關係で割愛した事は執筆下さつた二氏に對し深くお詫びをしなければならない。編輯委員としても非常に遺憾に思ふところであつて、將來この二編は何等かの方法に依つて發表したき希望を抱いてゐる。

來年は更に、より以上に內容の充實した、そして立派な山日記の刊行される事を期待して止まない。山に關する言葉、山小屋、山案內の三つの調査は會の事務室に於て編輯にたづさわる者のみの力では決してよいものは出來上らない。將來とも會員諸氏の御援助を御願ひすると共に、山日記の內容について叱正と鞭韃を賜らば幸ひである。

日本北アルプス登山協議會概況

矢澤米三郎

長野運輸事務所長の發起で五月七日松本市中央電氣會社支社三階に開會す。來會者は長野縣内務警察及學務三部長、松本市長、山麓四村長、關係三警察署長、二營林署長、信濃山岳會長以下六役員、旅館溫泉山小屋及案内組合、商工會議所、郵便局長、鐵道自動車各代表者、土産品寫眞販賣店等、通計九十三名。外に富山縣より電氣局、黑部鐵道及山岳會代表三名の參加せるあり、頗る盛會なりき。

午前九時原田運輸事務所長議事席に就き、左の演說を了り諸案につき審議せり。

▲講　演

1　開會の辭　原田長野運輸課長
2　所　感　中里長野縣警察部長
3　山小屋の改善に就て　木地松本營林署長
4　所　感　櫻井長野縣衛生課長
5　所　感　中園長野縣社會課主事
6　山岳氣象豫報に就て　宮野松本測候所長
附　說　大久保同所技手
7　所　感　小里松本市長
8　日本北アルプスの價値　矢澤信濃山岳會長
9　所　感　大谷ジャパンツーリスト主事
10　同　井上鐵道事務官
11　同　平井觀光局事務官
12　同　茂木運輸旅客係

鐵道局の提出題左の如し

1　登山地に對する粁程、所要時間、諸物價、自動車賃、山小屋宿料案内料金に就て　名古屋鐵道局
2　登山客誘致並參考に供せん爲め本期山小屋其他の施設に對し改良せらるべき點に就て　名鐵
3　本協議會を毎年一回（四月頃）開催し毎年度の物價宿料其他案内料金の協定をなし又一般登山者よりの希望をとりて改善することとしては如何　名鐵

4　登山案内料金、山小屋宿料値下の件　東京鐵道局
5　放送に關する件　同
6　北アルプス聯合共同宣傳に關する件　同

▲協議事項

A　一般に關するもの

1　登山協議會を毎年四月頃開催の件　（可決）
2　共同宣傳に關する件　（可決）

B　案内人に關するもの　委員會委員長　關根壽夫君

1　案内人の管理統一及料金引下に關する件（研究）
2　案内人營業取締規則制定の件　（研究）
3　案内人の改良（不作法、不案内、不整頓、山岳知識向上、特約小屋へ强制、ローカルカラー欠如等）（注意）
4　案内人を判別すべき腕章を定むる件　（可決）
5　カード又は手帳を持たす件　（考慮）
其他希望若干あり

C　山小屋旅舍賣店に關するもの

（委員會附托）委員長　矢下治藏君

1　山小屋の新施設に關する件
一の俱小屋のモダーン施設計畫、中の湯にテニスコート及食堂新設、各山小屋に天氣豫報を通知すべきラヂオ新設等の陳述あり
2　槍ヶ岳附近に官設小屋を設けられたし（研究）
3　殺生小屋邊に理想的山小屋の設置希望（研究）
4　外人誘致の設備を望む　（承知）
5　ラヂオ放送施設を望む　（承知）
6　山小屋に掲示板（通信用）を望む　（承知）
7　案内料並に宿料値下の件
（凡一割内外引下に決定）
8　山小屋宿泊階級徹廢の件　（現に階級なし）
但し上高地、中房、白骨、立山等は現に遊覽地にして山小屋にあらずと認む
9　サービス改善、茶代廢止、宿料掲示を望む（承知）
10　テントの用意、公德販賣小屋設置を望む（研究）
11　物價を平地と懸隔なき樣希望　（少々無理）
12　寫眞用暗室を希望す
（現に主なる山小屋には有り）

13 山上の炊飯に糯米を加ふる件　（研究）
14 寢具の改良希望　（承知）

D　交通に關するもの

（委員附托）委員長　三品周爾君

1 登山路の粁程、所要時間調査　（承知）
現に信濃山岳會の年々發行する登山要項あり
2 道標の完成、里程記載、名所指示希望　（承知）
3 信頼すべき登山地圖作成の件　（承知）
4 汽車電車自動車增發の件　（研究）
5 上高地行自動車賃値下げの件　（研究）
松本中の湯間二圓二十錢とす
6 三等寢臺車を中央線に連結の件　（不可能）
7 急行車を中央線（名古屋より）に發する件　（不可能）
8 天候豫報の件　（承知）
驛々に掲示の外、車内にて通報す
9 所々に婦人便所を設くる件　（承知）

尚其他各地より提出又は希望の小問題あれど煩を厭ひて之を省けり。特に問題の豫選宜しきを得ず玉石混淆の嫌ありしのみならず、往々指名惡口せし投書等をも一々議題とせしはその當事者の感情を害せしものなきを保せず稍々遺憾とする所なり。

附

同會閉會各官廳關係者退場の後矢澤座長となりし左の建議案を附議せり。

日本北アルプスの國立公園達成
促進に關する建議案

内務大臣宛

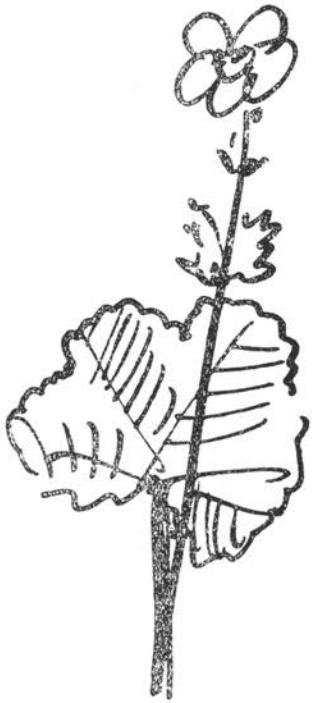
日本北アルプス連峯は今や遠近老若憧憬の中心たり其の山岳の尊嚴、大雪渓の偉觀、森林の欝葱、風光の明媚、高山植物の豐富、御花畑の壯觀、氷河資料の存在スキー練習場の分布優に天下に冠絶するのみならず藝術上より見るも精神修養の道場たる點より云ふも煩劇なる士女學生青年の休養所たる點より云ふも一般國民健康增進の靈域たる點より見るも國立公園候補地とし

て其の唱首に居るべきものたるを信ず吾人は當局の速に此連峰を選定して國立公園の施設を斷行せられんことを望む。

茲に本會滿場一致の決議を以て此段及建議候也

信濃山岳會幹事武田鎌次郎氏右決議案朗讀の上簡單に說明し一名の異論者なく之を可決せり此時越中山岳會幹事伊原清治氏起て一場の挨拶あり熱誠其步調を一にすべき旨を陳べたり。

（昭和六・五・一三）



新刊紹介

Im Kampf um den Himalaya. Der erste deutsche Angriff auf den Kangchendzönga 1929. von Paul Bauer, München, 1931.

The Kanchenjunga Adventure. By F. S. Smythe London, 1930.

バウアーをリーダーとする一九二九年のカンチェンジュンガの登攀と、ディーレンフルトをリーダーとする一九三〇年の所謂インターナショナル・エキスペディションとの記録である。此の二つのカンチェンジュンガ・エキスペディションが色々の點で著しい對照を示してゐることは非常に興味のある事柄であるのみならず、かゝる試みについて我々に教ふる所が非常に大きいのであるが、今此の二冊の相次いで行はれた試登記錄を手にして我々は一層その感を深うせざるを得ない。

バウアーの隊は一九二九年にカンチェンジュンガ登攀の試みをしてゐる。此の登攀については既に「山岳」誌上(二十五年第二號)に紹介せられた通りであるが、後のものと比べて隊の組成が著しく、恐らく望みうる最高の程度に於いてといひ得る位に堅固であり、いはゞ粒よりの連中の隊であつた。一行は七月の三十一日にダージリングを出發し——一行は印度に着く迄何れの山に登る可きか決定的な考へを持つてゐなかつた——十月の二十九日に歸つて來てゐる。登攀はゼムー氷河より試みられ、主峯から北に走る尾根の途中から東へのびた猛烈な氷尾根登攀に於いてクライマックスに達してゐる。天幕を張る餘裕のない程に狹い氷の尾根に穴を穿つて露營するといふ、從來かゝる高度(最高の野陣場は七〇二〇米に達してゐる、因にカンチェンジュンガそのものは八四八〇米である)に於いて試みたることなき方法を用ひ、立派に成功してゐることは、恐らく此の試攀の齎した最も大なる成果の一つであらう。併し少しでも山の中を歩いた經驗をもつ我々にとつて、最も心をひかれる點は、此の隊が大體に於いて非常に程度の高い登山家によつて組織せられてゐたのみならず、それが恐しく強固な一隊に組織せられてゐたといふ點である。此の點については、先づ、リーダーたるバウアーその人に贊辭が捧げらるべきは言ふ迄もない。併し同時に之は隊員の一人々々が技術に於いてのみならず、教養に於いても一流の山岳人であつたことを證明するに他ならない。之なくしては登山史上比類少しといはれたやう

な猛烈な奮鬪をあの高い所で吹雪と缺乏との中に續けられ得るものではない。此の書を翻いて我々の何よりも感ずる點は、實に此の點である。隊員の一人々々が自分々々の身を時と所とに應じて立派に處置しうる程に熟練し經驗に富んでゐなければならないといふことは、國境の外に羽根を延さうといふ程の連中であれば萬々承知の上のことであるに相違ない。それ故之は先づヒマーラヤ登攀位の大物になれば前提條件として遠の昔に解決せられてゐるのである。併し、問題はそれ丈けの一騎當千の士が如何に充分に力を協せて人の踏み棄になり乍ら永い、屢々單調にして眼を樂しましむるものゝ少い旅をつゞけ又、動もすれば人を短氣にし勝ちな困難と缺乏とに耐えて、連日連夜七千米の高い所で氷の中で奮鬪しうるかといふ點でなければならない。此の點に於いて我々は曾つてのエヴェレストのエキスペディションの經驗に學ぶ所が非常に多い。又今此のバヴァリアの隊の敎ふる所も實に此の一點であるやうである。そして、此の一點は如何なる地方、如何なる種類のエキスペディションについてもいはれることであるし、之丈けの意味よりしても、此の書は注意深く讀まれるに値する貴重なる文獻である。

菊版一七四頁の中、一二七頁が一般記錄、次の十五頁が一行の全行程を蔽ふその日〳〵の簡單な日誌、次いで一行の費用、出費の出所、並に、項目分けにした支出の額、（總額四〇、三四二マーク！）が揭げてある。而して之に續いて、食糧に關する記述、準備品、衞生、氣象に關する記述があり、更にカンチェンジュンガの標高に關する一文と文獻目錄とが加へられてゐる。誠に此の種類のものとして親切の限りを盡したものといふことが出來る。費用など我々が從來此の種の文獻に探索して殆んど滿足なる問答を得ざりし項目が明瞭に書かれてゐることは特に喜ばしい事柄である。挿畫大小百枚、パノラマ三枚。山がいいせいだらうが何れも素晴しい。そしてポケットカメラで突嗟の間に撮つたやうな本文の中に挿入されてゐる繪にひどく美しいものが多い。そしてそんなものからしても一行の氣分を我々はよく會得出來るやうに思ふのである。附圖三枚、何れも略圖であるが充分に目的を達してはゐる。

此の本を批評したあとでスマイスの本の批評をすることは或は決して正當なことでないかも知れない。第一、一方は謂はゞオフィシアルなものであり一方は一行の一員の物したものに過ぎない。而もその記錄の多くは、既に我々がタイムスへの同じ筆者が送つた記錄に加へる所が少い程度のものである。日本でもありさうなことだが、スマイスも多分出版屋の狠にせ

つつかれたのであらう。寫眞も決して充分であるとは思はれない。地圖に至つては貧弱を極めたものである。併し此の本の之等の缺點は決して著者その人にのみ歸せらるべきではない。思ふに一九三〇年の所謂インターナショナル・エキスペディションそのものが、その出發點からして見當が狂つてゐたのだ。尤も之はインターナショナルの隊の能率を全體的に悲觀的に見た上でのことではない。たゞ隊が隊として立派な有機體になつて居らず、議長が隊長としての資格を缺いて居たりしては、如何に豪の者を世界中からよりすぐつて來ても何事も成就せられないといふことを此のエキスペディションは徹頭徹尾證明して居るやうに思はれる。初めから鳴物入りで賑かだつた此の試登が、地味に頑張り强く目的に嚙りついてなされるといふことは全く望むべからざることである。そしてそのパブリシティーがこのスマイスの本の出版屋をもとらへたのであらうし、何うせ本屋だから商賣人なみに早く出して安く澤山賣らうと考へたのであらう。我々が此の本を手にしての失望の腹癒せは、其故、大部分は本屋の方に又ヤンヤと見當違ひの喝采を送つた一般人の方に持つて行くべきものであらう。

我々は山岳人としてスマイスに親しむこと既に數年に及ぶ。モン・ブロンの東側の記念せらるべき二つの初登攀の故に我々は特に彼の名を記憶する。彼の最初の著書は既に「山岳」(二十五年第一號)に於いて同じ評者の手に紹介せられもしてゐる。

併し、エキスペディションその物は立派な失敗であつた。而も之は闘はざるに敗れたるかの觀を抱かしめさへもする失敗であつた。そしてこの事について若し何人か責任を負ふべきであるならば、リーダーのディーレンフルトその人でなければならない。此の本は「如何にエキスペディションをなすべからざるか」と教訓する點に於いて多くの價値を持つてゐるといつてもよいであらう。隊の編成準備品、運搬、經路等等について當時の隊員の一人であつたスマイスの批判は一つ〳〵充分に檢討せらるゝに値する。そして讀者はスマイスが言葉を濁らせて廻り遠く發表してゐる多くの批判を見逃してはならない。讀者は飛んでもない隊に引ずりこまれたといつたやうなスマイスの嘆息を屢々聞くであらうし、何故彼が今年比較的年若き連中ではあるが、兎に角隊としての活動能力は少くとも此のインターナショナル エキスペディションに優るであらう一隊を率ゐてカメットに志してゐるかをよく了解するであらう。全く此の登攀に万一成功せずとも、スマイスは思ひの儘に合理的に又全力を傾倒して奮闘しうるの時間を持つ事によつて一年間の溜飲を下げることは疑ふべくもない。

著書は菊版四五五三頁、寫眞約五十枚、カンチェンジュンガそのもの、記述とそれの登攀史に關する有用なる概説を含み、此の試登によつて彼の學びし所を述べたる一章又此の地方の氷河、雪、雪崩に關する記述と氣學に關する各一章を有する。準備品に關する經驗、特に防寒具、食料に關するそれはバウアーの記述と併せ熟讀吟味せられなければならない。特にバウアーの經驗は彼等がコーカサスに於いて得たるものに更に加へたる所のものであり、スマイスのそれは幾世代に亘るイギリスの登山家達の積み重ね來つた經驗の最後の表現であると考ふる時、之等の章の特別に意義深きものであることは論するまでもないであらう。

（松方三郎）

Alpine Journal No. 241. (November 1930.)

最近の最大收獲であつた二つのヒマーラヤ探險の記事を併せ掲げ得た編者の着眼及び努力に對して敬服する。元來、獨逸人の登り方に對しては餘り好意を持つて居ないアルパイン・クラブが、然も譯文を以てその機關誌の卷頭を飾るといふのはこの連中の平常の遣口を知つて居る我々には寧ろ意外に思はれた次第である。然し何等の偏見に煩はされる事なく、その爲し遂げられたる行爲を正當にもその眞實の高さに於て認識したと言ふ點に於て、ストラットは編輯者としての達見を明かに示して居る。バウアー自身の書いた"The Fight for Kanchenjunga, 1929"に就てはその概略は已でに筆者が本誌二十五年第二號一二七頁以下に記述せるものに盡されて居るし、また多くの人々は"Im Kampf um den Himalaya"を讀まれて居るに違ひないからそれに就ては今此處に述べない。

スマイスが一九三〇年の十一月にアルパインクラブで演説した"The Assault on Kangchenjunga 1930"に就ても多く言ふ必要はあるまい。只、この演説に於ては、彼のこのエクスペイディションに對する不滿が、それ程強調されて居らないのは注目すべきである。ジョンソン・ビークの登攀にのみ終つたこのエクスペディションに於てはスマイスが責められるべきでない事は、彼自身が此處にその然らざる所以を喋々と論じて居ないのにも拘らず、心ある登山者には明かに看取せられるであらう。然し何が幸になるか分るものではない、今後斯る統制のとれないエクスペディションが企てられる事もなし、またエクスパーツはこれに參加しようとしないとすれば、この一九三〇年の試みは完全に成功したと言つてよからう。

前號に引續きて掲載せられたものには、バッカーのロスト・

ナラティヴ及び、ラウバーの得意とするピーチホルンに關する記述がある。

ケムブリッヂ大學の一九二三年一九二六年及び一九二九年に於けるグリーンランド探檢は、場所が場所とて華かさは其處に認められないが地味な、しつかりしたものである。九六五〇呎に達するベーターマン・ピークがその主なる對象として取扱はれて居るが、三度もこんな鳴物いらずのエクスペディションが出せる國柄が羨しく思はれる。

松方三郎氏が書かれた、「アイガーとヨンルリ」なる一文は特に興味深く讀まれた。殊に氏の Prodecessor としての横有恒氏が、一個のストレンヂーとしてグリンデルワルトの村を訪れ來り、そしてミッテルレギの登攀に成功して村中の誰も彼もが喜んで居るのに、一人その仲間に外れて靜かに村を去り行くまでの姿が如實に描れて居るのは宛ら一つの物語を讀んで居るが如き感があつた。後半ヨンリの初登攀に關する部分は前半程の感興を以て讀む事は出來なかつたのは前半が餘りにも巧みに書かれて居る罪であらう。

松方氏の次ぎに浦松佐美太郎氏は、一九一六年の八月の或る朝チューンの湖畔を馳せつゝあるインターラーケン行きの急行列車から空しく雪に輝く山々の姿を求むる一個の旅客より初まつて、ウェッターホルンの南西山稜に於けるヴァリエーション・ルートの確立に至るまでの氏自身の姿の移り行きを手極よく纏めて居られる。然し氏の眞の面目がこの一文には謙讓にも押し隱されて仕舞つて居るのを物足らなく思ふのは自分一人ではあるまい。伊太利のウゴ・デイ・バルレピアナ氏に依るコーカサスの紀文及び北米合衆國のグランド・テートンの東山稜に關する記述等は相當に長いものであるが、これ等に就ては此處には詳述しない。

（渡邊　漸）

The Alpine Journal No. 242.(May 1931.)

內容を地方的に分類して見る。ヒマーラヤ一、アルプス五、アメリカ二、ニュージーランド一、及び朝鮮一である。印度の平原をチベットの高原から隔てゝゐる此の延長千五百哩の一大山系であれば、その間には自然の狀態に於いても氣象その他住民の狀態に於いても實にかけ離れた兩極端のものが存在するにも拘らず、兎角人は自分の出會はしたヒマーラヤだけからして全體を推測したり論斷したりするの冒險を冒すといふ所から、して、卷頭に揭げられたジェネラル・プルースの一文はヒマー

ラヤと呼ばる、此の山系の中に於いてどれ程著しい對照が一地方と他地方との間に存在するかを述べたものである。謂ふ迄もなく、かゝる問題について今日、彼ブルース以上に充分にかゝる題目を取り扱ふ資格を備へた人は存在しないといつてよい。短い物ではあるが一句々々よく味ふに値する文章である。ジェネラル・ブルース自身の比類まれと稱せらるゝユーモアが所々にチラリ〳〵と出て居るのが殊の外讀者を樂しましめる。何もカンチェンジュンガだエヴェレストだのといはなくてもう少し低い山を少人數探り歩いたならば費用もかゝらず又特別の興趣もあるであらうといふ言葉は注目に値する。又ヒマーラヤのやうなスケイルの大きな山に對しては下手にアルプス等で出來上つてしまつた玄人の山案内よりは素人で頭が出來、相當に經驗の積んだ人の方が早く眼をならすことが出來るやうだ、といふやうな言葉は僅に一つの例に過ぎなかつたけれ共、興味のある言葉である。アーチャー氏の朝鮮の山についての記錄は場所柄だけに特別の興味がある。挿入された素晴しい岩壁や恐ろしく日本離れのした高山を見て之が日本の領土内所か京城から二里内外の所に存在してゐるのかと知つたならば驚かない人は少いであらう。少くとも私は嘗つてアーチャー氏から引伸しでそれを初めて示された時、云ふにいはれない驚嘆と歡喜とを禁じ得なかつたが、今又改めて雜誌の上で之に出會はして同じ感を繰返へして抱かざるを得ないのである。之等の山々は徐々に京城在住の日本人によつて登攀を試みられつゝあるといふことであるが、アーチャー氏の熱心と努力とが將來の此の方面に於ける發達を促進する上に少からぬ貢献をしたであらうことは疑ふ可くもない。朝鮮といへば取りあへず金剛山を連想する輩を我々は放棄しなければなるまい。多分丹念に内地を探求したならばアーチャー氏によつて此處に紹介せられて居るやうな可愛峰や王峯の如き逸物は決して一二に止らないであらうから。そして日本の登山家は、アーチャー氏の此の一文が齎すであらう効果を想へば、氏等の開拓者的の熱情に感謝の意を表すべきものであらう。

訃報欄に就いて前世紀末に於けるニュージーランドやアンデスの探險登山を以て識らるゝフィッツ、ジェラードの名を見出し、シュレックホルンのアンデルソン・グラートにその名をとゞめたアンデルソンの名を見出し、ブリタニアヒュッテ設立の中心人物でありイギリスに於けるA.B.M.S.A.C.の永い間の指導的精神であつたブルースの名を見出すことは、何れも現役の錚々たる人々ではないけれ共哀傷の感なきを得ない。

（松方三郎）

The Himalayan Journal. Vol. III.
(April 1931.)

第一卷から打建てられた此のジャーナルの高い水準が立派に保持せられてゐることが快き限りである。併し之は矢張り、近時に於けるヒマーラヤ及びその附近に於ける探險乃登攀の著しき發展に負ふ所が大であるに相異ない。內容目次より特に興味あるものを擧げれば次の如くである。

一、マンメリーの最期（ジェネラル・ブルース）二、一九二九年ガランダ・カラコラム探險記錄（フィッサー夫人）三、印度地質概說（サー・エドウィン・パスコラ）四、ヤルカンドよりカラタシへ（ウイリマムソン）五、チベット西端の高臺について（エミール・トリンクラー）六、一九三〇年インターナショナルヒマーラヤ探險（ディーレンフルト）

ジェネラル・ブルースの卷頭の一文は一八九五年に於ける彼のマンメリーが最後の印度旅行を當時行に加はれる一人として詳しく述べ、ナンガ・パルバートに於ける彼の最期に及んだものである。嘗つてノーマン・コリー教授の筆を以て物語られた此の登山史の一英雄の最後の場面を今再びジェネラル・ブルースより物語られることは殊の外興味も深く、讀んで居る間に今更に逝ける人の山岳人としての偉大さを偲ばしめられる節が多い。特に吾々の多くは幸ひにして長谷川氏の示された る幻燈や、氏によつて直接物語られたる所によつて（前號「山岳」小集會記事參照）とに角おぼろげ乍らも、印度の山特にナンガ・パルバートの大いさを想像しうる。そしてその大いさを頭に入れて讀む時此の文章は一入に興味の深まるのを覺へるのである。

ジェネラル・ブルースの寄稿の次にディーレンフルトの報告を擧げやう。我々はこの所謂インターナショナル・エキスペディションのリーダーであつた人の口より之に關する記錄を示されて、明瞭に此のエキスペディションが戰はざるに先立つて敗れたるものたることを觀得するのである。何となればディーレンフルトの報告を一貫する調子が山岳人の氣質にかなり相反してゐるからだ。こんなリーダーを戴いた隊こそ救はれない、といふ可きであらう。所々スマイスに當りちらしたりするあたり讀むにたえざるものがある。チエタンの犧牲を自分自身に負ふ丈けの責任感もないやうなリーダー振りでは全くやりきれない。「スマイスの自分に食つてかゝつたことは皆嘘だ。總て自分のやつた事は正しい。チエタンを殺したのは自分一人の責任ぢやない。自分はアルプスを跨にかけた老登山家で

ある。四十四の自分がジョンソン・ピークに登つたことは全くえらいといはなければなるまい。エキスペディションが失敗だなどといふのは飛んでもないことだ。第一我々は何もカンチェンジュンがだけがめあてゞあつたのぢやない。他に澤山の高い山にも登つたし、之迄人間のたつた頂きでは一番高い頂上にも立つた等々。」全く大したものである。何もスマイスの發表した所が全部當らないとしても、一隊のリーダーがかう面相をかへてが鳴りたてゝは誠に興のさめた話である。地質學では知らないけれ共、山岳人としての此の人の修業の程も窺はれて遺憾の感なきを得ない。特に之が實際に此の探險隊の齎し成就した貢献の評價の上に少からぬ不當に不利な結果を與へるであることを思へば一層に惜しまれるのである。アルパイン・ジャーナルなどで目茶苦茶に攻擊されたエキスペディションのフイルムについて印度は田舍だとでも思つたのか、大いに吹いたあたりも滑稽であるが、兎に角、かゝる意味に就いて、此の一文は一讀の價値のあるものであらう。

日本人がアルプスよりもヒマーラヤにより多くの興味を抱くことは當然のことであらう。初めからヒマーラヤの氷河でたゝき上げられたやうな日本の山岳人が出て來ないとも限るまい。初めからヒマーラヤのスケイルでヒマーラヤの山を測るやうな人間が我々の間に生れて來たならば隨分愉快でもあらう。兎に角、此の雜誌は其處に盛られた全てがヒマーラヤに關係してゐる點に於いて、讀みごたへもあり興味も深いものである。

（松方三郎）

Alpines Handbuch. Herausgegeben vom Deutschen und Oesterreichischen Alpenverein, 2 Bände. 1931. Brockhaus, Leipzig.

四六倍版上下二卷合計九百餘頁、山の自然科學的方面の叙述より技術的方面の說明まで十九章に分つて說き及んでゐる。謂ふ迄もなく批評の如きは一人の力のよくなし能ふ所ではない。たゞ內容の一班をも紹介し得ばと筆をとる。

上卷內容――一、地球上の諸山脈（リクマー・リクマース）二、山の地質（ディーレンフルト）三、山の氣象（ヘンリー・ヘーク）四、山の動物界（フーベルト・エルハルト）五、高山植物（アウグスト・ハイエーク）六、山岳語彙（シュミットクンツ）七、山岳編年史（同上）

リクマースの物は凡そ全世界の山脈を網羅したものではあるが寧ろ序文代りのものである。日本アルプスの中で御岳と

八ケ岳が何故か特に擧げられてゐる――標高も不正確である――場所など頼りないけれ共、カムチャツカやアリューシャンの山等、日本の登山界の勢力範圍に入れて呉れた邊りは非常に有難い(一四頁)。地質は斷るまでもなくカンチェンジュンガのディーレンフルト教授の筆になる。アルプスの地質構造、その成生並に破壞の過程を論じ、最後に約一頁登山者の爲の實際的の注意を加へてある。氣象の一章は十頁の短いものであるが前章に比べれば遙に實用的である。勿論ヨーロッパのアルプスの事情をもとにして書かれたものではあるが。エルハルトはギーセンの大學教授をしてゐる人であり動物の生理學的方面の研究に從事しつゝある人であると聞く。高山動物の一篇は頁を費すこと約百頁、此の方面に於ける綜合的な叙述として一勞作たるを失はぬといふことが出來るやうに考へられる。附錄第一に千百内外の動物の通稱をABC順に列べ、第二に十頁を超える引用文獻目錄を擧げた所なども、自分如き素人には兎に角その方面の專門家には少からず貴重なる貢獻たることを疑はない。高山植物はウィーンのハイエーク教授の筆になり約六十頁に亙るものである。最後のシュミットクンツの語彙は從來になき詳細を極めたものである。ざつと勘定した所では英獨佛伊諸國の言葉が三千位載錄せられてゐる。外國語の中には明かに誤譯と思はれるものもあるが、驚く可きはその精力である。Shan (chinesisch) Berg, Gebirge などゝいふのがヨーロッパ語に介在して居る所なども微笑を禁じ得ない。併し更に一層驚くべきは編年史である。基督以前遠くヘルクレスの傳說時代に初まる。勿論此の邊りは年代は明瞭でない。最後は「一九三一年獨墺山岳會此のハンドブッフを出版す」といふ所で終つてゐる。登山家のために料理の本など書いた人だけあつて愛嬌がある。分量からいへば實に百四十頁に及び、アルプスは勿論、コウカサス南北東、ヒマーラヤ、アフリカの山に迄及んでゐる。色々の山岳會の雜誌から書拔けは誰でも出來るといへばそれ迄であるが、全く恐ろしい努力である。動植物地質に暗い人間でも此の最後の二篇を繰つてゐる丈けで裕に十日や二十日は暮らせるかも知れない。丹念に見たならば誤りも或ひはあるであらうが、之はその分量からして當然許さるべきものである。卷末に山名、地名、小屋、人名の索引を附す。

下卷内容――一、山岳放浪と山登り(ルドフスキー)二、方向決定(ホーフマイヤー)三、岩登り(フォン・クラウス)四、氷上行進(ウェルツェンバッハ)五、山岳スキー(フォン・ツァリンガー)六、山の危險(ホーフマイヤー)七、遭難と救助(ゲオルグ・プラーブ)八、醫學的考察(フォン・レードウィッツ)九、

山案内（ハインリヒ・メンガー）一〇、幼年者の山間旅行（エンツェンシュペルガー）一一、山岳寫眞（グスターフ・クーファール）一二、山岳諸團體（アロイス・ドライヤー）

下卷は上卷に比べれば幾分薄手である。併し一見して判るやうに登山者に直接關係の深い章が多い。尤も多くは既に度々論ぜられ、又説明せられたものではあるが。

ルドフスキーのものは山登りの本質論に初まり、初心者に對する注意――準備、携帶品、氣象、野營その他初步的の必要項目――を述べたものであり、ホーフマイヤーの第二篇は、地圖、案内書、及びコムパス、高度計等、方向決定に關する事項を載録してある。フォン・クラウスの岩登りとウェルツェンバッハの氷上行進とは何といつても此の卷の中心をなすもの合せて五十頁を超える。共に細く節を分ち懇當に圖解が施されてある。山登りの技術に説明をなす場合の好個の參考書である。山岳スキーには附録としてシュタイグワックスについての短い記述が添へられて居り、更に山岳スキーに關する文献目録が加へられて居る。山の危險の一章は再びホーフマイヤーの筆になる。先づ暴風、寒氣、熱、霧、雨、氣候の激變、過勞等の一般的危險を先づ述べ、更にシュタインシュラーク、墜落等の岩登りについての特殊の危險を擧げ、氷については氷河、雪原、雪庇、氷雪崩等の諸項を論じ、最後に節を改めて雪崩を論述してゐる。遭難と救助の篇は主として萬一の場合の方策について獨墺山岳會又は瑞西山岳會の規定等を述べ、又事件に際しての個人乃至團體の行動について述べたるものであつて、此の方面に未だ確たる習慣も規定も確立せられて居ない我が登山界に教ふる所蓋し少からぬものがあらうと信ぜられる。醫學的考察の一篇は高度の人體に及ぼす影響を述べ之に對する馴馭と訓練とを論じ、機能障碍、高山病、電擊等を述べて最後に簡単乍ら應急手當を添へたものである。折角の文献目録にロングスタフの Mountain Sickness and its Probable Causes を欠き、ケラスの研究やエヴェレスト探險前後の之に關する多くの研究乃至報告を擧げず、英語のものとしては、僅にウォークマンの報告のみを擧げたるが如き貧弱の感なきを得ない。メンガーの山案内論はアルプスに於ける山案内の發達史から説き起し、諸國に於ける山案内の訓練教育並に取締方法等を説明した、之亦、目下かゝる方面への過渡時代にある我國登山界に有用なる一文である。エンツェンシュペルガーは Handbuch der Leibesübungen 中に「登山」なる一册を物した人である。クーファールの山岳寫眞に關する記述は、かゝる方面の文献をのぞいた事もない現在の筆者には紹介すらも出來ないが、約十

五頁に亘るもの最後の登山團體の一篇は世界山岳會總まくりである。發生順にアルパインクラブに初り、ヨーロッパ以外の地に於ける山岳會の抄記に終る。「日本山岳會は一九〇六年三月東京に生れ、故國に於ける登山の振興に力を致しその目的を以て年三回雜誌「山岳」を發行す。「山岳」は旅行に關する記錄以外に美しき圖版をも挿入す」などいつたやうな所が注目される。重要な山岳會の番地の載錄せられてゐるのも調法である。

以上は全くの概要の說明にすぎない。恐らく讀者は以上の紹介を以て理解せられるであらうが、曾つてS・A・Cのチューリヒのセクチォン・ウトーから出されたRatgeber für Bergsteiger と行き方を大體同じうし、たゞ一面に於いて一層詳細ならんことを企てたものであるといふことが出來るが、Handbuch の名に背がない丈けには色々ことにも觸れてあり、よく纏められても居ると考へられる。此の規模——勿論從來のあらゆる此の種のものよりも大がゝりではあるが——のものにこれ以上オリヂナルな研究又は學問的貢献を期待することは恐らく無理であらう。そして此の大きさのものであつても、充分に登山に關する文献中に獨特の價値を認めらるゝに値するものと考へられる。所々に指摘した如く細い點に就いては夫々の玄人筋から見れば必ずしも完全ではないとも思はれるけれ共獨墺山岳會の公けの立場として名實相伴つたものであり永く又廣く利用せらるゝ事を疑はない。日本での賣價は各七圓二十五錢であるといふ。此の紹介の出る頃には上下兩卷とも通常の洋書店の書架に列べられてゐることゝ思ふ。(松方三郎)

南アルプス地形圖

昨年北アルプス地形圖二葉及び富士山近傍圖を發行せる陸地測量部は今年新らたに南アルプス地形圖二葉を發行した。一は「白根山近傍圖」と名付けられ五万分一地形圖「韮崎」「市野瀨」の大部分及び「大河原」「鰍澤」の各約二分ノ一を含み、他は「赤石岳近傍圖」にして「大河原」「鰍澤」の一部分、「身延」「赤石岳」の大部分の地域を含んで居る。北アルプス地形圖等と同じく四色刷折疊みとなつて居る。

昨年の北アルプス地形圖と異なつて居る點で目につくのは山小屋を朱色の記號にて明示せる事であつて然かも糧食の補給可能、不可能に依つてこれを更に二つに分つたのは登山者に對して親切な思ひ付きである。主要なる登山路は朱線にて示したのは昨年のものと同樣であるが、北アルプス地形圖に於てなくもがなの朱點線にて表示したる稍〻難路と思はれるも

のは省かれて單一化せられたのは賢明な遣り方である。本誌二十五年二號に於て筆者は、北アルプス地形圖の下方に拙劣なる寫眞網版を列べたてたのを非難したが、今回の地形圖には斯る蛇足は省かれて居るのは測量部が一般登山者の眞の欲求が奈邊にあるかを推察するに吝ならざる證左と考へたい。

將來、尙斯る登山者の地形圖が發行せられ、或ひは已でに出版せられたる地形圖が改版せられるに際しては、それに先立つて一應本會當事者に內示せられたならば お互ひに脾益する事が尠くないであらう。今回の改版圖に於ても、測量者が伴ひたる地方の案內、人夫等の稱呼がその儘に用ひられて居るのを明かに指摘する事が出來る。斯る地方的の稱呼は、殊にその山項が國境線上に沿へるものに於ては一方のみの稱呼を採りて他側の稱呼を顧ない事はいさゝか妥當を缺きはしないだらうか？一例としては惡澤岳、魚無河內岳等の今回も尙改められず大河原側の稱呼たる東岳、中岳、前岳に止まつて居るのを擧げたい。五万分一地形圖「赤石岳」圖幅には東岳、荒川岳とあるが元來荒川岳とは今回の改版に前岳とせられたる峰の稱呼であつて、國境を越えて遠く、純然たる大井川の領域なる峯にまでも、荒川中岳、荒川東岳等の稱呼を冠する事はいさゝか慾が深か過ぎる。それも名の無い峰なら兎に角、見識ある登山者には惡澤岳、魚無河內岳として遍く用ひられて居る山名をや。筆者は大井川、田代の人夫が平然として「東岳（アヅマ）」なる珍妙なる稱呼を唱へて居るのに寧ろ義憤を感じた位である。惡澤岳、魚無河內岳、荒川岳（奧西河內岳）とするのが妥當であらう。

又、正しき考證よりして立派な山名があり、然かもそれが妥當なる見解を包懷する登山者には亘く用ひられて居るにも拘らず、一部地方人士の偏狹なる鄕土愛より出發せる不適切なる山名が誤り用ひられて居る事がある。その一例は今回の改版にも吾人の期待の空しく裏切られたる鳳凰山に關する稱呼である。地形圖に觀音岳とせられた峰が地藏岳であり、地形圖の地藏岳が鳳凰山に相當し、その項點を爲すものが地藏佛である。地形圖の誤謬は鳳凰山の岩塔たる地藏佛を地藏岳と混同し、鳳凰山をこの一郡の總稱とした事から出發して居る。觀音岳は又、藥師岳と地藏岳との中間に移さるべきである。斯る山名の誤謬は地形圖が普遍的なるものなるが故に、尙更速かに改めずに時期を逸すれば最早正しきに戻さんとしても無効に終る虞れが多いのである。

今回の修正に於ては澤の名前が甚だ多數加へられた事は注目に値するが、何でも漢字にあてはめようとする傾向が依然として見られないでもない。例へば戸台川の「ネキゴヤ澤」が「寢

木小屋澤」、「ウタジュク澤」が「歌宿澤」、澤の名ではな、が「ジョウガ岳」が「嫦娥岳」、尾勝谷の「ホーラク谷」が「崩落谷」、小澁川の「古川」が「福川」、北澤の「アレ澤」が「荒澤」（アラ澤と讀み易い）等、必ずしも漢字を用ゐるのが正確な表現法でない事が分るであらう。

其他目につくのは、部分、部分に依つて、地名、山名、澤の名等を入れる標準が甚だまち〳〵である事である。その結果、ある部分に於ても不必要と思はれる小澤や小隆起にまでも名前が付せられ、ある部分に於ては當然名を付けて然るべき峰にまで名前がつけてない事である。それは全然その方面は人が入らず、名前も付いて居らずといふのならば分つても居るが、廣く知られて居るものにさへ名前を付けず、ほんの一部のそれこそ獵師とか鮠釣り以外には必要としないものを掲げて置くのはどうかと思はれる。尤もこうして少しづゝでもブランクの穴を埋めて行くといふなら、考へは又、別であるが。「白根山」と言ふと日光の白根か草津白根の樣に聞える、「白峰三山」と改めた方がはつきりしていゝのではなからうか。尙「自根山近傍圖」をもう少し大きくして「赤石岳近傍圖」の一部をこれに加へ、「赤石岳近傍圖」にはもつとずつと南の部分を加へたらどんなものであつたらうか。せめて井川邊りまではこの中に含有せしめた方がよくはなかつたかと思はれる。

部分的に細い誤謬も目についたが、一々これを擧げる事は徒らに冗長になるだけだから止めにして置かう。兎に角、この地形圖から吾々登山者の受ける恩惠は並一通りのものでない事を感謝しつゝ、將來、然かも出來得べくんば毎年少しづゝ修正してより完全なものを作りあげられん事を希望して止まない。

（渡邊　漸）

登山とキャムピング

本書は本會々員熊澤正夫、桑田英次、椙山正雄、三輪武五郎瀨木三雄の五名の共著になるものであり、その內容は序說及び登山の準備、普通の登山、岩登り術、積雪季登山、天幕生活の五編に分たれ、夫々各自の最も經驗ある方面を分擔執筆して居る。

本書刊行の目的は初步者に對して簡明平易なる登山術の敎科書を提供せん事を主意とし、簡から複へと登山術を極めて初步から可成り高い程度に至るまで万遍なく統一のとれた階段的順序に依る記載に依つて然かも直接、技術と關聯する限りの範圍內に止まるべく細心なる努力を拂つたものであるとは熊

澤正夫氏がその序に於て強調して居る處である。

從來、發行せられた登山の技術書と稱せられるものには吾人を滿足せしめる程度のものがなく、その多くは統一の採れない寄せ集め式のものか或ひは又、オリヂナリティーを全く缺如せる直譯その儘のものの何れかに止まつて居た。

ある人々は日本に於ては技術の習得を要求する樣な登攀は行はれないから、登山に關する技術書は全然不要だと言つて居るが、狹い意味に於てはこの事は事實であつたとしても、果して技術書は不要なものだらうか？ 山登りといふものが、自然の懷に還へるといふ事だけでなしに一つの系統だつた、廣義のスポーツの一分科として取扱はれねばならない今日、それに對應する技術的の系統づけられた教科書はどうしても缺く事は出來ないであらう。それから亦、どれが本當でどれが間違つて居るのかさつぱり分らない人達に、これは間違つて居ない事だ、かうしなければならぬのだとか、これは間違つて居るのだ夢にもこんな事はしてはならぬとか或ひは亦、これは何方でもいゝのだとかいふ目標を與へて遣る事は確かに必要な事である。

斯る意味に於て本書の出現は、殊にそれが初心者に對して充分な役目を果して居る點から考へて大いに意義あると筆者は信ずる。何れの頁を讀んでも、其處には著者等の多年の經驗から得られた生きた知識が山男らしい心遣ひの許に直ちに初心者が了解する事を得、實行に移す事を得るやうに事實を全く消化して充分に自分のものとした上で書き下されて居るのは、一讀最も嬉しく感じられた點である。技術に關する記述は必ずしも此處に書かれて居るのが最上とは思はれないし、又著者も斯る點を意圖はして居ないであらうが、その記述に於ける眞面目さは本書の價値を充分に裏書するであらう。然かも斯る技術書の陷り勝ちの記述の難解、記載の單調化等を救ひ得たる著者の手腕は一見平凡なるが如く見えて然かもさに非らざるを充分に物語つて居る。

部分的に見て第二編「普通の登山」の出來榮えは最も優れて居る樣に思はれる。「登山の準備」に於ける記述もかつちりとしたもので第二編に劣らぬものだ。第四編「積雪季登山」もその第二章の積雪季高山の狀態及び危險の項を除けば立派なものだ、殊にその概說の一章は簡明に要を盡して居る點に於いて感心した。

「岩登り術」の編はその獨自なる記載にも拘らず他の編程に筆者をして喜ばしめなかつたのは、該編の執筆者の罪に非らずして、「岩登り術」の現在の日本に於ける發達の過程及びその正確

なる理解の要求が案外に低いレベルにある事を物語つて居る一つの證左と看做す事が出來よう。

該編に於ては元來、ロッククライミングなるものが未だ我々に充分に消化されて居ないだけに初心者に向つての記述は尙一層困難なものとなつて居る。加ふるにその間に間々散見する執筆者の意見中には直ちにこれ同意を表し難きものさへ見受けられる。バランス・クライミングの眞の意義を悟り得た人々の眼よりすれば少くとも本書に於ける記述は初心者にバランス・クライミングの眞諦を傳へるには遺憾ながら充分でない樣に思はれるであらう。本書が初心者にその焦點を置く點から考へるとそれが充分に理解出來るといふ程度までは行かなくとも少くともバランス・クライミングの何物たるかその片鱗を窺ふに足るだけの詳細なる記述が必要ではなからうか。基本的技術の項は可なり簡明に記載されては居るが、初心者にとつては尙、煩雜の處れがありはしまいか？尙テキストを多く他の成書より採用したのは記述が決して直譯的のものでないものだと言ふ事を輕卒にも見逃がさせ易くはないであらうか？

「積雪季登山」の中シュネークンデ及びラウィネンクンデを取扱へる部分は、今まで我が國に於て書かれたもの中では比較的整つたものではあるが、雪崩の分類及びその解釋、或ひは亦その發生條件等に於て吾人をして無條件に同意せしめ難き點がある樣に思はれる。「風成殼雪」なる語が屢々用ゐられて居るがこれは元來ウインドクラストの譯語に相當し、著者がこの言葉の許に表現しようとして居るウインド・パックドスノー或ひはシュネープレッターを指しては居ない。初心者の爲に書かれたといふ事を念頭に置くならば、雪崩の分類及びその記述はもつと簡單であつてよからう。此處に書かれた記述は初心者に取つてはいさゝか抽象に過ぎてはつきりした概念を與へる事が困難でなからうか。改版の際先づ書き改められればならぬのはこの部分であらう。第二編の中、「天候の變化とその處置」も、現在日本に於て登攀の成否を支配する唯一の要素は天候にあると言つても過言ではないのであるから、もつと充分な材料を集めて、初心者にその重大性を刻み込む樣に努力を拂はれたい。次の「疲勞、身體的故障及び遭難」の項も亦、もう少し實際的に書かれたならばと思つた。

圖版は斯る技術書に在つては、技術に直接關係あるもの、例へば、第三圖「登山靴鋲の種類と配置」の如きものを多く選み、著者が序に於て强調せる如く、寫眞に於ても亦、技術に直接連絡ありと思はれるもの以外に亘らない樣にして欲しかつた。

（渡邊　漸）

會報

會務報告

二月五日定例幹事會

出席　小島、武田、高頭、木暮、浦松、松本、鳥山、槇、松方、藤田、冠、渡邊、角田、藤島。(委任)岩永。

一　財團法人基本金の金額につき主管官廳の意向を伺ひたるに少くとも二萬乃至三萬圓を必要とする模樣なるが、現在この金額を集むるは困難なるを以て、一萬圓迄は集め得るものとして手續を進むるに決定。

二　「山岳」第二十六年一號編輯に關して編輯係より報告あり。印刷費見積書比較研究の結果印刷所を變更することゝせり。

三　山小屋建設地借入につき冠幹事東京營林局長と交渉したるに、後立山冷ノ地附近は昨年より既に先願者ありて當局の意向確定せず。他に候補地を求むることゝす。

四　三月十五日より開かるべき文部省主催の體育展覽會に出品の件。

三月五日定例幹事會

出席　小島、武田、高頭、冠、松本、松方、鳥山、渡邊、藤島(委任)高野、木暮、角田、藤田。

一　「山岳」第二十六年第一號の印刷部數及定價を決定せり。

二　山小屋建設候補地として後立山新越乘越を選定。關係方面との交渉冠幹事に一任。

三　文部省主催體育展覽會への出品決定。交渉、陳列は冠、松本兩幹事擔當。

四　四月中旬有志晩餐會開催の件。

五　財團法人基本金の件。

四月七日定例幹事會

出席　武田、高野、高頭、冠、槇、松方、鳥山、角田、藤島。

一　五月七日大阪に開かるべき關西在住會員小集會に角田幹事下阪。「山小屋に就て」講演することゝす。(別項參照)

二　六月上旬に講演會開催の件。山小屋基金募集を標傍せずなるべく低廉なる入場料を以てすることゝす。

三　豫て刊行計劃中なりしガイドブックは本年登山期前の間に合はず、材料も尙蒐集不足なるを以て明年度に延期することゝせり。

四　昭和五年度決算承認。(會報六號參照)

五月七日定例幹事會兼評議員會

出席　小島、木暮、三枝、武田、高野、高頭、田部、冠、松本鳥山、浦松、松方、渡邊、藤島。

一　講演會の具體案作成。

二　六月下旬開催の第五十一回小集會の件。

三　「山岳」編輯報告。今後は編輯係幹事が隨時編輯會議を召集することゝす。

四　山小屋建設地に付き冠幹事大町營林署長と面談したる結果、冷ノ池附近に建設すること稍可能性あること判明したるを以て、今後の形勢を觀望しつゝ一方實現に努力することゝせり。交渉は冠幹事一任。

五　財團法人認可申請手續遲延するやも知れざるにより、既に昨秋評議員會に於て承認せられたる財團法人寄附行爲案の內より法人に關する字句を除きたる會則を以て現行會則に代ふる件承認せられたり。（別項參照）

關西在住會員集會

昭和五年十月二十三日大阪美津濃ビルに於て開催。東京より小島評議員松方幹事出席。晩餐の後別室に於て座談にうつり、會員相互の意見交換あり。又會務に關しては夫々幹事の側より會員の質疑に應ずる所ありしに、今日かゝる會合を復活するを得しは會せる者の等しく喜びとする所であつたのみならず、相互の忌憚なき意見の交換のあつた事により會合の意義を一層深からしめた事は疑なき所である。（以上會報第二號より轉載）參會者左の如し（順序不同）

加納　一郎　津田　周二　武山　良次　原　岩男
湯村　和吉　西岡　一雄　松岡　靖一　藤木　九三
中村　勝郎　國府　精一　桑原　武夫　水野祥太郎
岸部　勢三　高橋勇次郎　岸田日出男　金井勝三郎
上田清太郎　三上　捨造　朝鄰記太留　安井喜之助
宇野陣三郎　影山　寅造　政友　巖三　今西　錦司
中原繁之助　新井久之助　山田　二郎　伊藤　愿
田中喜左衞門　榎谷　徹藏　山崎　彥麿　小島　久太
別宮　貞俊　松方　三郎

アルパイン・クラブよりの祝電

創立二十五週年に對し左の如き祝電ありたり。

Alpine Club annual meeting assembled heartily congratulates Japanese Alpine Club twenty-fifth anniversary. Wilson, President.　（昭和五年十二月十日着）

Heartiest congratulations good wishes twenty-fifth anniversary. Alpine Club.　（昭和五年十二月十一日着）

創立當初より因緣淺からぬアルパイン・クラブ（「山岳」創刊號一五六頁以下參照）より寄せられたる此の好意に對し、本會は折返し電報を以て滿腔の謝意を表する所ありたり。（なほ會報第四號所載名譽會員ウエストン師よりの通信參照）

第一回關西小集會

五月七日　於大阪堂ビル。榎谷氏司會。講演

一、山小屋に就いて　會員　角田吉夫氏

角田氏は幻燈スライド數十枚を使用して、日本とスキスとに於ける山小屋の狀況を約二時間餘に亘つて講述せられた。氏の苦心によつて作成された精密な各種の統計表を基として、史的考察の概觀から、山小屋の現況に及び、分布狀態、設計上の分類、經營、設備、將來の希望抱負、本會の企劃と實行狀況等を極めてシステマティックに設き進められた。從來關西地方、主として京阪神方面では山小屋に關する課題を取扱つたことが極めて尠く、本當のところ、まだ山小屋迄手がつき兼ねてゐたのだつたが、今回の講演によつて、その方面に新しい刺戟を與へられたので、今後はこの方面に少からぬ期待を持たせられるであらう。同氏は非常に切り詰めた時間で出張せられ、講演後一時間そこそこで又匆忙として歸京の途に就かれたので、ゆつくり落ち付いて懇談の出來なかつたことを殘念に思ふが、二時間の講演と一時間の座談とによつて與へられたところのものが、莫大であつたことを、一同は深く感謝したのであつた。當日の來會者は

角田　吉夫　榎谷　徹藏　山崎　彦麿　三好　毅一
岸部　勢三　高橋佳十郎　頭井豐次郎　西岡　一雄
中村　勝郎　渡邊小兵衛　新井久之助　影山　寅造
岡本治之助　山口季次郎　米澤　政吉　政友　巖三
藤木　九三　加納　一郎　朝輝記太留　後藤　正彦

水野祥太郎　下山　勇　津田　周二　中原繁之助
三木　高岑
以上二十五名。外に會員外の來會者十八名。

本會々則の變更

本會を財團法人組織に更むることに就ては昨年來十數次の評議員會及幹事會に於て議を練り來り、昨秋に至り寄附行爲案の成案を得て既に之を會報第三號紙上に發表し、管轄官廳に認可申請の手續を執るまでに進捗したのであるが、其後基本金の金額その他二三の點に付て疑義が生じ來たつて認可申請の手續は稍々遲延するを免れない形勢となつた。然し本會の事務は既に本年一月から前記の寄附行爲案に據つて遂行されてゐるばかりでなく、今秋には理事（從來の幹事）改選のことも行はれる筈である。依つて法人認可の實現するまでの經過期間中の會則として財團法人寄附行爲案中より法人に關する字句を除去せるものを制定することゝなり去る五月七日の評議員會に於て可決されたのである。今後本會の萬事を律してゆくべき新會則は左の通りである。

日本山岳會々則

第一條　本會ヲ日本山岳會(Japanese Alpine Club)ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1)　機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2)　其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長、副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル但會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レバ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス但其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チテ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名及役員一名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナサザル者ハ入會ノ許可ヲ取消ス可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細則

一、會費其他ニ關スルモノ

（イ）會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

（ロ）毎年十一月末日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

（ハ）本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

（ニ）本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス但毎年十一月末日以後ノ入會者ニハ頒布セス

（ホ）毎年十一月末日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

（ヘ）本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覧スルコトヲ得

（ト）會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

（チ）會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

（リ）本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

（ヌ）團體加入者ノ代表者交代シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

（ル）本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

（チ）海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

（イ）理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

（ロ）役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

（ハ）會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

（ニ）理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

（ホ）團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

（ヘ）候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

（ト）候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

（チ）改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

（リ）投票ハ記名連記投票トス

日本山岳會事務所

東京市芝區高輪南町參拾番地
振替貯金口座東京四八二九番
電話高輪二四五番

日本山岳會編輯所

東京市芝區琴平町一番地五號
不二屋ビル三〇七號室

評議員　木暮理太郎（常任）、小鳥久太（常任）、沂藤茂吉、中村清太郎、三枝守博、高野鷹藏（常任）、高頭仁兵衛（常任）武田久吉（常任）、田部重治、山川默。

理事　別宮貞俊、榎谷徹藏、藤島敏男、藤田信道、岩永信雄、冠松次郎、横有恒、松方義三郎、松本善二、田中喜左衛門、鳥山惣成、角田吉夫、浦松佐美太郎、渡邊漸、山崎彦麿。

監事　木村鑛吉。

會長　小鳥久太。

副會長　高野鷹藏、横　有恒。

第五十回小集會記事

昭和六年二月二十四日午後六時半より赤坂溜池三會堂に於て松方幹事司會の下に開催。松方幹事は一九二九年度のバヴァリア隊カンチェンジュンガ試登に就て、浦松幹事は一九三〇年度の國際登山隊の同峯試登に就て概略を講演し、別に渡邊幹事は前者の醫學的報告を略述する所ありたり。

バヴァリア隊の隊員の果敢なる行動、整然たる統制と、國際登山隊の杜撰なる計畫、不統制の曝露との對照は尠からざる興味を感ぜしめたり。兩氏の講演後槇幹事よりカナディアン・ロッキー遠征當時の準備、隊員統制等に就いての苦心談あり。次で參會者の討議に移り、用具、食糧、包裝、其の他の諸點につき有益なる議論交換せられたり。

午後十時散會、參會者四十二名。

文部省主催體育展覽會出品目錄

昭和六年三月十五日より同廿九日まで東京市お茶の水、東京科學博物館に於て開かれたる文部省主催體育展覽會に本會より出陳せる品目は左の通りである。

一秩父宮殿下御撮影
　ツエルマットより仰ぎ見たるマッターホルン
一ゴルネル氷河畔の秩父宮殿下
一リスヨッホに於ける秩父宮殿下（以上三點松方三郎出品）
一劔　谷　（寫眞）　冠　松次郎氏出品
一マウントアルバータ（寫眞二葉）　槇　有恒氏同
一ウォルターウエストン氏小照　松方三郎氏同
一本會々員地方別分布表　本　會　同
一本會々員章　四個入額　同　松方三郎氏同
一外國山岳會々員章　四個　同
一ピッケル　一本　黑田正夫氏同
一登山綱試驗表　同
一切斷試驗せる登山綱　本　會　同
一立山劔岳模型　武田久吉氏同
一ルックザック　一個　武田・松方兩氏同
一登山靴　二足　槇　有恒氏同
一木底靴　一足　冠松次郎氏同
一カンジキ　一足　同
一カモシカ皮製足袋一足
以上の外尙十數點の出品ありたるも會場が狹隘なりしため

出陳を見合せた。

會員有志晩餐會（昭和六年四月十六日）

ふるい「山岳」をみると會員有志晩餐會の記事がちよく〳〵載つてゐる。第一回のときの記事には、當時山岳會の集會は年に一回の大會だけでそれも講演が大部分、會員がお互ひに膝を交へて談じ合ふ機會がない。ひとつ懇親會兼談話會のやうなものを開かうといふのが話の始まりだ、とある。そして第一回は今では大先輩の辻本滿丸、高野鷹藏、三枝守博の三氏が發起人となつて明治四十二年一月十六日麴町の富士見軒で開かれた。爾來年に一二回づゝ開かれ大正八年五月二十五日品川・鮫洲の川崎屋に於ける二十一回の會合まで續きその後いつとなく中絶してゐる。

そのとき〳〵の記事を讀むと愉快さうな模樣が目に浮ぶやうである。山岳會の成り立ちからみてこのやうな會合が必要であつたこともまた比較的長いあいだ繼續したこともうなづかれるのだ。今日では山岳會の集會もふえたし山を中心にした小範圍の團體もたくさん方々に生れて、有志晩餐會が催された頃とはよほど時世も變つてゐる。或ひはかゝる催しは不必要な時代となつてゐるのかもしれない。しかし各方面の人々を包容してゐる山岳會の會員がときに一堂に會して山を中心にして大いに快談するといふことも必要でないまでも無駄ではあるまいと思はれる。それで去年の秋から有志晩餐の復活といふことが話に出て、去年は結局創立二十五周年紀念晩餐會に變形してしまつたのであるが、今年の春になつて第一回當時の發起人がまた發起人となつて遂に有志晩餐會が復活した。何がさて凝り屋の集りとて、あゝでもないこうでもないと思案の結果會場は品川舊東海道入口の「くまあづま」といふ家にきまつた。

會報に勸誘通知を載せて出席の返事を待つたが、暫く中絶してゐた後のせいか思つたより參會者は少いやうだつた。けれども四月十六日の夕方その「くまあづま」といふおそろしい名の家へ集つた方々は十八名、いづれも態雙（くまそ）、東夷（あづまえびす）ならぬ山好きばかり。着席配膳の時刻が少々遲かつたせいか、お酒のまはり極めて早く

小聲の話はきゝとれぬほどに景氣が出て、高山大岳もケシ飛びさうな勢ひで、いつの間にか夜は更けた。當夜の模樣は愉快な朗らかな會合であつたとしか書けないが、しかしこの有志晩餐會は決して無駄ではなかつた。今年の秋には開きたいと思ふ。そして今後も長く續いてゆくことを期待してゐる。

尙當夜の出席者は、星野光之助、飯塚篤之助、加藤保二、木村鑛吉、小島久太、近藤茂吉、槇有恒、松井幹雄、松本善二、三枝守博、高野鷹藏、田部重治、高頭仁兵衛、鳥山悌成、角田吉夫、吉田竹志、吉田次男、藤島敏男。次回の世話人は松井、吉田、藤島。

講演會（昭和六年六月十六日）

去年の秋、朝日講堂で開いた創立二十五週年記念と山小屋基金募集とを兼ねた講演會も中々盛會だつたが、山の講演をやるにはホールも大きすぎたし講演者も話が仕難くいかの感があつたので、こんどはお馴染の赤坂・三會堂の中講堂で、來會者は少くてもいゝからしんみり落付いた講演會を開かうといふことにきめた。講演者は會員の伊藤秀五郎、浦松佐美太郎の兩氏とそれにいまひとり先輩を煩はす筈だつたが老大家連何れも言を左右に托して承諾されず、結局前の二氏だけにお願ひした。近頃の講演會には附き物になつてゐる映畫去年の秋のときにも適當のものを探すのに骨を折つたのだつたが、こんどは丁度今年の四月下旬會員の角田吉夫、黑田鎭夫の兩氏が世話をして上高地、穗高、槍ケ岳方面で撮影した封切物二卷を岡本洋行から借用することが出來た外に、當日間際になつて鐵道省の旅客課撮影に係る乘鞍岳のこれも未公開のものを借用することが出來たので大變好都合であつた。

昨年は登山會だの學校山岳部だのへ切符の販賣を依賴したが、今度はチラシ丈けを送つて、切符は數も少いことだし評議員理事が知己へ依賴する外は二三の運動具店に依賴するに留めた。之で準備は簡單に濟んだのだが、お役所へ屆ける段になつて大いに閉口した。「フイルムより引火、大慘事突發」なんてことが頻發した故か、中々御許可にならず、漸くお許しの出たの

が講演會當日のおひるすぎといふのだから氣の揉めたこと一通りでなかつた。當局の杓子定規か私達の不慣か、とにかく山の講演會ひとつ開くにもヤヽコシイ手續が必要なのには尠からず驚いた。

× × ×

當日は暦の上の入梅が文字通り實現して朝から憎らしい雨が小止みもなく鉛色の空から落ちてゐる。散々手古摺らされた上にこの雨で會場内閑寂を極はめたりなどしては、講演者に氣の毒なばかりか、骨折甲斐がないと心配してゐたが、やつぱり雨ぐらいは物ともしない熱心家が尠くないとみえて、開會の頃には殆んど空席なしといふ盛況だ。

正七時。小島會長の開會の辭に始まる。小島さんはこの日の講演者と自分とがいかに時代に於て隔たれるかを輕妙なる引例によつて語り、講演者を紹介して壇を下る。

伊藤秀五郎氏の「北海道及び千嶋の山」に就ての講演大要は左の通りである。

× × ×

幾つか數へられる北海道の山岳の特色の中で、最も大きなものは山が擴りをもつといふことと、山が人間化されてゐないといふことの二つである。山の擴りとは高さに對する言葉で山の深さとは異つた意味である北海道の山の擴りとは、富士山に於ける如き裾野ではなくて平原である。如何なる山も、裾野が海面下に隱されてゐるやうな火山島か何かでない限りは、平原をその周圍にめぐらしてゐないものはないが、内地では平原はすつかり人間の手によつて利用し盡されて、未整理のままで殘されてゐる處は皆無であるが、北海道での平原は如何にも茫莫として大陸的で假令それが開墾されてあつても、この開墾されかたが大ざつぱで生々しくて、利用厚生の程度の遙かに低い原始的な臭の強い荒蕪な原野である。そしてそうした平原——あの直線的な開墾道路が幾里も續いてゐる原野を通つて山へはひつて行くときに、何處でその原野が終つたのか、何處から山へはひつたのか、いつのまにか樺の深い澤に沿つて歩いてゐるといふやうに、その移り行きが極めて微妙で、登山口まで交通機關が延びてゐて、愈

々これから山へかかるといふやうなところが尠い。だから北海道の山は平原までもその擴りをもつてゐるともいはれる。卽ちその山としての內容を平原まで擴げてゐるとみられるのである。

第二に北海道山岳の特色は、山が人間化されてゐないといふことである。山が人間化されるといふことは必しも山に登山路が開かれたり、登山小屋が作られたりするといふやうな、眼で見た上で實際に人間の手が加へられた事を明瞭に示す變化のみを意味するのではない。それは山として山岳と人間との交涉の歷史がすなはち人間の意志が山岳に働きかけられた時間の長さが、おのづから吾々の心のうちに作り出す第六感的の感情である。千年前のマッターホルンも百年前のマッターホルンも、現在のそれとその實質には殆んど變化はないであらう。登山術の進步といふことを考へなければ、登山の困難さに於ては昔も今も少しも變りはないであらう。しかしマッターホルンは、それと人間との長い間の交涉が、それの人間化されてあることを吾々に感じさせる。その意味に於て、アルプスはヒマーラヤとかコーカサスの山々に比して遙かに人間化されてゐるといふことが出來よう。この第六感的の要素——風景の形態的な諸要素を空間的要素とすれば、このやうな第六感的の要素は時間的要素といふことが出來る——をも、ヘルハッパなどの風土心理學に導き入れることは出來ないであらうか。とにかく、北海道の山岳は內地の山々に比して人間化されてあることの程度が遙かに低い。北海道の山岳がよく原始的であるといふのは、人氣がないとか、登山路が開かれてゐないとか、そういつたやうな現在北海道の山岳がもつ、狀態以外に、かかる心理的要素が働いてゐるのではないであらうか。しかしこの第六感的のものも、山岳の狀態も、すべて年とともに移り變つて行くのはまぬがれ難いことである。

尙、のんびりした澤步きの面白さと、アイヌのもつ地名學も、北海道の山のもつ特色として擧げることが出來る。

次いで千島に就ては、一、行政區劃と生物學的位置。二、交通。三、氣候。四、漁業。五、生物。六、山—

—分布と高度。七、アライト島の生活と登山等を述べ尙千島の山は何れも登山は極めて容易で、初登山といふ意味ではそれ程價値のあるものではないと結ばれた。

講演後約五十枚のスライドについて北の島の山々を紹介され、聽衆は深き感銘を受けた。

× × ×

浦松佐美太郎氏の講演大要は左の通りである。

英人 Montagne の Action 及び愛蘭人 Sr John Irvine の "The Mountain" といふ二つの山を對象とした小說に表現された、兩者の山に對する態度が二つの面白い對照を示してゐる。それを中心にして、卽ち前者は登山といふアクションの內に人生を認め、後者は山の中に人生を沒却するを描き出してゐるを語り、この二つの山岳小說を讀んで感じた所、及びそれにより て考へられた我々の山に對する考へ方を述べられた。

× × ×

兩氏の講演後「銀嶺を行く」といふ乘鞍岳に於けるスキーイングの映畫及び「雪と岩へのあこがれ」といふ春の穗高・槍の映畫を上映した。何れも今年の四月下旬に撮影されたもの、前者には動的な美しさがあり、後者には靜的な美しさがあつた。最後に最近舶載された獨逸映畫「モン・ブロンの嵐」の宣傳編を上映してこの講演會は閉じられた。

（T・F）

104

八〇

圖書基金申込會員氏名

東京

細川　加茂（一口）　山川　默（二口）　三枝　守博（一口）
松方　三郎（二口）　高野　鷹藏（一口）　蒔田　晉一（一口）
加藤　保二（一口）　辻本　滿丸（一口）　小島　久太（三口）
近藤　茂吉（二口）　目黑　四郎（二口）　大橋　進一（一口）
藤島　敏男（一口）　山田　力（一口）　木村　鐵吉（一口）
酒井　忠一（一口）　角田　吉夫（一口）　飯塚篤之助（二口）
大谷　光明（一口）　高木　伊八（三口）　林　悌助（一口）
若林祐次郎（一口）　石塚秀次郎（一口）　田部　重治（一口）
山内　二郎（一口）　松本　善二（一口）　高橋　良之（一口）
吉田　竹志（一口）　柴田　潤藏（一口）　松宮　三郎（二口）
槇　有恒（一口）　田中　啓雄（一口）　冠　松次郎（一口）

大阪　今村　幸男(一日)
京都　田中喜左衞門(一日)　桑原　武夫(一日)
兵庫　毛馬新次郎(一日)　別宮　貞俊(二日)
滋賀　井花伊左衞門(一日)
石川　藤岡　鍵藏(一日)
熊本　北田　正三(二日)
小樽　岡本　三男(一日)
計　四十一名　五十三日

板倉勝宣記念書架

圖書室の出來を機會に故板倉勝宣氏の記念の意味を以つて板倉家より書架一基を寄贈せられた。寄贈せられたる書架は早速圖書室に收められた。棚の上に故人の記念の意味なる所以を刻みこんであるから圖書室を訪れられた會員は直にそれと氣付かれるであらうが、板倉家の御好意によつて今我々の間に故人を偲ぶよすがともなり、而も甚だ有用なるこの書架を備へることを得たことは非常なる喜びでなければならない。厚く板倉家に對して謝意を表する次第である。

新着圖書目錄

一新舊刊和書

（出版書店より寄贈の分に對しては定價を（　）内に書添へたり、單位圓）

東京帝國大學山の會　叙澤に逝ける人々　梓書房(二・〇〇)
改造社　日本地理大系・奥羽篇　改造社
同　中部篇　同
同　朝鮮篇　同
同　滿洲篇　同
同　九州篇　同
大泉　黑石　山と溪谷　二松堂(一・五〇)
田部　重治　スキーの山旅　大村書店(二・五〇)
尾崎　喜八　山に憩ふ　山と溪谷社(一・八〇)
河田　槇　丘陵スキー術　目黑書店(一・七〇)
吉井　修七　シュナイダーは語る　三省堂(一・四〇)
坂部　護郎　最近のスキー術　同　(一・五〇)
小秋元隆邦　新しいスキー術　目黑書店(二・七〇)
竹節　作太　富士とアルプス　白林社(一・八〇)
小松　榮　冠松次郎　後立山連峯　第一書房(二・五〇)

田部　重治　山と溪谷（第九版）　第一書房（二・五〇）
金　星　堂　登山キャムプ適地案内　金星堂（一・〇〇）
熊澤　正夫　瀨木三雄　桑田　英次　三輪五郎　登山とキャムピング　刀江書院（二・三〇）
椙山　正雄　日本アルプス大觀　木星社書院（三・七〇）
冠　松次郎　スキージャムピング　山とスキーの會（一・五〇）
廣田戸七郎　陸地測量部　一等水準照檢測成果覽錄
吉野山岳會　吉野群山及附近の山水美探勝案内
赤倉近傍圖　陸地測量部（〇・三〇）
赤石嶽近傍圖　同　（〇・三五）
白根山近傍圖　同　（〇・三五）
藥保　八郎　峠
高木菊三郎　日本地圖測量小史　古今書院
（以上著者寄贈）
青木　文教　秘密之國西藏遊記　（大九）
河口　慧海　西藏旅行記　（明三七）
白井光太郎　日本博物學年表　（明四一）
東京天文臺　理科年表　（昭六）

二、新着定期刊行物（和書）

JOCH・創刊號、昭・六・三　慈惠醫大山岳部
ツーリスト　第一八年第九號―第一九年第六號、昭・五・九―昭・六・六　ジャパン・ツーリスト・ビューロー
R・C・C・報告・第四號、昭・六・三　R・C・C
山　嶺　九年九號―一〇年七號、昭・五・九―昭・六・七　東京野歩路會
旅　行　第六〇―六三號、昭・六・三―昭・六・六　東京旅行クラブ
會　報　第三卷第四號、昭・六・四　林と野の會
登　高　第一―二號、昭・六・二―昭・六・四　日本登高會
〃
山　彦　第四年第二―七號、昭六・二―昭・六・七　山彦山岳會
旅　第一〇年九號―第一一年五號、昭・五・九―昭・六・五　東京アルカウ會
ペデスツリヤン　第一二四―一三二號、昭・五・九―昭・六・六　神戸徒歩會
山の旅　第二年第四―五號、昭六・四―五　山の旅會

會　報　昭和六年第一號、昭・六・五　信濃山岳會
彙　報　第三年第一—三號、昭・六・一—昭・六・五
臺灣山岳會
アルピニズム　第一—三號、昭・六・一—昭・六・五
アルピニズム社
樹　氷　第一—二號、昭・六　山人倶樂部
山ある記　第七號、昭・五・一二　藏前山岳部
山と雪　第一—七號、昭・五・一〇—昭・六・四
山と雪の會
報　告　第一號、昭・五・一一　關西學生山岳聯盟
務の旅　第十二年第三五—三六號、昭・五・一一—昭・六・五
務の旅會
管見錄　第七年二—六號、昭・六・二—昭・六・六
大阪管見社
會　報　第八年第二—五號、昭・六・二—昭・六・五
關東山岳會
山岳・創刊號　昭・六・一　戸畑山岳會
飛驒詩壇　第十卷第五—八號、昭六・二—昭・六・六
飛驒史壇會
山と溪谷　第四—八號、昭・五・一一—昭・六・七
山と溪谷社
山行案內　第五年第九號—第六年第六號、昭・五・九
—昭・六・六　昭和マウント倶樂部
岳　友　第六九—六八號、昭・五・九—昭・六・六
日本岳友會
アルカウ趣味　第一七年一〇號—第一八年七號　昭・五・九
—昭・六・六　日本アルカウ會
アミーバ　第三卷第一、二號、昭・六・四　生き物趣味の會
旅と人　第二年第七號、昭・六・七　旅と人社
山　旅　第一號、昭・六・六　山旅クラブ

三、新舊刊洋書

Lunn, A. The Englishman in the Alps, being a Collection of English Prose and Poetry relating to the Alps. Second Ed. 1927.

The Bell Goat "INAKA" Vols., XIII,XIV,XV,XVII,XVIII. 1920—1924.

Tyler, J. E. The Alpine Passes, The Middle Ages (962—1250) 1930.

Bauer, P. Im Kampf um den Himalaya, der erste deutsche Angriff auf den Kangchendzönga 1929. 1931.

Smythe, F. S. The Kangchenjunga Adventure. 1930.

Schmithals, H. Die Alpen, das Gesamtgebiet in Bildern. 1930.

Schätz, J. J. Wunder der Alpen, 1929.

Nansen. F. Through the Caucasus to the Volga. 1931.

de Beer, G. R. Early Travellers in the Alps.

Bilgeri, Handbook on Mountain Ski-ing. 1929.

Bergsteiger Skifahrer Kalender, 1929.

Mill, H. R. The Record of the Royal Geographical Society, 1830—1930, 1930.

四、新着定期刊行物（洋書）

The Alpine Journal (The Alpine Club) Vol. XLII No. 241 — Vol XLIII 242. Nov. 1930.— May 1931.

Die Alpen (S.A.C.) Vol VI. No.8 — Vol. VII No. 5. Aug. 1930— Mai 1931.

La Montague (C.A.F.) 1930, No. 11—12—1931, No.1—2, 1930, September Octobre—1931, Mars Avrie.

Rivista Mensile (C.A.I.) Vol. XLIX. 1930. No. 7— Vol. L. 1931. N.4., Luglio 1930— Aprile 1931.

Revue Alpine (Section Lyonnaise der C.A.F.) Vol. 31. No. 2—Vol. 32. No. 1., 2e trimestre 1930—1er trimestre 1931.

The Scottish Mountaineering Club Journal. (S.M.C.) Vol. 19. No. 110—111, Nov. 1930— April 1931

Bulletin (C.A.B.) Tome VII No. 21—22 Decembre 1930 —Mars 1931.

25. Jahresbericht. (A.A.C.Bern) Vom. 1, Nov. 1929 bis 31. Okt. 1930.

The Mountaineer. (The Mountaineer) Vol. XXII No. 10— Vol. XXIII No. 7., Sep. 1930— June, 1931.

Trail and Timberline (The Colorado Mountain Club) No. 144—150 Oct. 1930— April 1931.

Der Schneehase (Der Schweizerische Akademische Ski-club Bd. 1. No. 4. 1930.

Meedeelingen der Nederlandsche Alpen-Vereeinging. (N.A.V.) 1930.

Annual (The Mountain Club of South Africa) No. 33. 1930.

The Geographical Journal (R.G.S.) Vol. LXXVI 2— Vol. LXXVII 5., Aug. 1930— May 1931.

The Himalayan Journal (Himalayan Club) Vol. III. April 1931.

Bulletin (Sierra Club) Vol. XV. No. 5—Vol. XVI. No. 2., Oct. 1930— April 1931.

Bulletin (The Prairie Club) No. 200— 207. Nov. 1930—June 1931.

The Prairie Club Year Book for 1931

Butlleti del Centre Excurgionista de Catalunya (Club Alpi Catala) Any XL. Num. 426—Any XLI Num. 431, Novembre de 1930— Abril de 1931.

Annario (Club Alpino Espanol) 1929— 1930.

Natural History (America Museum of Natural History) Vol XXX. No. 5.— Vol XXXI. No. 3. Sept.— Oct. 1930—May—June 1931.

En bokom Göteberg (Svenska Turist Föreningen) 1931.

Arsskrift 1931. (S.T.F.) 1931.

Svenrk Turist Kalender 1931 (S.T.F.) 1931.

Bulletin (Appalichian Mountain Club) Vol. XXIV. No.3—No.9. Dec. 1930—May. 1931.

五、舊刊和洋寄贈書

Abraham, G.D. British Mountain Climbs. 1923.

Do., Swiss Mountain Climbs. 1911.

Alpine Club: Peaks, Passes and Glaciers, 1860.

Alpine Climbing. 1882.

Baker & Ross, The Voice of the Mountains.

Ball Alpine Guids, 3 Vols., Central Alps & Western Alps. 1898, 1907, 1911.

Dent, C.T. Mountaineering.

Hirst,J. Songs of the Mountaineers, 1922.

Lunn, A. Englishman in the Alps. 1913.

Do., The Alps. 1914.

Public Schools Alpine Sports Club Year Book. 1911.

Wilson, C. Mountaineering. 1893.

Young. G. W. Wind and Hills. 1909.

（以上近藤茂吉氏寄贈）

中里介山　千年樫の下にて　（昭三）

日本庭園協會　國立公園

磯　清　吉備陵語　（昭二）

（以上吉田竹志氏寄贈書）

地球學團『地球』溫泉號（大一三）
天沼　俊一　埃及紀行（昭二）
後藤朝太郎　日本より支那へ（大一三）
鹿子木真信　ヒマラヤ行（大九）
成功雜誌社『探檢世界』雪中富士登山號（明四二）
橘　南谿子　東西遊記全二册（明四二）
岩崎　金三
角田　政治
有田保太郎　阿蘇山の地學的研究
地　震（二ノ一二—三ノ四）
Fulton, J.H.W. With Ski in Norway & Lapland. 1911.
Lunn, A. Alpine Ski-ing at All Heights and Seasons. 1921.
The National Geographic Magazine 1914—1927.
（陸奥廣告伯爵より木村鑛吉氏を通して）
（以上木村鑛吉氏寄贈）

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或ひは別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿寬集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は本會事務所或ひは編輯所宛て申込みあり度し。

前號補正

頁	行	誤	正
五	七	理田、	理由、
同	一五	摸、糊	糢、糊
三	一	づけるら	づけら
二一	一一	臺車で、	臺車が、
二四	一五	花連港	花蓮港
二三		スキーチ脱セザル	……
同		ペカラル部分	ペカラ○ザル部分
二六	上段 二	古人、日本人	古代、日本人
同	下段 五	天香具山	天の香具山
二七	下段 七	常世神地位	常世神の地位
二九	上段 四	此に、限らず	此は、必らず
二一	下段一〇	ガノ男	才ノ男
二二	上段 三	毛向峠	手向↓峠
二三	上段 五	語系、類解	語原、類解
二四	上段一三	越處の下に越路(コエジ)を加ふ	
同	下段 二	丹波、山	丹澤、山
二五	上段 三	言海坂	言海に、坂
同	同 一六	染めましを	染めにしを
二八	上段一二	一と二は順序入換	
同	同 一八		
二九	上段一五	強含すれば	強ひて、含ますれば
同	下段一四	峠の、總稱	峠を、總稱

頁	行	誤	正
一八〇	上段 六	峠に、	峠を、
一八三	上段一一	頂の、頂上	峠の、頂上
一八四	上段最終	昔も、	昔は、
二二四	上段一二	冠幹部、	冠幹事、
二二八	上段 九	(上下入れ替へる)	
同	下段 六	美瀞、	美瀞、
同	同 二〇	ミユツレン	ミユレン
同	同 二九	K.(一段下げる)	

編輯後記

前號が出てからまだ日が淺いので一般會員諸氏からは原稿を餘り多く寄せられなかつた。それが爲再び昔日を想起せしめるかの如く我々當事者が烏滸がましくも筆を執らねばならなかつた。次號の締切まではまだ大分期間もある事であるから、我々は二十六年三號に大いに期待を有つて居る。本號卷頭に山口成一氏苦心の撮影になる「富士山遠望」を掲げ得た事は編者の太く喜びとする所、又、茨木猪之吉氏には再びその表紙をお願ひする事が出來たし、カットも前號通り坂本直行氏に依つて描かれたものを用ゐた。表紙の繪は用紙の關係上、原畫の持味を充分に發揮せしめ得るに至らなかつたのは殘念である。編輯者に與へられた時間が短かかつた爲、圖版の出來榮えも餘りよくないがこの程度で我慢せねばならなかつた。本文と雜錄との間に掲げた「山岳讃仰の歌」の作者はその本名の發表を許されなかつたが、本會評議員の一人である事を編輯者が此處に言つた處で叱られる事もあるまい。

（渡邊）

編輯者　冠　松次郎
　　渡邊　漸

次號原稿〆切　九月末日

昭和六年七月二十日印刷
昭和六年七月廿五日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

發行者　東京市芝區高輪南町三十番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

印刷者　東京市神田區表猿樹町二番地　中村修二

印刷所　東京市神田區表猿樹町二番地　株式會社開明堂東京支店

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

著作權所有

夏山への登山用具！

クレツテルシユウ(¥4.00)ランタン(アルミ大¥3.50)

ルツクサツク・テント・ピツケル・アイゼン・ザイル等等

型錄御申越次第送呈致します

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

電話(小石川) 845、2071

日本山岳會評議員 田部重治著

峠と高原

□七月上旬發賣□

四六判上製函入
別刷寫眞版多數
定價一圓五十錢
送料十二錢

懷かしき山村、清き流れ、幽林の小徑、やがて豁然とうち展らく未知の世界、古きを振返りつゝ新しきに入る心のときめき——峠こそは我が國土の最も美はしき詩ではあるまいか。そこには自然と人間のいとも妙なる諧調がある。苔むす過去がある。小笹の絨毯、軟草の衾、白樺・落葉松・樹などの彩どり——山の頂近く、或はその裾に横はる高原こそは、岩にあき、密林に堪へ難くなつた人の弱き心をも憩はす慈母の胸ではなからうか。そこには、よし放牧の牛・馬は遊ばなくも、自然の牧歌がたゞよふ。著者は今、この「峠」と「高原」を中心として、深き想、新しき山旅、豐かなる追憶と體驗を語る。勿論本書は、諸君の山へのあこがれに思はざりし境を加へ、或は古き地をも新たなる美を以て想起せしめるであらう。が、より貴き贈りものは、山に入る人々への心の糧である。ルックや地圖よりも前に先づ用意されねばならぬ、自然を愛し味ふ心そのものである。

角田吉夫著 □上越國境□ 近刊
木暮理太郎著 □東京から見える山□ 近刊

東京武蔵小石川區 市町十番地 大村書店 振替東京四六一五 電話小石川五七九二・五四

●冠　松次郎著

日本アルプス大觀

立山・黒部・後立山

四六三倍大判　美裝上製函入
寫眞七十八葉、解說、地圖附

定價　參圓七拾錢
送料書留　二十八錢

日本アルプスの大寫眞集いよ〳〵出づ！

最新刊

各務良幸
麻生武治　共著

山岳大觀

『山旅と寫眞、それは私には離すことの出來ない楯の兩面である。山谷を見て寫眞をとる。寫眞を見て山谷を想ふ。寫眞によつて現はれる山岳溪谷の美はしきことよ。懷しきことよ。それは私の日常生活にどれだけ慰安と生彩とを與へることか……』と著者は言ふ。斯くてこの同じ心持ちの人々の爲めに本書は贈られるのだ。この心持ちを持つ人、この心持ちの解る人々にのみ本書は絶大の價値を持つ。

本書は横一尺八寸、縱四寸三分見開きの北アルプス連嶺諸巨峯の大展望、横一尺二寸五分、縱五寸二分見開きの深雪に輝く五龍岳の壯觀を始めとし、日本山岳美の極致たる黑部溪谷を中心として、著者が多年踏破探勝せる際に撮影せるものより最も代表的なもののみを撰び、細心の注意の下に編まれたる北アルプスの山岳美―雪・岩・溪の大寫眞集である。

精巧無比の製版と相俟つて畫面が凡てを語るであらう。アルピニストにとつてこれほど力强き友があらうか。誇りと自信とを以てすゝめる。

近刊　藤木九三著　槍・穗高・岩登り

四六倍大判　寫眞版五十六葉
解說付、上製函入定價貳圓八拾錢（送料拾八錢）

日本アルプス、歐洲アルプスを多年踏破せる際に、兩著者が自ら撮影せる寫眞を主とし、その代表的なものを撰んで編輯された日本最初の山岳寫眞集。好評　三版！

●　木星社書院
東京市外巢鴨町二ノ四一六
東京振替口座　六七一七

全學界の總動員になる我國唯一の科學的解剖書出づ！

日本アルプス

大好評

鮮麗無比の寫眞無慮三百余

北、中、南の全日本アルプスを夫々の權威者により各方面より分析研究せる我國最初の日本アルプスの科學的解剖書！ 先づ近代景觀の雄たる上高地から穂高、槍、白馬等の秀峰險嶺を縱走横走し乍ら、各方面より之を科學的に檢討し、立山、黑部峽谷の神祕を探り木曾駒、赤石等の處女峰にその掬すべき山岳美の仍つて來る處を尋ねる等縱横に全日本アルプスに解剖のメスを揮ひ、アルプス特有の高山植物まで其一切の祕密を玆に展開し來る。加ふるに幣社が多大の經費と時日とを費して蒐集せる寫眞は、雄大崇嚴そのあるが儘の姿を眼前に見るやうである。

執筆者

子爵	田中阿歌麿
山岳會理事	木暮理太郎
理學士	花井重次
伊那高女長	八木貞助
山岳會理事	冠松次郎
法政大教授	田部重治
工學士	黑田正夫
林學博士	田村剛
理學博士	内田清之助
理學博士	武田久吉

定價三圓也　送料卅六錢

東京市神田區錦町一ノ一九

新光社

振替東京四三二四〇

理想的山のガイドブック出づ

時間記錄と費用概算

平賀文男著

南アルプスと其溪谷

三六判二八〇頁 原色版一枚寫眞 十四版四枚スケッチ 十三枚地圖三枚 （定價一圓） 送料十錢

河田楨・高畑棟材共著

東京附近の山々

三六判二八〇頁 原色版一枚寫眞 十四版四枚スケッチ 十七枚地圖三枚 （定價一圓） 送料十錢

河田楨・高畑棟材共著

奥秩父と其附近

三六判二五〇頁 原色版一枚寫眞 十四版四枚スケッチ 十四枚地圖三枚 （定價一圓） 送料十錢

右三書は何れも理想的山のガイドブックとして編纂されたものである。内容に於いて裝幀に於いて挿畫に於いて全く申分のない出來榮である最寄書店に實物御覽を乞ふ。

山の手帖

實用ポケット小形 二五六頁縦四寸三分 横二寸八分革レザー 防水表紙 定價金四拾錢

内容

實用本位の山の手帖である。記錄欄・方眼紙・住所錄・金錢出納欄・汽車發着時間記入欄・略暦・登山の注意・天候の見方・方角の見方・日出沒表・月出沒表・山植物圖譜等あり。

山を行く

高畑棟材著 四六判 文本 五〇六頁 定價二圓半送料八十錢

昭和五年讀書週間推薦図書

チッケスの山 畫集

二十枚 會稿人新の富田通雄氏の山の凸版目網男美氏 東京切手五十二枚裝幀優三百限部 四六判 定價一圓 送料十錢

チッケスの山丸家畫洋進新・刷別トーア版の油繪(原色版)の山の氏 五十枚二 十六錢

山小屋 雜誌

高畑棟材編輯 無料雜誌

菊判 十六頁 四十錢 昭和六年九月創刊 發行號 (投稿歡迎) 限名三千 先着三名 封入切手 二錢

東京丸之内 永樂ビルヂ 朋文堂

電話丸之内三六〇一番 振替東京四九六番